

秋田県文化財調査報告書第451集

前田表Ⅱ遺跡

—一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2010・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。

縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

まえ だ おもて に
前 田 表 II 遺 跡

—一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2010・3

秋 田 県 教 育 委 員 会



1 前田表Ⅱ遺跡空中写真（北→）



2 前田表Ⅱ遺跡空中写真（西→）

序

本県には、これまでに発見された約 4,900 か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田をめざす開発事業の根幹を成すものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道 7 号仁賀保本荘道路建設事業に先立って、平成 19・20 年度に、にかほ市において実施した前田表Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、平安時代から中世の土坑や溝状遺構が検出され、土師器・須恵器などの遺物も見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、にかほ市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 22 年 3 月

秋田県教育委員会

教育長 根 岸 均

例 言

- 1 本書は、一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に伴い、平成19(2007)・20(2008)年度に発掘調査された秋田県にかほ市両前寺字前田表145外に所在する前田表Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査の成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報27(平成20年度)』および発掘調査報告会資料などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 2 本書第4図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『平沢』(平成15年発行)を、第6図は、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供の1/1,000工事用平面図をもとに作成した。
- 3 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を使用した。
- 4 発掘調査および整理作業における以下の作業は下記の業者に委託した。
水準測量および方眼杭設置作業：株式会社藤和測量設計
遺跡掘削管理業務：斉勇株式会社
遺跡空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
木製品保存処理・実測図作成：株式会社吉田生物研究所
- 5 以下の自然科学的分析は、下記の業者に委託した。なお、本書ではその分析結果報告を第5章に掲載した。
樹種同定：株式会社吉田生物研究所
放射性炭素年代測定：株式会社吉田生物研究所
赤外線分光分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
電子顕微鏡観察：パリノ・サーヴェイ株式会社
- 6 本書は、第5章を除いて、第4章第1節を加藤竜、第4章第2節を加藤・藤本玲子・築瀬圭二が執筆し、他の執筆と編集は築瀬が行った。第5章は各節に執筆機関を示した。
- 7 本書を作成するにあたり、次の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。
〔五十音順・敬称略〕
石船清隆 榊原滋高 嶋田忠一 高橋正 土田秀喜 羽柴直人 八重樫忠郎

凡 例

1 本書に掲載した平面図（遺構実測図）の方位は、世界測地系平面直角座標第X系による座標北を示す。原点（MA）における座標北と磁北との偏角は西偏 $8^{\circ} 20'$ である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2 遺構については検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下のとおりである。

SK: 土坑 SD: 溝状遺構 SX: 沢状の落ち込み SA: 柱列 SKP: 柱穴様ピット

3 遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。

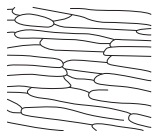
4 遺構実測図および遺物実測図には、それぞれスケールを付して表示した。

5 挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については、個々の頁に明示した。

 内黒処理  漆  アスファルト・炭化物

6 土師器の実測図に用いた調整の表現は下記のとおりである。

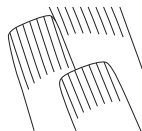
ヘラミガキ



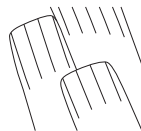
ヘラケズリ



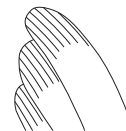
ヘラナデ



ハケメ



ユビナデ



7 出土した土器類については、酸化炎焼成ののちに内面黒色処理を施した土器を内黒土師器、内外面黒色処理を施した土器を黒色土器と呼称する。また酸化炎焼成のみの土器を土師器、還元炎焼成の土器を須恵器と呼称する。

8 土器の出土点数・重量の計測は接合後に行ったため、複数の遺構・グリッド間で接合された遺物点数・重量の集計については、次のようにした。①遺構間、遺構・グリッド間では遺構番号の小さい遺構出土として集計、②グリッド間ではアルファベットの早いグリッド出土とした。

9 SX100 と他の遺構出土の土器片が接合したものを広域に分散廃棄された可能性がある遺物（広域分散廃棄遺物）とし、実測し、遺物観察表と遺物接合分布図で示した（2点間の接合は紙面の都合上、割愛した）。また、離れた遺構間で接合したもの、SX100 内の離れたグリッド間で接合したもの、SX100 と離れたグリッドⅡ層出土の土器片が接合したのもも分散廃棄された可能性が考えられるので実測し、遺物観察表に示した。このうち、墨が塗布された破片が他と接合した甕（146）と SX100 内の破片が多く接合した甕（132）は遺物接合分布図で示した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査要項	2
第2章	遺跡の環境	3
第1節	遺跡の位置と立地	3
第2節	歴史的環境	5
第3章	発掘調査の概要	11
第1節	遺跡の概観	11
第2節	調査の方法	11
1	発掘調査	11
2	室内整理	12
第3節	調査の経過	12
第4章	調査の記録	14
第1節	基本層序	14
第2節	検出遺構と出土遺物	17
1	土坑	17
2	溝状遺構	38
3	沢状の落ち込み	45
4	柱列	47
5	柱穴様ピット	47
6	出土遺物	48
第5章	自然科学的分析	99
第1節	樹種同定	99
第2節	放射性炭素年代測定	102
第3節	赤外線分光分析	104
第6章	まとめ	109

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	3	第 32 図	遺構内出土遺物 (6)	76
第 2 図	鳥海山周辺地域の切峰面図	4	第 33 図	遺構内出土遺物 (7)	77
第 3 図	地形区分図	4	第 34 図	遺構内出土遺物 (8)	78
第 4 図	前田表Ⅱ遺跡と周辺遺跡図	7	第 35 図	遺構内出土遺物 (9)	79
第 5 図	字切図と前田表Ⅱ遺跡調査範囲	10	第 36 図	遺構内出土遺物 (10)	80
第 6 図	遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図	15	第 37 図	遺構内出土遺物 (11)	81
第 7 図	基本土層	16	第 38 図	遺構内出土遺物 (12)	82
第 8 図	遺構配置図	19・20	第 39 図	遺構内出土遺物 (13)	83
第 9 図	ピット配置図	21	第 40 図	遺構内出土遺物 (14)	84
第 10 図	SK02・03・08・21	52	第 41 図	遺構内出土遺物 (15)	85
第 11 図	SK09・11・12・15・77	53	第 42 図	遺構内出土遺物 (16)	86
第 12 図	SK17・18・41・43・70・71・SD66 平面図	54	第 43 図	遺構内出土遺物 (17)	87
第 13 図	SK17・18・41・43・70・71・SD66 断面図	55	第 44 図	遺構内出土遺物 (18)	88
第 14 図	SK19・22・25・26	56	第 45 図	遺構外出土遺物 (1)	89
第 15 図	SK27・30	57	第 46 図	遺構外出土遺物 (2)	90
第 16 図	SK31・32・33・34	58	第 47 図	遺構外出土遺物 (3)	91
第 17 図	SK35・37・38・39・44・55・78	59	第 48 図	遺構外出土遺物 (4)	92
第 18 図	SK45・46・47・49・53	60	第 49 図	顕微鏡写真	101
第 19 図	SK54・57・58・59・79・99	61	第 50 図	土器 (SK08) 付着物	107
第 20 図	SK61・63・64・65・68	62	第 51 図	土器 (SX100) 付着物	107
第 21 図	SK73・74・75・76・98	63	第 52 図	土器 (SK08)	
第 22 図	SK80・82・84・87・88・154	64		付着黒色物質の FT-IR スペクトル	108
第 23 図	SD05・06・07	65・66	第 53 図	土器 (SX100)	
第 24 図	SD20・28・36・50	67・68		付着黒色物質の FT-IR スペクトル	108
第 25 図	SD83・86・102	69	第 54 図	遺構外遺物出土分布図	112
第 26 図	SD90・SA101	70	第 55 図	墨書土器・篋書土器出土分布図	112
第 27 図	遺構内出土遺物 (1)	71	第 56 図	遺物接合分布図 (1)	113
第 28 図	遺構内出土遺物 (2)	72	第 57 図	遺物接合分布図 (2)	114
第 29 図	遺構内出土遺物 (3)	73	第 58 図	遺物接合分布図 (3)	115
第 30 図	遺構内出土遺物 (4)	74	第 59 図	遺物接合分布図 (4)	116
第 31 図	遺構内出土遺物 (5)	75			

表 目 次

第1表	前田表Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧	8	第8表	遺構内出土遺物観察表(5)	97
第2表	柱穴様ピット一覧表(1)	50	第9表	遺構外出土遺物観察表(1)	97
第3表	柱穴様ピット一覧表(2)	51	第10表	遺構外出土遺物観察表(2)	98
第4表	遺構内出土遺物観察表(1)	93	第11表	秋田県前田表Ⅱ遺跡出土木製品同定	100
第5表	遺構内出土遺物観察表(2)	94	第12表	測定試料及び処理	102
第6表	遺構内出土遺物観察表(3)	95	第13表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	103
第7表	遺構内出土遺物観察表(4)	96			

図 版 目 次

巻頭図版1	1	前田表Ⅱ遺跡空中写真(北→)	図版3	1	S K 63 完掘(東→)
	2	前田表Ⅱ遺跡空中写真(西→)	2	S K 65 完掘(南西→)	
図版1	1	S K 08 断面A-B(南→)	3	S K 82 完掘(南西→)	
	2	S K 08 完掘(南→)	4	S K 84・87 完掘(南→)	
	3	S K 12 完掘(南東→)	5	S D 05・06・07 完掘(西→)	
	4	S K 17・18・33・34・41・43・70・71・S D 66 完掘(南西→)	6	S D 20 断面K-L(西→)	
	5	S K 22 完掘(南西→)	7	S D 83・86・90・102 完掘(南東→)	
	6	S K 25・26 完掘(西→)	8	S D 83・102 断面A-B(北西→)	
	7	S K 27 断面(南西→)	図版4	1	S D 20・28・36・50 完掘(南西→)
	8	S K 27 完掘(南西→)	2	S D 90 完掘(東→)	
図版2	1	S K 30 完掘(西→)	3	S A 101 P 1 断面(東→)	
	2	S K 31 完掘(南→)	4	S A 101 P 2 断面(東→)	
	3	S K 38・78・S K P 188 完掘(東→)	5	S A 101 P 1・P 2 完掘(東→)	
	4	S K 39・55 完掘(東→)	図版5		出土遺物(1)
	5	S K 49 完掘(西→)	図版6		出土遺物(2)
	6	S K 57 断面(南→)	図版7		出土遺物(3)
	7	S K 57 完掘(南西→)	図版8		出土遺物(4)
	8	S K 59 完掘(南→)			

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟県新潟市を起点として日本海に沿い、山形県を経て秋田県小坂町で東北縦貫自動車道と連結し、青森市に至る高規格幹線道路である。この道路は、総延長約322kmで、新潟市以北の日本海沿岸の高速交通体系を改善し、沿線諸地域の生産活動や情報・物資の交通を促進するために計画された。

前田表Ⅱ遺跡が所在する仁賀保本荘道路は、平成11年5月18日に日本海沿岸東北自動車道の一部として計画決定された仁賀保インターチェンジ（I.C）～本荘I.C間の12.5kmである。この道路は一般国道7号のバイパスとして位置づけられ、供用開始後は自動車専用道路として無料開放される。計画では車道幅員は全幅23.5mの4車線になるが、当面は2車線の対面通行で供用される。平成19年9月17日、仁賀保本荘道路12.5kmうち、にかほ市両前寺交差点の暫定仁賀保I.C～本荘I.C間の11.2kmは、日本海沿岸東北自動車道の本荘I.C～岩城I.C間の21.6kmと同時に開通した。このことにより、由利本荘市や秋田市へのアクセスが向上し、住民生活、地域経済及び救急医療の面で大きな効果が出ている。

仁賀保本荘道路は平成10年4月に路線が発表された。これを受けて、秋田県教育委員会は、平成18年12月26・27日に阿部堂川の南側部分の建設工事予定地内の試掘調査^(註1)を実施した。調査の結果、周知の前田表遺跡の西側で須恵器・土師器等が出土したことから、前田表Ⅱ遺跡とし、確認調査を実施することとした。確認調査は路線内の12,620㎡（当初11,000㎡、追加1,620㎡）を対象に平成19年6月18日から29日まで秋田県埋蔵文化財センターが実施した^(註2)。調査の結果、遺構は土坑1基、溝跡2条などを検出し、遺物は土師器や須恵器などが出土したので、平安時代の集落跡と推定され、工事区内の5,820㎡について発掘調査が必要であることがわかった。また、秋田県教育委員会は、平成19年7月12日に阿部堂川の北側部分^(註3)について試掘調査した。調査の結果、部分的に須恵器・土師器が出土したことから、阿部堂川を挟んで南側に隣接する前田表Ⅱ遺跡の発掘調査の際に詳細について調査することにした。発掘調査は国土交通省の阿部堂川改修の事業計画の関連から、阿部堂川を挟む調査区の北側部分1,800㎡を平成19年10月10日から12月28日まで行い、調査区の南側部分4,200㎡を平成20年6月16日から10月10日まで秋田県埋蔵文化財センターが実施した。

註1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第420集 2007(平成19)年

註2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第439集 2008(平成20)年

註3 註2と同じ

第2節 調査要項

遺 跡 名	前田表Ⅱ遺跡（遺跡略号：6MDO－Ⅱ）
遺跡所在地	秋田県にかほ市両前寺字前田表145外
調査期間	平成19年度 平成19(2007)年10月10日～11月28日 平成20年度 平成20(2008)年6月16日～10月10日
調査目的	一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調査面積	6,000 m ² （平成19年度：1,800 m ² 、平成20年度：4,200 m ² ）
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	平成19年度 柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 副主幹） 武藤 祐浩（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課男鹿整理収蔵室 班長兼学芸主事） 袴田 道郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課男鹿整理収蔵室 学芸主事） 巴 亜子（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 調査・研究員） 藤本 玲子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 調査・研究員） 平成20年度 加藤 竜（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主任） 築瀬 圭二（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事） 藤本 玲子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 調査・研究員）
整理担当者	築瀬 圭二（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事）
総務担当者	平成19年度 時田 慎一（秋田県埋蔵文化財センター 中央調査課 副主幹） 平成20・21年度 時田 慎一（秋田県埋蔵文化財センター 中央調査班 主任専門員） （※職名等は発掘調査当時のもの）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所 にかほ市教育委員会

第2章 遺跡の環境

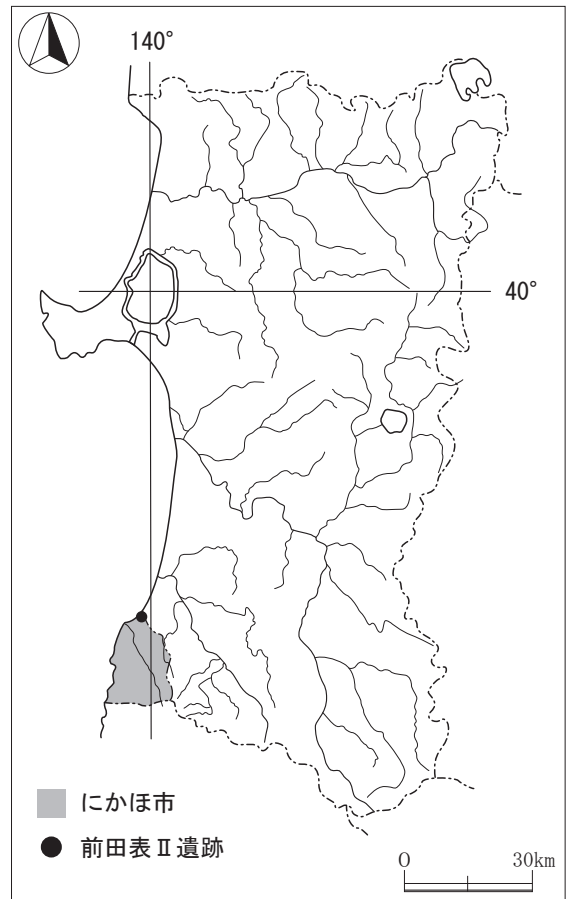
第1節 遺跡の位置と立地

前田表Ⅱ遺跡が所在するにかほ市は、秋田県の南西部端の沿岸、北緯 $39^{\circ} 19'$ ～ $39^{\circ} 47'$ 、東経 $139^{\circ} 52'$ ～ $140^{\circ} 04'$ に位置し、北～東側は由利本荘市に、南側は山形県飽海郡遊佐町に接している(第1図)。その面積は 240.61km^2 で秋田県で第15位、東西に約 16.6km 、南北に約 23km の範囲に広がる。市域は、南東にある独立峰の標高 $2,236\text{m}$ の鳥海山を取り巻く同心円のほぼ北北西～西側部分を占め、西方～北西方向の海岸線に向かって規則的に高度を下げ、傾斜する(第2図)。

にかほ市を構成する地形は、山地・丘陵、台地、低地であるが、鳥海火山とその近傍に位置していることを反映して、火山活動に起因する地形を主としている。前田表Ⅱ遺跡周辺の地形は、遺跡東方に非火山性の仁賀保丘陵地(Ⅰa)があり、南北方向に伸びている。いわゆる「仁賀保高原」の一部であり、標高は約 $160\sim 500\text{m}$ である。この丘陵地は新第三系天徳寺層・笹岡層、第四系西目層の堆積岩から構成される海底隆起地塊であり、西縁に沿って南北方向に仁賀保衝上断層群が認められる。

西縁の低地との境界は直線的である。遺跡南方には象潟泥流台地(Ⅱc)が広がり、南西部の海岸線に至る地域を占めている。遺跡北方から西方の海岸線を仁賀保新期砂丘地(Ⅲe)が細長く縁取って分布する。前田表Ⅱ遺跡は、仁賀保沖積低地(Ⅲa)にあり、この地形は象潟泥流台地上に沖積作用によって形成されている(第3図)。

前田表Ⅱ遺跡は、およそ北緯 $39^{\circ} 17' 56''$ 、東経 $139^{\circ} 58' 35''$ にあり、にかほ市の北端、JR羽越本線仁賀保駅より北東へ約 1.4km 、TDK株式会社秋田工場(立沢遺跡)の北側約 300m に位置する。遺跡は、にかほ市両前寺地区の標高 $10.7\sim 14.9\text{m}$ の沖積地に立地する。遺跡の東側に前田表遺跡や安倍館跡が立地する仁賀保丘陵地(仁賀保高原北西端)の裾部が迫り、その裾部に沿って国道7号線が通る。西側約 0.5km には日本海が広がる。遺跡の北側には阿部堂川が丘陵地から西流する。

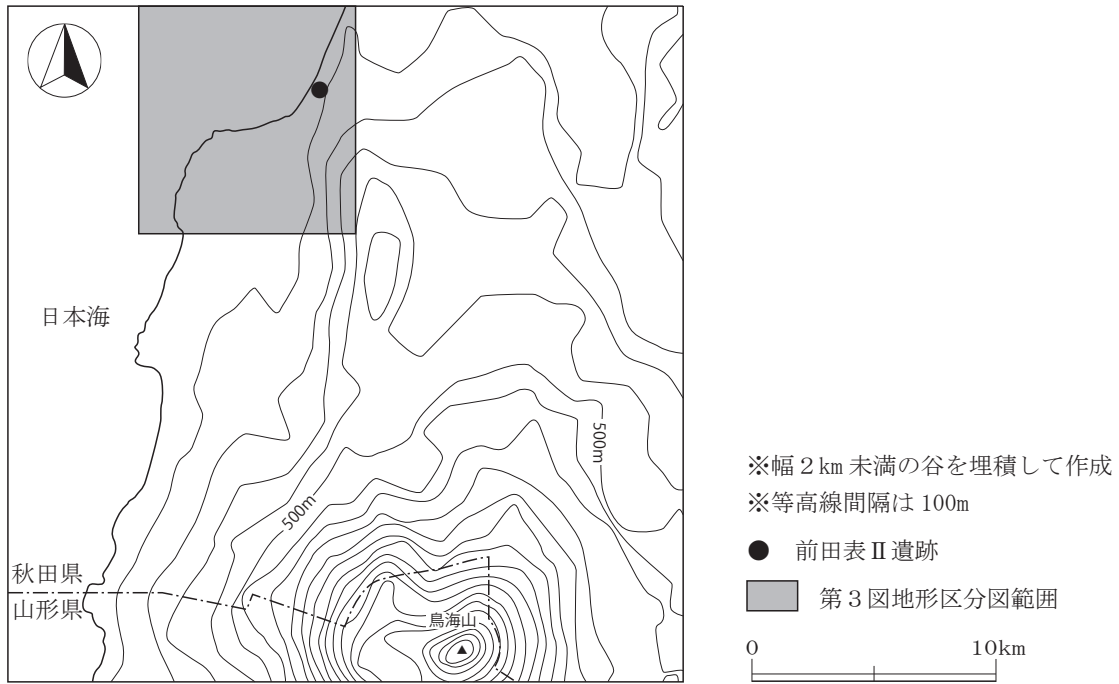


第1図 遺跡位置図

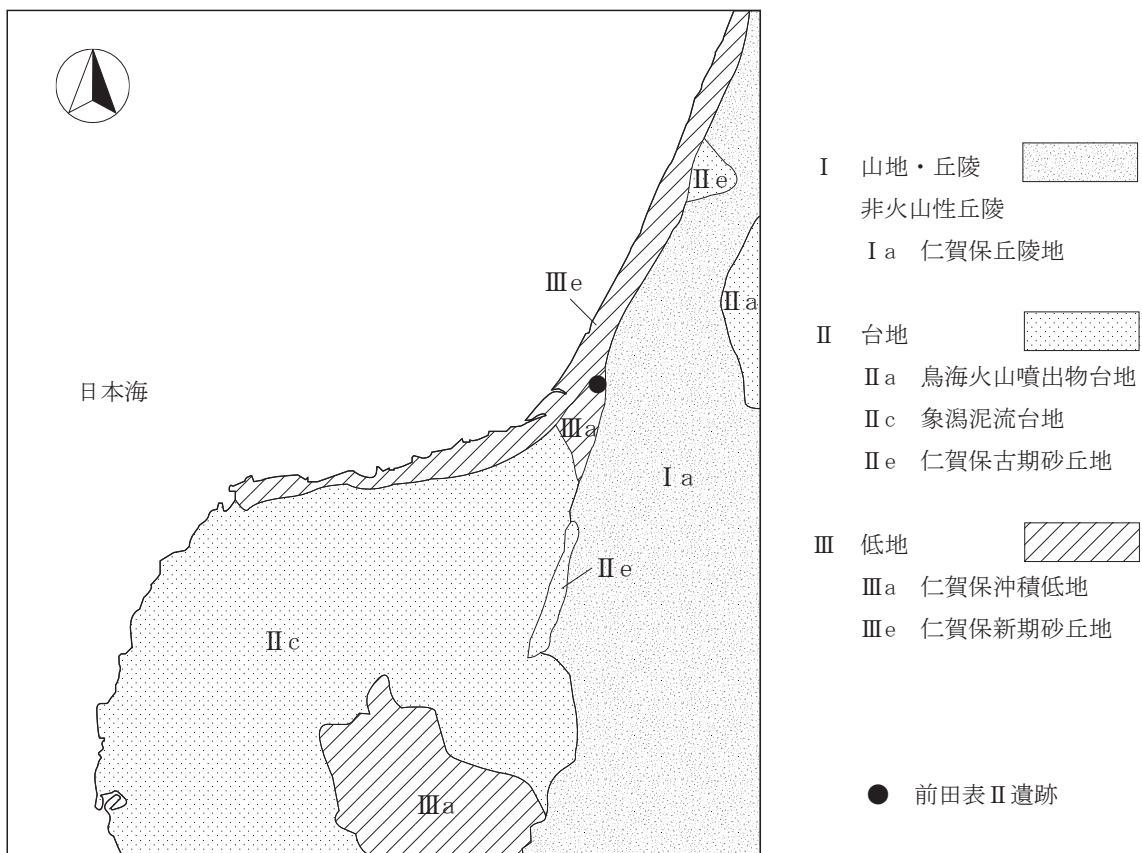
註1 秋田県『土地分類基本調査象潟・吹浦』2003(平成16)年

註2 註1に同じ

註3 仁賀保町史編纂委員会『仁賀保町史』1972(昭和47)年



第2図 鳥海山周辺地域の切峰面図



第3図 地形区分図

第2節 歴史的環境

前田表Ⅱ遺跡のある両前寺字前田表は平成17(2005)年に古くから仁賀保郷と呼ばれる仁賀保町、金浦町、象潟町の三町が合併して誕生した、にかほ市の最北端にある。江戸時代には両前(善)寺村は最上領、本田正純領を経て、元和8(1622)年10月から本荘藩領になる。村は大西目田高の名主斎藤与助に属し、西目とは深いつながりがあったと考えられる。村名の初見は由利十二頭記に元和8年(註1)の村の年貢高25石5斗8升5合とある。明治維新後の明治21(1888)年市制、町村制の公布によって、翌年、当初属していた西目村(現由利本荘市)から平沢村(現にかほ市)に所属替えが行われた。前田表Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図(第4図)は、南北方向に伸びる仁賀保高原の丘陵地とその高原を源にして西流する白雪川、北流する西目川によって形成された、それぞれの沖積低地の東西8km、南北11.75kmの地域を示している。ここでは、第4図に記載された本遺跡を取り巻く99遺跡のうち、発掘調査が実施された遺跡や文献資料等が残っている遺跡を中心に、旧石器時代から中世までを概観する。以下の記述は前田表Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧(第1表)にある文献を参考にした。

旧石器時代の遺跡は新林(90)、四角井戸(97)遺跡の2か所が確認されている。発掘調査はされていないが、新林遺跡では石刃や剥片が、四角井戸遺跡ではナイフ形石器や彫刻器、搔器などが採集され、いずれも後期旧石器時代に帰属する。

縄文時代の遺跡は黒潟(27)、下岩ノ沢(36)、西ノ沢(42)、寺ヶ沢Ⅲ(47)、根子ノ沢(51)、碁石(65)、客殿森(68)、鷹橋(69)、井岡(70)、中ノ目Ⅰ(73)、堅田沢(75)、大森橋(80)、湯ノ沢(83)、角間台(87)、中ノ道(88)、中湯沢Ⅰ(89)、新林、北ノ股(92)、大森台(93)、二ツ森(94)、孫七山(95)、鰍沢(96)、四角井戸、船岡台(99)遺跡である。このうち、白雪川流域は黒潟、下岩ノ沢遺跡の2か所のみである。これは鳥海山の大規模な山体崩落(山崩れ)によって、岩窟などがこの地域の縄文時代の遺跡を覆ってしまった可能性が考えられている。縄文時代の遺跡を出土遺物から細分すると、早期は、寺ヶ沢Ⅲ遺跡、前期は寺ヶ沢Ⅲ、根子ノ沢、中ノ目Ⅰ、碁石、四角井戸、北の股、孫七山、鰍沢、船岡台遺跡、中期は下岩ノ沢、根子ノ沢、中ノ目、碁石、湯ノ沢、新林遺跡、後期は寺ヶ沢Ⅲ、根子の沢、堅田沢、井岡、西ノ沢、客殿森、内野、北ノ股、碁石、角間台、大森橋遺跡、晩期は西ノ沢、鷹橋、中湯沢Ⅰ、北ノ股、根子ノ沢、角間台遺跡である。これらのうち発掘調査された遺跡は下岩ノ沢と寺ヶ沢Ⅲ遺跡の2か所である。下岩ノ沢遺跡は縄文時代の陥し穴1基を検出し、縄文中期に帰属する土器片が出土した。寺ヶ沢Ⅲ遺跡は早期・前期・後期土器片が出土した。他の遺跡は発掘調査はされていないが、池田正治氏によって根子ノ沢遺跡では前期から晩期までの数多くの土器が採集されている。このうち、中期大木9式の深鉢形土器が完全な形(口縁部がいくつかの破片)で畑地から農作業中に出土した。中には火炎土器などの北陸系の土器が含まれる。中ノ目Ⅰ遺跡では前期～中期までの土器が採集され、この中には口縁部に北陸系の土器の特徴である半割竹管文を施し、その下の胴部には円筒下層式土器(前期)の特徴である木目状撚糸文を施した南と北の特徴を合わせ持つ土器が含まれる。船岡台遺跡では本荘高校郷土史クラブ員が円筒上層式b式土器(中期)の口縁部破片と大木7b式土器(中期)および北陸系の土器片を採集した。

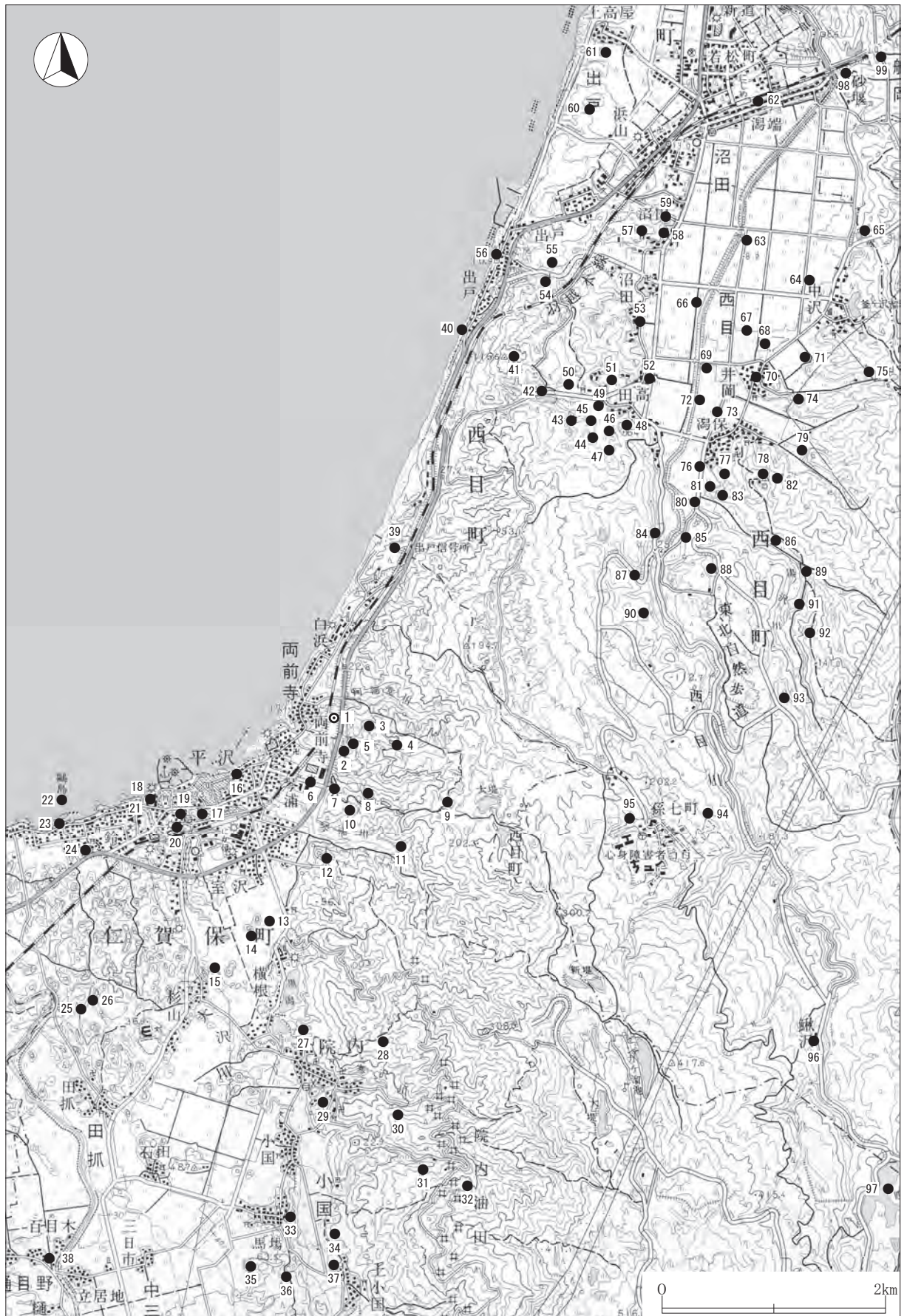
弥生時代の遺跡は根子ノ沢、宮崎(59)遺跡の2つの遺跡がある。この時代の遺跡は発掘調査されておらず、土器が少し採集されているだけである。

古墳時代の遺跡は沼田（53）、宮崎遺跡である。宮崎遺跡は昭和62年3月14日から22日まで、町教育委員会によって発掘調査され、古墳時代中期頃と推定される竪穴住居跡1軒、土坑1基を検出し、土師器・須恵器片が出土したことが報告されている。井岡遺跡からは昭和8年頃、地元の池田浅吉氏によって古墳時代中期の祭祠遺物と考えられている子持勾玉が発見されており、これは日本海沿岸では最北の例である。また、この近くから5世紀後半から6世紀中頃までの土師器、須恵器のほかに、北海道の続縄文文化の終末期に位置する北大式土器が採集された。

本遺跡周辺には古代に帰属する遺物と考えられる土師器や須恵器片、鉄滓、羽口などが出土または採集された古代（奈良・平安時代）の遺跡は43か所ある。これらのうち発掘調査された遺跡は立沢（6）、下岩ノ沢、猿田（39）、寺ヶ沢Ⅲ、宮崎遺跡である。立沢遺跡は本遺跡の南側約300mにあり、発掘調査は遺跡の一部しか実施されていないが、平安時代の掘立柱建物跡5棟、溝跡、柱穴様ピット、土坑、焼土遺構などを検出した。秋田県で初めての製塩土器や円面硯、墨書土器、輸入陶磁器等が出土した。詳細は後述するが、本遺跡と立沢遺跡は両前寺川を挟み、丘陵の裾部に近接し、ほぼ同じ標高に立地することから密接な関係が考えられる。下岩ノ沢遺跡は竪穴住居跡3軒、溝跡、土坑等を検出し、土師器、須恵器等が出土した。いずれの遺跡も集落跡である。猿田遺跡は田畑の整地工事に先だって平成4年8月8日～11日まで、町教育委員会によって発掘調査され、土師器や須恵器を伴う溝1条と数基の土坑が検出された。寺ヶ沢Ⅲ遺跡からは土師器や須恵器片が出土した。宮崎遺跡からは土師器や須恵器とともに竪穴住居跡が3軒検出された。発掘調査はされていないが、沼田遺跡からは8世紀中頃の土師器高坏・長胴甕等が、井岡遺跡からは76点の墨書された土師器、須恵器が採取されている。

中世の由利地方は由利氏、大弐局、仁賀保氏を始めとする所謂由利十二頭など、小領主の支配が変遷し、これらと関係があると考えられる城館遺跡が数多くある。中世の城館遺跡は安倍館（4）、鴻ノ巣館（12）、平沢館（20）、山根館（30）、丸山館（35）、待居館（38）、浜館（41）、田高館（48）、エゾ館（57）、豊後館（74）、瀧保館（78）、花館（98）跡がある。このうち安倍館跡は本遺跡の東側、約500mの丘陵地にある。築城者とその年代は不明であるが、三つの郭からなり、その第一の郭（小館）は標高115mにあり、郭の広さは約300㎡で帯郭を有する。第二の郭は520㎡のやや方形、西側は急斜面で眺望広く、日本海も望む。二段の帯郭が北に40mほど伸びて小館との関連を持つ。底箱堀の空堀が南から北にあり、また、郭と平行に土塁が二筋現存する。第三の郭は標高137m。四段の腰郭があるほか、土塁の痕跡もあり、第一、二郭間との通路を思わせる。館全体の西南側は急斜面、東側は山地を背負い、複雑な地形である。安倍館跡の西側、本遺跡の南東側には香取神社のある阿部堂遺跡（5）があり、中国（唐・宋・明）の古銭が約360枚出土したが、本遺跡からも同種の銭貨が出土している。詳細は後述するが、明治時代に作成された字切図（第5図）には、阿部堂川を水源とする水路が北東から南西方向に設置され、その水路に沿って道がある。道は途中で分岐し、丘陵地（前田表遺跡）に延び、さらには安倍館跡に続く。本発掘調査によって字切図に描かれた水路と流路方向をほぼ同じくするSD20が9世紀以降に近接地に設置されたことが明らかになった。推論の域を出ないが、当時から丘陵に続く道があり、両遺跡と関連する施設の可能性が考えられる。

註1 西目町史編集委員会『西目町史 通史編』2001（平成13）年



第4図 前田表Ⅱ遺跡と周辺遺跡図

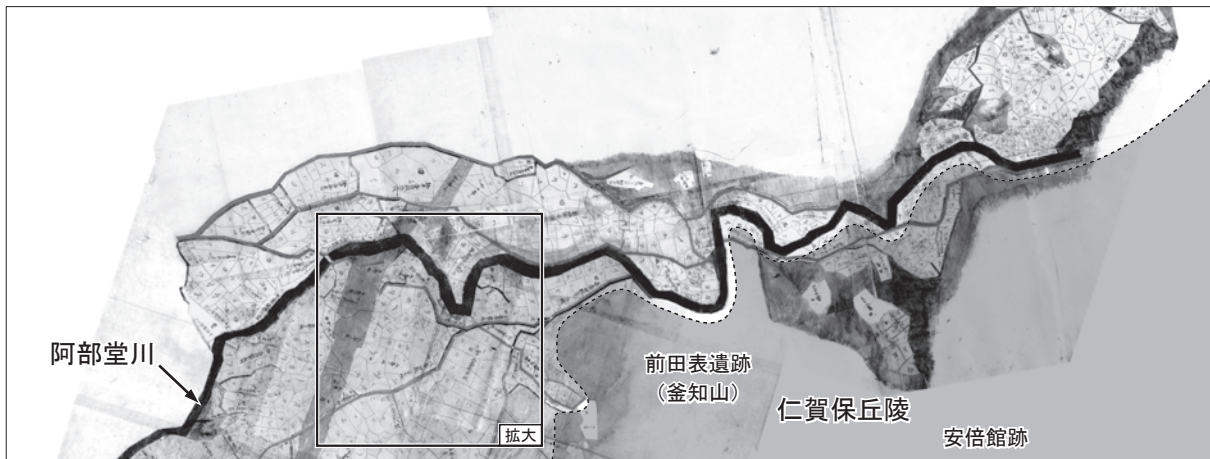
第1表 前田表Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡地図 番号	遺跡名	種別	文献	番号	遺跡地図 番号	遺跡名	種別	文献
1		前田表Ⅱ		本書・1	51	41-10	根子ノ沢	遺物包含地	10・12・16
2		家ノ浦			52	41-52	小深田	遺物包含地	
3	35-36	前田表	遺物包含地	2	53	41-33	沼田	遺物包含地	10
4	35-30	安倍館	館跡	3・7	54	41-24	大股	寺院跡	12
5	35-15	阿部堂	遺物包含地	3・4・7	55	41-61	下山	番所跡	
6	35-34	立沢	集落跡	5	56	41-30	里道	砲台跡	12
7		横枕			57	41- 4	エゾ館	館跡	10・12
8	35-16	旧熊野神社	寺院跡	4	58	41-28	衾下	遺物包含地	
9	35-49	須郷谷地	遺物包含地		59	41- 3	宮崎	遺物包含地	10・17・18・19
10	35-48	出ヶ沢	遺物包含地		60	41- 2	オシダテ	遺物包含地	
11	35-18	旧雄野寺	寺院跡		61	41- 1	土花	貝塚	12・17・20
12	35-39	鴻ノ巣館	館跡	3	62	41-31	弁天前	番屋跡	
13		上谷地Ⅰ		6	63	41-35	向谷地	遺物包含地	
14		上谷地Ⅱ		6	64	41-37	中沢	遺物包含地	
15		新脇田		6	65	41-34 5-81	基石	遺物包含地	
16	35-14	平沢・琴浦境 の立石	境界石		66	41-36	新堰	遺物包含地	
17	35-13	仁賀保家陣屋	陣屋跡	7	67	41-38	川袋	遺物包含地	
18	35-11	建武碑Ⅰ	板碑	7	68	41- 7	客殿森	遺物包含地	
19	35-12	建武碑Ⅱ	板碑	7	69	41- 9	鷹橋	遺物包含地	
20	35-53	平沢館	館跡	3	70	41- 8	井岡	遺物包含地	10・16・18・ 21・22・23
21	35-10	丁刃森方角石	方角石	7	71	41-43	堅田	遺物包含地	
22	35- 6	吉兵井戸	井戸跡		72	41-55	中ノ目Ⅱ	遺物包含地	
23	35- 5	淀切不動	磨崖仏	7	73	41-21	中ノ目Ⅰ	遺物包含地	10
24	35- 7	千石家陣屋	陣屋跡		74	41-17	豊後館	館跡	3・10
25	35- 8	法界寺	寺院跡	7	75	41-45	堅田沢	遺物包含地	
26	35- 9	高寺	遺物包含地	7	76	41-45	大森	遺物包含地	
27	35-47	黒瀉	遺物包含地		77		清水沢	遺物包含地	14
28	35-18	七高神社	寺院跡	4・7	78	41-11	瀧保館	館跡	3・10・16
29	35-50	南野	遺物包含地		79	41-58	前ヶ沢	遺物包含地	
30	35-②	山根館	館跡	3・4・7・25	80	41-47	大森橋	遺物包含地	
31	35-40	研石	遺物包含地		81	41-18	大学館	館跡	3・10
32	35-41	十文字	遺物包含地		82	41-57	館ノ後	遺物包含地	
33	35-33	細久保	遺物包含地	7	83	41-55	湯ノ沢	遺物包含地	
34	35-19	八森屋敷	遺物包含地		84	41-51	松ノ木	遺物包含地	
35	35-38	丸山館	館跡	3・4	85	41-50	内野	遺物包含地	
36	35-35	下岩ノ沢	集落跡	7・8	86	41-48	中湯沢Ⅱ	遺物包含地	
37	35-51	上小国	遺物包含地		87	41-13	角間台	遺物包含地	10
38	35-32	待居館	館跡	3・4・7	88	41-14	中ノ道	遺物包含地	
39	35-55 41- 6	猿田	遺物包含地	10・11	89	41-20	中湯沢Ⅰ	遺物包含地	
40	41-29	浜田	一里塚	12	90	41-12	新林	遺物包含地	10・16
41	41- 5	浜館	館跡	3・10・12・13	91	41-53	大湯沢	遺物包含地	
42	41-39	西ノ沢	遺物包含地	10	92	41-49	北ノ股	遺物包含地	10
43	41-25	大平	寺院跡	12	93	41-54	大森台	遺物包含地	
44	41-59	寺ヶ沢Ⅱ	遺物包含地		94	41-44	二ツ森	遺物包含地	
45	41-41	内山	遺物包含地		95	41-27	孫七山	遺物包含地	
46	41-23	寺ヶ沢Ⅰ	寺院跡	12	96	41-15	鰻沢	遺物包含地	
47		寺ヶ沢Ⅲ	遺物包含地	14・15	97	41-15 35-56	四角井戸	遺物包含地	10・16
48	41-19	田高館	館跡	3・10	98	5-28	花館	館跡	
49	41-42	大西目Ⅱ	遺物包含地		99	5-27	船岡台	遺物包含地	24・25・26
50	41-40	大西目	遺物包含地						

※表中の遺跡地図番号は、『秋田県遺跡地図（由利地区版）』に記載された登録番号である。

第1表文献（表中の番号は文献番号に対応する。）

- 1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第439集 2008(平成20)年
- 2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第420集 2007(平成19)年
- 3 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981(昭和56)年
- 4 仁賀保町史編集委員会『仁賀保町史』1972(昭和47)年
- 5 仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告』1987(昭和62)年
- 6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第446集 2009(平成21)年
- 7 仁賀保町教育委員会『仁賀保町史普及版』2005(平成17)年
- 8 仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告』1986(昭和61)年
- 9 にかほ市教育委員会『にかほ探訪』2006(平成18)年
- 10 西目町史編集委員会『西目町史 資料編』1998(平成10)年
- 11 西目町教育委員会『猿田遺跡遺構確認調査報告書』1994(平成6)年
- 12 佐々木孝一郎『西目村の話』1970(昭和45)年
- 13 西目町教育委員会『浜館遺跡調査報告』1976(昭和51)年
- 14 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第401集 2005(平成17)年
- 15 秋田県教育委員会『寺ヶ沢Ⅲ遺跡—一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—』秋田県文化財調査報告書第419集 2007(平成19)年
- 16 西目町史編集委員会『西目町史 通史編』2001(平成13)年
- 17 奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』1967(昭和42)年 吉川弘文館
- 18 富樫泰時『日本の古代遺跡 秋田県』1985(昭和60)年
- 19 西目町教育委員会『宮崎遺跡発掘調査報告』1987(昭和62)年
- 20 秋田県教育委員会『八郎瀉の研究』1965(昭和40)年
- 21 池田正治・高橋学「由利郡西目町で採集された墨書土器—土の下の歴史を求めて—」『秋田考古学』第39号 1987(昭和62)年
- 22 高橋学「西目町井岡遺跡で採集された遺物について」『秋田考古学』第40号 1990(平成2)年
- 23 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第1号』1986(昭和61)年
- 24 本荘市教育委員会『遺跡発掘調査報告書』1971(昭和46)年
- 25 本荘市『本荘市史 史料編Ⅰ上』1984(昭和59)年
- 26 本荘市『本荘市史 通史編』1986(昭和61)年



第5図 字切図と前田表Ⅱ遺跡調査範囲

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

前田表Ⅱ遺跡は、前述したように標高10.7～14.9mの沖積地に立地する。遺跡の東側には前田表遺跡や安倍館跡が立地する丘陵地（仁賀保高原北西端）が迫り、西側約0.5kmには日本海が広がる。遺跡内の北側を阿部堂川が、遺跡の南側にある立沢遺跡との間には両前寺川が丘陵地から西流する。調査対象区域（6,000㎡）は前田表Ⅱ遺跡のうち、遺跡分布調査や遺跡確認調査時に遺構や遺物の分布が確認された遺跡の北側で、調査以前は水田として利用されていた。発掘調査は国土交通省の事業計画の関連から2か年にわたり、遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図（第6図）で示すように、平成19年度は阿部堂川を挟む遺跡の北側部分（1,800㎡）、平成20年度は19年度調査区の南側部分（4,200㎡）を実施した。19年度調査は阿部堂川の南側の調査区を「A区」、北側を「B区」とした。調査では遺構は確認できなかったが、主に平安時代の須恵器や土師器が少量出土した。A区の出土土器は調査区南側（20年度調査区）の微高地上の遺跡中心部から流されてきたと推定される。B区の出土土器は東側の丘陵地に前田表遺跡や安倍館跡が立地することから、これらの遺跡から流れ落ちてきて堆積したものと考える。20年度調査では平安時代から中世の土坑59基、溝状遺構11条、沢状の落ち込み1か所、柱列1基、柱穴様ピット151基と江戸時代の溝状遺構1条を検出した。2年間にわたる発掘調査で検出された遺構や遺物から、この遺跡が平安時代以降の人々の生活の場であったことが明らかになった。その中で遺跡が最も頻繁に利用されたのは平安時代と考えられる。しかし、調査区内からは竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの居住施設が見つかっておらず、祭祀的な行為や土坑・溝状遺構等を設置した人々が住む集落の中心からは離れていたと推測される。隣接する前田表遺跡や家ノ浦遺跡、本遺跡の南側にある平安時代の掘立柱建物跡が見つかった立沢遺跡など周辺遺跡との密接な関係も考えられる。

第2節 調査の方法

1 発掘調査

調査は確認調査に基づき表土の除去を重機によって行った。水田の造成により沢状の落ち込み部分を除き、旧表土は失われており、Ⅱ層まで除去した。Ⅳ層上面までの粗掘り、遺構精査は移植ベラ・ジョレン等を使用して人力で作業を行った。排土運搬はベルトコンベアーを使用し、排土置き場は19年度調査ではA、B区の西側、20年度調査では南側のそれぞれ隣接地を利用した。

調査はグリッド法で行った。対象範囲全域に方眼杭を打設するため、調査区内に任意の1点を選定して、これをグリッドの原点MA 50（世界測地系平面直角座標第X系 $X = -77498.053$ $Y = -73921.456$ ）の基準杭とした。基準杭の座標北方向に南北基線、これに直交するラインを東西基線とし、両基線を延長して当該区内に4×4mメッシュのグリッドを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の原点を通る南北線をMA、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向

第3章 発掘調査の概要

かって昇順となるよう、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう、それぞれ付した。なお、南北線に付した2文字のアルファベットはA～Tまでの20文字の繰り返しとなっている。この方眼によって画する4m四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と東西線の符号とを組み合わせ、MA50グリッドのように呼ぶこととした。調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的な位置の把握に努めた。

遺構は、検出順に01からの通し番号を付して遺構種別を表す記号と組み合わせで呼称した。また、最終的に遺構でないと判断されたものについては欠番とした。遺構の掘削は、原則として半截または十字に土層ベルトを残し、2分割法、4分割法による精査を行った。調査の記録は、平面図・土層断面図及び写真で記録化した。平面図・土層断面図は原則として1/20の縮尺で作成し、遺構細部の図面を必要とする際には1/10の縮尺で作成した。遺物の取り上げについては、基本的に遺構外遺物には出土グリッド・層位・出土年月日を、遺構内遺物には出土遺構名・遺構内層位・出土年月日をそれぞれチェック付きポリ袋もしくは耐水性荷札に記入し、取り上げた。なお遺構内およびその周辺の遺物については、適宜出土地点の位置を記録した。発掘調査時の写真撮影は、遺構の検出状況・断ち割り状況・完掘状況の順で撮影し、適宜遺物の出土状況、遺構細部の拡大撮影などを加えた。また、広範囲の撮影、俯瞰状況での撮影にはローリング・タワーを使用した。さらに、調査完了時の全景撮影としてラジコン・ヘリコプターを使用しての空中写真・ビデオ撮影を行い、写真は35mm判のモノクロ・カラーリバーサル・6×7判のリバーサルフィルムとTIFF及びJ-PEGデータでCD-ROMに、ビデオはDVDに保存している。写真撮影は、基本的に35mm判を使用し、必要に応じてブローニー判も使用した。フィルムはモノクロ・カラーリバーサルを併用し、デジタルカメラでの撮影も行った。

2 室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第2原図とした。第2原図をスキャニングし、Adobe社「Photoshop CS3」・Adobe社「Illustrator CS3」を使用し、トレース・レイアウトまでの作業を行った。

遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示している。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後、一眼レフカメラによる写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

平成19年度発掘調査は、10月10日～11月28日まで実施した。なお、調査区の本調査に先立ち、9月25日～27日までバックホー、キャリアダンプによる表土除去、10月3日～5日までグリッド杭打設を行った。各週ごとの調査経過については、以下のとおりである。

平成20年度発掘調査は、6月16日～10月10日まで実施した。なお、調査区の本調査に先立ち、6月2日～10日までバックホー、キャリアダンプによる表土除去、6月9日～13日までグリッド杭打設を行った。各週ごとの調査経過については、以下のとおりである。

平成19年度 【第1週】10月10日～10月12日 現場作業はA区のベルトコンベアーの設置から始め、11日から稼働。精査はA区南端と北端の壁面を土層観察用に清掃。

【第2週】10月15日～10月19日 A区境(東西南北)壁面の断面図作成と写真撮影を終了。A区西・東側の畦畔際と中央から東西・南北方向にサブトレンチを入れて掘り下げ。地山と考えていたA区内全域が、全て盛土であることが判明。

【第3週】10月22日～10月26日 遺構精査は柱穴様ピットの掘り下げと図面作成、写真撮影。A区中央から南側の遺構検出作業と中央部に設定した南北方向のサブトレンチの掘り下げ。A区全域のⅡ層の掘り下げ。

【第4週】10月29日～11月2日 A区は遺構確認や精査、土層堆積状況確認のための土層断面精査。B区は分布調査時のトレンチを確認し、その掘り下げと併せて排水用溝の掘り下げ。

【第5週】11月5日～11月9日 A区は遺構確認や土層堆積状況確認のための土層断面精査を進めた。B区は分布調査時のトレンチを確認し、土層断面図を作成。

【第6週】11月12日～11月16日 A区は東側で遺構確認や土層堆積状況確認のためのトレンチ掘り下げ、土層断面精査を先週から継続。B区は今回新たに掘ったトレンチの土層断面図を作成。

【第7週】11月19日～11月22日 A区は東側でトレンチ掘り下げ、土層断面精査を先週から継続。B区は今回新たに掘ったトレンチの土層断面図の作成を終了し、出土遺物の採り上げ。21日、午前10時、文化財保護室立会いのもと、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所担当者と現場引き渡しについて現地協議。

【第8週】11月26日～11月28日 A区は東側で土層堆積状況確認のためのトレンチ掘り下げを終了。B区は全体的な掘り下げと出土遺物の採り上げ。28日、19年度調査区の発掘調査完了。

平成20年度 【第1週】6月16日～6月20日 ベルトコンベアー設置のほか、環境整備。調査は北端の壁面を土層観察用に清掃し、写真撮影と図面作成を開始。

【第2週】6月23日～6月27日 西端の排水溝設置を継続。調査は北端壁面の写真撮影を完了し、図面作成を継続。これと平行して北側から粗掘りと遺構確認を開始し、北西側では土坑3基を検出。

【第3週】6月30日～7月4日 西端の排水溝設置を終了。北側壁面の写真撮影と図面作成を継続。ベルトコンベアーを南側に6mほど移動して先週に引き続き、北側から粗掘りと遺構確認。

【第4週】7月7日～7月11日 遺構確認面までの粗掘り作業。北側では幅20cmほどの溝跡が東西方向に、幅3～4mほどの溝跡が北東～南西方向に延びていることを確認。どちらの溝跡も北側の市道の下まで延びる。

【第5週】7月14日～7月18日 週の前半は断続的な降雨のため、遺構確認面までの粗掘り作業。後半は遺構確認作業を急ぐ。堅穴状の土坑からほぼ完形の土師器壊が出土。14日、降雨のため作業中止。

【第6週】7月22日～7月25日 遺構確認面までの粗掘り作業、降雨の合間に遺構精査。25日、文化財保護室と市道部分の調査について現地で打ち合わせ。市道部分には溝跡が延びるため調査が必要であることを確認し、調査範囲も決定。

【第7週】7月28日～8月1日 断続的な雨のため、遺構確認面までの粗掘り作業。降雨の合間に遺構確認・精査作業。30・31日の2日間は重機を使って北側市道部分の表土除去。

【第8週】8月4日～8月8日 遺構精査を継続。複数の溝跡を検出。

【第9週】8月18日～8月21日 遺構精査を継続。21日、雨のため午後の作業中止。

【第10週】8月25日～8月29日 中央部・南側の遺構確認作業、並びに遺構精査。東側は重機を使って遺構確認面付近まで掘り下げ。中央部において、計5条の溝跡を検出。

【第11週】9月1日～9月5日 南西側・南東側を除いた遺構確認作業と並行して、中央部の土坑や溝跡の遺構精査。また、月～木曜日まで北側の市道部分の表土除去・遺構確認作業。

【第12週】9月8日～9月12日 中央部で検出した土坑・溝跡等の遺構精査並びに市道部分及び西側の遺構確認。

【第13週】9月16日～9月19日 北側の市道部分と南西端の低い部分の遺構確認作業を終了。中央部、南西部、北側市道部の土坑・溝跡等の遺構精査継続。南西端では数基の土坑と検出済みの溝跡の延長部を検出。市道部の北西側で幅約2m、検出面からの深さ約1.6mの溝跡を検出。

【第14週】9月22日～9月26日 遺構精査を継続。あわせて東側の遺物が集中する沢状の落ち込み部分(SX100)の掘り下げに着手。北端部に柱根が残る柱穴2基を確認。掘り方は直径約90cmで他の柱穴と比べて規模が大きく、約2.7mの間隔で南北に並ぶ。

【第15週】9月29日～10月3日 遺構精査と東側のSX100の掘り下げを継続する。SX100から白磁碗の小破片が出土。

【第16週】10月6日～10月10日 7日、午前10時、文化財保護室立会いのもと、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所担当者と現場引き渡しについて現地協議。8日、空中写真撮影。10日、全発掘調査完了。

第4章 調査の記録

第1節 基本層序

遺跡の層序は地形を考慮して任意の地点にトレンチを設定し、各地点の土層観察結果を相互に比較しながら検討を行った（第6・7図）。地点ごとに土質は若干異なっているが、土層の生成要因に主眼をおいて、遺跡の層序を以下のⅠ～Ⅴ層に分けることとした。

第Ⅰ層 現表土である。水田耕作土・床土および盛土で構成される。全体的に垂直方向の鉄分の沈着が認められる。本層は以下a～e層に細分した。

第Ⅰa層は農道造成時の盛土である。第Ⅰb層は標高の高い部分に作られた田地の耕作土に相当する。第Ⅰc層は地山土塊を多量に含み、上位の第Ⅰb層耕作土造成に伴う盛土と考える。第Ⅰd層は調査区全体を覆う現水田の耕作土である。厳密には上部が耕作土、下部が床土に相当するが、ここでは細分していない。第Ⅰe層は地山土塊を含み、上位の第Ⅰd層造成時に客土された盛土と考える。

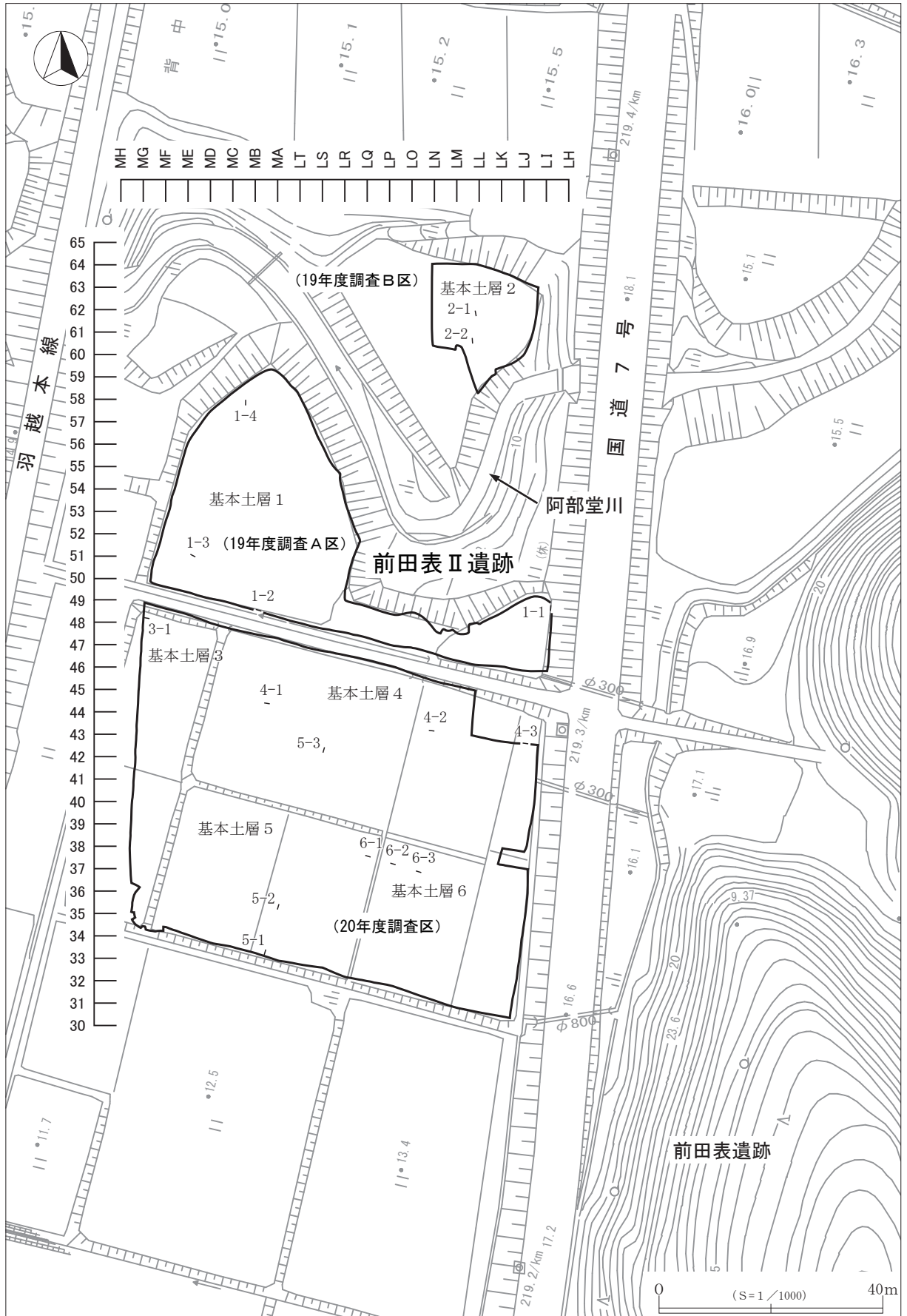
第Ⅱ層 区画整理前の水田に伴うものである。耕作土と床土で構成され、上位の第Ⅰ層および下位の第Ⅲ・Ⅳ層との層界は明瞭である。現水田の耕作が上部まで及んでいる場合もあり、層厚は地点により異なっている。上位のⅠ層と同様、全体的に垂直方向の鉄分の沈着が認められる。本層は以下a～c層に細分した。

第Ⅱa層は旧水田に伴う耕作土である。第Ⅱb層は旧水田に伴う床土である。第Ⅱc層は下位の第Ⅳ層と混合した状態であり、旧水田の造成・耕作に伴い下部の地山土が巻き上げられたものとする。

第Ⅲ層 調査区東側の沢状の落ち込み（一部がS X 100）に確認された層で、本来の遺構構築時の表土に連続する堆積土と考える。本層下部にはヨシ等の植物遺体や木製品が僅かながら出土しており、低湿な状況下で堆積したものと推測する。本層は色調から上下a・b層に細分可能であるが、土性や遺物出土状況に大きな違いは認められず、同じ低湿な状況下における堆積土の漸移的な変化と推測する。なお本層中からは特にL P 35・36グリッド周辺を中心として土師器・須恵器等の遺物が多数出土しており、人為的に廃棄されたものとする。

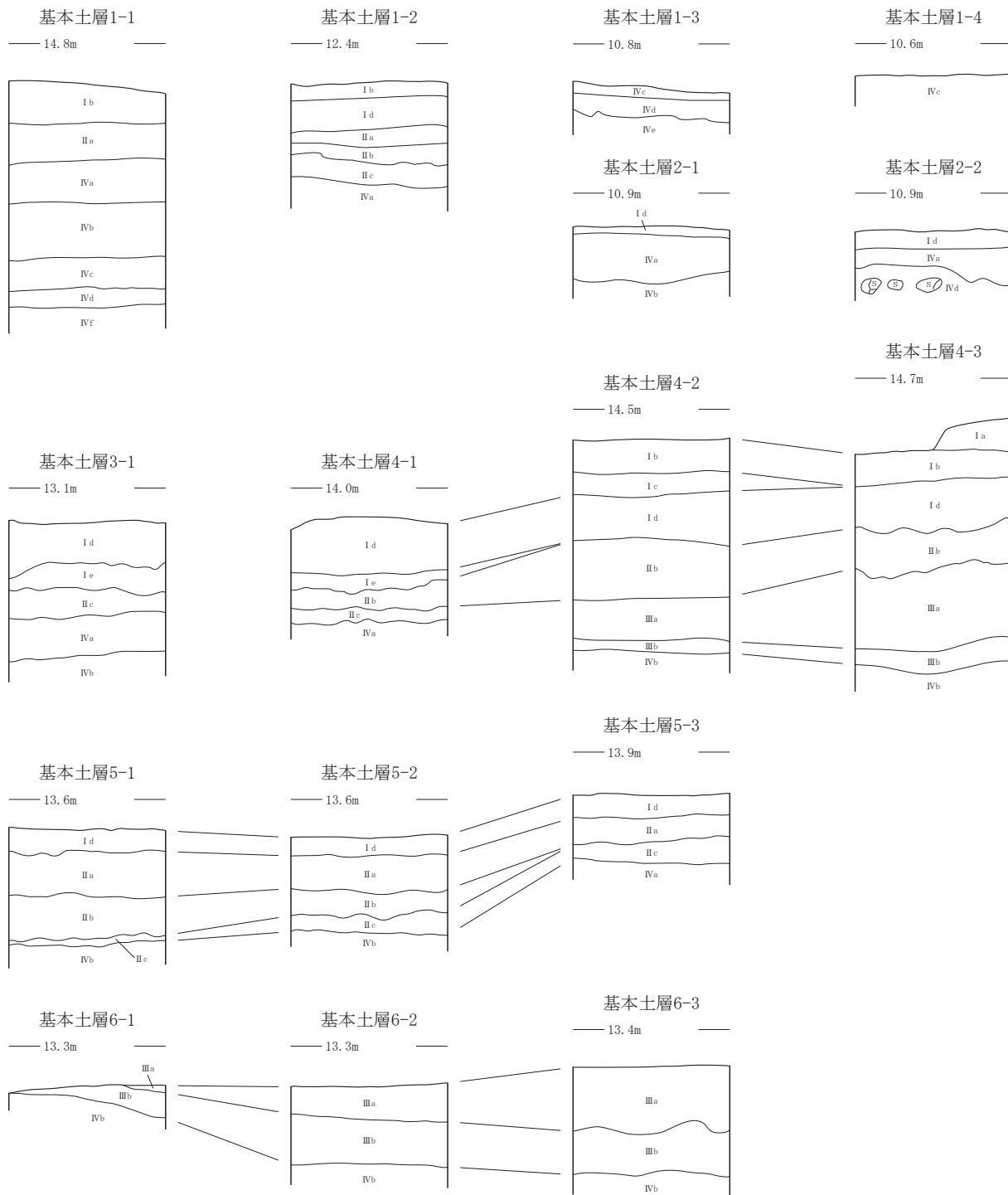
第Ⅳ層 遺跡全体に認められる基盤層である。大部分がグライ化したシルト質土で構成され、部分的に植物遺体を多く含む層や砂層が互層をなすといった堆積状況から、阿部堂川を供給源とした河成堆積物と推定する。遺構確認は本層上面で行った。本層は以下a～f層に細分した。

第Ⅳa層は黄褐色を基調とし、調査区内でも相対的に標高の高い地点で認められることから、離水した環境で酸化したものとする。これに対し第Ⅳb・c層は全体的にグライ化している。第Ⅳd層は植物遺体や細砂および粘土が互層をなしており、明らかな水成堆積を示す。第Ⅳe層は上位よりもさらに粒子の細かいシルトを主体とし、軟質な泥岩塊を多く含んでいる。第Ⅳf層は粘性の比較的高いシルト質土である。



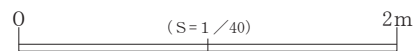
第6図 遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図

第4章 調査の記録



基本土層注記

- Ia にぶい黄褐色(10YR4/3) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 地山土塊φ10~30mm30%
- Ib 暗灰黄色(2.5Y4.5/2) 土性SiC 粘性中 しまり弱
- Ic 灰黄褐色(10YR4/2) 土性SiC 粘性中 しまり中 地山土塊φ5~20mm20%
- Id 暗灰黄色(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性弱 しまり中
- Ie 灰黄褐色(2.5Y5/2) 土性SiC 粘性弱 しまり中 地山土塊φ5~30mm50%
- IIa 暗灰黄~黒褐色(2.5Y3.5/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり中~強
- IIb 黒褐色(2.5Y3/2) 土性SiCL 粘性弱~中 しまり中~強
- IIc 暗灰黄色(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性中 しまり中
- IIIa 暗灰黄~オリーブ褐色(2.5Y4/2.5) 土性SiC 粘性中 しまり中~強
- IIIb 暗灰黄色(2.5Y4/2.5) 土性SiC 粘性中 しまり中 植物遺体少量
- IVa にぶい黄色(2.5Y6/3) 土性SiC 粘性中 しまり中
- IVb 灰色(7.5Y6/1) 土性SiC 粘性中~強 しまり中
- IVc 灰色(10Y5/1) 土性HC 粘性強 しまり中~強
- IVd オリーブ黒色(5Y2/2) 土性CL 粘性弱 しまり中 植物遺体少量
- IVe 灰色(5Y4/1) 土性SiC 粘性中 しまり中
- IVf 暗オリーブ灰(5GY4/1) 土性SiC 粘性中 しまり中~強
- V 明赤褐色(5YR5/8) 土性S 粘性弱 しまり強



第7図 基本土層

第V層 比較的深度の深い部分で確認された層である。円磨した大小の礫により構成されており、河床礫層と考える。

調査区の地形は新旧の水田造成による改変を受け、遺構構築時の表土は失われており、微地形の復元は困難であるが、大きく見ると阿部堂川に沿う平成19（2007）年度調査A・B区はそれぞれ河川流路に向かって下る斜面地、平成20（2008）年度調査区の中央部は周辺より標高の高い平坦地で、西側は南西に向かって下る緩斜面地となっている。平成20年度調査区の東側は、北から南に向かう斜面地が形成されており、灌漑施設等の設置による流路変更により埋没した沢状地形と考える。なお、この沢状地形の西岸の地形変換点付近においては、土師器・須恵器等が出土する遺物包含層が形成されているが、LNライン以東は極端に遺物出土量が減衰しており、遺構が確認される可能性も低いと判断し、調査対象から除外している。

遺跡の基盤層（第IV層）は阿部堂川を供給源とした河成堆積物と推定する。ただし、基盤層中から僅かではあるが土師器等の遺物が出土しており、遺跡は元々氾濫原の中に位置し、遺跡が安定的に利用されるのは阿部堂川が現河道に移った後と推測する。基盤層中の遺物は、河道変更により周辺の遺跡から流出したものであろう。

第2節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、前田表Ⅱ遺跡で検出した遺構は、土坑が59基、溝状遺構12条、沢状の落ち込み地形にある遺物集中区1か所、柱列1基、柱穴様ピット151基である。遺構内出土遺物は土師器（115.284kg）と須恵器（19.834kg）が大多数を占める。土師器の器種は坏（内黒土師器、黒色土器を含め66.678kg）・甕（48.213kg）・鍋（0.393kg）である。須恵器の器種は坏（4.285kg）・蓋（0.228kg）・壺（5.640kg）・甕（9.681kg）である。この他に、緑釉陶器破片、白磁破片、近世陶磁器（0.528kg）、土製品、木製品、石製品などが出土した。遺構は出土遺物の編年と出土木材・炭化材の放射性炭素年代測定の結果から、江戸時代の溝状遺構1条を除いて、平安時代から中世に帰属すると推定できる。

1 土 坑

土坑は59基検出された。性格は不明のものが多いが、底面の凹凸が顕著な土坑は粘土採掘坑の可能性が考えられる。

SK02（第10図）

MF46・47グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SKP122と重複し、同遺構を切る。規模は長径1.40m、短径1.16mの略円形で、確認面からの深さは0.56mである。主軸方向はN-54°-Eである。底面は中央部が凹み、やや起伏がある。周壁は東側の一部ではオーバーハングし、他はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が地山土由来の黄灰～暗灰黄色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は須恵器坏1点（2g）が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物が小破片で周辺に類似の土坑がなく、時期・性格は不明である。

S K 03 (第10図)

MF 46 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K 21、S K P 129と重複し、S K 21を切り、S K P 129に切られる。規模はS K P 129に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.84 m、短径0.86 mの長楕円形で、確認面からの深さは0.44 mである。主軸方向はN-8°-Wである。底面は凹凸があり、周壁は西側の一部ではオーバーハングし、北側は緩やかに、他はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄灰～灰黄色土を主体とする。1～3層は人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏4点(8g)、須恵器坏1点(5g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物が小破片で周辺に類似の土坑がなく、時期・性格は不明である。

S K 08 (第10図、図版1)

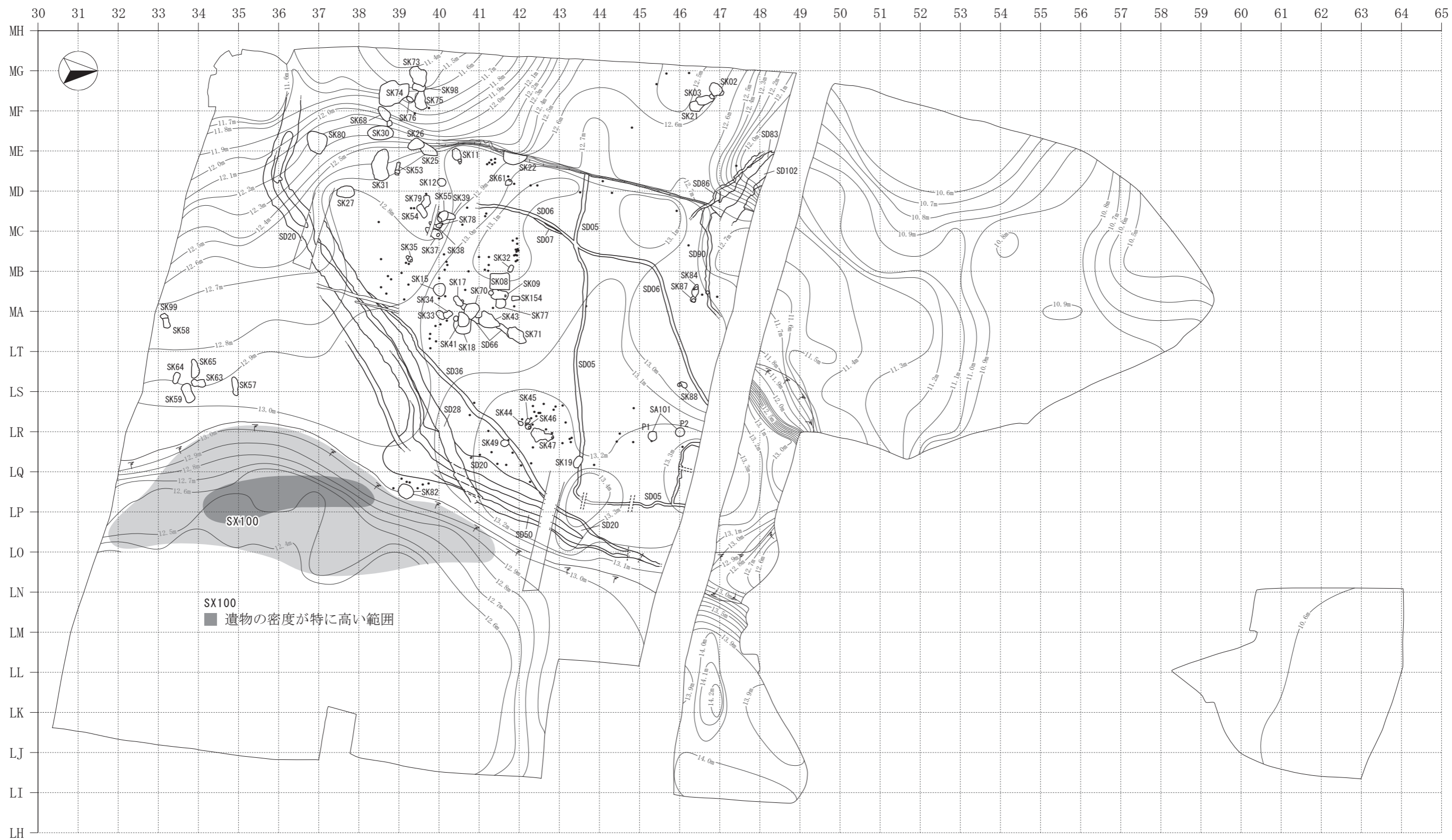
MA 41 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.94 m、短径1.66 mの長方形で、確認面からの深さは0.32 mである。主軸方向はN-0°である。底面は概ね平坦で、周壁に沿って幅0.08～0.10 m、深さ0.07～0.09 mの周溝が巡っている。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が地山土由来の暗灰黄～オリーブ色土を主体とする。1～3層は炭化物の混入量に差はあるが、層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土、4層は板壁の裏込め土に腐植した板壁が混入した層と考えられる。

遺物は土師器坏108点(1,833g)・甕35点(283g)、須恵器坏2点(14g)・甕2点(20g)が出土した。土師器坏が大多数を占め、須恵器は少ない。このうち、土師器坏は2層から第27図1～3・5・6、3層から第27図7～10、土師器甕胴部は2層から第27図4が出土した。9は口縁～体部の内面にかけてタール状の付着物が認められる。10は内黒土師器内面に漆の染みこんだ繊維状のもの(第5章第3節参照)が付着し、外面の一部は被熱剥離している。11は10から剥離分離したものである。8は完形で土坑底面から倒立の状態出土した。口縁部内面から口唇部の一部にタール状の付着物が認められる。灯明具への転用後、故意に残置されたと考えられる。これらの出土遺物から、S X 100と関連する祭祀的な土坑の可能性が考えられる。

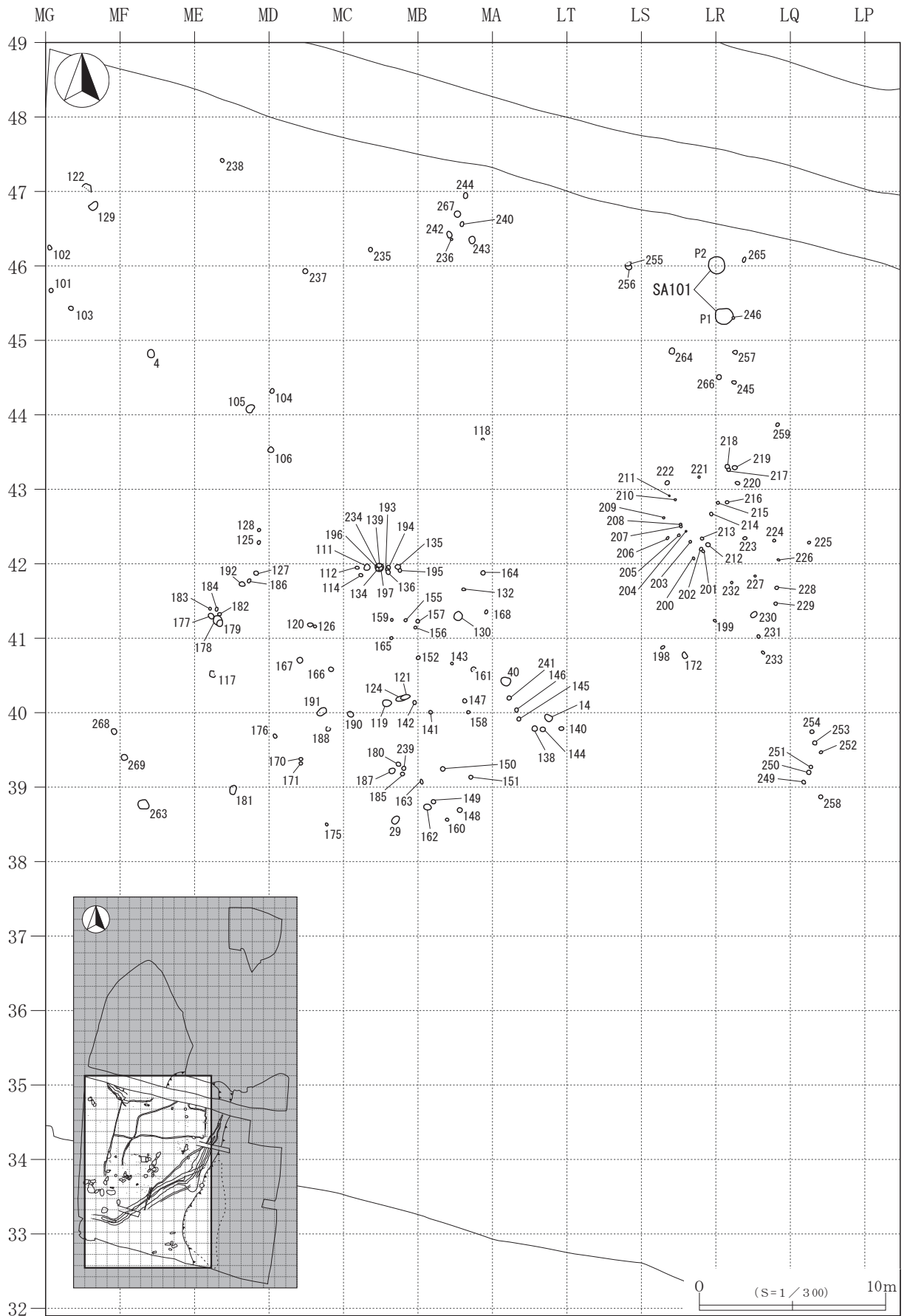
本遺構の埋没時期は4層底面出土の土師器坏等の出土遺物から10世紀前半を上限とする。本遺構は概ね平坦な底面を有する竪穴状の四角形で、壁際には細い周溝が巡り、板で壁を作った可能性が考えられる。本遺構を土坑として扱っているが、工房跡の可能性があり、底面に置かれた土師器坏8は廃絶儀礼的な行為の際に残置された可能性も考えられる。

S K 09 (第11図)

MA 41 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K P 130・132、S K 77と重複し、S K P 130・132に切られ、S K 77を切る。規模はS K P 130に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.48 m、短径0.82 mの楕円形で、確認面からの深さは0.24 mである。主軸方向はN-10°-Eである。



第8図 遺構配置図



第9図 ピット配置図

底面は概ね平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土はともに地山土由来のオリーブ、暗オリーブ色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏5点(30g)・甕3点(20g)、須恵器甕1点(37g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 11 (第11図)

MD・ME 46グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K P 117と重複し、同遺構に切られる。規模はS K P 117に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.20m、短径0.88mの楕円形で、確認面からの深さは0.24mである。主軸方向はN-85°-Eである。底面は西側が丸く凹み、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の暗灰黄色土を主体とする。1～3層は人為的な埋め戻し土で、特に2・3層の層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏15点(129g)・甕1点(9g)、須恵器坏5点(59g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 12 (第11図、図版1)

MD 39・40グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径0.82m、短径0.76mの円形で、確認面からの深さは0.24mである。主軸方向はN-3°-Eである。底面は凹凸があり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が遺構構築時の表土由来の暗灰黄～オリーブ黒色土を主体とする。1～3層の層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土、4層は土坑開口時に周辺表土が流入した自然堆積土と考える。

遺物は土師器坏25点(222g)・甕14点(116g)、須恵器壺1点(13g)が出土した。このうち、4層から土師器坏(第27図12・13)が出土した。13は皿状で底部が肥厚した柱状高台を有する。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考える。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 15 (第11図)

MA 39・40グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.28m、短径1.20mの略円形で、確認面からの深さは0.48mである。主軸方向はN-81°-Eである。底面は中央部に向けて緩やかに凹み、周壁はやや急に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の黄褐～灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏5点(23g)・甕7点(63g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K17 (第12・13図、図版1)

MA40グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SD66、SKP161と重複し、これらの遺構を切る。規模は長径1.20m、短径0.60mの楕円形で、確認面からの深さは0.44mである。主軸方向はN-46°-Eである。底面は凹凸が顕著で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～5層が地山土由来の灰黄～青灰色土を主体とする。1～4層は人為的な埋め戻し土で、特に1・2層の層界は不明瞭で土質・混入土が類似しており、一括の埋め戻し土、5層は壁面の崩落土と考える。

遺物は土師器坏61点(415g)・甕25点(356g)、須恵器坏2点(12g)・壺1点(11g)が出土した。このうち、4層から土師器甕胴部(第27図14)・口縁～胴部(第28図15)が出土した。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明であるが、本遺構の南東約2mに位置するSK33や西南西約8mのSK54は規模、主軸方向をほぼ同じくし、他の土坑と比べて出土遺物も比較的多いことから、関連する遺構の可能性が考えられる。

S K18 (第12・13図、図版1)

LT40グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK41・70、SKP40、SD66と重複し、SK41・70、SKP40に切られ、SD66を切る。規模はSK41・70、SKP40に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.84m、短径1.88mの略円形で、確認面からの深さは0.24mである。主軸方向はN-52°-Wである。底面は概ね平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の暗灰黄色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏39点(440g)・甕16点(10g)、須恵器坏2点(5g)・甕2点(55g)が出土した。このうち、須恵器甕胴部(第28図16)が2層から出土し、SK54(3層)出土破片と接合した。小破片のため、埋め戻し土の中に偶然混入した可能性があるが、遺構間の直線距離が12m以上あることから、遺物を故意に分散廃棄した可能性が考えられる。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K19 (第14図)

LQ43グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SD05と重複し、同遺構を切る。規模は長径1.24m、短径0.76mの楕円形で、確認面からの深さは0.10mである。主軸方向はN-61°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の暗灰黄～灰黄褐色土を主体とする。1層は人為的な埋め戻し土、2層は土坑開口時に周辺表土が流入した自然堆積土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は切り合い関係からSD05より新しい。周辺に類似の土坑がなく、性格は不明である。

S K 21 (第10図)

ME・MF 46グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K 03と重複し、同遺構に切られる。規模はS K 03に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値0.96 m、短径1.08 mの不整形で、確認面からの深さは0.46 mである。主軸方向はN-22°-Wである。底面は凹凸があり、周壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の黄灰～灰黄色土を主体とする。1・2層は人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の埋没時期は切り合い関係からS K 03より古いが、堆積土が類似しており、時期差がないと考えられる。性格は不明である。

S K 22 (第14図、図版1)

MD 41・42、ME 41グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は西側が水田の造成により底面まで破壊されている。現存する部分の形状から推測すると、長径2.36 m、短径残存値1.16 mの楕円形で、確認面からの深さは0.60 mである。主軸方向はN-4°-Eである。底面は凹凸があり、周壁はやや緩やかに立ち上がる。

堆積土は1～4層が遺構構築時の表土由来のオリーブ黒色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器甕2点(29g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。また、1層からは木製の浮の一部(第28図17)が出土した。表面を削り、両端を尖らし、一方の先端には孔があり、表面は赤黒に半々に塗られている。17は土坑破壊時に混入した近世以降の遺物の可能性がある。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 25 (第14図、図版1)

MD・ME 39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K 26と重複し、同遺構に切られる。規模はS K 26に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.64 m、短径1.00 mの不整形で、確認面からの深さは0.56 mである。主軸方向はN-37°-Eである。底面は概ね平坦で、周壁は中位からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来のオリーブ褐色土を、2・3層が遺構構築時の表土由来の灰色土を主体とする。1層は本遺構の埋め戻し後の陥没部分に流入した自然堆積土、2・3層の層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏5点(22g)・甕1点(17g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 26 (第14図、図版1)

ME 39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K 25と重複し、同遺構を切る。規模は長径1.56 m、短径1.12 mの楕円形で、確認面からの深さは0.58 mである。主軸方向はN-20°-Wである。底面は

概ね平坦で、周壁は中位からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1・5層が地山土由来のオリブ褐～明黄褐色土を、2～4層は遺構構築時の表土由来の灰色土を主体とする。1層は本遺構の埋め戻し後の陥没部分に流入した自然堆積土、2～4層の層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土、5層は壁面上部の崩落土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は切り合い関係からSK25より新しいが、堆積土が類似しており、時期差がないと考えられる。性格は不明である。

SK27 (第15図、図版1)

MC・MD37グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.72m、短径1.16mの長楕円形で、確認面からの深さは0.20mである。主軸方向はN-1°-Wである。底面は概ね平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2・4・13層が炭化物層、焼土・被熱土層が7層である。

遺物は土師器坏13点(57g)・甕2点(6g)が出土した。本遺構使用時に周辺から混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の時期は底面の炭化物の放射性炭素年代測定結果によると、12世紀前半(西暦1129±20年)である。炭化物層や焼土・被熱土層、焼土・被熱土塊の堆積状況から最低4度の焼成行為に伴う炭化物層や焼土・被熱土層の掻き出し等が行われたことが推測できる。遺構の性格は不明である。

SK30 (第15図、図版2)

ME38グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径2.56m、短径1.38mの楕円形で、確認面からの深さは0.66mである。主軸方向はN-1°-Wである。底面は概ね平坦であり、周壁は南側がほぼ垂直に、北側がやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1～4層が地山土由来の黄褐～暗オリブ色土を主体とする。人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏10点(76g)・甕5点(67g)、須恵器坏1点(14g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK31 (第16図、図版2)

MD・ME38グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径3.12m、短径1.64mの楕円形で、確認面からの深さは0.60mである。主軸方向はN-77°-Wである。底面は概ね平坦だが西側で一段下がる。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1・2・4～6層が地山土由来のオリブ褐～灰色土を主体とする。1層は本遺構の埋め戻し後の陥没部分に流入した自然堆積土、3層は炭化物粒・塊を主体とする層だが被熱層を持たず、前後の2・4層とともに本遺構周辺での焼成行為に伴う炭化物等を含んだ一括の人為的な埋め戻し土、5層は壁面上部の崩落による自然堆積土、6層は土抗開口時に流入した自然堆積土と考える。

遺物は土師器坏6点(40g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明であるが、本遺構の南東約1.2mに位置するS K 27は焼成行為を伴う遺構であるので、堆積土から推測して関連する可能性が考えられる。

S K 32 (第16図)

MA・MB 41グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径0.72m、短径0.44mの楕円形で、確認面からの深さは0.20mである。主軸方向はN-65°-Wである。底面は凹凸があり、周壁は北側がやや緩やかに、南側がほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1・2層が地山土由来のオリーブ褐色土を、3層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。1・2層の層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土、3層は土坑開口時に周辺表土が流入した自然堆積土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構は周辺にあるS K 154と規模・堆積土が類似しており、埋没時期は10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 33 (第16図、図版1)

LT・MA 39・40グリッドにあり、第IV層上位で確認した。S K 34と重複し、同遺構に切られる。規模はS K 34に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.00m、短径0.64mの楕円形で、確認面からの深さは0.48mである。主軸方向はN-50°-Eである。底面は凹凸が顕著で、南に傾斜する。周壁は南～西がほぼ垂直に立ち上がり、北～東がやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1～4層が地山土由来の暗灰黄～暗緑灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏24点(116g)・甕15点(241g)、須恵器坏3点(24g)・甕1点(15g)が出土した。このうち、須恵器甕胴部(第28図18)が4層から出土し、S K P 40(3層)出土破片と接合した。ともに最下層から出土したが、小破片で遺構間が約1.6mと近接していることから、埋め戻しの際に混入した可能性がある。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明であるが、本遺構の北西約2mに位置するS K 17や西約9.2mのS K 54は規模、主軸方向をほぼ同じくし、他の土坑と比べて出土遺物数量も多いことから、関連する遺構の可能性が考えられる。

S K 34 (第16図、図版1)

LT・MA 40グリッドにあり、第IV層上位で確認した。S K 33と重複し、同遺構を切る。規模は長径0.88m、短径0.68mの楕円形で、確認面からの深さは0.52mである。主軸方向はN-32°-Wである。底面は凹凸が顕著で、周壁は北東・西の一部がオーバーハングし、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～6層が地山土由来の黄褐～暗緑灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏12点(76g)・甕4点(100g)、須恵器壺1点(13g)・甕1点(10g)が出土した。埋

め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 35 (第17図)

MB 39グリッドにあり、第IV層上位で確認した。S K P 180・187と重複し、これらの遺構に切られる。規模はS K P 180・187に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値0.54 m、短径0.48 mの略円形で、確認面からの深さは0.16 mである。主軸方向はN-72°-Eである。底面は凹凸があり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄灰色土を主体とし、人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器甕2点(13g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 37 (第17図)

MB・MC 39・40グリッドにあり、第IV層上位で確認した。開口部中央やや南側を東西方向に幅約0.45 mの後世の暗渠設置による攪乱がある。S K P 190と重複し、同遺構に切られる。規模はS K P 190に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.96 m、短径0.92 mの楕円形で、確認面からの深さは0.48 mである。主軸方向はN-32°-Eである。底面は南側に傾斜し、凹凸が顕著である。周壁は南東～西側がオーバーハングし、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の暗灰～暗緑灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏25点(165g)・甕4点(21g)、須恵器甕1点(311g)が出土した。このうち、須恵器甕胴部(第28図19)はS K 43、S D 83(11層)、S X 100(L Q 36)の遺構内土器片とL T 43・MB 40・MC 43グリッドII層出土土器破片と接合した。遺構間は最長約45.6 mあることから、遺物を故意に分散廃棄した可能性が考えられる。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 38 (第17図、図版2)

MC 39・40グリッドにあり、第IV層上位で確認した。開口部中央やや南側を東西方向に幅約0.45 mの後世の暗渠設置による攪乱がある。S K 78、S K P 188と重複し、これらの遺構に切られる。規模はS K 78、S K P 188に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.12 m、短径0.40 mの不整形で、確認面からの深さは0.24 mである。主軸方向はN-25°-Eである。底面は凹凸があり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄灰～青灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏19点(80g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK39 (第17図、図版2)

MC 40 グリッドにあり、第IV層上位で確認した。SK 55と重複し、同遺構に切られる。規模はSK 55に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.72m、短径0.76mの楕円形で、確認面からの深さは0.46mである。主軸方向はN-10°-Eである。底面は南側に緩やかに傾斜する。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の暗灰黄～灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏6点(21g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK41 (第12・13図、図版1)

LT 40 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK 18・70と重複し、これらの遺構を切る。規模は長径1.52m、短径1.16mの楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。主軸方向はN-67°-Eである。底面は中央が凹み、起伏がある。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄褐色土を、4層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。1～4層は人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏3点(41g)・甕3点(87g)・鍋1点(62g)、須恵器坏1点(3g)が出土した。このうち、土師器鍋口縁部(第28図20)は2層から出土した。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK43 (第12・13図、図版1)

LT 40・41、MA 41 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SD 66と重複し、同遺構を切る。規模は長径2.12m、短径1.44mの不整形で、確認面からの深さは0.40mである。主軸方向はN-23°-Eである。底面は東側中央部が凹み、起伏がある。周壁はやや急に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄褐～灰色土を主体とする。1・2層の層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土、3層は壁面上部の崩落土と考える。

遺物は土師器坏44点(338g)・甕11点(386g)・鍋1点(24g)、須恵器壺3点(41g)・甕3点(204g)が出土した。このうち、2層から土師器坏(第28図21)・甕底部(同図22)、須恵器甕胴部(同図23・24)が出土した。22は底部外面が砂底である。23はLS 38・42、MA 41 グリッド、24はMA 41 グリッドII層出土土器片と接合した。本遺構出土土器片が広域接合した第28図19についてはSK 37を参照のこと。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK44 (第17図)

LR 42 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径0.50m、短径0.38m楕円形で、確認面からの深さは0.08mである。主軸方向はN-28°-Eである。底面は平坦で、周壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする単層で、人為的

な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏1点（3g）が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明であるが、周辺に位置するSK45・46の堆積土は、黒褐色土を主体として炭化物や地山土粒・塊を比較的多く含む点で本遺構と類似しており、これらはごく短期間に、付近で燃焼行為を伴うような状況下で堆積したものと推測する。

SK45（第18図）

LR42グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SKP202と重複し、同遺構に切られる。規模はSKP202に切られるため全体形状は不明であるが、長径0.60m、短径0.38mの楕円形で、確認面からの深さは0.08mである。主軸方向はN-50°-Wである。底面は平坦で、周壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の暗灰黄色土を、2層は遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。両層とも人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構は周辺にあるSK44・46と規模・堆積土が類似しており、埋没時期は10世紀前半を上限とする。

SK46（第18図）

LR42グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SKP201・202・212と重複し、これらの遺構に切られる。規模はSKP201・202に切られるため全体形状は不明であるが、長径0.60m、短径0.52mの略円形で、確認面からの深さは0.12mである。主軸方向はN-23°-Eである。底面は丸く凹んでおり、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の暗灰黄色土を、2層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。両層とも人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器甕1点（9g）が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK47（第18図）

LQ・LR42グリッドにあり、第IV層上面で確認した。確認時には2基以上の遺構同士が重複した可能性も考えたが、精査の結果1基の土坑であることが判明した。SKP216と重複し、同遺構に切られる。規模は長径2.32m、短径1.36mの不整形で、確認面からの深さは0.20mである。主軸方向はN-12°-Eである。底面は凹凸が顕著で、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の暗灰黄色土を、2・3層は遺構構築時の表土由来の黒褐灰色土を主体とする。人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏2点（19g）、須恵器蓋1点（67g）が出土した。このうち、須恵器蓋（第28図25）が出土し、MA46グリッドII層出土土器片と接合した。これらの遺物は、埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は3層出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果によると、15世紀中葉（西暦

1442 ± 20年) である。性格は不明である。

S K 49 (第18図、図版2)

LQ 41グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SD 36と重複し、同遺構を切る。規模は長径0.82 m、短径0.66 mの略円形で、確認面からの深さは0.28 mである。主軸方向はN - 2° - Wである。底面は平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はともに地山土に類似する灰色基調土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は遺構の切り合い関係からSD 36より新しい。性格は不明である。

S K 53 (第18図)

MD 38・39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SKP 181と重複し、同遺構に切られる。規模はSKP 181に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.24 m、短径0.40 mの長方形で、確認面からの深さは0.36 mである。主軸方向はN - 80° - Wである。底面は西側に緩やかに傾斜し、起伏がある。周壁は西側で一部オーバーハングし、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層とも地山土由来の灰～黄灰色土を主体とする。人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏2点(2g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 54 (第19図)

MC 39グリッドにあり、第IV層上位で確認した。SK 79と重複し、同遺構を切る。規模は長径1.38 m、短径0.68 mの長楕円形で、確認面からの深さは0.40 mである。主軸方向はN - 59° - Eである。底面は凹凸が顕著で、周壁は南西側が一部オーバーハングし、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄灰～オリーブ灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏74点(825g)・甕6点(96g)、須恵器坏7点(33g)・壺2点(27g)・甕2点(13g)が出土した。このうち、土師器坏(第28図26・第29図27～30)・甕口縁部(同図31)、須恵器壺胴部(同図32)を掲載した。28は本遺跡から出土した坏の中で最大である。32はミニチュアの壺である。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。本遺構出土土器片が広域接合した第28図16についてはSK 18を参照のこと。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明であるが、本遺構の東北東約8 mに位置するSK 17や東約8 mのSK 33は規模、主軸方向をほぼ同じくし、他の土坑と比べて出土遺物も比較的多いことから、関連する遺構の可能性が考えられる。

S K 55 (第17図、図版2)

MC 39・40グリッドにあり、第IV層上位で確認した。SK 39、SKP 191と重複し、SKP 191に切れ、SK 39を切る。規模はSKP 191に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値0.92 m、短

径0.88 mの楕円形で、確認面からの深さは0.36 mである。主軸方向はN-48°-Wである。底面は凹凸が顕著であり、周壁は東側がやや緩やかに、他はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1・2層が地山土由来の黄灰～灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏5点(25g)・甕2点(15g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 57 (第19図、図版2)

L R・L S 34グリッドにあり、第IV層上面で長楕円形プランと、プラン長径に直交する2条の板材列を確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.88 m、短径0.60 mの長楕円形で、確認面からの深さは0.20 mである。主軸方向はN-78°-Eである。また、掘形長径に直交する2条の板材列が、約1.10 mの間隔において土坑底面にほぼ垂直に打ち込まれていた。西側の板材列は8枚、東側の板材列は13枚の板材で構成され、両列ともに部分的に重なり、隙間なく並べられている。板材列は掘形プランから突出している箇所もあり、本来の土坑上端は一回り大きかったと推測する。打ち込まれた板材の下端レベルは揃っておらず、長さの異なる板材を打ち込み、上端で揃えたのであろう。底面は若干の凹凸が認められるが概ね平坦で、周壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1・2層が地山土由来のオリーブ色基調土を主体とし、3層は土坑底面に部分的に薄く堆積した土で、黒褐色土に木片等の有機物を多く含む。後者は遺構構築直後の堆積土、前者は板材打ち込み直後に埋め戻した土と考えられ、土坑内堆積土は土坑の基底面を構成し、土坑機能時の堆積土は水田耕作の影響により失われたと推測する。

遺物のうち、板材列を構成する板材の中には、端部が尖る形状をなすものや、端部に方形の穿孔を伴うもの第29図33が見受けられ、屋根材等の転用品と考える。この他に土師器坏22点(52g)・甕2点(35g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明であるが、対向する板材列がほぼ隙間なく設置されていることから、溜枘のような水貯留施設の可能性が高いと考えられる。

S K 58 (第19図)

L T 33グリッドにあり、第IV層上面で確認した。確認当初は1基の土坑と考えたが、精査の結果、2基の土坑が切り合ったものと判断した。S K 99と重複し、同遺構に切られる。規模はS K 99に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.04 m、短径0.66 mの楕円形で、確認面からの深さは0.12 mである。主軸方向はN-75°-Eである。底面は若干の凹凸が認められるが概ね平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山土由来の暗灰黄色土を主体とする単層で、人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏8点(26g)・甕1点(92g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 59 (第19図、図版2)

L R・L S 33グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.92 m、短径0.96 mの楕円形で、確認面からの深さは0.28 mである。主軸方向はN-68°-Eである。底面は南西側がやや深く凹み、段差が生じている。周壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を、2層が地山土由来の灰色土を主体とする。一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏8点(37g)・甕2点(331g)、須恵器坏2点(16g)が出土した。このうち、比較的大型の土師器甕口縁~胴部(第29図34)が土坑底面中央部から出土しており、埋め戻し直前に故意に置かれたものの可能性が高い。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

土坑底面から出土した34から、本遺構の埋没時期は10世紀前半を上限とする。34はその出土状況により故意に残置されたものと推測されることから、土坑墓の可能性も考えられる。

S K 61 (第20図)

MD 41グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K P 186と重複し、同遺構に切られる。規模はS K P 186に切られるため全体形状は不明であるが、長径0.72 m、短径0.56 mの不整円形で、確認面からの深さは0.28 mである。主軸方向はN-39°-Wである。底面は丸く凹み、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の黄褐色土を、2層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏9点(43g)、須恵器坏1点(7g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 63 (第20図、図版3)

L S 33・34グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.44 m、短径0.76 mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.22 mである。主軸方向はN-12°-Eである。底面は北側半分が深く凹み、中央部に段差が生じている。周壁は南側がやや緩やかに、他はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の暗灰黄~灰色土を主体とする。一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏10点(119g)・甕3点(92g)、須恵器坏2点(11g)が出土した。このうち、北端部土坑確認面上から伏せた状態で出土した土師器坏(第29図35)は約1/3復元した。体部が内彎し、外面に6条の平行沈線を有し、体部中位から直線的に外折する。上面の削平のため、完形に近い出土ではないが、埋め戻し時に故意に伏せて置かれた可能性が高いと考える。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。35はその出土状況により故意に残置されたものと推測されることから、土坑墓の可能性が考えられる。

S K 64 (第20図)

L S 33グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.16 m、短

径0.60mの楕円形で、確認面からの深さは0.08mである。主軸方向はN-72°-Wである。底面は凹凸が顕著で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は地山土由来の灰オリーブ色土を主体とする単層で、人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は須恵器坏1点(16g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 65 (第20図、図版3)

L S 33・34グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.80m、短径0.80mの長楕円形で、確認面からの深さは0.16mである。主軸方向はN-81°-Eである。底面は凹凸が顕著で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は地山土由来の灰オリーブ色土を主体とする単層で、人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏13点(31g)・甕3点(29g)・鍋1点(30g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 68 (第20図)

ME・MF 38グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K P 263と重複し、同遺構に切られる。規模はS K P 263に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.68m、短径0.90mの楕円形で、確認面からの深さは0.46mである。主軸方向はN-56°-Eである。底面は丸く凹み、周壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の黄褐～灰オリーブ色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器甕1点(18g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 70 (第12・13図、図版1)

L T 40・41、MA 40・41グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K 18・41、S D 66と重複し、S K 18、S D 66を切り、S K 41に切られる。規模はS K 41に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.48m、短径1.36mの楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。主軸方向はN-49°-Wである。底面は中央部が凹み、起伏がある。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の黄褐色土を、2・3層は遺構構築時の表土由来のオリーブ黒色土を主体とする。人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏78点(410g)・甕29点(480g)、須恵器坏1点(3g)・甕1点(12g)が出土した。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 71 (第12・13図、図版1)

L T 41・42グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S D 66と重複し、同遺構を切る。規模は

長径2.16m、短径1.22mの長楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。主軸方向はN-35°-Eである。底面は南側中央部が凹み、やや起伏がある。周壁はやや急に立ち上がる。堆積土は1～3層が地山土由来の暗灰黄～黄褐色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏34点(307g)・甕13点(201g)、須恵器坏1点(8g)・甕4点(298g)が出土した。このうち、2層から須恵器甕口縁部(第29図37)・甕胴部(第30図38)、3層から内黒土師器坏(第29図36)が出土した。36は外面に3条の平行沈線を有する。37はLT40グリッドII層出土土器片と接合した。38はSX100(LO34)、LQ43、LS43グリッドII層出土土器片と接合した。遺構間は約35mあり、遺物を故意に分散廃棄した可能性が考えられる。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK73 (第21図)

MF39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK98と重複し、同遺構を切る。規模は長径2.20m、短径1.56mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.64mである。主軸方向はN-63°-Eである。底面は西側が深く凹み、起伏がある。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が地山土由来の暗灰～灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏26点(170g)・甕5点(50g)、須恵器坏3点(31g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK74 (第21図)

MF38・39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径3.00m、短径2.36mの不整楕円形で、確認面からの深さは1.00mである。主軸方向はN-12°-Wである。底面は凹凸が顕著で、起伏がある。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が地山土由来の暗灰黄～灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏61点(353g)・甕17点(610g)、須恵器坏4点(34g)が出土した。このうち、土師器甕胴部(第30図39)、須恵器坏(同図40)を掲載した。土師器は残りのよいものがあるが、表面が摩滅しており、埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK75 (第21図)

ME・MF39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK98と重複し、同遺構に切られる。規模はSK98に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.78m、短径1.16mの不整長楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。主軸方向はN-83°-Wである。底面は凹凸があり、周壁はやや急に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の灰～灰オリーブ色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏11点(83g)・甕6点(200g)、須恵器坏1点(2g)・甕2点(343g)が出土した。このうち、須恵器甕底～胴部(第30図41)・甕胴部(同図42)は4層から出土した。41は底部と胴部の境界が不明確で底部周縁から連続してごく緩やかな外傾で立ち上がる。42は転用硯で、12m以上離れた本遺構より高い位置にあるMB40グリッドII層出土土器片と接合した。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

S K 76 (第21図)

MF39グリッドにあり、第IV層上面で赤く焼けた数個の石が混入した楕円形プランを確認した。重複する遺構はない。規模は長径0.72m、短径0.44mの楕円形で、確認面からの深さは0.30mである。主軸方向はN-32°-Eである。底面は南側に傾斜しながら丸く凹み、周壁は南側がほぼ垂直に、北側は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を、2・3層が地山土由来の暗青灰色土を主体とする。一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏8点(36g)・甕3点(205g)が出土した。砂底の甕底部などが出土したが、表面が摩滅しており、埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。遺構確認時は焼成遺構等を考慮したが、性格は不明である。

S K 77 (第11図)

MA41グリッドにあり、第IV層上面で確認した。S K 09と重複し、同遺構に切られる。規模はS K 09に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.12m、短径1.04mの略円形で、確認面からの深さは0.20mである。主軸方向はN-34°-Wである。底面は概ね平坦で、周壁はやや急に立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の黄褐色土を、2層は遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。人為的な埋め戻し土と考える。1層には多量の炭化物粒・材を含むことから、付近で燃焼行為を伴うような状況下で堆積したものと推測する。

遺物は出土しなかった。

本遺構の埋没時期は遺構の切り合い関係からS K 09より古い。性格は不明である。

S K 78 (第17図、図版2)

MC39・40グリッドにあり、第IV層上位で確認した。S K 38と重複し、同遺構を切る。規模は長径は0.67m、短径0.41mの楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。主軸方向はN-21°-Wである。底面は凹凸があり、周壁は南西側の一部がオーバーハングし、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の黄灰～灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は切り合い関係からS K 38より新しい。性格は不明である。

SK79 (第19図)

MC 39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK 54と重複し、同遺構に切られる。規模はSK 54に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値1.20 m、短径0.76 mの不整形で、確認面からの深さは0.32 mである。主軸方向はN-61°-Wである。底面は凹凸が顕著で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1~4層が地山土由来の黄灰~灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の埋没時期は切り合い関係からSK 54より古い。性格は不明である。

SK80 (第22図)

MD・ME 36・37グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径2.40 m、短径2.00 mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.38 mである。主軸方向はN-67°-Eである。底面はやや起伏があり、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1~3層が地山土由来の黄褐~明黄褐色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏13点(63g)・甕2点(27g)、須恵器坏1点(6g)・甕1点(142g)が出土した。このうち、須恵器甕胴部(第30図43)は3層から出土し、直線距離が14.5 m以上あるMA 42グリッドII層出土土器片と接合した。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK82 (第22図、図版3)

LP 39グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径1.56 m、短径1.36 mの楕円形で、確認面からの深さは0.24 mである。主軸方向はN-17°-Eである。底面は概ね平坦で、周壁は東側がほぼ垂直に、西側がやや緩やかに立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の暗灰黄色を、2層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。1層は人為的な埋め戻し土、2層は土坑開口時に周辺の表土が流入した自然堆積土と考える。

遺物は土師器坏41点(220g)・甕18点(257g)、須恵器甕1点(76g)が出土した。このうち、須恵器甕胴部(第30図44)は1層から出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は2層出土の炭化物の放射性炭素年代測定結果によると、12世紀末~13世紀前半(西暦1194±20年)である。性格は不明である。

SK84 (第22図、図版3)

MA 46グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK 87、SK P 236・242と重複し、SK 87を切り、SK P 236・242に切られる。規模は長径1.28 m、短径0.64 mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.28 mである。主軸方向はN-74°-Wである。底面は概ね平坦であり、周壁は中位までやや緩やかに、中位から開口部に向けてほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1~5層が地山土由来の黄灰~灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は須恵器坏1点(7g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。
本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK87 (第22図、図版3)

MA 46 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK 84、SKP 243 と重複し、これらの遺構に切られる。規模はSK 84 に切られるため全体形状は不明であるが、長径残存値0.54 m、短径0.52 mの略円形で、確認面からの深さは0.20 mである。主軸方向はN-76°-Wである。底面は凹凸があり、周壁は中位までやや緩やかに、中位から開口部に向けてほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来の灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の埋没時期は切り合い関係からSK 84より古い、堆積土が類似しており、時期差がないと考えられる。性格は不明である。

SK88 (第22図)

LS 46 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SKP 255 と重複し、同遺構を切る。規模は長径0.80 m、短径0.52 mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.28 mである。主軸方向はN-38°-Eである。底面は南側に傾斜して丸く凹み、周壁は北側がやや急に、南側がほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層が地山土由来の明黄褐色、2層が遺構構築時の表土由来の黒褐色土を主体とする。一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は土師器坏3点(27g)・甕1点(22g)、須恵器蓋1点(10g)が出土した。このうち、須恵器蓋口縁部(第30図45)は2層から出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK98 (第21図)

MF 39 グリッドにあり、第IV層上面で確認した。SK 73・75 と重複し、SK 75 を切り、SK 73 に切られる。規模はSK 73 に切られるため全体形状は不明であるが、長径1.28 m、短径残存値0.64 mの楕円形で、確認面からの深さは0.42 mである。主軸方向はN-10°-Eである。底面は凹凸が顕著であり、周壁は急に立ち上がる。堆積土は1~4層が地山土由来の黄灰~緑灰色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の埋没時期は切り合い関係のある土坑から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

SK99 (第19図)

LT 33 グリッドにあり、第IV層上面で確認したSK 58の精査中に、土層断面においてこれと切り合う別の遺構として確認した。SK 58 と重複し、同遺構を切る。規模は長径0.76 m、短径0.52 mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.12 mである。主軸方向はN-6°-Eである。底面は丸く

凹み、周壁はやや急に立ち上がる。堆積土は地山土由来の灰オリーブ色土を主体とする単層で、混入物がほとんどなく均質な状態であることから、流入による自然堆積土と考える。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は切り合い関係からSK58より新しいが、堆積土が類似しており、時期差がないと考えられる。性格は不明である。

SK154 (第22図)

MA41・42グリッドにあり、第IV層上面で確認した。重複する遺構はない。規模は長径0.80m、短径0.48mの略円形で、確認面からの深さは0.20mである。主軸方向はN-3°-Wである。底面は平坦であり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はともに地山土由来のオリーブ～灰オリーブ色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、一括の人為的な埋め戻し土と考える。

土師器坏4点(38g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から10世紀前半を上限とする。性格は不明である。

2 溝状遺構

溝状遺構は12条検出された。埋没時期は出土遺物から江戸時代の1条を除いて、10世紀前半の平安時代を上限とする。

SD05 (第23図、図版3)

LP43～46、LQ43・45・46、LR～MD43グリッドにある。第IV層上面においてLR～MD43グリッドでは東西方向にほぼ直行し、LP43～46グリッドでは南北方向にほぼ直行、LP45グリッドでは東西方向に分岐する不明瞭な溝状プランとして確認した。SD06と重複し、MB43グリッドではほぼ直角に交差するが、切り合い関係が認められないことから、埋没時期は同時であったと考えられる。平面形は後世の削平により西側は消失し、北側は未調査の市道(幅約1m)を隔てた平成19年度調査A区では検出されていないことから全体形状は不明であるが、LP43およびLR46グリッド付近ではほぼ直角に曲折、LP46グリッド付近ではほぼ直角に分岐し、それ以外の部分においてはほぼ直線的である。残存部の計測値は全長約50.40m、幅約0.25～0.50mの带状で、確認面からの深さは約0.16～0.20mである。底面標高値は断面G-Hで約13.20m、断面A-Bで約12.75m、断面K-Lで約13.10mである。底面は概ね平坦で、LP43グリッド付近が分水界となり、西と北に向かって緩やかに下る傾斜をなす。壁は下部が急角度で立ち上がり、上部が緩やかに開く。堆積土は離れた6地点の断面(A-B～K-L)を観察し、断面A-B 3層、断面E-Fを単層、他を2層に分層した。断面A-B 2層は溝機能時の開口部付近壁面の崩落土と考えられる。全体的な傾向として、下部の堆積土は細砂質土を主体とし、レンズ状に堆積する溝機能時の水性堆積と考えられる。一方上部の堆積土は地山土粒・塊、溝機能時の表土由来の黒褐色土粒・塊や炭化物粒を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は土師器坏5点(299g)・甕6点(192g)、須恵器坏1点(87g)が出土した。このうち、水性堆積層上面から土師器坏(第31図46・47)、小型甕(同図48)が出土し、ほぼ完形の46以外は表面が摩

滅している。46は溝埋め戻し直前に故意に投入された可能性が考えられる。1層から須恵器坏（第31図49）と小破片が出土し、埋め戻しの際に混入したと考える。

出土遺物から本遺構の埋没時期は10世紀前半を上限とする。底面の標高差が小さく、一方向への流れではないことから、SD06と一連の施設として、周囲の土地と区画するために設置された可能性が考えられる。

SD06（第23図、図版3）

LR～LT46、LT・MA45、MB43～45、MC40～43グリッドにある。第IV層上面においてMB45～LR46グリッドに向けて東北東方向にほぼ直行し、MB45～MC40グリッドに向けて南西方向にほぼ直行する不明瞭な溝状プランとして確認した。SD05・07と重複し、SD07を切る。SD05とはMB43グリッドでほぼ直角に交差するが、切り合い関係が認められないことから、埋没時期は同時であったと考えられる。平面形は後世の削平により南側は消失し、北側は未調査の市道（幅約1m）を隔てた平成19年度調査A区では検出されていないことから全体形状は不明であるが、MB45グリッド付近で大きく曲折し、それ以外の部分においてはほぼ直線的である。残存部の計測値は全長約35.20m、幅約0.20～0.40mの带状で、確認面からの底面までの深さ約0.10～0.16mである。底面標高値は断面C-Dで約12.90m、断面M-N・S-Tで約12.80mである。底面は概ね平坦で、MB43グリッド付近が分水界となり、南と北に向かって緩やかに下る傾斜をなす。壁は下部が急角度で立ち上がり、上部が緩やかに開く。堆積土は離れた5地点の断面（C-D、M-N～S-T）を観察し、2層に分層した。全体的な傾向として、下部の堆積土は細砂質土を主体とし、レンズ状に堆積する溝機能時の水性堆積と考えられる。一方上部の堆積土は地山土粒・塊、溝機能時の表土由来の黒褐色土粒・塊や炭化物粒を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は土師器坏3点（82g）、須恵器坏2点（234g）が出土した。このうち、水性堆積層上面から須恵器坏（第31図50・51）が出土した。完形で出土した50は溝埋め戻し直前に故意に投入された可能性も考えられる。小破片は埋め戻しの際に混入したと考える。

出土遺物から本遺構の埋没時期は10世紀前半を上限とする。底面の標高差が小さく、一方向への流れではないことから、SD05と一連の施設として、周囲の土地と区画するために設置された可能性が考えられる。

SD07（第23図、図版3）

MB42・43、MC42・43グリッドにある。第IV層上面においてSD06に併走し、MB43～MC42グリッドに向けて南西方向にほぼ直行する不明瞭な溝状プランとして確認した。SD06と重複し、SD06に両端が切られる。平面形はほぼ直線的である。残存部の計測値は全長約3.20m、幅約0.15～0.25m、確認面からの底面までの深さ約0.10～0.20mである。主軸方向はN-30°-Eである。底面標高値は断面O-Pで約12.95mである。底面は概ね平坦で、南に向かって緩やかに下る傾斜をなす。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山土由来のオリーブ褐色土を主体とし、溝機能時の表土由来の黒褐色土粒・塊や炭化物粒を少量含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

本遺構は掘り直してSD 06を設置した際に、その一部だけが利用されずに埋め戻されたものと考えられる。底面付近の堆積土に水性堆積の跡をほとんど残していないことから設置後、短期間の利用だったと考えられる。SD 05・06・36・66・86と同様に周囲の土地と区画するために設置された可能性が考えられる。

SD20 (第24図、図版3・4)

LN 44・45、LO 42～44、LP 40～43、LQ 39～41、LR 39、LS 38・39、LT 37～39、MA 37・38、MB 36・37、MC 35・36、MD 35・36、ME 35・36、MF 36グリッドにある。第IV層上面においてLN 44～MF 36グリッドに向けて南西方向に大きく蛇行する溝状プランとして確認した。SD 28・36、SKP 233と重複し、SD 36を切り、SD 28、SKP 233に切られる。なお、検出の段階でSD 28に切られることが明瞭に確認された。併走するSD 50はLO 43グリッド付近で本遺構から分岐しており、切り合い関係や段差が認められないことから、掘削と使用の開始は本遺構と同時であったと考えられる。平面形は後世の削平により北東側と南西側が消失しており全体形状は不明であるが、LR 39およびMD 35グリッド付近で大きく曲折し、それ以外の部分においてはほぼ直線的である。残存部の計測値は全長約65.80 m、幅約1.20～2.70 m、確認面からの底面までの深さ約0.35～0.62 mである。底面標高値はLO 44グリッド付近で約12.85 m、MD 35グリッド付近で約11.80 mである。主軸方向はLR 39～MD 35グリッド間の最も直線距離が長い部分で、N-58°-Eである。底面は多少の凹凸が認められるものの概ね平坦で、北東から南西に向かって緩やかに下る傾斜をなす。壁は下部が急角度で立ち上がり、上部が緩やかに開く。堆積土は離れた6地点の断面(A-B～K-L)を観察した。全体的な傾向として、中～下部の堆積土は細砂質土を主体とし、粗砂や植物遺体のラミナが認められ、溝機能時の水性堆積と考えられる。一方上部の堆積土はシルト質土を主体として砂質土や植物遺体の混入は殆ど無く、溝が機能を失った後の凹みに表土が自然に流入したものと考えられる。なお、下流側の断面K-Lの部分では堆積土の不整合が観察され、少なくとも3回の流路変更が認められる。当該箇所は流路の曲折した部分に相当し、比較的埋没し易い環境であったと推測される。水路としての機能を維持するため、溝を掘り直すメンテナンスが施されていた可能性が高いと考えられる。

遺物は土師器坏845点(8,028g)・甕287点(1,941g)・鍋1点(41g)、須恵器坏41点(481g)・壺12点(1,046g)・甕25点(1,693g)が出土した。このうち、土師器坏(第31図52・53)、須恵器坏(同図54・55)・壺(同図56～59、第32図60)・甕(同図61～63)が下部堆積土から出土した。52・53は内黒土師器である。56、57は長頸壺の頸部、頸～口縁部で、同一個体の可能性がある。53・55・58・59・60はSX 100出土土器片と接合した。遺物を故意に分散廃棄した可能性が考えられる。61はLR 41、LS 41、LT 43グリッドII層出土土器片と接合した。本遺構から12 m以上離れている。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。また、溝が曲折するMD 35グリッド付近では底面から幅広の板材が出土(断面K-L)しており、流水促進の効果を期待して設置した樋のような施設であった可能性も考えられる。

底面から出土した幅広の板材の年代は放射性炭素年代測定結果によると、西暦793±19年である。本遺構の構築時期は8世紀末～9世紀前半との推定が可能である。また、出土遺物から埋没時期は10世紀前半を上限とする。残存する両端付近の底面の標高差が約1 mあり、明治時代の字切図(第5図)

には本遺構の近接地に流路方向を同じくする阿部堂川を水源とした灌漑用水路が描かれており、自然地形を利用した灌漑用水路の可能性が考えられる。

S D 28 (第24図、図版4)

LP 40・41、LQ 40、LR 39・40、LS 39、LT 38・39、MA 37・38、MB 37、MC 37グリッドにある。第IV層上面において北東－南西方向の明瞭な直線状プランを確認した。S D 20・36と重複し、これらの遺構を切る。なお、検出の段階でS D 20・36を切ることが明瞭に確認された。平面形は南西端部が確認調査時のトレンチで、それより南西側は後世の削平により消失しており、全体形状は不明であるが、幅の変化が少なく直線的である。残存部の計測値は全長約31.50m、幅約0.90～1.90m、確認面からの底面までの深さ約0.20～0.22mである。底面標高はLR 40グリッド付近で約12.91m、MB 37グリッド付近で約11.58mである。主軸方向は、N－64°－Eである。底面は概ね平坦で、北東から南西に向かって緩やかに下る傾斜をなす。壁は急角度で立ち上がる。堆積土は1層が細砂質土とシルト質土がラミナ状に互層をなし、明瞭な水性堆積を示している。壁際に堆積する2層がシルト質土を主体として比較的大きな地山土塊を多く含む。底面直上に堆積する3層が細砂質土を主体として部分的にシルト質土のラミナが認められ、1・2層との境界部分に植物遺体を多く含んでいる。このような堆積状況から、最下層の3層は溝機能開始直後の水性堆積、2層は溝の幅や深さの調整を意図した人為的な盛土、1層は盛土後の水性堆積と考えられる。

遺物は土師器坏74点(471g)・甕22点(303g)、須恵器坏2点(7g)・壺1点(185g)・甕2点(334g)、近世陶磁器8点(528g)、木製品、石器が出土した。このうち、1層から肥前産磁器(第33図66・67)や漆椀(同図69)、面取りされた3面が残る八角柱と考えられる柱材(第34図70)が出土した。2層から須恵器長頸壺頸～口縁部(第33図64)・横瓶頸～胴部(同図65)、石匙(同図68)が出土した。異なる時代に帰属すると考えられる遺物が同一層から出土したが、本遺構の2層は盛土である。64はSX 100(LP 35)、MA 40グリッドII層出土土器片と接合した。遺物を故意に分散廃棄した可能性が高いと考えられる。65は胴部は頸部に垂直にロクロナデ痕があり、頸～肩部間が歪む。胴部は2つの甕口縁部を貼り合わせ、胴部中央に頸～口縁部を製作している。

本遺構の埋没時期は1層からの出土遺物66・67・69等から江戸時代(17世紀末)以降と推測される。明治時代の字切図(第5図)には本遺構の近接地に流路方向を同じくする阿部堂川を水源とした灌漑用水路が描かれており、自然地形を利用した灌漑用水路の可能性が考えられる。

S D 36 (第24図、図版4)

LP 42、LQ 41・42、LR 40・41、LS 39・40、LT 38・39、MA 38グリッドにある。第IV層上面において北東－南西方向に緩く蛇行する不明瞭な溝状プランを確認した。S D 20・28、SK 49と重複し、これらの遺構に切られる。なお、検出の段階でS D 28に切られることが明瞭に確認され、精査の途中でS D 20に切られることが確認された。平面形は北東端部および南西端部がS D 20に切られるため全体形状は不明であるが、幅の変化が少なく、緩く蛇行する。残存部の計測値は全長約26.60m、幅約0.20～0.60mの带状で、確認面からの底面までの深さ約0.19～0.29mである。底面標高はLP 42グリッド付近で約12.88m、MA 38グリッド付近で約12.76mである。主軸方向は

残存部両端を結んだラインで、N-49°-Eである。底面は丸く凹み、底面標高値の差は少なく、一方向への際だった傾斜は認められない。壁は急角度で直線的に立ち上がる。堆積土は3地点の断面(M-N~Q-R)を観察した。全体的に粘土をわずかに含んだシルト質土を主体とし、上部・下部に小径地山土塊・粒を少量含んでいる。また堆積土中位には部分的にラミナ状の細砂が観察され、一時的に水性堆積したものと推測されるが、全体として顕著に認められる現象ではない。本遺構は底面標高差がほとんど無く、堆積状況からも恒常的な流水を意図したものと認め難い。溝としての機能を失った後に開口部が自然に埋没し、部分的な凹みが埋め戻されたと考えられる。

遺物は土師器坏9点(222g)・甕7点(1,058g)・鍋1点(79g)、須恵器坏1点(9g)が出土した。このうち、土師器坏(第34図71)・甕(同図72)・鍋口縁部(同図73)が3層から出土した。71はほぼ完形で底面付近から出土しており、溝埋没直前に故意に投入された可能性が考えられる。72は推定口径が18.9cm、器高38.9cmの丸底の長胴甕でS X 100(L O 36、L P 35~38、L Q 35~38、L R 36グリッド)、MA 37グリッドII層出土土器片と接合した。遺物を故意に分散廃棄した可能性が考えられる。他の小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

出土遺物から埋没時期は10世紀前半を上限とする。S D 05・06・07・66・86と同様に周囲の土地と区画するために設置された可能性が考えられる。

S D 50 (第24図、図版4)

L O 41~43、L P 38~42、L Q 38・39、L R 38、L S 37・38、L T 37、MA 37グリッドにある。当初は第IV層上面のL Q 38~MA 37グリッド間において、北東-南西方向の明瞭な直線状プランとして確認した。S D 28と重複し、同遺構に切られる。なお、先述したとおり精査の段階でS D 20とは切り合い関係が認められず、S D 20から分岐した一連の溝であることが判明した。掘削と使用は同時に開始されたものと考えられる。平面形は後世の削平により南西側が消失しており全体形状は不明であるが、L Q 39グリッド付近で大きく曲折し、それ以外の部分においてはS D 20と並行し、直線的である。分岐部分から南西端部間の計測値は全長約38.30m、幅約0.50~0.70m、確認面からの底面までの深さ約0.12~0.54mである。底面標高値はL O 44グリッド付近で約12.78m、L T 38グリッド付近で約12.79mである。主軸方向はL R 38~MA 37グリッド間の最も直線距離が長い部分で、N-49°-Eである。底面は多少の凹凸が認められるものの概ね平坦で、底面標高差が少なく、1方向への際だった傾斜は認められない。堆積土は離れた4地点の断面(C-D~G-H、S-T)を観察した。全体的な傾向としてはS D 20とほぼ同様の堆積状況を示しており、水性堆積により徐々に埋没したものと考えられる。S D 20とは同時に埋没が開始したと判断するが、全体の幅が広がっている部分(C-D・E-F)での堆積状況を観察すると、S D 50に近い南東岸側から先に遺構確認面付近まで埋没したことが看取される。

遺物は土師器坏72点(538g)・甕23点(290g)、須恵器坏7点(39g)・壺4点(167g)・甕1点(4g)が出土した。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

出土遺物から埋没時期は10世紀前半を上限とする。堆積過程から、S D 20とS D 50は当初分岐した状態で流水の機能を果たしていたが、使用を継続するうちに分岐する意図が弱くなり、最終的に溝としての機能はS D 20のラインのみに一本化されたものと推測される。

SD66 (第12・13図、図版1)

LT 41・42、MA 41グリッドにあり、第IV層上面でSK 17・43・70・71の精査中に各遺構間に不明瞭な溝状プランを確認した。SK 17・18・43・70・71と重複し、これらの遺構に切られる。平面形は後世の削平により北東側と南西側が消失しており全体形状は不明であるが、残存部両端の計測値が全長は約8.60m、幅約0.40～0.60mの帯状で、確認面からの深さは約0.20～0.28mである。主軸方向はN-20°-Eである。底面標高値は断面M-Nで約12.80m、断面O-Pで約12.60mである。底面は南西方向に傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は断面(M-N・O-P)を観察した。1～3層は地山土由来の黄褐～オリーブ褐色土を主体とする。層界は不明瞭で土質は類似しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は土師器坏35点(187g)・甕21点(258g)、須恵器坏5点(27g)・甕1点(6g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

底面付近の堆積土に水性堆積の跡をほとんど残していないことから設置後、短期間の利用にとどまり、堆積土の類似からSD 07の一部と同時期に埋め戻された可能性が考えられる。また、遺構間の切り合い関係からSK 17・18・43・70・71より古い、出土遺物から周辺の土坑と時期差のないものと推定する。底面標高値や規模等がSD 05・06・07・36と類似しており、周囲の土地と区画するための施設として設置された可能性が考えられる。

SD83 (第25図、図版3)

MC 46・47、MD 47・48グリッドにある。第IV層上面において南東-北西方向に緩く蛇行する不明瞭な溝状プランを確認した。SD 86・90・102と重複し、SD 90を切り、SD 86・102に切られる。東側は後世の削平のため消失し、北西側は調査区外に延びる。削平と調査区外のため全体形状は不明だが、残存部の計測値は全長約7.90m、幅約1.60～2.30m、確認面からの底面までの深さ約0.10～0.86mである。底面標高値は東端で約12.50m、断面A-Bで約11.86m、断面C-Dで約11.40mである。主軸方向は残存部両端を結んだラインで、N-46°-Wである。底面は東端から断面A-B付近では急角度で傾斜し、その下流部底面には多くの円礫が堆積する。その後は北西方向に緩やかに傾斜し、一部丸みを帯びる部分もあるがほぼ一貫して平坦である。壁は急角度で直線的に立ち上がる。堆積土は2地点の断面(A-B・C-D)を観察した。全体的な傾向として下部の堆積土は細・粗砂を含んだ黒色土と粘性の強い地山由来土が互層をなす水性堆積である。堆積土の1層は地山土由来の黄灰色土を主体にし、表土由来のオリーブ黒色土を多量に、炭化物粒を少量含むが、本遺構の蛇行する部分の流路を直線に近いバイパス的な流路にするために新たに設置されたSD 102を掘り上げた際に出た土を埋め戻したものとする。

遺物は土師器坏52点(296g)・甕39点(370g)・鍋1点(15g)、須恵器坏12点(168g)・蓋1点(140g)・壺3点(268g)・甕7点(1,179g)、土製支脚1点(10g)が出土した。このうち、土師器甕(第34図74・第35図75)、須恵器坏(同図76・77)・蓋(同図78)・壺(同図79・80)・甕(同図81・82・第36図83・84)が堆積土の下位付近から出土した。77は高台付の底部が残存し、内面と高台内に墨が付着しており、硯に転用されたと考えられる。76は底部がヘラ切りで口径から78の蓋とセットの可能性はある。78は全体形状が唯一わかる蓋で、偏平なつまみを有する。80は胴部で内

面に粘土紐痕を残す。81はSD 86、SX 100 (LP 36)、MB 40グリッドⅡ層出土土器片と接合した。遺構間は42.8m以上あることから、遺物を故意に分散廃棄した可能性が考えられる。82はMB 42グリッドⅡ層出土土器片と接合した。本遺構出土片が広域接合した第28図19についてはSK 37を参照のこと。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

出土遺物から本遺構の埋没時期は10世紀前半を上限とする。本遺構は厚い水性堆積層を持つことから、自然地形を利用した灌漑水路の可能性が考えられ、遺構間の切り合い関係から既存のSD 90を改修して設置した可能性が考えられる。

SD 86 (第25図、図版3)

MC 46、MD 46～48グリッドにあり、第Ⅳ層上面において南東-北西方向にほぼ直行する不明瞭な溝状プランとして確認した。SD 83・90と重複し、これらの遺構を切る。両端部は後世の削平のため消失しており全体形状は不明だが、残存部の計測値は全長約9.60m、幅約0.10～0.40m、確認面からの底面までの深さ約0.16～0.18mである。底面標高は断面A-Bで約12.42m、断面C-Dで約11.84mであり、北西方向に下る傾斜をなす。主軸方向は残存部両端を結んだラインで、N-43°-Wである。底面は丸みを帯び、壁は急角度で直線的に立ち上がる。堆積土はSD 83と共通の断面C-Dラインで観察し、2層に分層した。2層は細砂質土が主体で、レンズ状に堆積し、溝機能時の水性堆積と考えられる。一方上部の堆積土は地山土粒・塊を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は土師器坏3点(17g)・甕2点(46g)、須恵器壺1点(51g)・甕2点(292g)が出土した。このうち、土師器甕(第36図85)を掲載した。本遺構出土土器片が広域接合した第35図81についてはSD 83を参照のこと。小破片は埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

出土遺物から埋没時期は10世紀前半を上限とする。SD 05・06・07・36・66と同様に周囲の土地と区画するために設置された可能性が考えられる。

SD 90 (第26図、図版3・4)

LT 46・47、MA～MC 46グリッドにある。第Ⅳ層上面においてLT・MA 46グリッドでは北東-南西方向に、MA～MC 46グリッド付近では東-西方向にほぼ直行する不明瞭な溝状プランを確認した。SD 83・86、SK P 267と重複し、これらの遺構に切られる。東側は後世の削平、西側はSD 83との重複のため全体形状は不明だが、残存部の計測値は全長約11.00m、幅約1.00～0.25m、確認面からの底面までの深さ約0.14～0.16mである。底面標高は断面A-Bで約12.72m、断面C-Dで約12.64mであり、西方向に下る傾斜をなす。主軸方向はMA～MC 46グリッド付近の残存部を結んだラインで、N-89°-Eである。底面は丸みを帯び、壁は急角度で直線的に立ち上がる。堆積土はレンズ状に堆積し、溝機能時の水性堆積と考えられる。

遺物は土師器坏6点(26g)・甕5点(84g)、須恵器壺1点(53g)が出土した。埋め戻しの際に混入した可能性が高いと考えられる。

出土遺物から本遺構の埋没時期は10世紀前半を上限とする。本遺構は、堆積状況から自然地形を利用した灌漑水路の可能性が考えられ、遺構間の切り合い関係から、ほぼ同位置にSD 83の設置によって改修され、一部の底面だけが重複による削平を受けずに残存した可能性が考えられる。

S D102 (第25図、図版3)

MC 47、MD 47・48グリッドにあり、第IV層上面において重複するS D 83と一連の東-西方向にほぼ直行する不明瞭な溝状プランとして確認した。確認時、平面ではS D 83との切り合い関係が不明瞭であったが、断面A-Bから本遺構がS D 83を切ることが明らかになった。東側は後世の削平のため消失し、北西側は調査区外に延びる。削平と調査区外のため全体形状は不明だが、残存部の計測値は全長約7.10m、幅約0.95～1.30m、確認面からの底面までの深さ約0.20～0.52mである。底面標高値は断面A-Bで約12.02m、断面C-Dで約11.80mである。主軸方向は残存部両端を結んだラインで、N-54°-Wである。底面は緩やかに西方向に傾斜し、断面A-B付近で凹凸があるが、断面C-D付近では概ね平坦である。壁は北東側が急角度で、南東側が緩やかな傾斜で直線的に立ち上がる。堆積土は断面A-Bの観察から、4層が水性堆積土、3層が壁面上位の崩落土、1・2層は人為的な埋め戻し土と考える。本遺構の断面A-B 4層は断面C-D 1層に相当する。

遺物は出土しなかった。

S D 83で記述したように、自然地形を利用して設置されたS D 83の蛇行した部分を直線の流路に掘り直した溝が本遺構である。断面C-Dの観察から、S D 83のレンズ状に重なり合う水性堆積土の上面に本遺構の水性堆積土が連続することから、S D 83の一部を改修しながら灌漑水路として継続的に使用されたものとする。なお、明治時代の字切図(第5図)には本遺構は描かれていないことから、それ以前に埋没し、周辺地形は改変されたものとする。

3 沢状の落ち込み

調査区東側の沢状の落ち込みに検出された遺物を多量に含有する黒色土の堆積層は本来の遺構構築時の表土に連続する堆積土と考える。第1節の基本層序でも触れたように、特にLP 35・36グリッド周辺を中心として土師器(88.07kg)・須恵器(8.288kg)・土製支脚(3.202kg)等の遺物が多数出土しており、故意に廃棄されたものとする。これらの遺物には墨書・篋書土器や他の遺構出土土器片と広域に接合する遺物も含まれることから、廃棄行為は水辺の低地(本遺構)と周辺地域を対象とした祭祀的な要素が強いものと推測する。遺構範囲は沢状の落ち込み部分のうち、遺物の出土量の比較的多い範囲とした。

S X100 (第8図)

LN 35～41、LO 31～41、LP 32～40、LQ 33～38、LR 34～36グリッドにある。第IV層上面で精査中にLN 45～LR 35グリッドまでを南西方向に、LR 35～NQ 32グリッドまでを南東方向に結ぶラインを境にして東側に延びる沢状プランとして確認した。重複する遺構はない。出土遺物量の特に多いグリッドとその周りの比較的多いグリッドを結んで平面形とした。底面は基本層序6-1～6-3(第7図)が示すように、東側に緩やかに傾斜する。底面標高値は基本層序6-1で約13.06m、基本層序6-3で約12.46mである。東側はLNグリッドラインで調査対象から除外している。堆積土は離れた3地点の基本層序6-1～6-3で観察した(第4章1節参照)。

土師器坏48,576g(うち内黒土師器4,311g、黒色土器30g)・甕39,328g・鍋166g、須恵器坏2,883g・壺3,697g・甕4,591g、土製支脚3,202gが出土した。但し、凡例に記述したように他の遺構内土器片

と接合したものについては含まれていない。この他に、木製品、緑釉陶器、白磁、砥石が出土している。このうち、第36図86～100・第37図101～113・第38図114～128が土師器坏である。86～94・96～100は体部に記入された墨書土器「⊖」で、遺跡から出土した15点のうち、本遺構から14点出土している（残りの1点は第44図187、SKP 143出土）。95は体部に記入された篋書土器「+または×」である。いずれも特定の意図を持った祭祀が執り行われた際に撒かれた可能性がある。92・102・105・113・126・128は内黒土師器である。126は口縁部を波状成形した皿状で、101とともに内面に漆が付着する。110は両面を黒色処理した黒色土器である。110・113は高台付で、底部回転糸切り後に菊花状圧痕を付す。108・109・112はアスファルトと籾殻等の植物が内面に多量に、外面と破面の一部に付着する（第5章第3節参照）。104は底部をハケメ調整後に体部下端から底部周縁部までケズリ調整し、底部外面が円形を留めない。坏としたが小型の壺の可能性がある。114は内面にタールが付着し、灯明皿に転用した可能性がある。117・119は皿状で底部が肥厚した柱状高台を有する。第39図129～134までが土師器甕である。129・131は底部に網代痕を有する。130は口縁～胴部上位を131は胴部下位～底部を残すが、ともに内外面がハケメ調整であり、器形や胎土が類似することから同一個体の可能性がある。132は底部～胴部下位が残存し、胴部外面がケズリ調整、内面と破面の一部に帯状のタールと蜂巢状にφ1mmほどの無数の空洞を有する厚さ約2mmの煤状炭化物が付着する。第39図135～138は土師器鍋である。135～137は口縁部片、138は胴部片で外面は平行タタキ、内面は青海波文のある当て具を使用後、ロクロナデ調整する。第40図139～151は須恵器坏である。140～142・147・150は底部切り離しがへら切りで、147は高台付である。151は底部に「奏」に類似する墨書文字を有する。第40図152は須恵器蓋口縁部である。第41図153～161・第42図162が須恵器壺である。153は長頸壺口縁～頸部、154は頸～肩部で器形や焼成状態が類似することから同一個体の可能性がある。155は短頸壺口縁～肩部、158は胴部である。155と158は自然釉や胎土などの焼成状態が類似し、同一個体の可能性がある。161は胴部で内面全面と破面の一部に墨が塗られていた。第42図163～167・第43図168が須恵器甕である。164は丸底の甕底～胴部下位で、本遺構（LO 35、LP 32、LP 35、LP 36、LP 37、LR 33、LR 36グリッド）内土器片とLQ 43、LS 39グリッドⅡ層出土土器片が接合した。このうち、LP 35グリッド出土土器片は内面全面と他と接合した破面の一部にも墨が塗布されていた。破碎後に、この土器片のみに塗布し、故意に他の土器片とともに分散廃棄した可能性が考えられる。接合破片はないが、161も同様の行為による遺物の可能性がある。168は本遺構（LR 36グリッド）出土土器片と本遺構から30m以上離れたLQ 39、MF 40グリッドⅡ層出土土器片が接合した。遺物を故意に分散廃棄したものである可能性が考えられる。第43図169は緑釉陶器碗口縁～胴部で内外面に被熱剥離痕がある。第43図170は白磁碗高台付底～体部下位で、見込みには劃花文を有する。破面の一部に黒色付着物（漆？）が認められ、接着痕の可能性がある。八重樫忠郎氏や羽柴直人氏によると所謂14世紀のピロースクタイプで東北地方では十三湊に次いで二例目の出土である。第43図171～173は筒形の土製支脚で171・173は粘土紐痕があり、側面下位にそれぞれ逆V字と逆U字状の切り込みを有する。172は内外面をケズリ調整する。第43図174～178は木製品で、177は曲物蓋または底、178は木錘（こも槌）である。第44図179は3面の磨面を有し、うち2面が凹面である。

出土遺物や他の遺構との関連から本遺構の祭祀的廃棄行為は10世紀前半を中心に実施されたものと

考えられる。14世紀の輸入白磁が遺構内から出土していることから、その後に完全に埋没したものと推定する。

4 柱列

柱根が残存する2基の柱穴を検出した。

S A 101 (第26図、図版4)

P 1はL Q・L R 45グリッドにあり、第IV層上面で確認した。遺構確認時は裏込め土の平面プランを確認することはできなかった。S K P 246と重複し、同遺構に切られる。規模は長径0.96m、短径0.84mの略円形で、確認面からの深さは0.84mである。底面は概ね平坦であり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が柱痕跡で、柱根は長さ約50cmが残る。1・2層は材が土中で朽ちるか、折り取られることで遺構構築時の表土や地山土粒・塊が流入したものと考えられる。3・4層は材が朽ちてできた層であり、3層には地山土粒・塊が混入する。5層は裏込め土である。

P 2はL Q・L R 45・46グリッドにあり、第IV層上面で確認した。遺構確認時は裏込め土の平面プランを確認することはできなかった。重複する遺構はない。規模は長径0.92m、短径0.88mの略円形で、確認面からの深さは0.84mである。底面は概ね平坦であり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1～4層が柱痕跡で、柱根は長さ約76cmが残る。堆積状況はP 1と同様で、5層は裏込め土である。

柱は芯々で約2.66mの距離があり、方位はN-2.5°-Wである。柱根は樹種同定結果によれば、いずれもカツラである(第5章第1節参照)。側面は腐植が著しく形状を知る加工痕等は不明であるが、底部には手斧による加工痕がある。柱材の放射性炭素年代測定結果によると、P 1は西暦1232±19年、P 2は西暦1247±19年でいずれも13世紀中葉である(第5章第2節参照)。2基のほかに周囲に同様の柱穴様ピットは現存しない。2基はほぼ南北方向に並び、遺跡の西約0.5kmの海岸線と東の丘陵地にほぼ平行に構築されており、両者を結ぶ門や鳥居のような施設であった可能性が考えられる。遺物は柱根の他にP 1から土師器甕2点(15g)が出土した。埋土した際に混入した可能性が高いと考えられる。なお、明治時代に作成された字切図(第5図)には、本遺構の近くには阿部堂川を水源とする水路が北東から南西方向に設置され、その水路に沿う道が描かれている。道は途中で分岐し、丘陵地(前田表遺跡)に延び、さらには安倍館跡に続く。本発掘調査によって字切図に描かれた水路と流路方向をほぼ同じくするS D 20が8世紀末～9世紀前半に近接地に設置されたことが明らかになった。当時から丘陵に続く道があり、本遺構は両遺跡などの丘陵にある施設と関連するものである可能性が考えられる。

5 柱穴様ピット

柱穴様ピットは第IV層上面で確認し、151基を検出した。これらのピット群には規則的な配列が認められなかったが、規模と堆積土が比較的類似する。これらの埋没時期は出土遺物から周辺の土坑等と時期差のないものと考えられる。なお、柱穴様ピットの位置についてはピット配置図(第9図)を、ピット個々の規模、出土遺物については、柱穴様ピット一覧表(第2・3表)を参照していただきたい。

6 出土遺物

遺構内遺物については各遺構の記述で触れているものもあるが、選別された出土遺物の特徴については、遺構内出土遺物観察表（第4～8表）、遺構外出土遺物観察表（第9・10表）を参照していただきたい。

縄文時代の遺物

縄文時代の摩滅した土器小破片4点と凹石が水田造成土から出土し、石匙は江戸時代に帰属する溝状遺構から出土した。本遺跡には縄文時代の遺構がないことから、他からの転位と考えられる。

平安時代の遺物

土器・陶器は土師器（155.539kg）、須恵器（31.378kg）、緑釉陶器片（0.046kg）が出土している。底部から口唇部まで残る全体像が推定できる資料が比較的多い土師器坏、須恵器坏については下記の項目で細分類を試み、遺構内出土遺物観察表（第4～8表）、遺構外出土遺物観察表（第9・10表）に示した。

坏分類基準

口唇部形態で2つ（a・b）に、体～口縁部形態で8つ（1～8）に細分した。

- a：口唇部が先細りになるもの。
- b：口縁部の厚さに変化が無く、口唇部が丸いもの。
- 1：体部と口縁部が内彎して立ち上がる。
- 2：体部が内彎し、口縁部が直線的に外傾する。
- 3：体部中位まで内彎し、口縁部まで直線的に外傾する。
- 4：体部下半から直線的に外傾する
- 5：体部下半から直線的に外傾し、口縁部が外反する。
- 6：体部が内彎し、口縁部が直立外反する
- 7：体部が内彎し、口縁部が外反する
- 8：器高が低く、皿状を呈する

土師器の坏は上記の分類基準に、A：内面に黒色処理を施さないもの、B：内面に黒色処理を施すもの（内黒土師器）を加えて分類した。Aは4の分類基準に該当する器形はない。底部切り離しがヘラ切りの47・69・127は7aに属し、口径に対して底径が大きく、器高は低い。13・117・119は8aに属し、底部が肥厚する柱状高台を有する。Bは7と8aの分類基準にのみ該当する。Bのうち、皿状の126と高台付の128の底部調整は摩滅で不明であるが、10・52・92・102・105の底部外面はケズリ調整である。甕は出土量が多いが、全体像を推定できる資料は少ない。外面はタタキ成形の後、ロクロナデ調整をしたものが主で、ケズリやハケメ調整のものは少ない。底部はごく僅かに網代痕や砂底のものがある。鍋は全体像を推定できる資料はない。比較的大きな口縁部や胴部破片は判別できたが、小破片の相当数は甕に分類された可能性が高い。内外面はロクロナデ調整され、内面に当て具痕やハケメ調整をとどめるものが多い。

須恵器の坏は上記の分類基準の1b、2a、4、6、7に該当する。底部切り離しがヘラ切りの76・140・141・142・150・198は他と比較して底部が大きく、器高が低い共通点はあるが、土師器坏

ヘラ切りほど分類基準では同一性に乏しい。蓋は4点出土した。壺は口縁～頸部破片のものは長頸壺・短頸壺に分類した。甕は本遺跡の須恵器の中では出土量が最も多い。壺と甕は全体像を推定できる資料はほとんどない。

土製品は土製支脚（4.468kg）、土錘3点が出土した。

石製品は砥石2点が出土した。

木製品は木錘（こも槌）、箸状木製品、曲物の蓋または底板、錐の柄、浮、板材が出土した。

中世の遺物

中国産輸入白磁片1点、珠洲系陶器片2点が出土した。

近世以降の遺物

陶磁器は肥前産を主とする陶磁器片（2.481kg）が出土した。

土製品は型押しのお像が出土した。

木製品は漆椀1点、柱材が出土した。

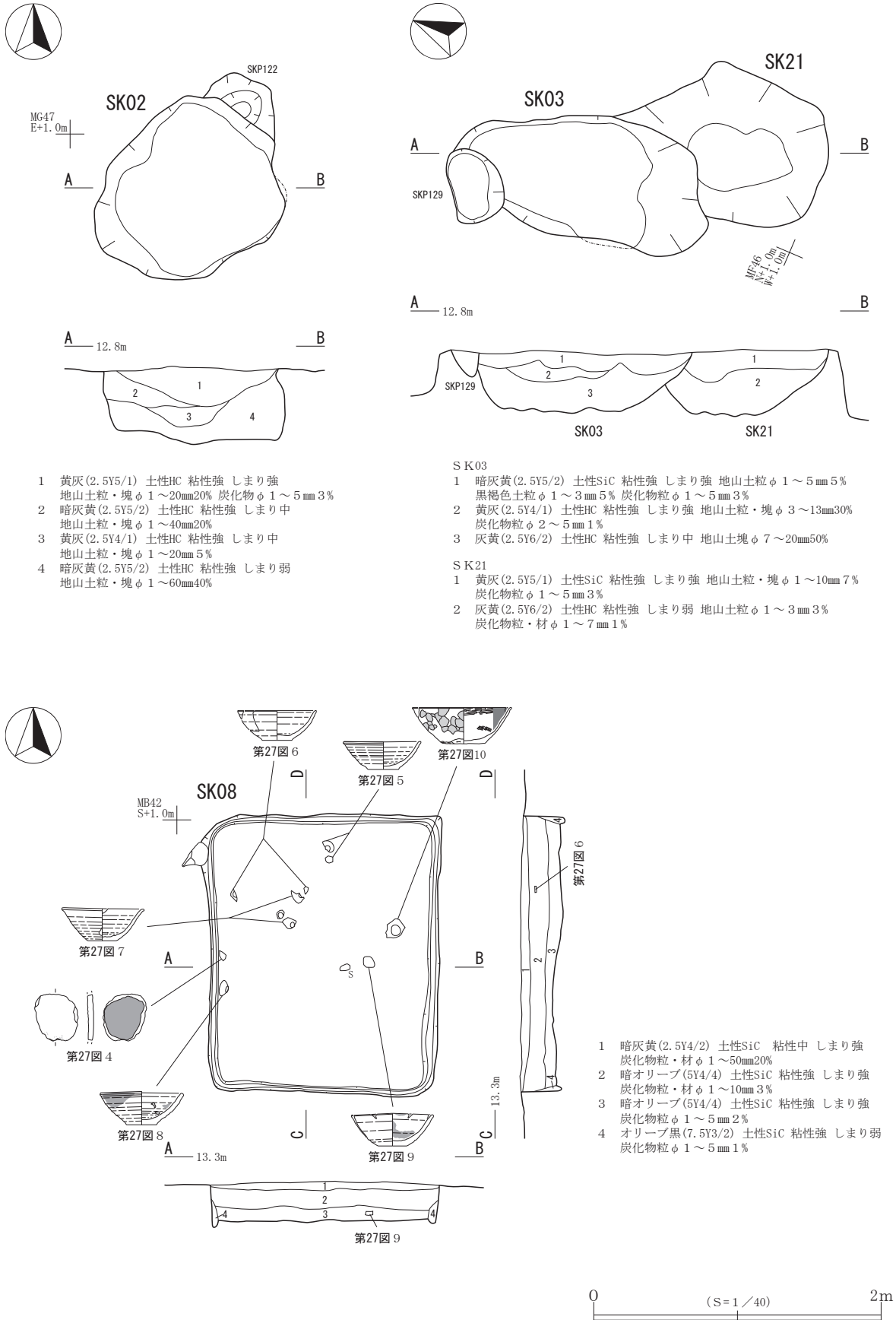
第2表 桂穴様ピット一覧表(1)

遺構	所在	平面形状	長径 cm	短径 cm	深さ cm	遺物数量	遺構	所在	平面形状	長径 cm	短径 cm	深さ cm	遺物数量
4	ME44	楕円形	60	48	52	土師器坏3点4g	147	MA40	略円形	23	20	20	
14	LT39	楕円形	60	45	10	土師器坏4点92g・	148	MA38	略円形	26	25	38	
						甕4点431g	149	MA38	円形	24	24	18	土師器坏1点2g
29	MB38	楕円形	50	33	11	土師器坏2点94g、 須恵器坏1点1g	150	MA39	略円形	22	21	11	
							151	MA39	円形	18	18	14	
40	LT40	略円形	52	40	28		152	MA・ MB40	楕円形	24	19	21	
101	MF45	方形	22	19	11								
102	MF46	楕円形	22	16	14		155	MB41	略円形	16	14	19	
103	MF45	略円形	22	22	9		156	MB41	円形	15	15	21	
104	MC44	楕円形	30	19	32		157	MA・ MB41	略円形	23	18	22	
105	MD44	不整形	50	38	19								
106	MC・ MD43	略円形	30	24	11	土師器坏3点29g・ 甕1点30g	158	MA39 MA40	略円形	20	16	11	
111	MB41	略円形	34	30	25		159	MB41	略円形	15	13	19	
112	MB41	略円形	20	17	12		160	MA38	略円形	20	18	14	須恵器甕1点5g
114	MB41	楕円形	18	12	19		161	MA40	略円形	(32)	28	31	土師器坏3点36g
117	MD40	不整形	32	32	19		162	MA38	楕円形	38	32	27	土師器甕2点6g、 須恵器甕1点17g
118	MA43	略円形	(16)	14	10								
119	MB40	楕円形	44	34	35		163	MA39	楕円形	28	16	14	
120	MC41	楕円形	33	24	25		164	MA41	略円形	26	24	11	
121	MB40	楕円形	48	26	12	土師器坏1点3g	165	MB40 MB41	略円形	16	15	17	
122	MF47	不整形	58	(54)	28								
124	MB40	楕円形	(64)	26	26	土師器甕1点8g、 須恵器甕1点51g	166	MC40	略円形	26	22	31	
							167	MC40	略円形	30	28	44	土師器坏1点14g・ 甕1点7g
125	MD42	略円形	18	14	12		168	MA41	楕円形	20	16	19	
126	MC41	円形	17	17	15		170	MC39	楕円形	20	15	13	土師器坏3点59g・ 甕2点18g、内黒坏4g、 土製支脚1点3g
127	MD41	略円形	26	24	21	土師器坏1点9g							
128	MD42	略円形	17	16	14								
129	MF46	不整形	53	36	27								
130	MA41	略円形	48	43	30		171	MC39	略円形	20	16	13	
132	MA41	楕円形	20	13	16		172	LR40	不整形	34	22	12	
134	MB41	略円形	20	19	12		175	MC38	不整形	14	12	25	
135	MB41	略円形	28	26	21	土師器坏1点6g	176	MC39	円形	24	20	11	
136	MB41	楕円形	26	20	19		177	MD41	楕円形	36	28	24	
138	LT39	略円形	28	26	19		178	MD41	楕円形	52	44	24	
139	MB41	略円形	27	22	14	土師器坏2点93g	179	MD41	楕円形	41	34	33	
140	LT39	楕円形	26	20	30	土師器坏3点4g	180	MB39	楕円形	26	20	12	
141	MA39 MA40	略円形	21	18	36	土師器坏2点13g	181	MD38 MD39	楕円形	50	38	24	土師器坏3点5g・ 甕1点3g
142	MB40	楕円形	18	14	16	土師器坏3点19g	182	MD41	略円形	17	13	13	
143	MA40	略円形	17	14	33	土師器坏1点7g 体部 墨書「0」、須恵器甕1点9g	183	MD41	円形	16	14	13	
							184	MD41	楕円形	23	15	10	
144	LT39	略円形	30	26	20		185	MB39	略円形	22	20	25	
145	LT39	略円形	24	22	19		186	MD41	楕円形	22	16	19	
146	LT40	略円形	24	20	20		187	MB39	楕円形	34	28	24	

第3表 柱穴様ピット一覧表(2)

遺構	所在	平面形状	長径 cm	短径 cm	深さ cm	遺物数量	遺構	所在	平面形状	長径 cm	短径 cm	深さ cm	遺物数量
188	MC39	略円形	28	26	24		225	LP42	略円形	18	16	10	
190	MB39	楕円形	34	26	33	土師器坏1点8g、 須恵器甕1点30g	226	LQ42	楕円形	13	9	8	
	227						LQ41	略円形	13	11	9		
191	MC39	楕円形	56	33	35	土師器坏1点25g・ 甕1点4g	228	LQ41	楕円形	20	18	28	
	229						LQ41	略円形	20	17	15		
192	MD41	楕円形	30	25	16		230	LQ41	楕円形	38	26	19	
193	MB41	略円形	(24)	20	22		231	LQ41	略円形	20	14	13	
194	MB41	楕円形	26	20	16		232	LQ41	略円形	14	13	16	
195	MB41	楕円形	22	16	12		233	LQ40	略円形	18	15	11	
196	MB41	楕円形	(20)	(14)	18		234	MB41	略円形	48	46	23	
197	MB41	楕円形	20	(12)	14	土師器坏1点4g	235	MB46	略円形	24	23	20	
198	LR40	楕円形	22	13	9		236	MA46	略円形	14	10	19	
199	LQ・ LR41	不整形	16	14	22		237	MC45	略円形	28	26	27	
	238						MD47	略円形	22	21	10		
200	LR42	略円形	14	12	17		239	MB39	略円形	28	22	27	
201	LR42	略円形	16	14	14		240	MA46	楕円形	26	20	14	
202	LR42	略円形	22	18	14		241	LT40	略円形	24	22	21	
203	LR42	略円形	12	10	12		242	MA46	楕円形	36	16	14	土師器坏1点5g
204	LR42	略円形	8	6	8		243	MA46	楕円形	40	28	26	
205	LR42	略円形	12	10	21		244	MA46	楕円形	34	24	16	
206	LR42	楕円形	18	9	15		245	LQ44	不整形	27	19	24	
207	LR42	略円形	16	12	12	土師器坏2点7g	246	LQ45	略円形	14	13	8	
208	LR42	略円形	16	(14)	10		249	LP39	楕円形	22	16	19	土師器甕2点15g
209	LR42	円形	12	12	7		250	LP39	略円形	26	22	15	
210	LR42	円形	10	10	11		251	LP39	略円形	24	18	28	
211	LR42	略円形	8	7	11		252	LP39	略円形	16	14	13	
212	LR42	略円形	24	22	18		253	LP39	楕円形	22	20	15	
213	LR42	略円形	18	17	16		254	LP39	略円形	22	18	16	
214	LR42	略円形	20	14	23	土師器甕1点9g、 須恵器坏1点7g	255	LS46	楕円形	36	(28)	16	
							256	LS45	楕円形	36	26	12	
215	LQ42	略円形	14	12	10		257	LQ44	不整形	26	20	16	
216	LQ42	略円形	19	16	45		258	LP38	略円形	24	20	10	土師器坏1点10g
217	LQ43	略円形	20	17	18		259	LQ43	略円形	20	16	18	
218	LQ43	略円形	24	22	23	土師器坏3点18g	263	ME38	楕円形	62	52	16	
219	LQ43	楕円形	27	21	18		264	LR44	略円形	33	28	21	
220	LQ43	楕円形	24	18	11		265	LQ46	楕円形	24	16	18	
221	LR43	円形	12	12	10		266	LQ44	略円形	25	24	27	
222	LR43	略円形	21	16	24		267	MA46	略円形	33	32	16	
223	LQ42	楕円形	21	15	28		268	MF39	略円形	32	30	24	
224	LQ42	不整形	15	12	8		269	ME39	略円形	32	32	14	

第4章 調査の記録



- 1 黄灰(2.5Y5/1) 土性HC 粘性強 しまり強
地山土粒・塊φ 1~20mm20% 炭化物粒φ 1~5mm 3%
- 2 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性HC 粘性強 しまり中
地山土粒・塊φ 1~40mm20%
- 3 黄灰(2.5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり中
地山土粒・塊φ 1~20mm 5%
- 4 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性HC 粘性強 しまり弱
地山土粒・塊φ 1~60mm40%

SK03

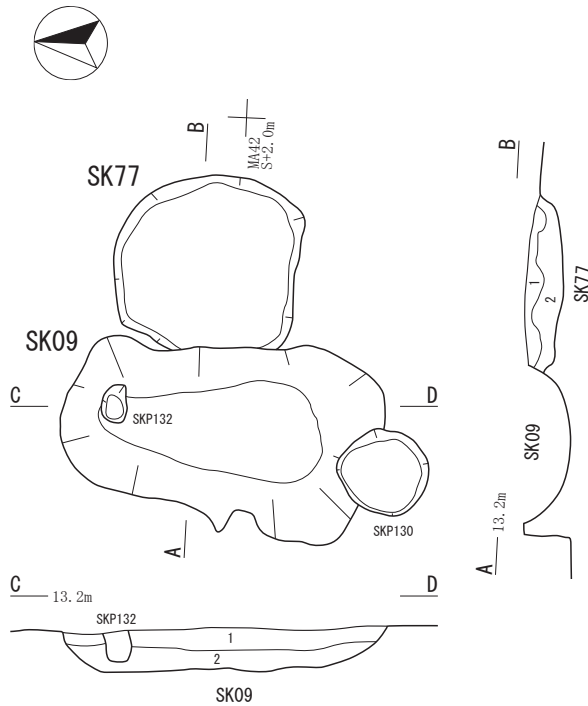
- 1 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒φ 1~5mm 5%
黒褐色土粒φ 1~3mm 5% 炭化物粒φ 1~5mm 3%
- 2 黄灰(2.5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土粒・塊φ 3~13mm30%
炭化物粒φ 2~5mm 1%
- 3 灰黄(2.5Y6/2) 土性HC 粘性強 しまり中 地山土塊φ 7~20mm50%

SK21

- 1 黄灰(2.5Y5/1) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒・塊φ 1~10mm 7%
炭化物粒φ 1~5mm 3%
- 2 灰黄(2.5Y6/2) 土性HC 粘性強 しまり弱 地山土粒φ 1~3mm 3%
炭化物粒・材φ 1~7mm 1%

- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性中 しまり強
炭化物粒・材φ 1~50mm20%
- 2 暗オリーブ(5Y4/4) 土性SiC 粘性強 しまり強
炭化物粒・材φ 1~10mm 3%
- 3 暗オリーブ(5Y4/4) 土性SiC 粘性強 しまり強
炭化物粒φ 1~5mm 2%
- 4 オリーブ黒(7.5Y3/2) 土性SiC 粘性強 しまり弱
炭化物粒φ 1~5mm 1%

第10図 SK02・SK03・SK08・SK21

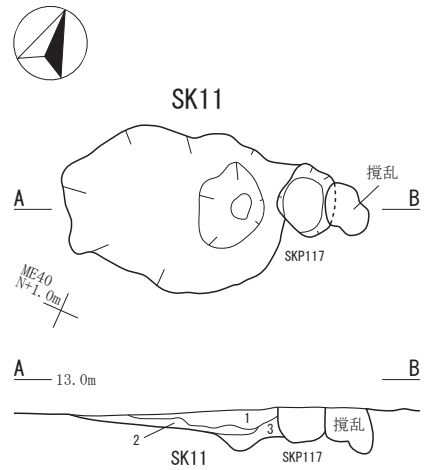


SK09

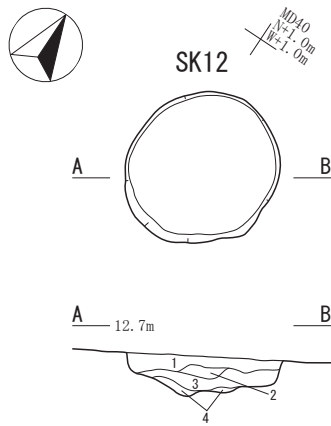
- 1 オリーブ(5Y5/4) 土性SiC 粘性中 しまり強 炭化物粒φ 1~5mm 5%
- 2 暗オリーブ(7.5Y4/3) 土性SiC 粘性強 しまり強 炭化物粒・材φ 1~10mm 2%

SK77

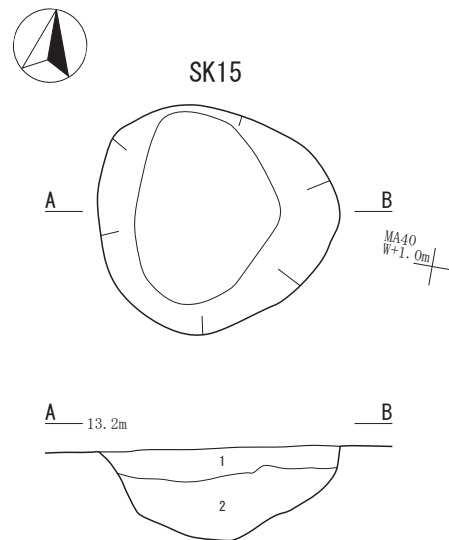
- 1 黄褐(2.5Y5/4) 土性SiC 粘性中 しまり強 黒褐色土粒・塊φ 1~20mm10%
炭化物粒・材φ 1~20mm20% 砂礫φ 1~100mm 5%
- 2 黒褐(2.5Y3/2) 土性Si 粘性中 しまり強 地山土粒・塊φ 1~10mm40%
炭化物粒・材φ 1~10mm 1%



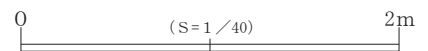
- 1 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SiC 粘性弱 しまり強
地山土粒・塊φ 2~10mm10% 暗褐色土斑状 7%
炭化物粒・材φ 5~10mm 3%
- 2 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SC 粘性強 しまり弱
黒色土粒φ 2~5mm 2% 炭化物粒・材φ 2~7mm 1%
- 3 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SC 粘性強 しまり強
地山土粒φ 1~3mm 1% 炭化物粒φ 2~3mm 1%



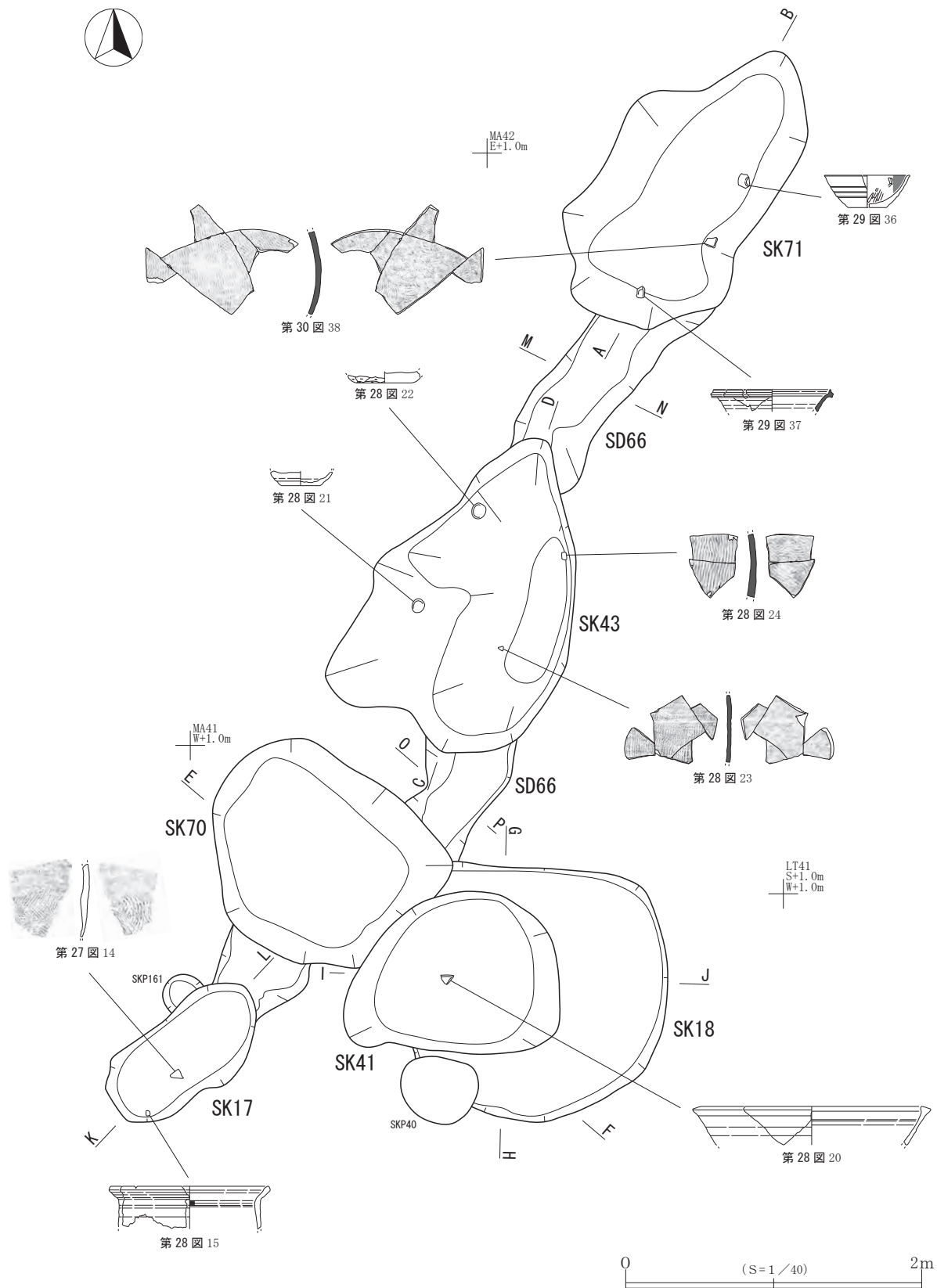
- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性Si 粘性中 しまり強
地山土粒・塊φ 1~10mm40% 炭化物粒・材φ 1~10mm 5%
- 2 灰オリーブ(5Y4/2) 土性Si 粘性強 しまり強
地山土粒・塊φ 1~10mm40%
- 3 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性Si 粘性中 しまり強
地山土粒・塊φ 1~10mm30% 炭化物粒・材φ 1~10mm 5%
- 4 オリーブ黒(5Y3/2) 土性Si 粘性中 しまり中
地山土粒φ 1~5mm10% 炭化物粒φ 1~5mm 1%



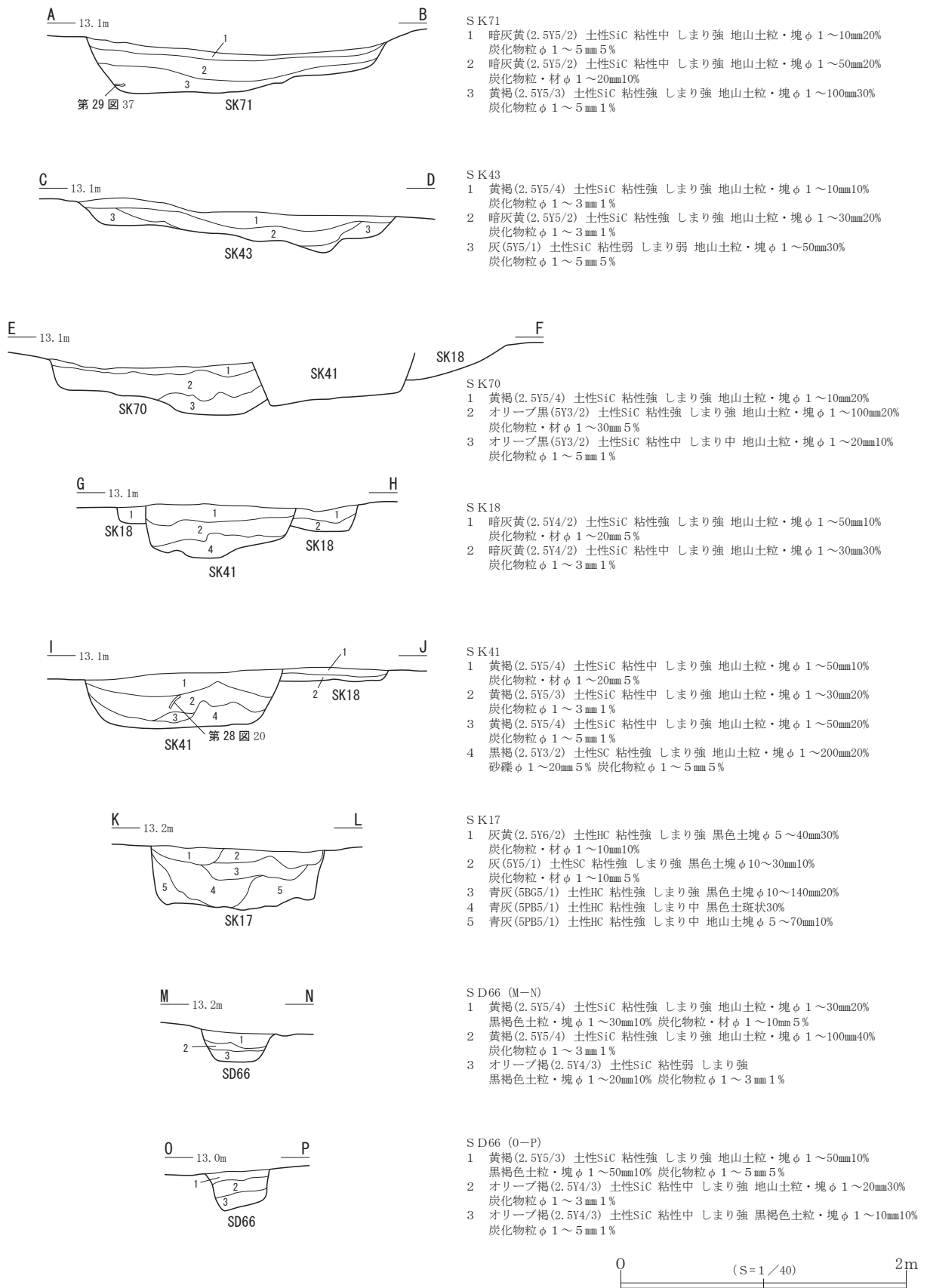
- 1 黄褐(2.5Y5/4) 土性SiC 粘性強 しまり強
地山土粒・塊φ 1~10mm10% 炭化物粒φ 1~3mm 1%
- 2 灰(5Y5/1) 土性SiC 粘性弱 しまり弱
地山土粒・塊φ 1~50mm30% 炭化物粒φ 1~5mm 5%



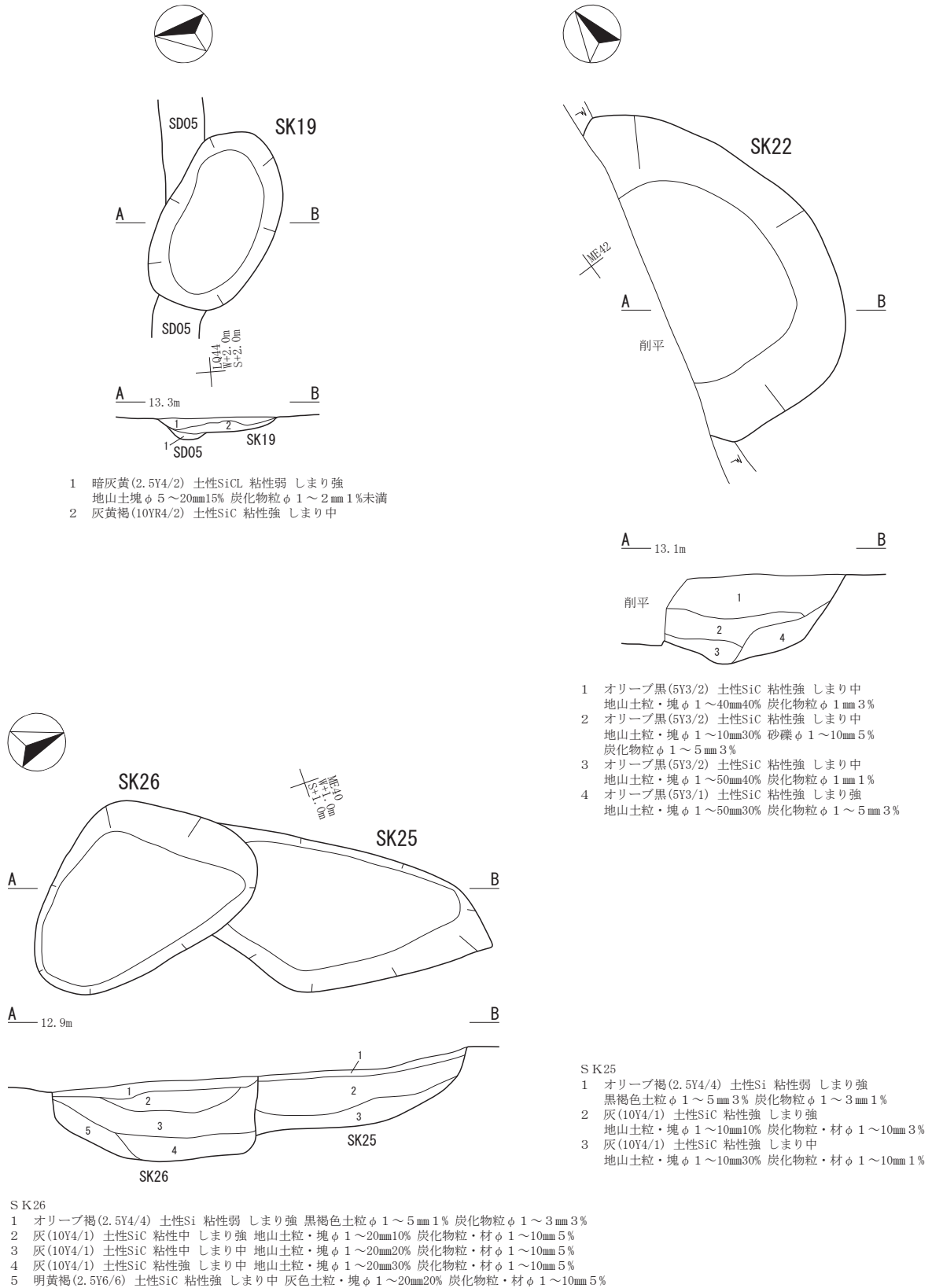
第11図 SK09・SK11・SK12・SK15・SK77



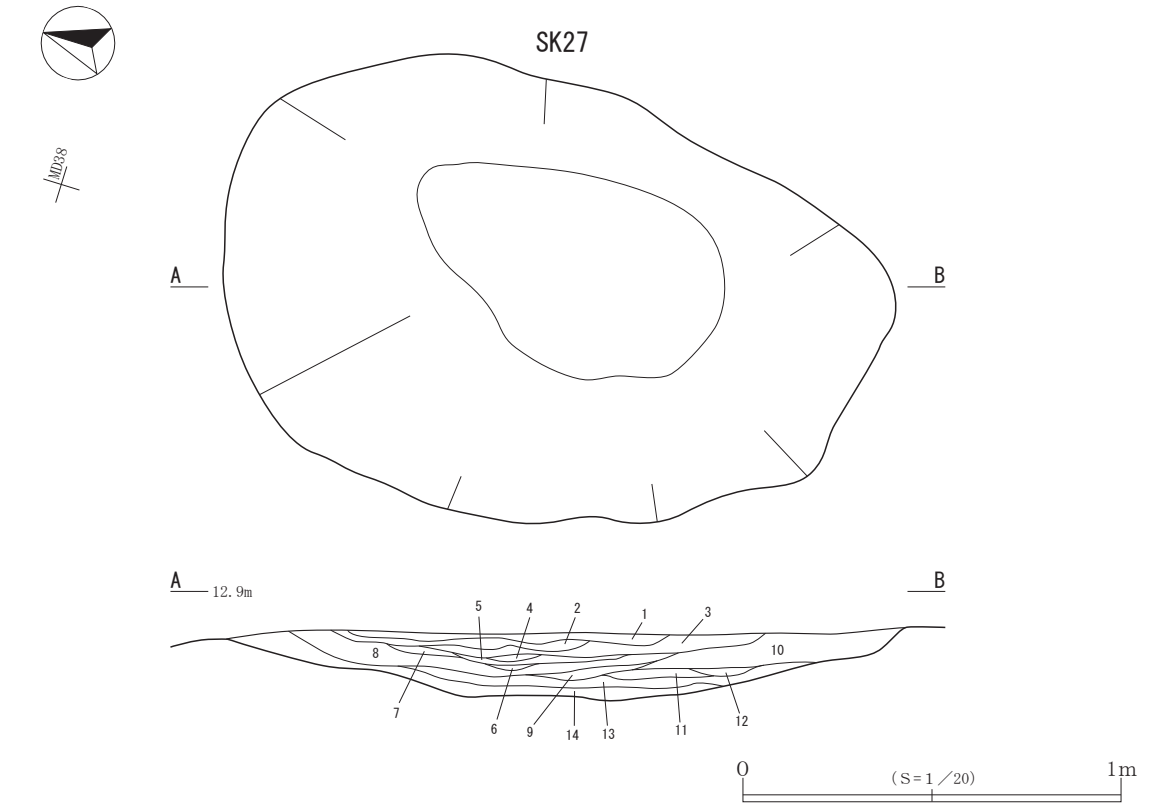
第12図 SK17・SK18・SK41・SK43・SK70・SK71・SD66 平面図



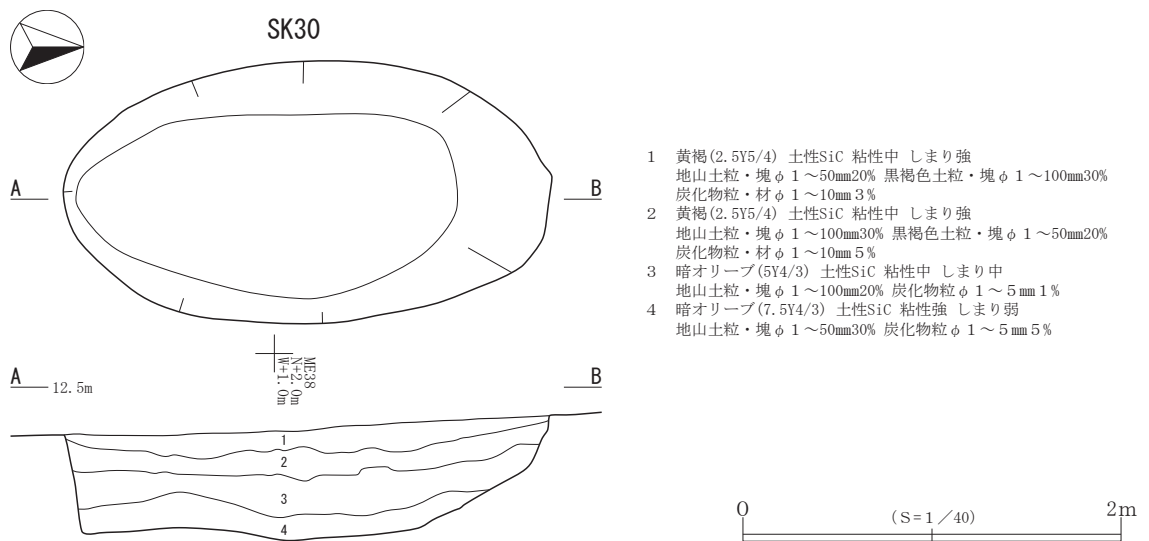
第13図 SK17・SK18・SK41・SK43・SK70・SK71・SD66 断面図



第14図 SK19・SK22・SK25・SK26



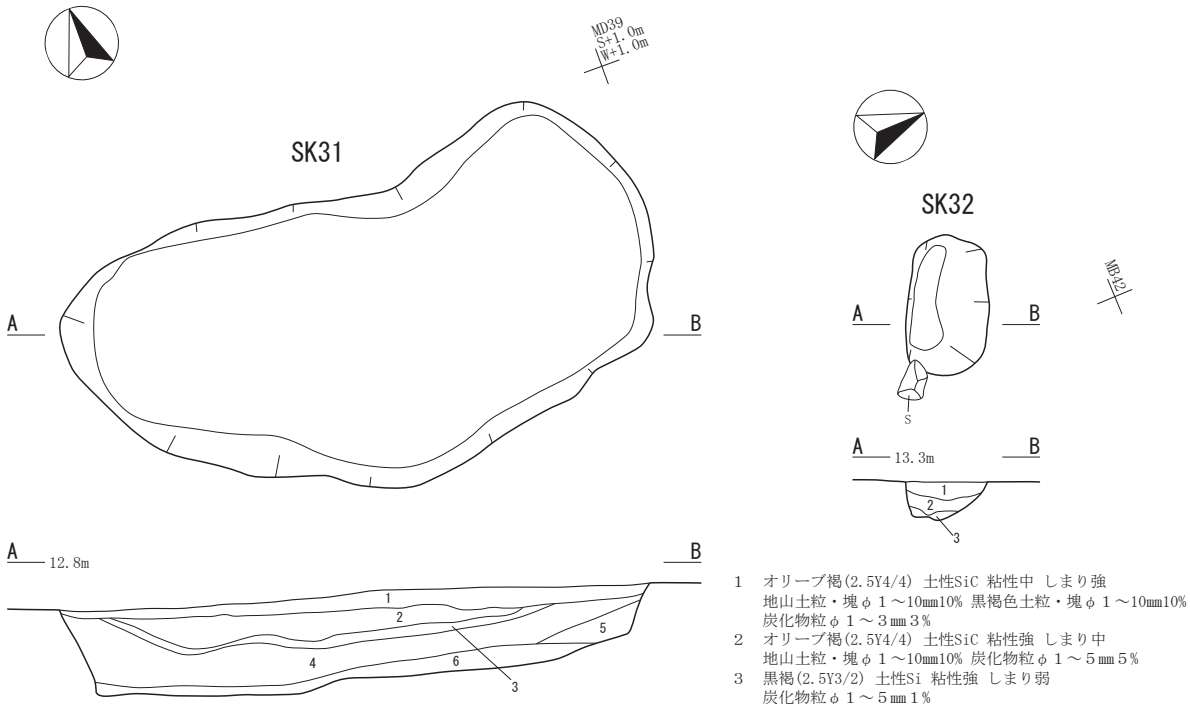
- 1 黄灰(2.5Y4/1) 土性SiC 粘性弱 しまり強 地山土粒φ 1~5mm 7% 炭化物粒・塊φ 1~10mm 5%
- 2 黒(N2/0) 炭化物層 粘性弱 しまり強 地山土粒φ 1~5mm 7%
- 3 黒褐(2.5Y3/1) 土性SC 粘性強 しまり強 焼土・被熱土粒・塊φ 1~7mm 3% 炭化物土粒・塊φ 1~10mm 8%
- 4 黒(N2/0) 炭化物層 粘性弱 しまり強 焼土・被熱土粒2.5Y7/4φ 1~5mm 2%
- 5 黒(N2/0) 土性SiC 粘性弱 しまり強 地山土粒φ 1~3mm 1% 炭化物土粒φ 1~3mm 1%
- 6 灰(5Y4/1) 土性SiC 粘性中 しまり強 焼土・被熱土粒・塊7.5YRφ 1~20mm 7% 炭化物粒φ 1~5mm 4%
- 7 橙(5YR6/6) 焼土・被熱層 土性SiC 粘性弱 しまり強
- 8 黒褐(2.5Y3/1) 土性SC 粘性強 しまり強 炭化物粒・塊φ 1~10mm 3%
- 9 黄灰(2.5Y5/1) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒φ 1~5mm 3% 炭化物粒・塊φ 1~10mm 10%
- 10 黄灰(2.5Y5/1) 土性SiC 粘性弱 しまり強 地山土粒φ 1~5mm 6% 炭化物粒・塊φ 1~15mm 10%
- 11 褐灰(10YR4/1) 土性HC 粘性強 しまり強 炭化物粒・塊φ 1~10mm 10%
- 12 灰(5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土粒φ 1~3mm 5% 炭化物粒φ 1~5mm 5%
- 13 黒(N2/0) 炭化物層 粘性弱 しまり強 焼土・被熱土粒φ 1~3mm 1%
- 14 黄灰(2.5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土粒φ 1~5mm 7% 炭化物粒φ 1~3mm 3%



- 1 黄褐(2.5Y5/4) 土性SiC 粘性中 しまり強 地山土粒・塊φ 1~50mm 20% 黒褐色土粒・塊φ 1~100mm 30% 炭化物粒・材φ 1~10mm 3%
- 2 黄褐(2.5Y5/4) 土性SiC 粘性中 しまり強 地山土粒・塊φ 1~100mm 30% 黒褐色土粒・塊φ 1~50mm 20% 炭化物粒・材φ 1~10mm 5%
- 3 暗オリーブ(5Y4/3) 土性SiC 粘性中 しまり中 地山土粒・塊φ 1~100mm 20% 炭化物粒φ 1~5mm 1%
- 4 暗オリーブ(7.5Y4/3) 土性SiC 粘性強 しまり弱 地山土粒・塊φ 1~50mm 30% 炭化物粒φ 1~5mm 5%

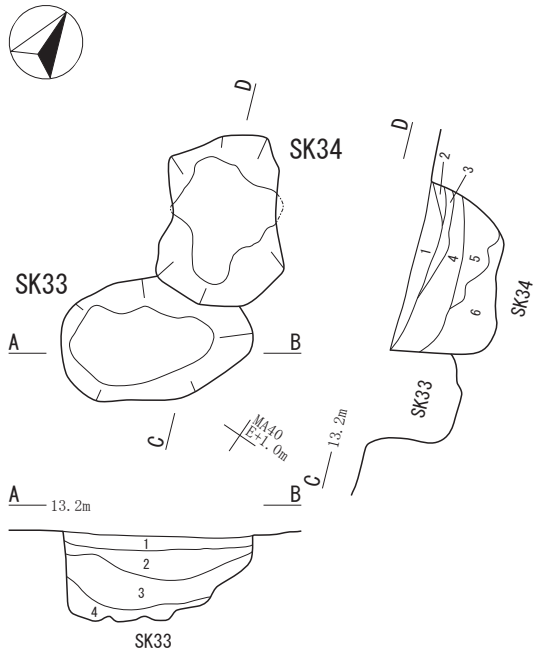
第15図 SK27・SK30

第4章 調査の記録



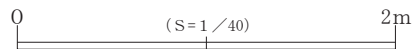
- 1 オリーブ褐(2.5Y4/4) 土性Si 粘性弱 しまり強 黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 3%
炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 5%
- 2 灰オリーブ(5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒・塊 φ 1 ~ 50mm 20%
炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 3% 焼土粒・塊 φ 1 ~ 20mm 5%
- 3 黒(5Y2/1) 炭化物層 粘性弱 しまり中 地山土粒・塊 φ 1 ~ 10mm 10%
焼土粒・塊 φ 1 ~ 20mm 10%
- 4 灰オリーブ(5Y4/2) 土性Si 粘性強 しまり中 炭化物粒・材 φ 1 ~ 10mm 20%
焼土粒・塊 φ 1 ~ 20mm 10%
- 5 灰オリーブ(5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり中 地山土粒・塊 φ 1 ~ 10mm 40%
- 6 灰(5Y4/1) 土性SiC 粘性強 しまり中 炭化物粒 1 ~ 5mm 1%

- 1 オリーブ褐(2.5Y4/4) 土性SiC 粘性中 しまり強
地山土粒・塊 φ 1 ~ 10mm 10% 黒褐色土粒・塊 φ 1 ~ 10mm 10%
炭化物粒 φ 1 ~ 3mm 3%
- 2 オリーブ褐(2.5Y4/4) 土性SiC 粘性強 しまり中
地山土粒・塊 φ 1 ~ 10mm 10% 炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 5%
- 3 黒褐(2.5Y3/2) 土性Si 粘性強 しまり弱
炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 1%

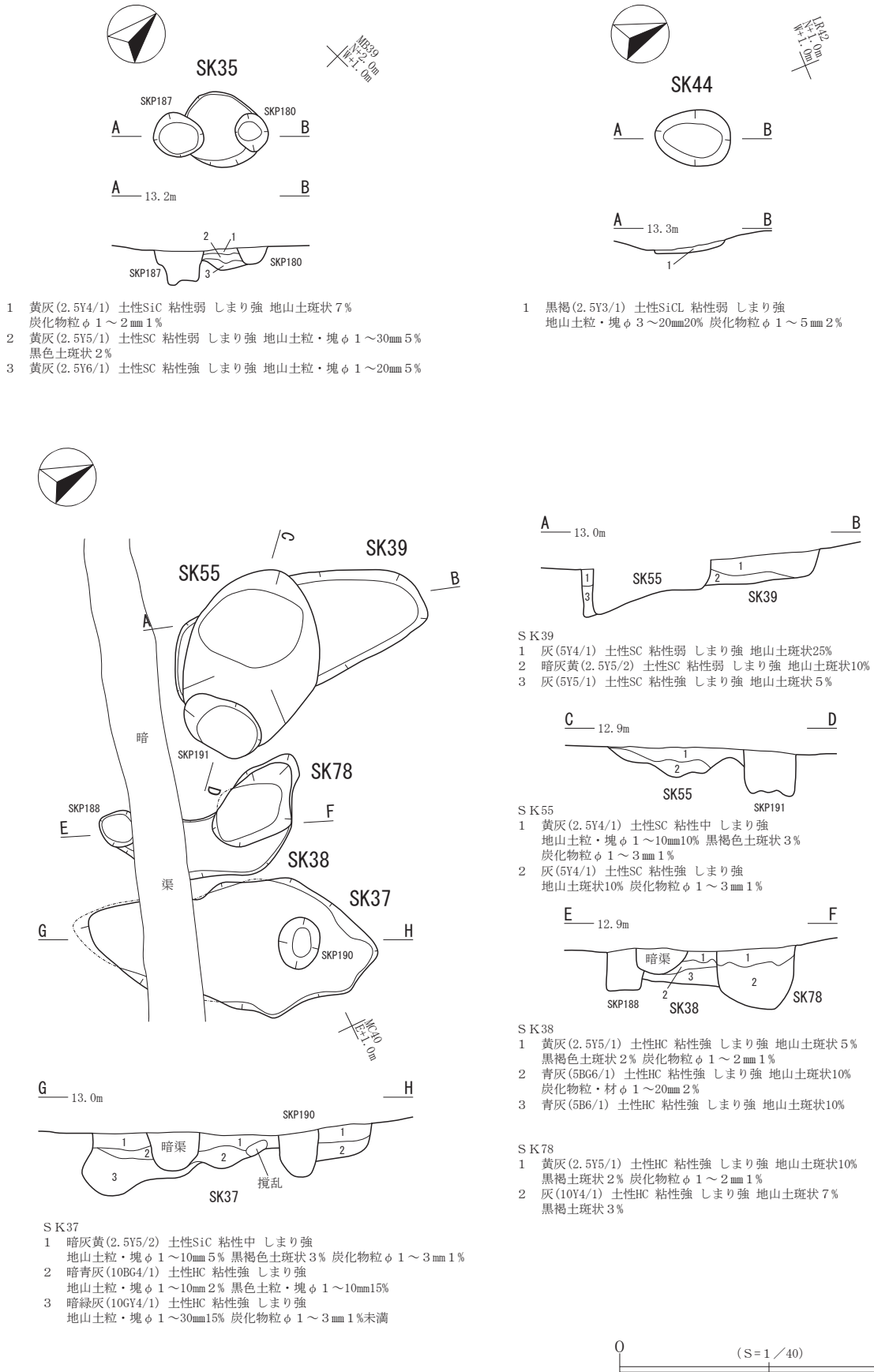


- S K34
- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり強
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 5% 炭化物粒・材 φ 1 ~ 10mm 3%
 - 2 黄褐(2.5Y5/3) 土性SiC 粘性強 しまり強
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 3% 炭化物粒 φ 1 ~ 3mm 3%
 - 3 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性中 しまり中
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 10% 炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 1%
 - 4 灰(5Y4/1) 土性SiC 粘性強 しまり中
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 5% 炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 1%
 - 5 暗緑灰(10GY4/1) 土性SiC 粘性強 しまり弱
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 5% 炭化物粒 φ 1 ~ 5mm 3%
 - 6 暗緑灰(10GY4/1) 土性SiC 粘性強 しまり強
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 20% 炭化物粒 φ 1 ~ 3mm 3%

- S K33
- 1 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SiC 粘性強 しまり強
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 5% 炭化物粒・材 φ 1 ~ 10mm 3%
 - 2 灰オリーブ(5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり強
黒褐色土粒 φ 1 ~ 5mm 5% 炭化物粒 φ 1 ~ 10mm 1%
 - 3 灰(5Y4/1) 土性SiC 粘性強 しまり中
黒褐色土粒・塊 φ 1 ~ 20mm 10% 炭化物粒・材 φ 1 ~ 10mm 3%
 - 4 暗緑灰(10GY4/1) 土性SiC 粘性強 しまり弱
黒褐色土粒・塊 φ 1 ~ 30mm 10% 炭化物粒・材 φ 1 ~ 10mm 5%

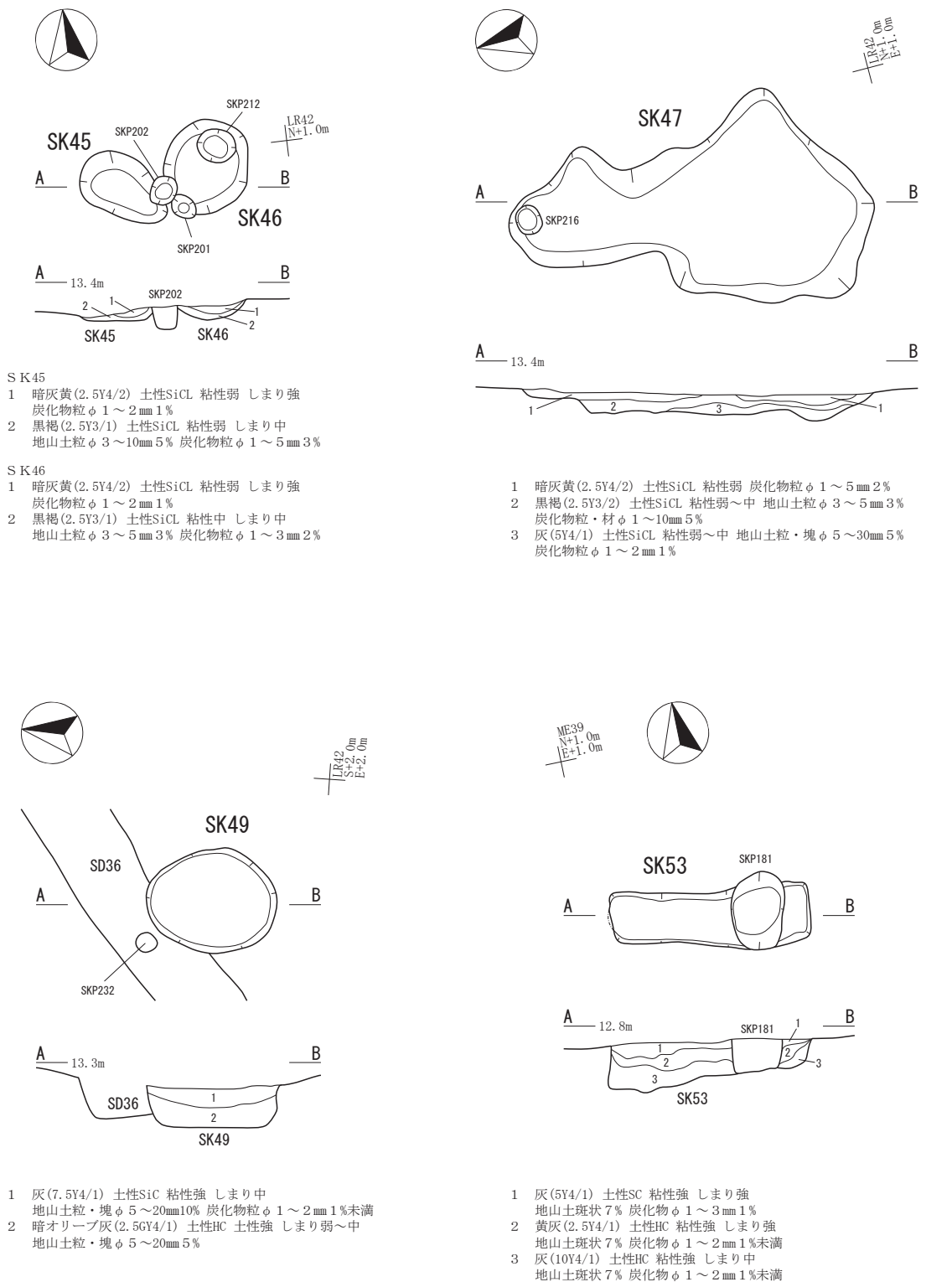


第16図 SK31・SK32・SK33・SK34

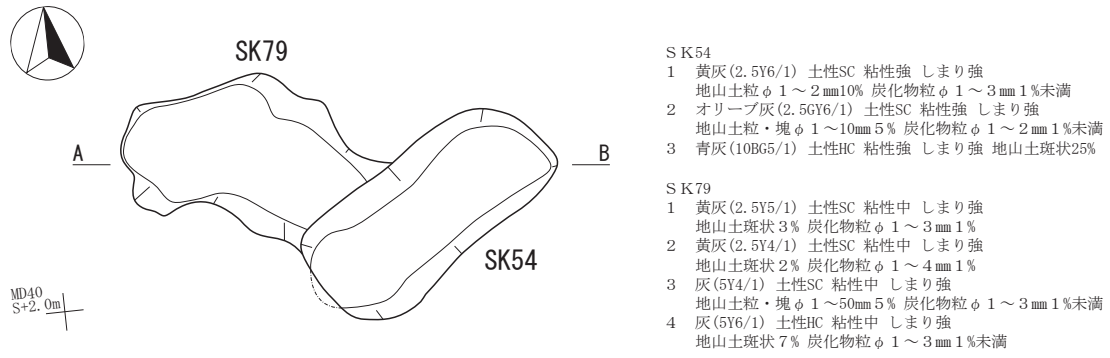


第17図 SK35・SK37・SK38・SK39・SK44・SK55・SK78

第4章 調査の記録

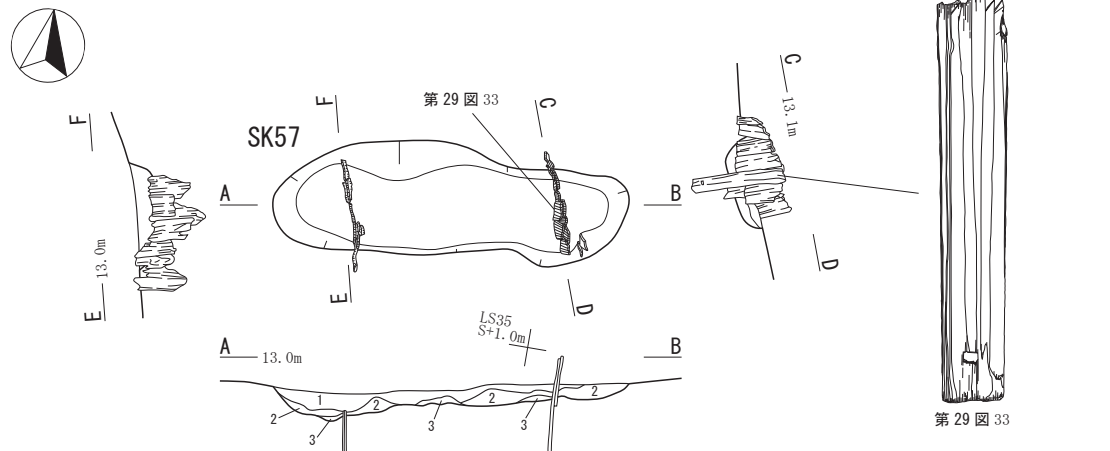


第18図 SK45・SK46・SK47・SK49・SK53

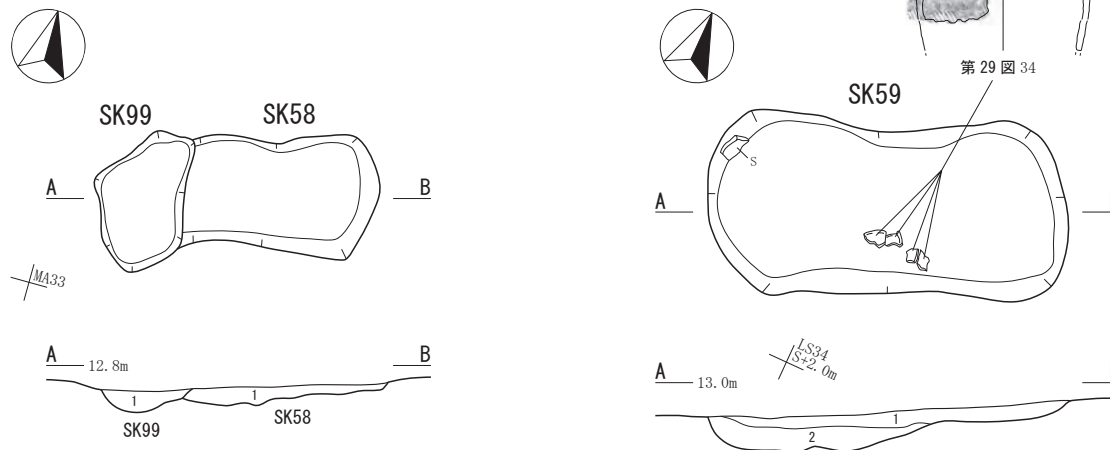


- SK54
- 1 黄灰(2.5Y6/1) 土性SC 粘性強 しまり強
地山土粒φ 1~2mm10% 炭化物粒φ 1~3mm 1%未満
 - 2 オリーブ灰(2.5GY6/1) 土性SC 粘性強 しまり強
地山土粒・塊φ 1~10mm 5% 炭化物粒φ 1~2mm 1%未満
 - 3 青灰(10BG5/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土斑状25%

- SK79
- 1 黄灰(2.5Y5/1) 土性SC 粘性中 しまり強
地山土斑状 3% 炭化物粒φ 1~3mm 1%
 - 2 黄灰(2.5Y4/1) 土性SC 粘性中 しまり強
地山土斑状 2% 炭化物粒φ 1~4mm 1%
 - 3 灰(5Y4/1) 土性SC 粘性中 しまり強
地山土粒・塊φ 1~50mm 5% 炭化物粒φ 1~3mm 1%未満
 - 4 灰(5Y6/1) 土性HC 粘性中 しまり強
地山土斑状 7% 炭化物粒φ 1~3mm 1%未満



- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中~強 地山土粒・塊φ 5~20mm20%
- 2 暗オリーブ灰(2.5GY4/1) 土性SiCL 粘性中 しまり強 地山土粒・塊φ 5~50mm50%
- 3 黒褐(10YR2/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり弱 木片等有機物多量混入



- SK99
- 1 灰オリーブ(5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり中
炭化物粒φ 1~2mm 1%未満

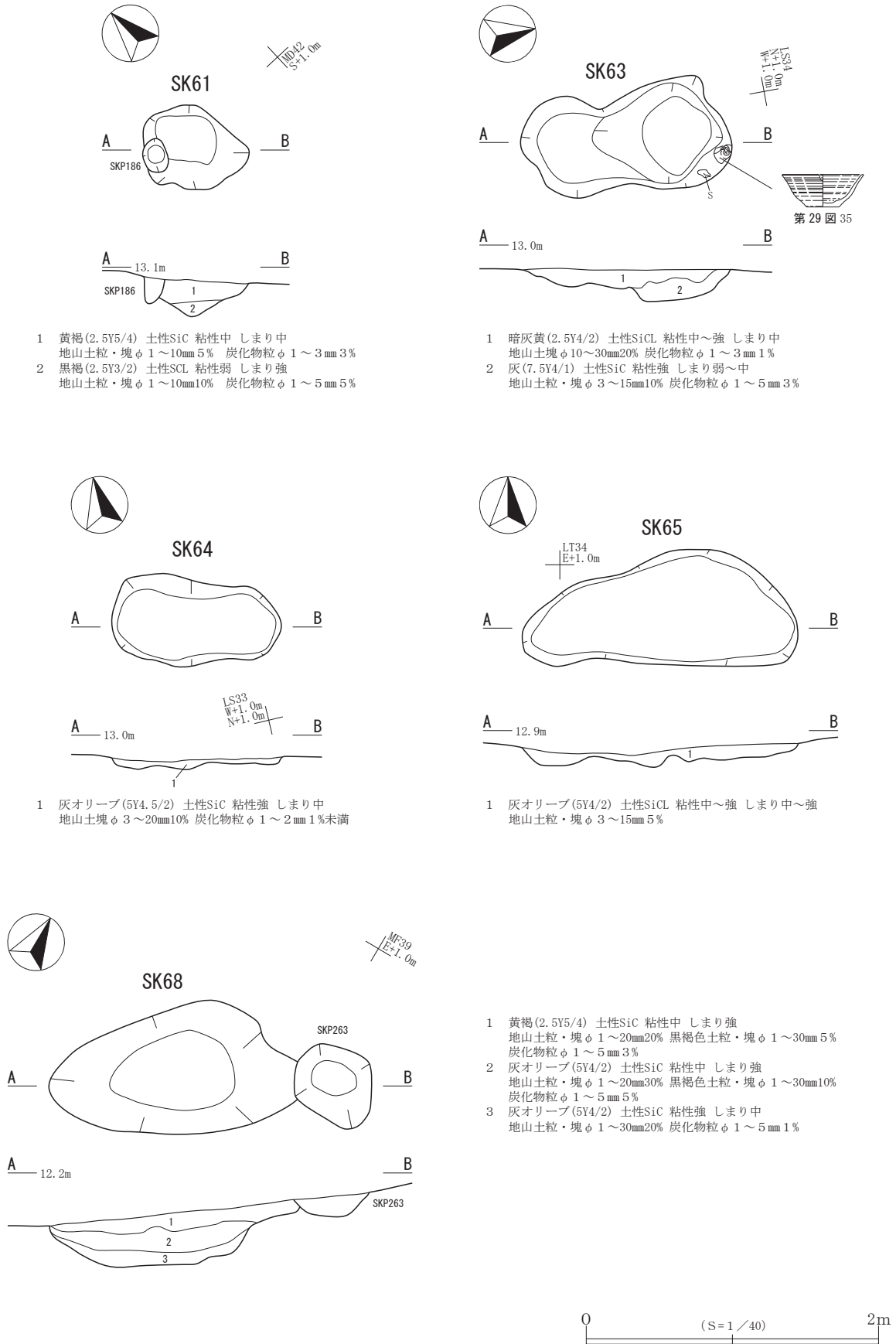
- SK58
- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり中~強
地山土粒・塊φ 5~20mm20%
炭化物粒φ 1~3mm 1%

- 1 黒褐(2.5Y3/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中
地山土粒・塊φ 1~10mm 5% 炭化物粒φ 1~2mm 1%未満
- 2 灰(10Y4/1) 土性SiC 粘性中 しまり中~強
地山土粒・塊φ 3~20mm15% 炭化物粒φ 1~2mm 1%未満

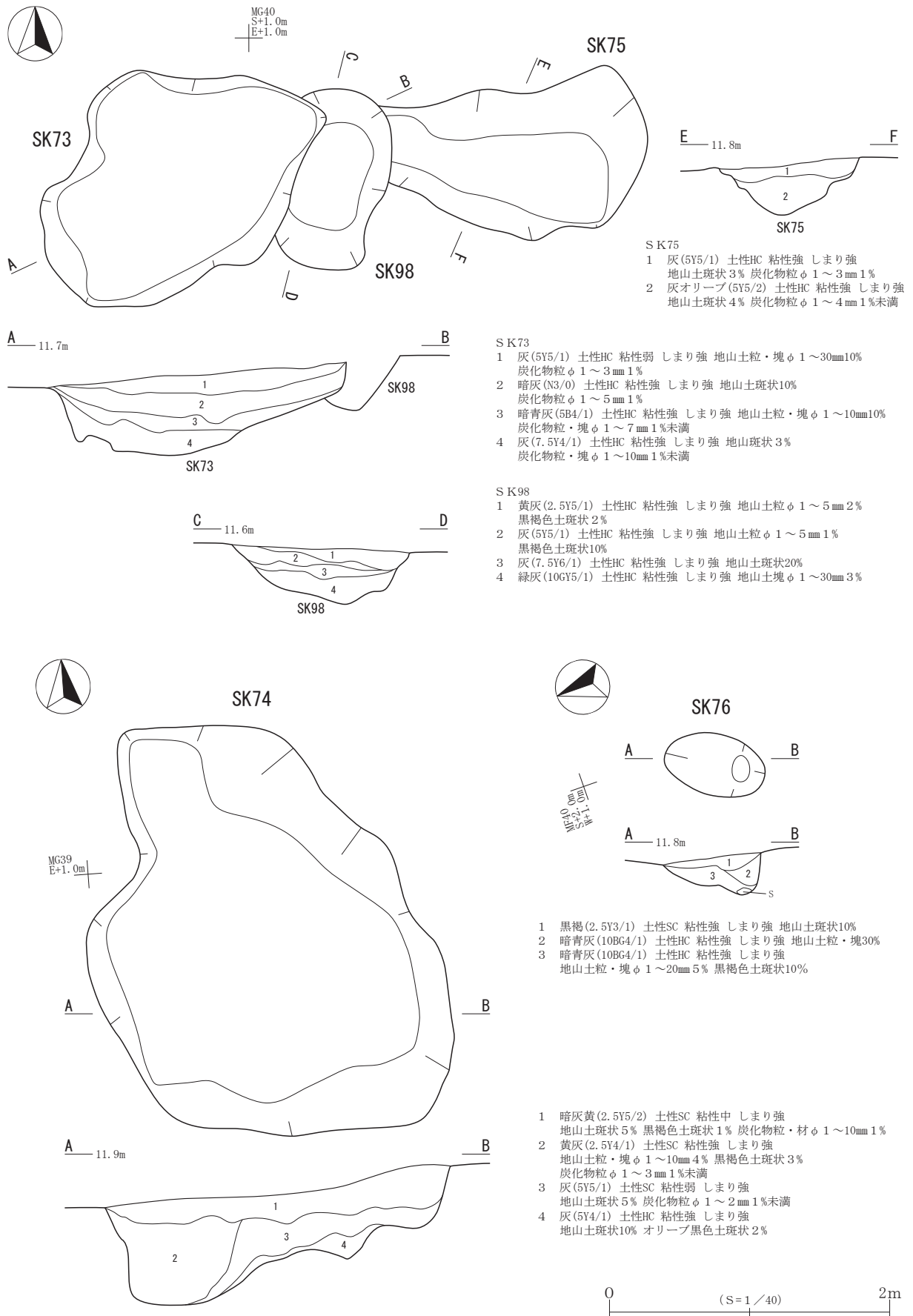
0 (S=1/40) 2m

第19図 SK54・SK57・SK58・SK59・SK79・SK99

第4章 調査の記録

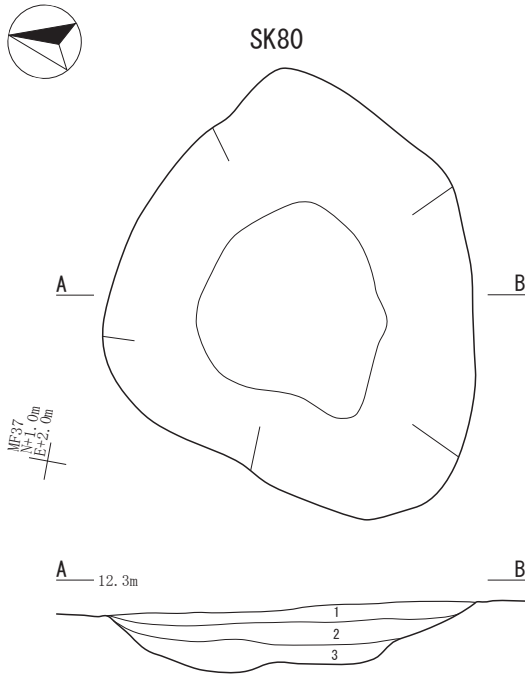


第20図 SK61・SK63・SK64・SK65・SK68

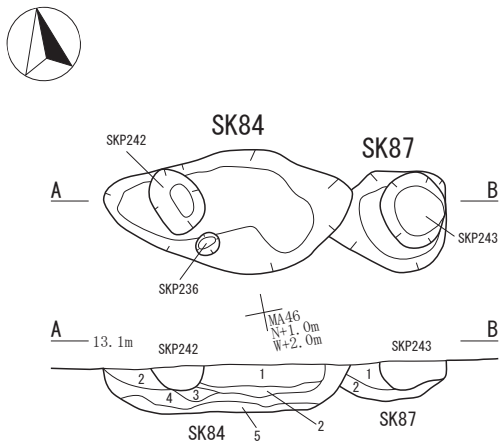


第21図 SK73・SK74・SK75・SK76・SK98

第4章 調査の記録

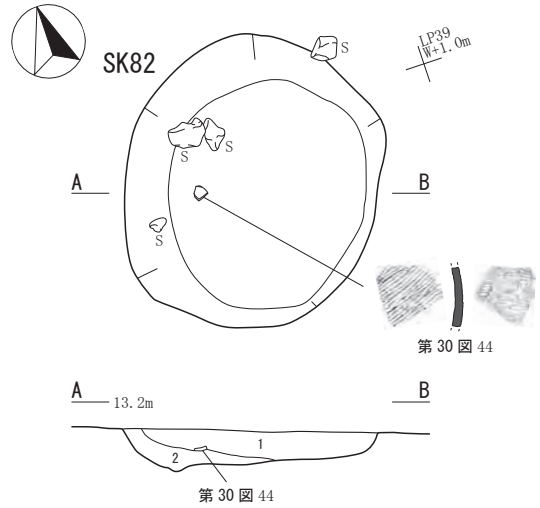


- 1 黄褐(2.5Y5/4) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒・塊 φ 1~10mm10% 炭化物粒 φ 1~5mm 3%
- 2 黄褐(2.5Y5/4) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒・塊 φ 1~30mm20% 炭化物粒 φ 1~5mm 5%
- 3 明黄褐(2.5Y6/6) 土性SiC 粘性強 しまり強 暗オリーブ色土斑状30% 炭化物粒 φ 1~5mm 5%

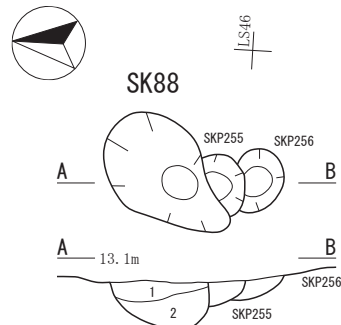


- SK84
- 1 灰(5Y5/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土粒 φ 1~2mm15% 炭化物粒 φ 1~5mm 2%
 - 2 灰(7.5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり中 地山土斑状 1%未満 炭化物粒 φ 1~2mm 1%未満
 - 3 黄灰(2.5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土斑状 2% 炭化物粒 φ 1~2mm 1%未満
 - 4 灰(5Y5/1) 土性HC 粘性強 しまり中 地山土斑状15% 炭化物粒 φ 1~5mm 1%
 - 5 オリーブ灰(2.5GY6/1) 土性HC 粘性強 しまり弱 地山土粒・塊 φ 1~50mm40%

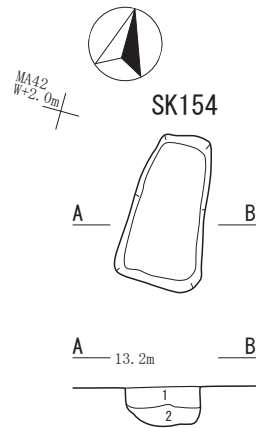
- SK87
- 1 灰(5Y4/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土粒 φ 1~3mm10%
 - 2 灰(7.5Y5/1) 土性HC 粘性強 しまり強 地山土粒・塊 φ 1~10mm 3%



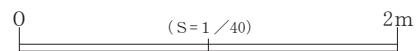
- 第30図44
- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性強 しまり中 地山土粒 φ 1~10mm 1% 炭化物粒 φ 1~5mm 2%
 - 2 黒褐(2.5Y3/1) 土性SiC 粘性強 しまり弱~強 地山土粒 φ 1~5mm 3% 炭化物粒 φ 1~5mm 1%



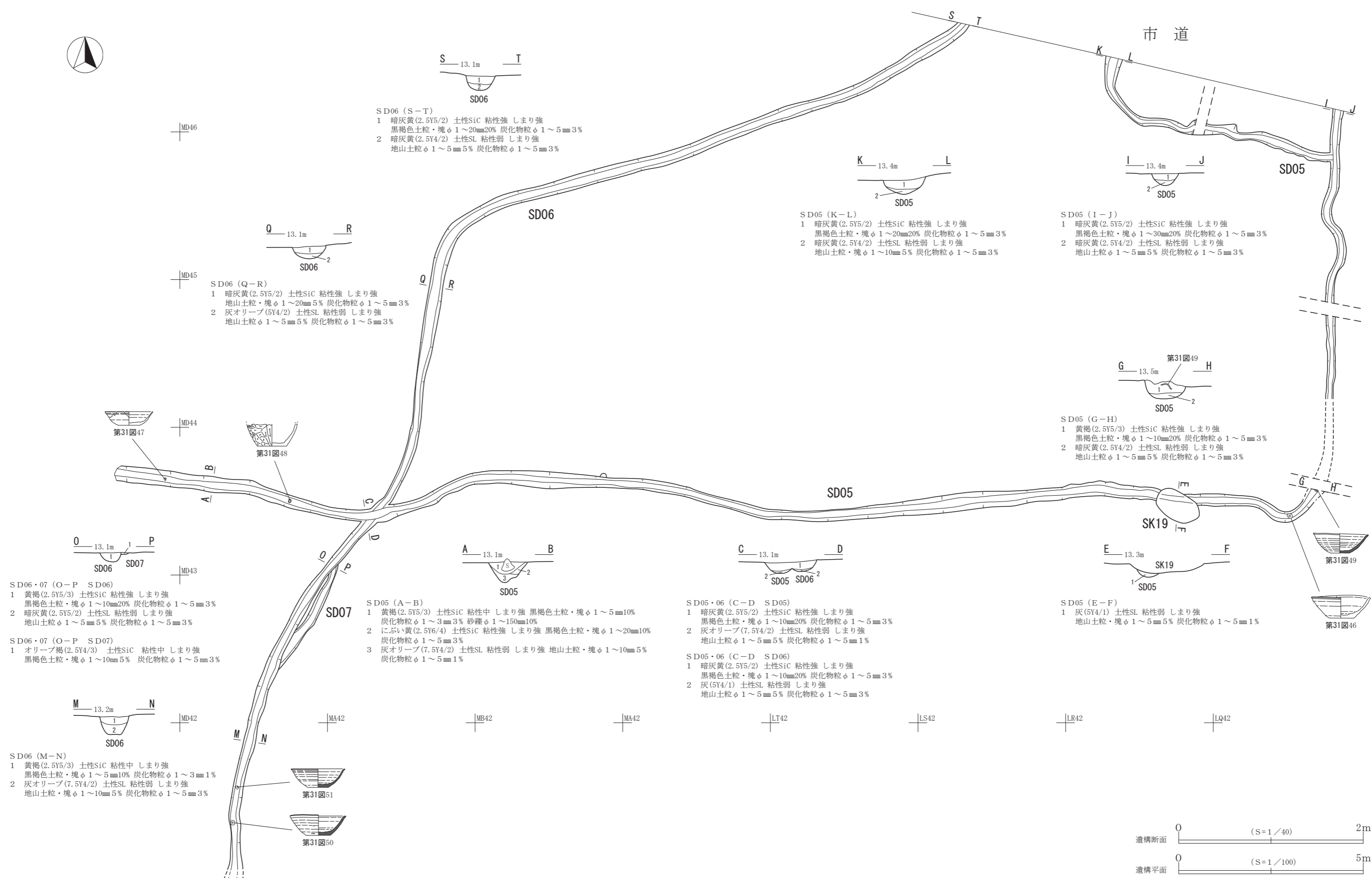
- 1 明黄褐(2.5Y6/6) 土性HC 粘性強 しまり強 黒褐色土斑状20% 炭化物粒 φ 1~5mm 5%
- 2 黒褐(2.5Y3/2) 土性SiC 粘性弱 しまり強 地山土粒・塊 φ 1~50mm30% 炭化物粒・材 φ 1~10mm10%



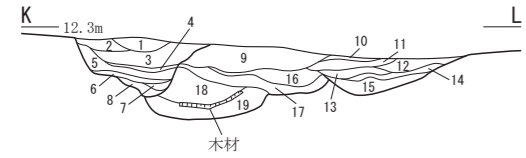
- 1 オリーブ(5Y5/4) 土性SiC 粘性中 しまり強 炭化物粒 φ 1~5mm 5%
- 2 灰オリーブ(7.5Y5/2) 土性SiC 粘性強 しまり強 地山土粒 φ 1~5mm 3% 炭化物粒・材 φ 1~10mm 3%



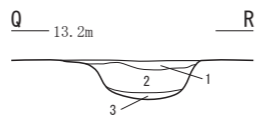
第22図 SK80・SK82・SK84・SK87・SK88・SK154



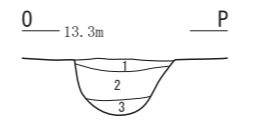
第23図 SD05・SD06・SD07



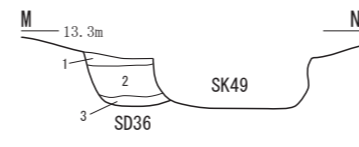
- SD20 (K-L)
- 1 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性L 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 2 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 3 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 4 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SL 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 5 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり中 植物遺体微量
 - 6 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SL 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 7 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性L 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 8 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SL 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 9 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 植物遺体少量
 - 10 灰(10Y4/1) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 11 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性L 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 12 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 13 黄褐(2.5Y5/3) 土性LS 粘性弱 しまり強 植物遺体微量
 - 14 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性L 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 15 暗灰黄～黄褐(2.5Y5/2.5) 土性SL 粘性弱 しまり強 植物遺体少量
 - 16 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SL 粘性弱 しまり中 地山土粒φ1～10mm10% 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量(15層より多い)
 - 17 黒褐～暗灰黄(2.5Y3.5/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり中 地山土粒φ1～10mm5% 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量(15層より多い)
 - 18 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiC 粘性中 しまり中 地山土粒・塊φ3～30mm2% 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量
 - 19 黒褐～暗灰黄(2.5Y3.5/2) 土性SiC 粘性中 しまり中 地山土粒・塊φ5～30mm5% 植物遺体微量



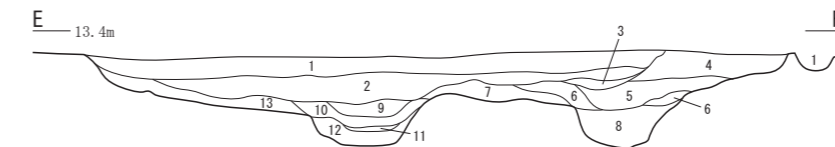
- SD36 (Q-R)
- 1 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 地山土粒φ1～10mm10%
 - 2 暗オリーブ灰(2.5GY4/1) 土性LiC 粘性中 しまり中 地山土粒φ1～5mm50%
 - 3 灰(10Y4/1) 土性SC 粘性中 しまり弱～中 地山土塊φ5～10mm10%



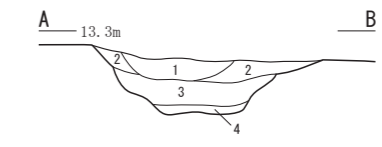
- SD36 (O-P)
- 1 灰オリーブ(5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 地山土塊φ1～10mm5%
 - 2 暗オリーブ灰(2.5GY4/1) 土性LiC 粘性中 しまり中 地山土粒φ1～5mm2%
 - 3 灰(10Y4/1) 土性SC 粘性中 しまり弱～中 地山土塊φ5～20mm10%



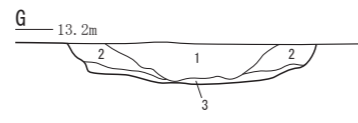
- SD36 (M-N)
- 1 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中 地山土塊φ5～20mm15%
 - 2 オリーブ褐(2.5Y4/3) 土性LiC 粘性弱 しまり中 地山土粒φ3～5mm2%
 - 3 灰(10Y4/1) 土性SC 粘性中 しまり弱～中 地山土塊φ5～10mm10%



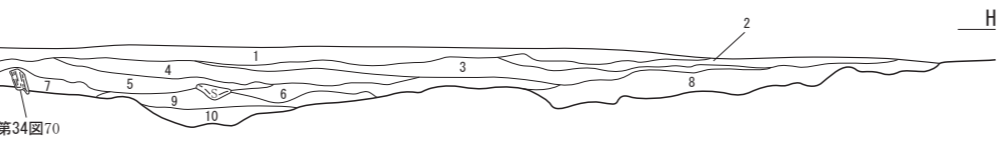
- SD20・50 (E-F)
- 1 黄褐(2.5Y5/3) 土性SiCL 粘性弱 しまり強
 - 2 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性CL 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～5mm1%
 - 3 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性L 粘性弱 しまり中
 - 4 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性L 粘性弱 しまり強
 - 5 暗灰黄～オリーブ褐(2.5Y4/2.5) 土性SL 粘性弱 しまり強 植物遺体少量
 - 6 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強
 - 7 オリーブ褐(2.5Y4/3) 土性L 粘性弱 しまり強
 - 8 灰(10Y4/1) 土性L 粘性弱 しまり中 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量
 - 9 暗灰黄～オリーブ褐(2.5Y4/2.5) 土性LS 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量
 - 10 灰(7.5Y4/1) 土性L 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 11 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性LS 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 12 灰オリーブ(5Y4/2) 土性L 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 13 黒褐(2.5Y3/2) 土性SiCL 粘性中 しまり強 炭化物粒φ1～5mm1% 植物遺体少量



- SD20 (A-B)
- 1 オリーブ褐(2.5Y4/3) 土性LS 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～2mm1% 植物遺体少量
 - 2 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中 炭化物粒φ1～2mm1% 植物遺体少量
 - 3 オリーブ黒(5Y3/1) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強 炭化物粒φ1～2mm1% 植物遺体少量(1・2層より多い)
 - 4 灰(10Y4/1) 土性SC 粘性中 しまり弱 炭化物粒φ1～2mm1% 植物遺体少量



- SD28 (G-H)
- 1 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性SL 粘性弱 しまり中～強 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量
 - 2 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 地山土粒φ10～30mm20% 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量
 - 3 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SL 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体中量(特に2層との境界部分に多い)

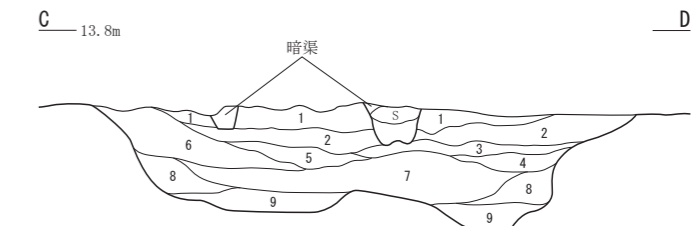
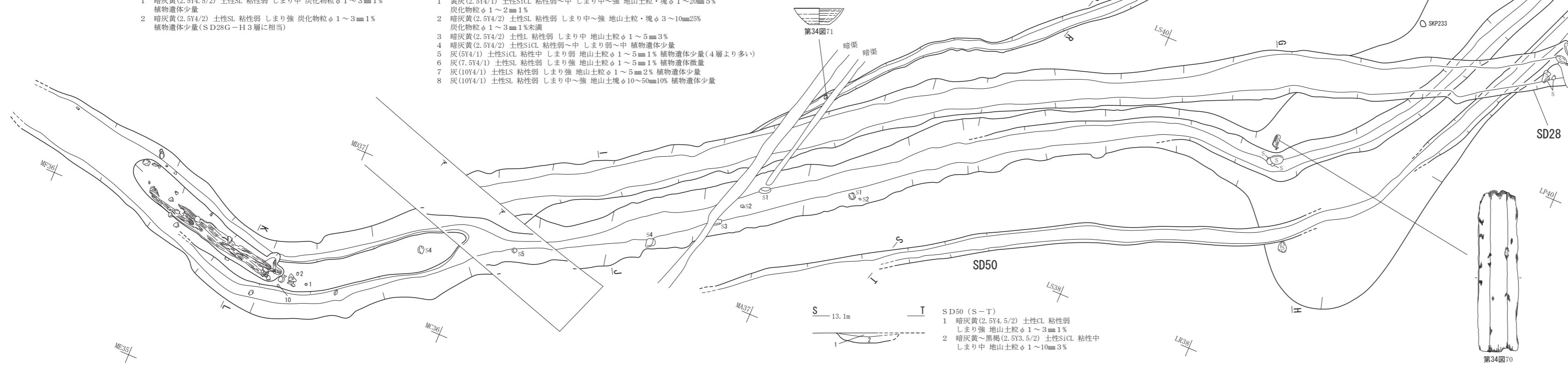


- SD20・50 (G-H)
- 1 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強
 - 2 黄褐(2.5Y5/3) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強
 - 3 暗灰黄～オリーブ褐(2.5Y4/2.5) 土性L 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 4 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性SL 粘性弱 しまり中～強 植物遺体微量
 - 5 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強
 - 6 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性SL 粘性弱 しまり中～強 炭化物粒φ1～5mm1% 植物遺体微量
 - 7 オリーブ褐(2.5Y4/3) 土性SiCL 粘性弱 しまり中 地山土塊φ5～20mm10%
 - 8 暗灰黄～オリーブ褐(2.5Y4/2.5) 土性L 粘性弱 しまり中～強
 - 9 灰(7.5Y4/1) 土性LS 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～5mm1% 植物遺体微量
 - 10 灰(10Y4/1) 土性LS 粘性弱 しまり中～強



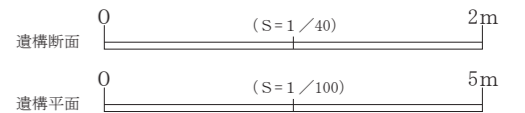
- SD28 (I-J)
- 1 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性SL 粘性弱 しまり中 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量
 - 2 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SL 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～3mm1% 植物遺体少量(SD28G-H3層に相当)

- SD20 (I-J)
- 1 黄灰(2.5Y4/1) 土性SiCL 粘性弱 しまり中～強 地山土粒・塊φ1～20mm5% 炭化物粒φ1～2mm1%
 - 2 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SL 粘性弱 しまり中～強 地山土粒・塊φ3～10mm25% 炭化物粒φ1～3mm1%未満
 - 3 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性L 粘性弱 しまり中 地山土粒φ1～5mm3%
 - 4 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり弱～中 植物遺体少量
 - 5 灰(5Y4/1) 土性SiCL 粘性中 しまり弱 地山土粒φ1～5mm1% 植物遺体少量(4層より多い)
 - 6 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 地山土粒φ1～5mm1% 植物遺体微量
 - 7 灰(10Y4/1) 土性LS 粘性弱 しまり強 地山土粒φ1～5mm2% 植物遺体少量
 - 8 灰(10Y4/1) 土性SL 粘性弱 しまり中～強 地山土塊φ10～50mm10% 植物遺体少量

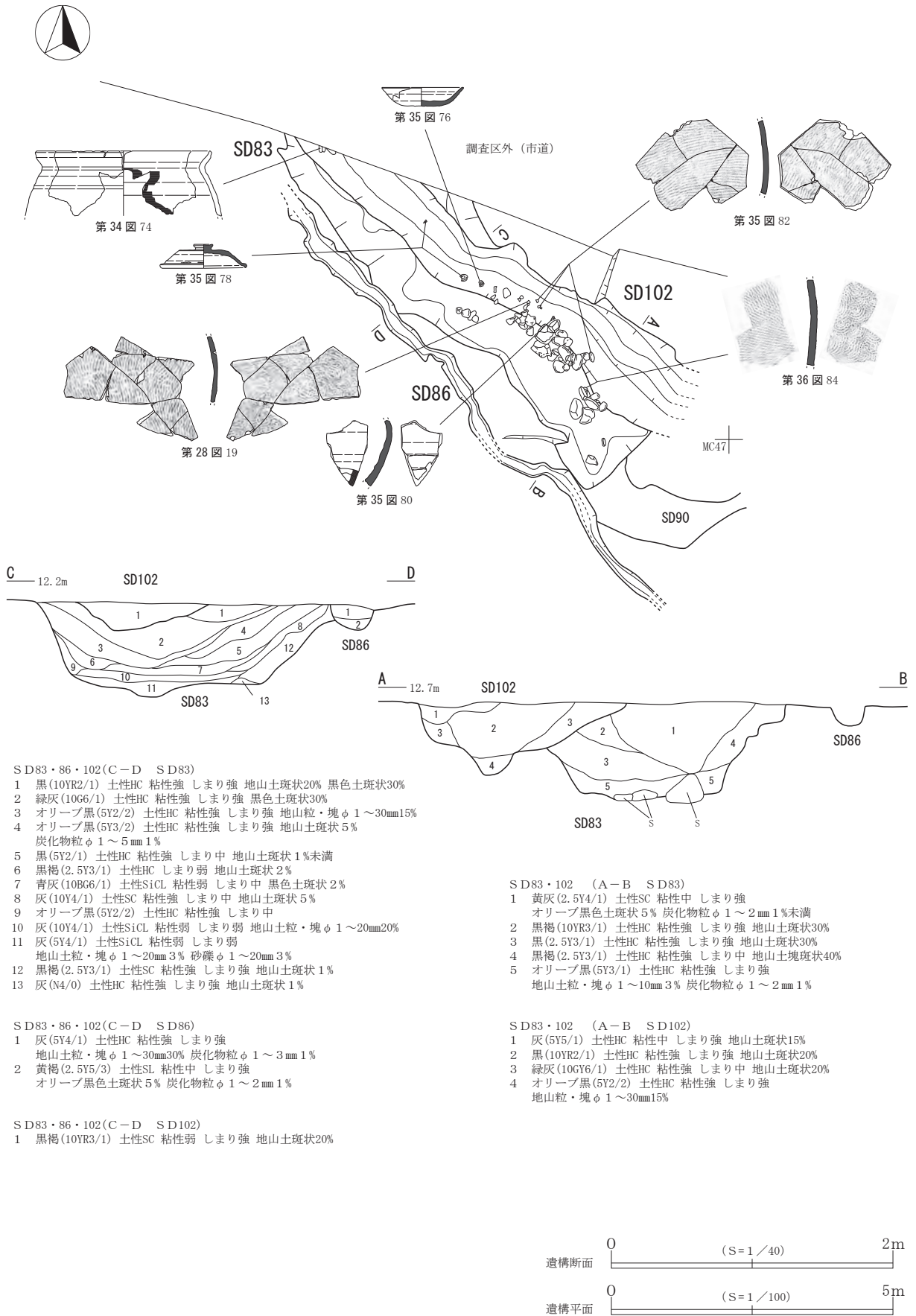


- SD20・50 (C-D)
- 1 黄褐(2.5Y5/3) 土性SiCL 粘性弱 しまり強
 - 2 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性L 粘性弱 しまり中～強 炭化物粒φ1～3mm2% 植物遺体少量
 - 3 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中～強 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量
 - 4 暗灰黄(2.5Y5/2) 土性L 粘性弱 しまり中～強 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量
 - 5 暗灰黄～黄褐(2.5Y5/2.5) 土性SL 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量
 - 6 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量
 - 7 暗灰黄(2.5Y4/2) 土性L 粘性弱 しまり中～強 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体少量
 - 8 灰(5Y4/1) 土性SiCL 粘性弱 しまり強 炭化物粒φ1～3mm1%未満
 - 9 灰(7.5Y4/1) 土性SL 粘性弱 しまり強 地山土粒・塊φ3～20mm3% 炭化物粒φ1～3mm1%未満 植物遺体微量

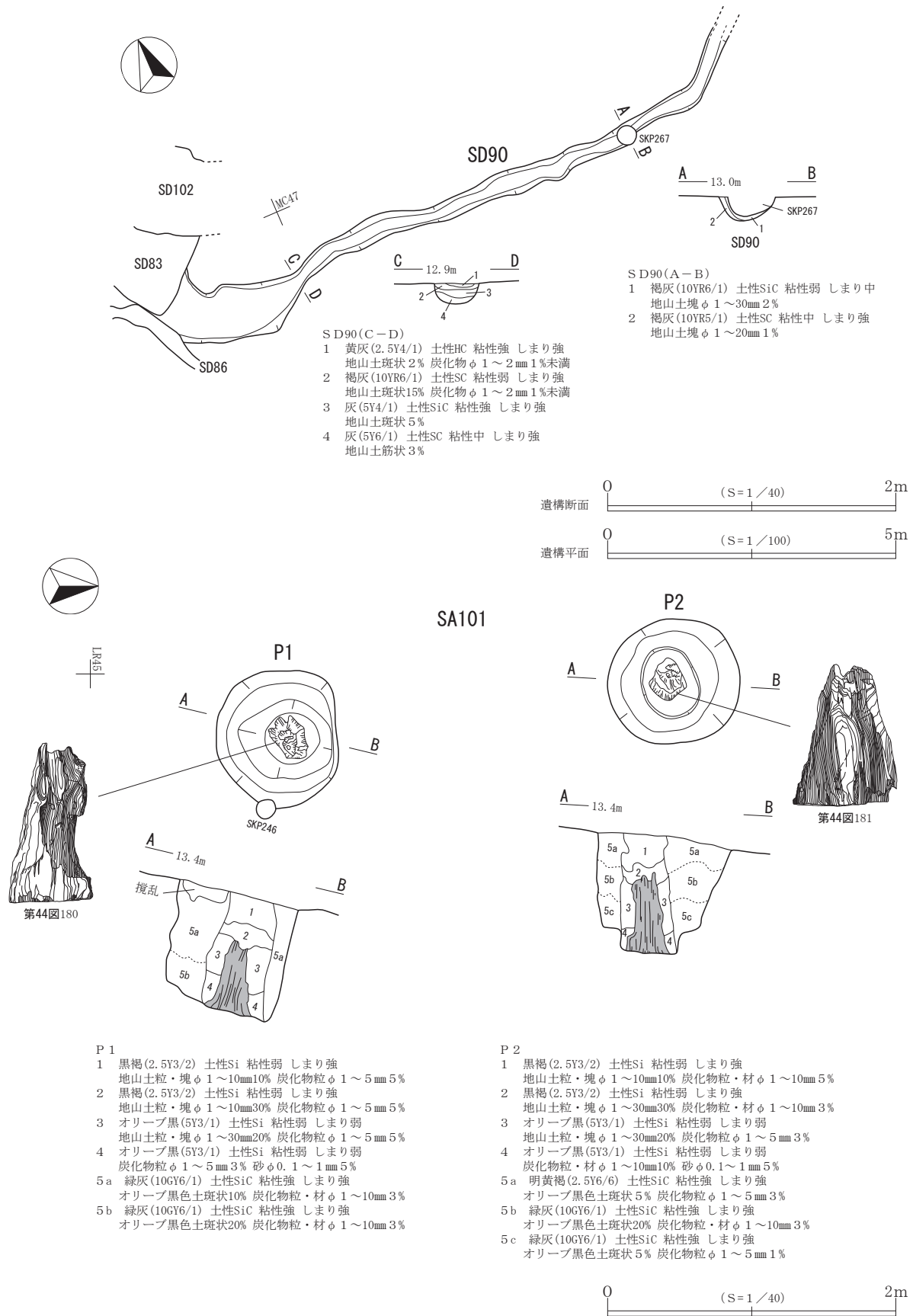
- SD50 (S-T)
- 1 暗灰黄(2.5Y4.5/2) 土性CL 粘性弱 しまり強 地山土粒φ1～3mm1%
 - 2 暗灰黄～黒褐(2.5Y3.5/2) 土性SiCL 粘性中 しまり中 地山土粒φ1～10mm3%



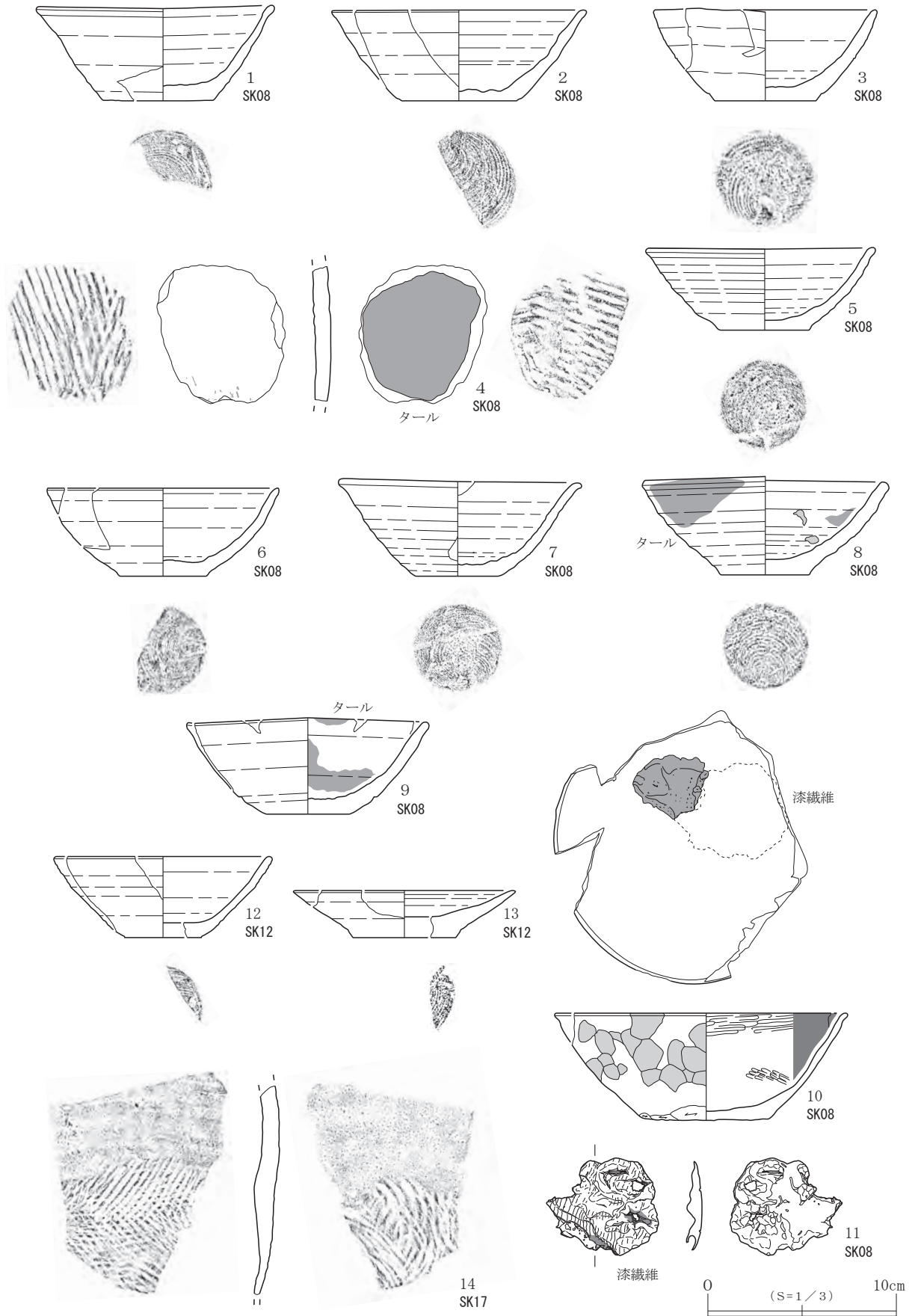
第24図 SD20・SD28・SD36・SD50



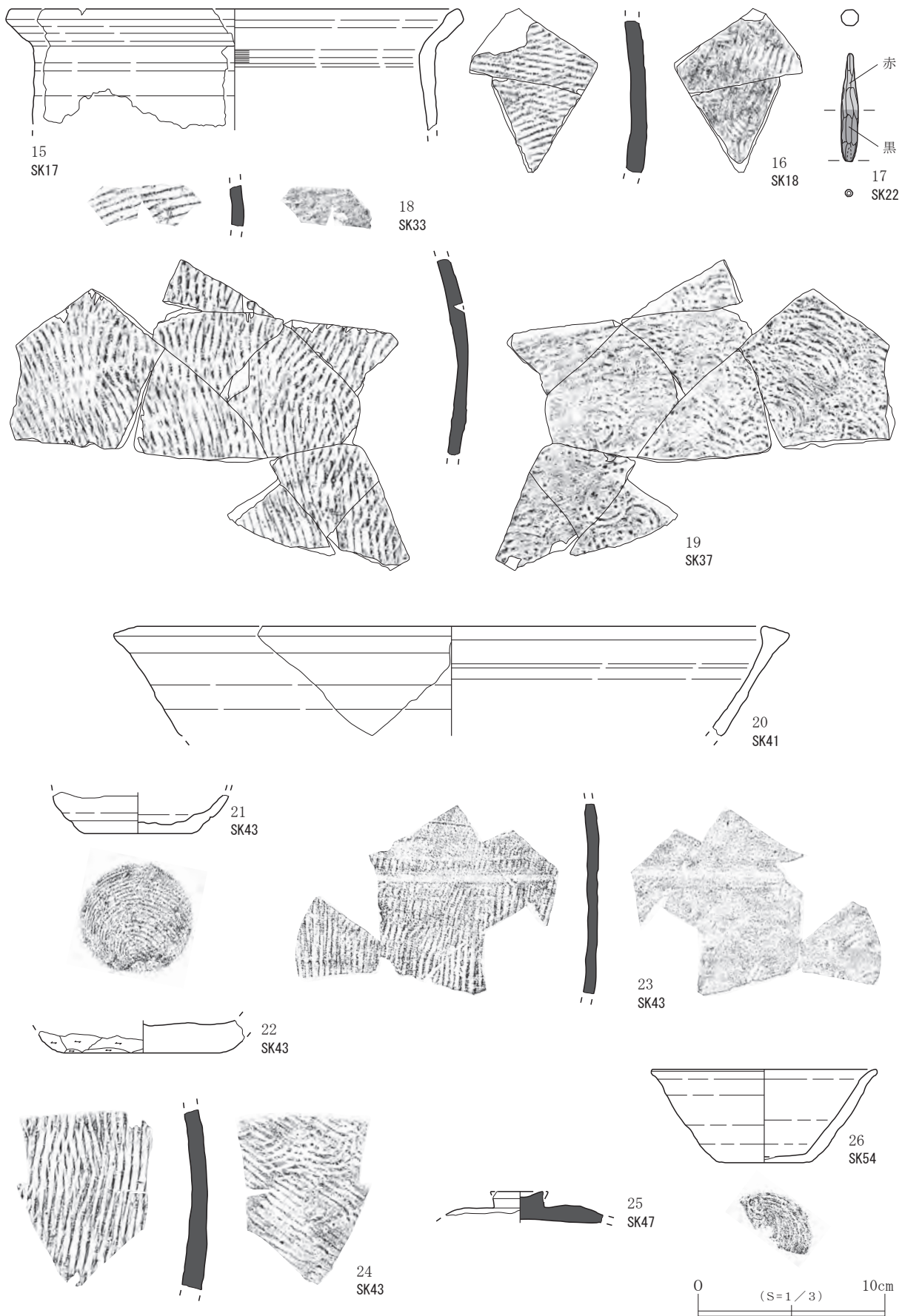
第25図 SD83・SD86・SD102



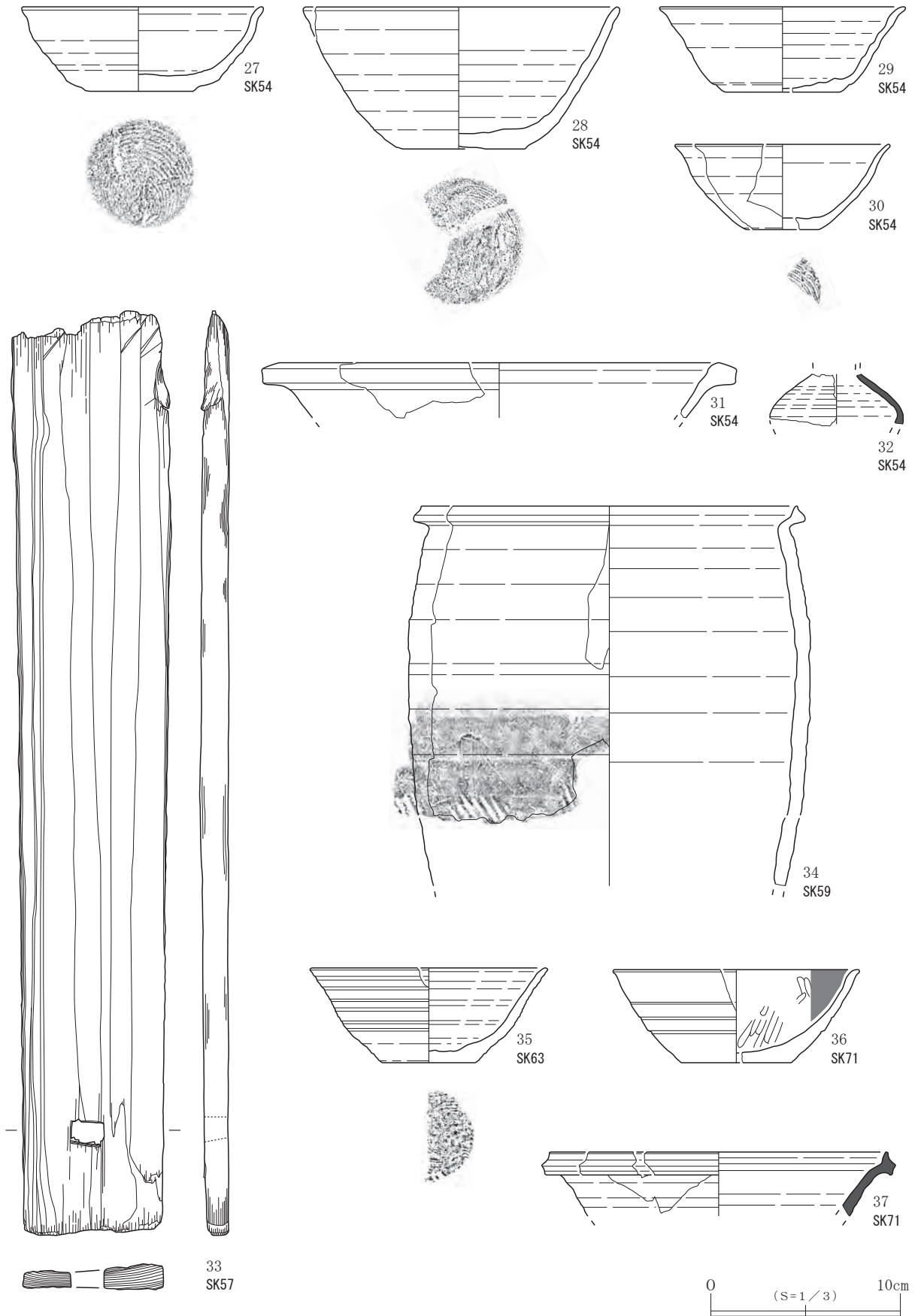
第26図 SD90・SA101



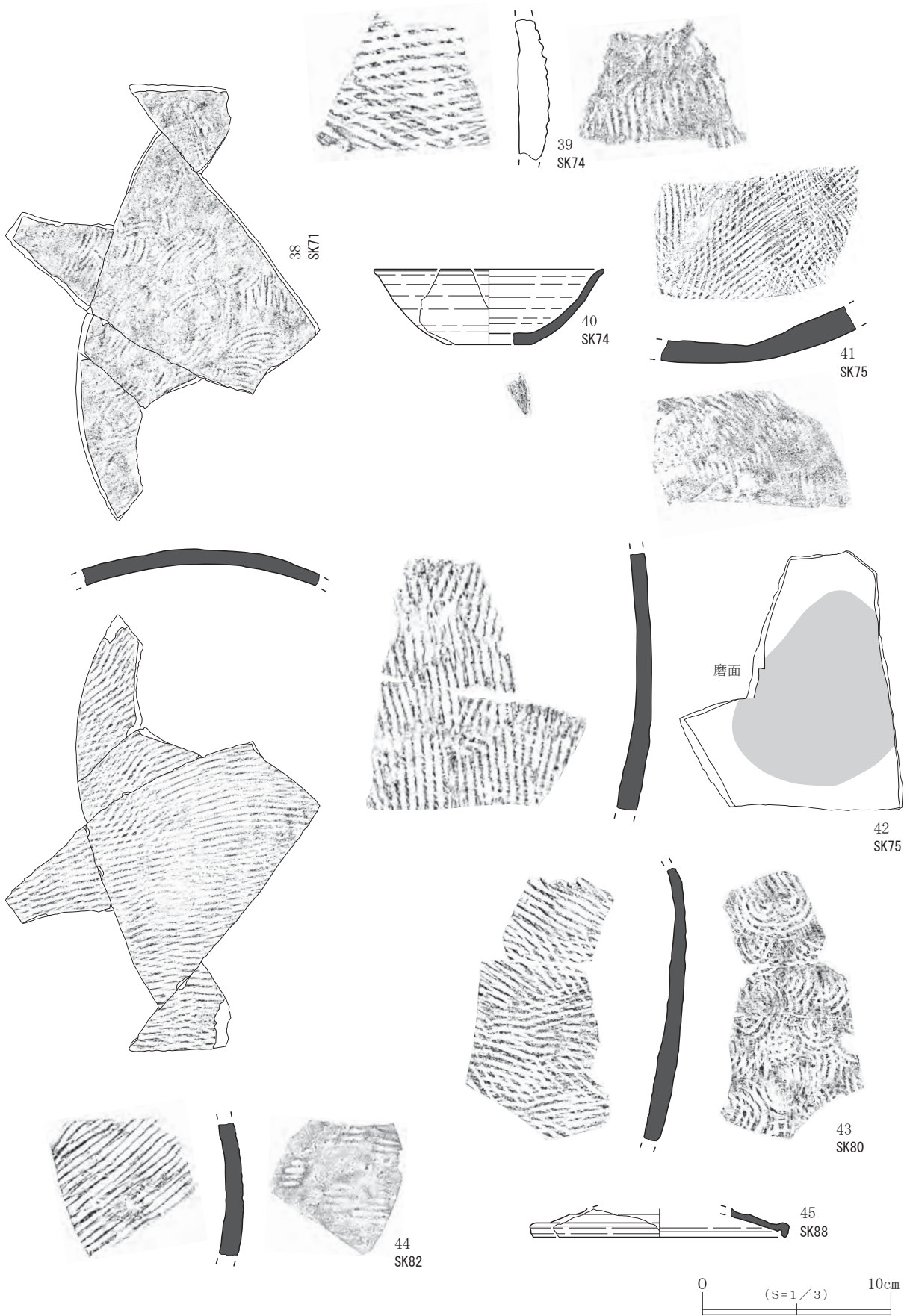
第27図 遺構内出土遺物(1)



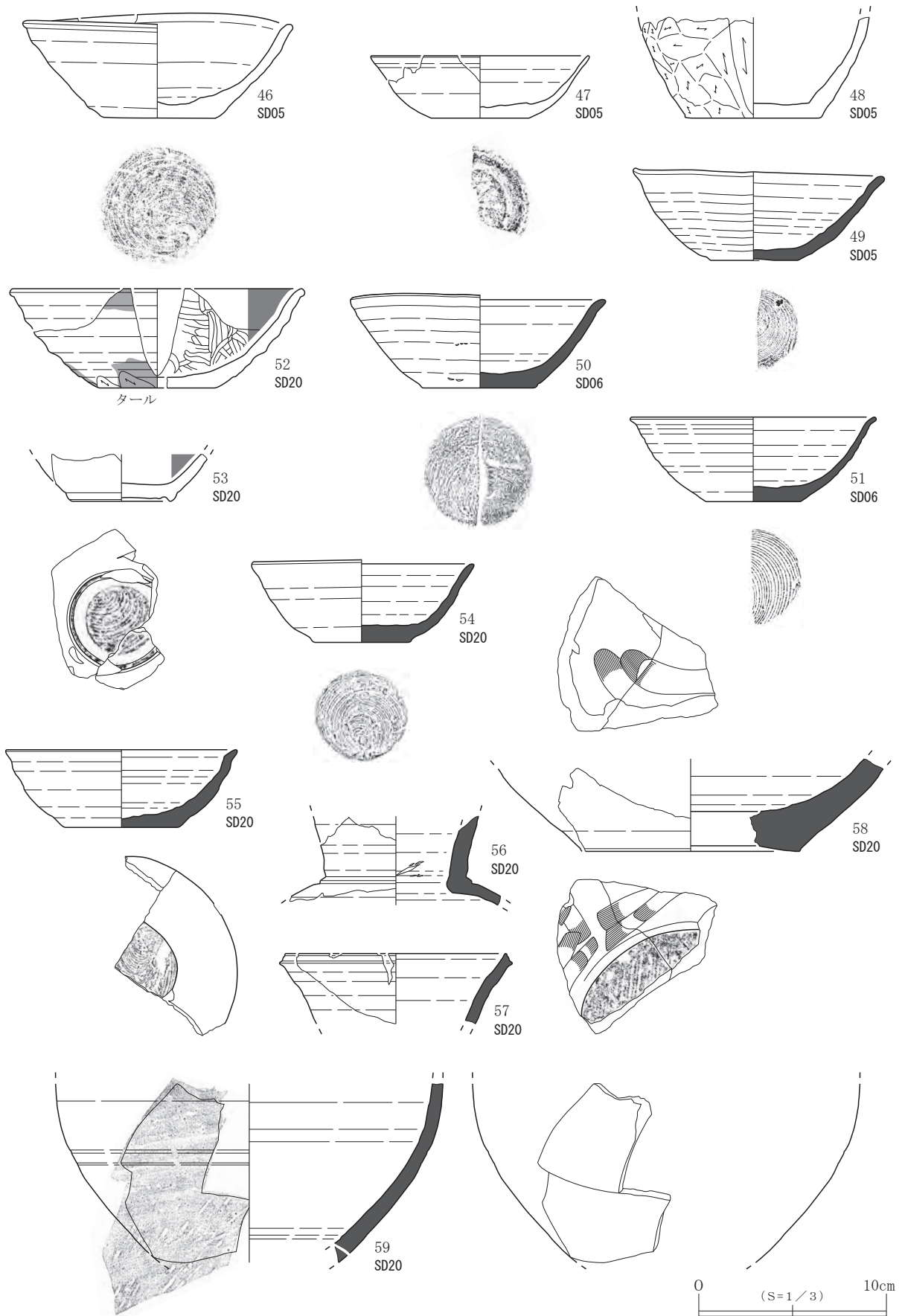
第28図 遺構内出土遺物(2)



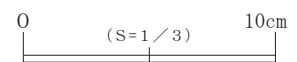
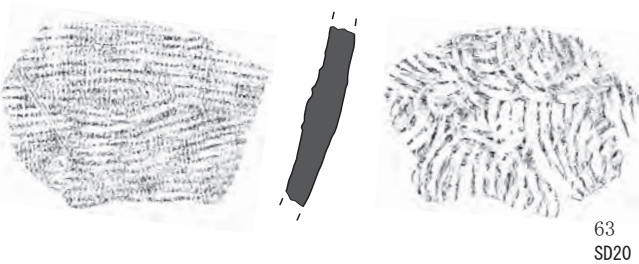
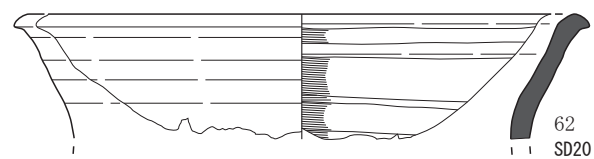
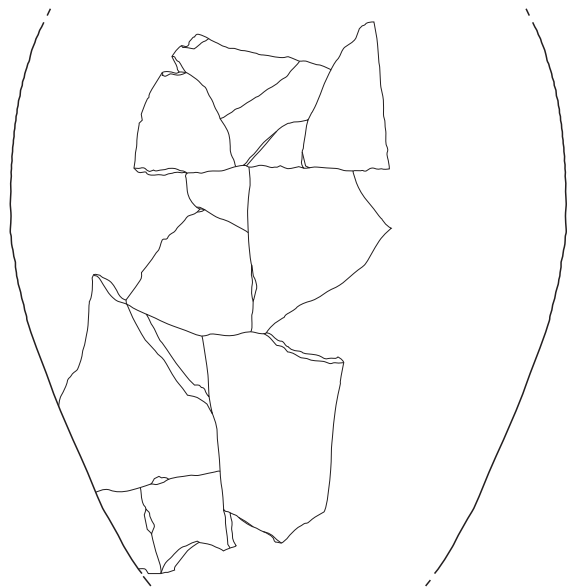
第29図 遺構内出土遺物(3)



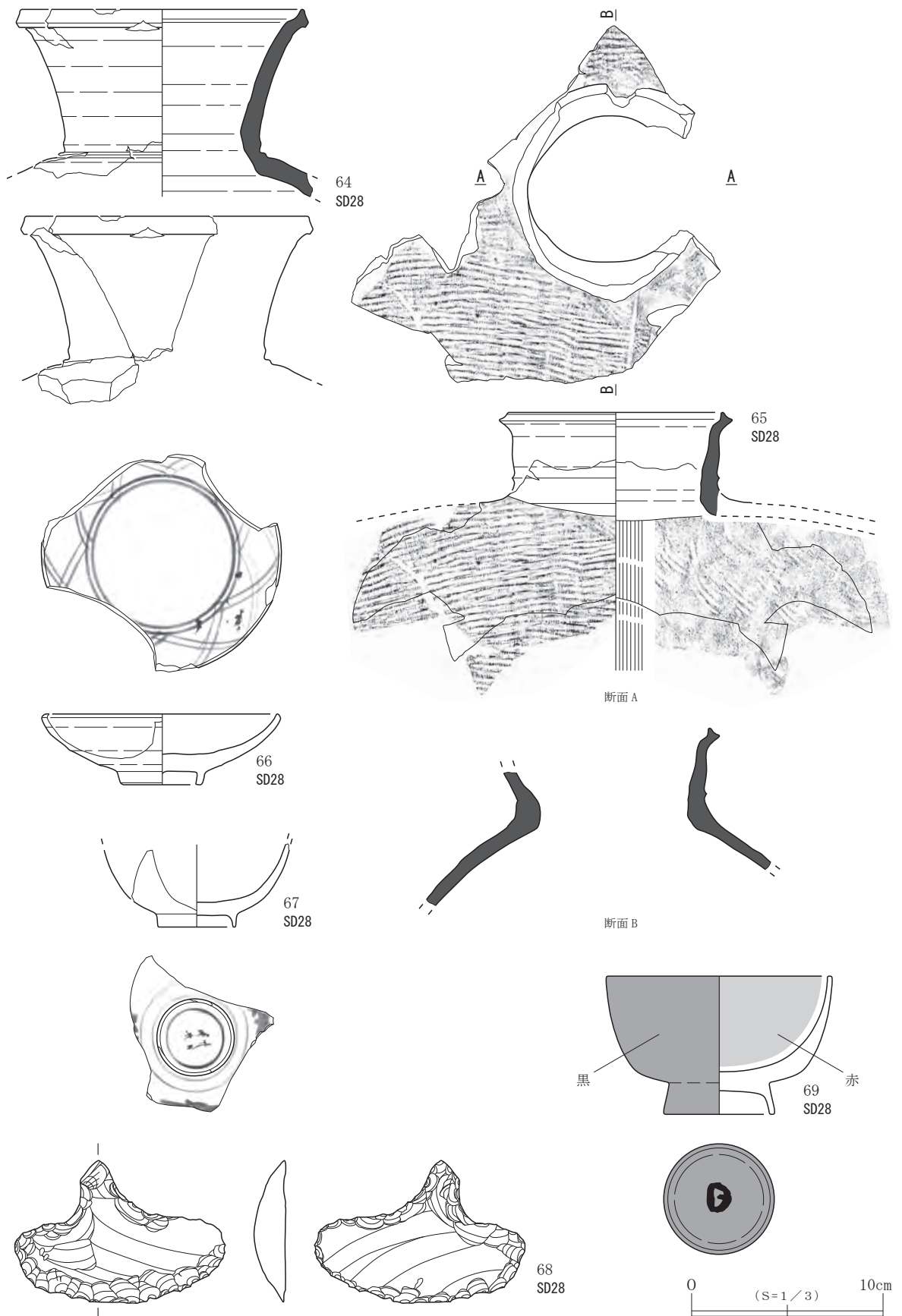
第30図 遺構内出土遺物(4)



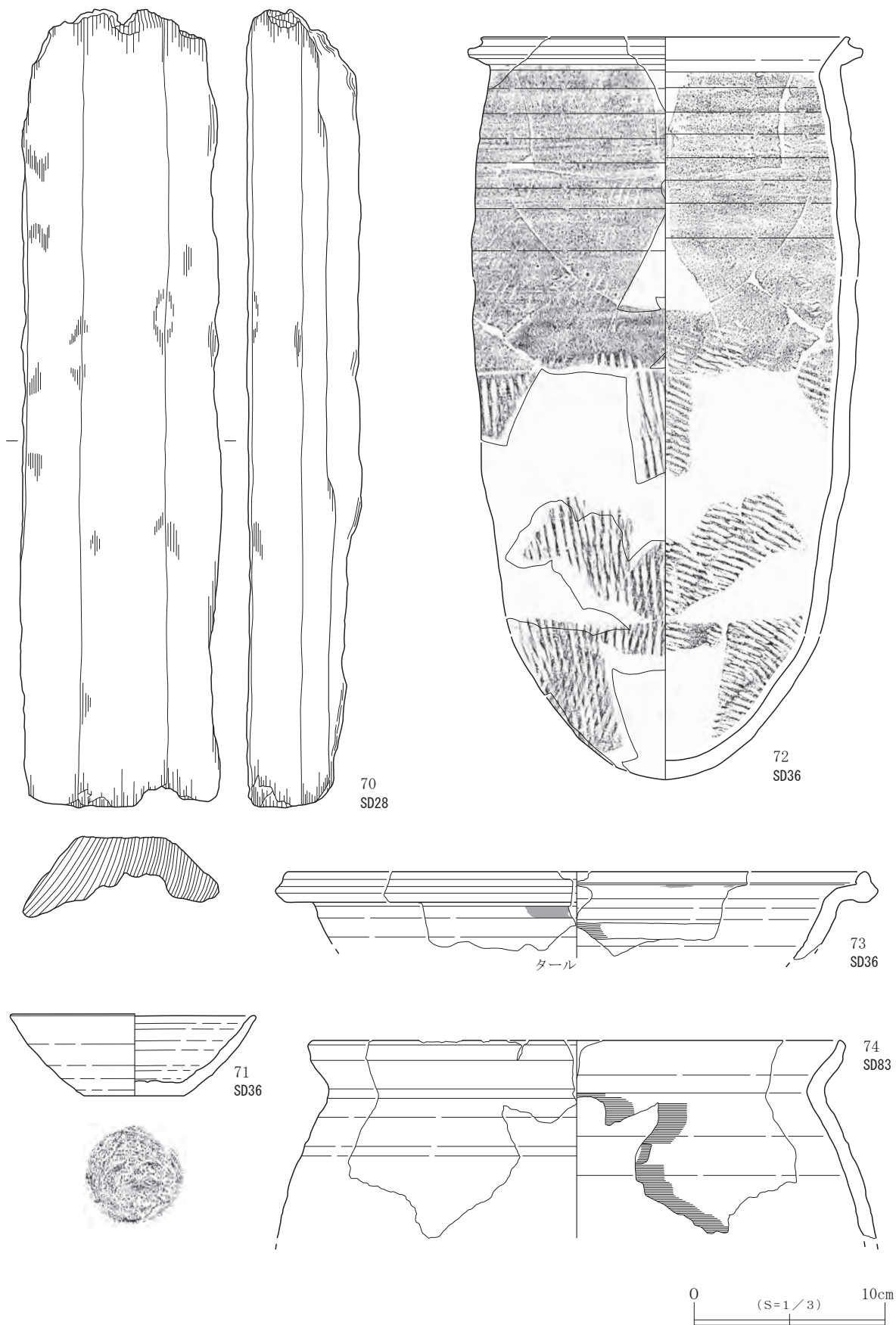
第31図 遺構内出土遺物(5)



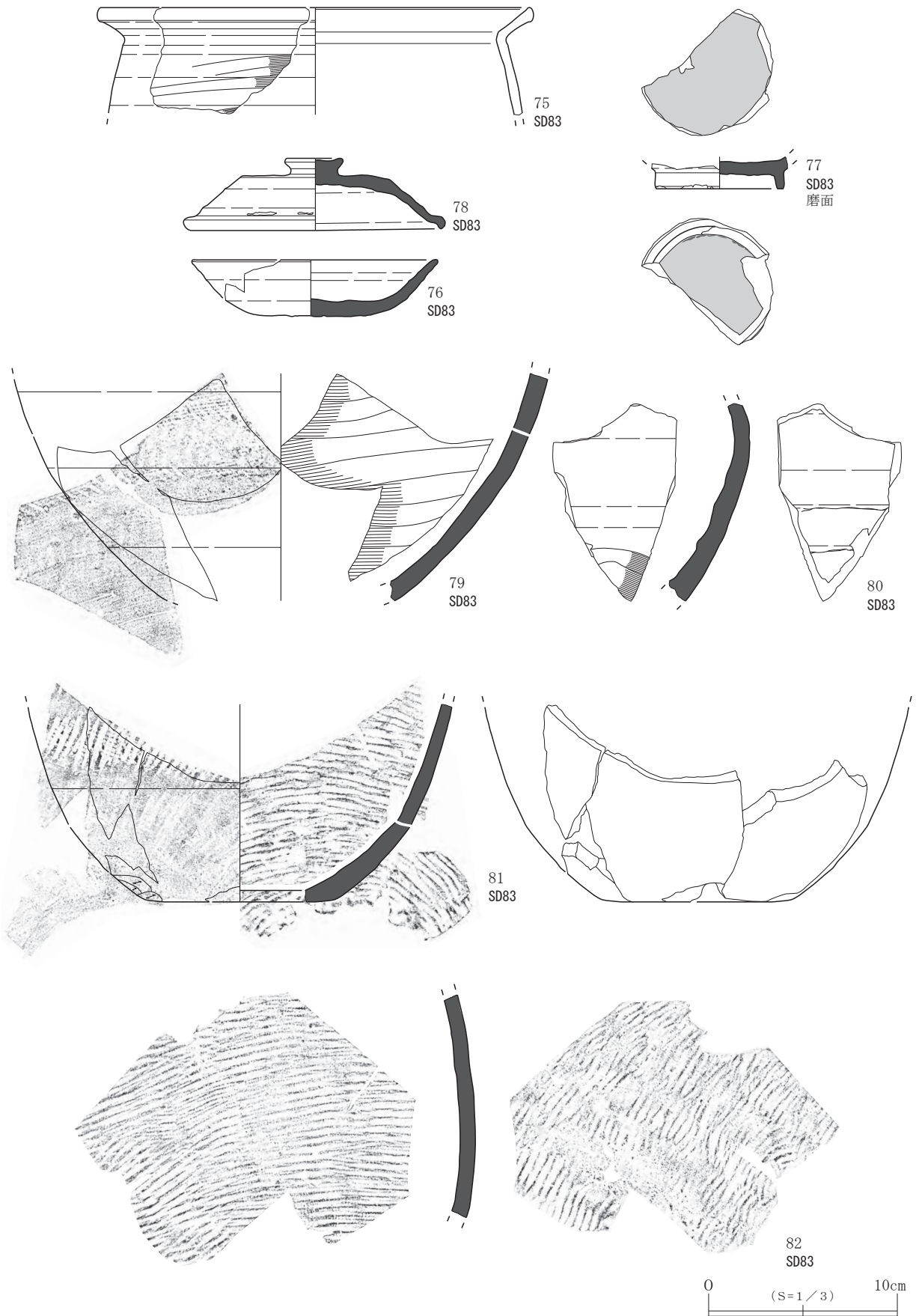
第32図 遺構内出土遺物(6)



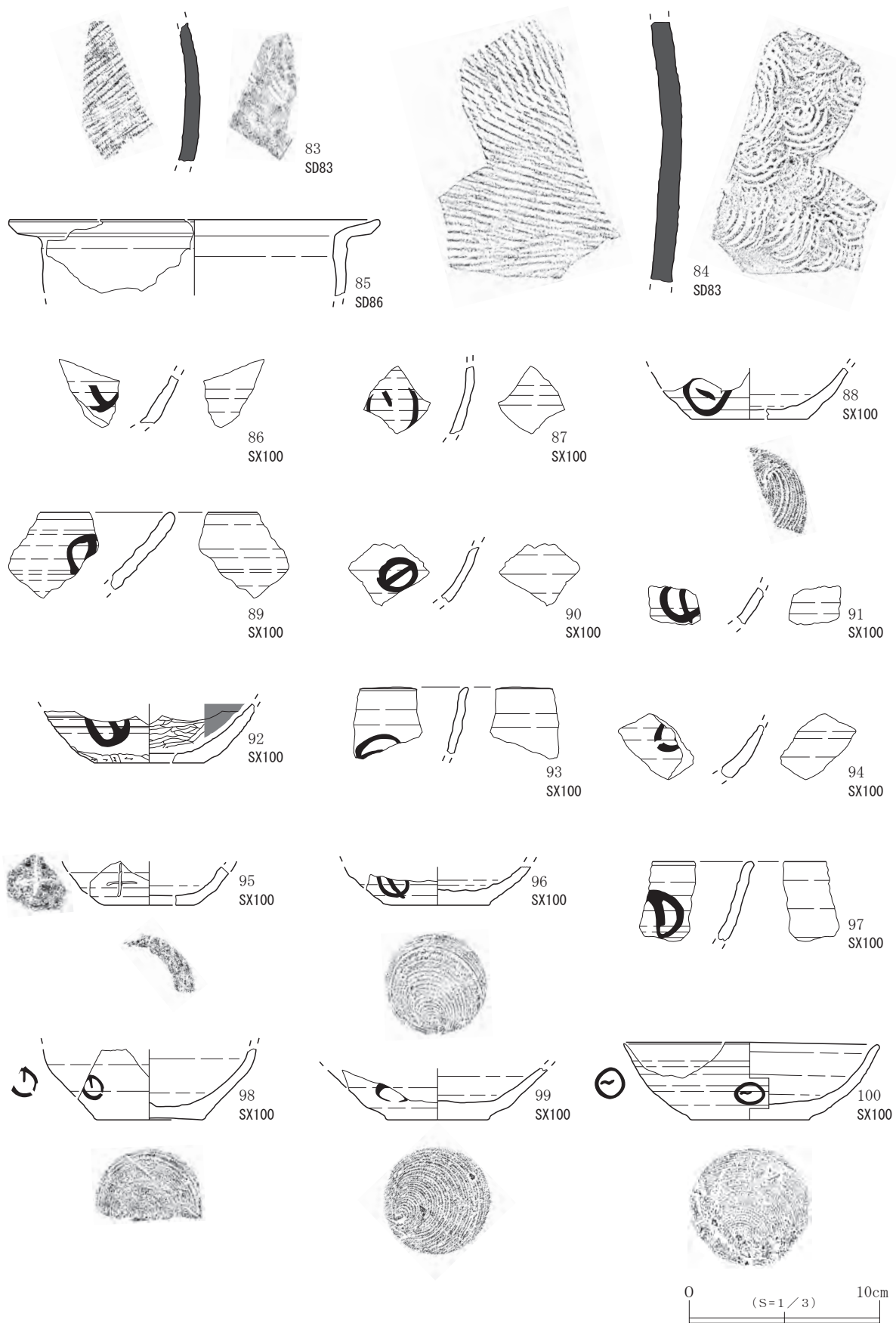
第 33 図 遺構内出土遺物 (7)



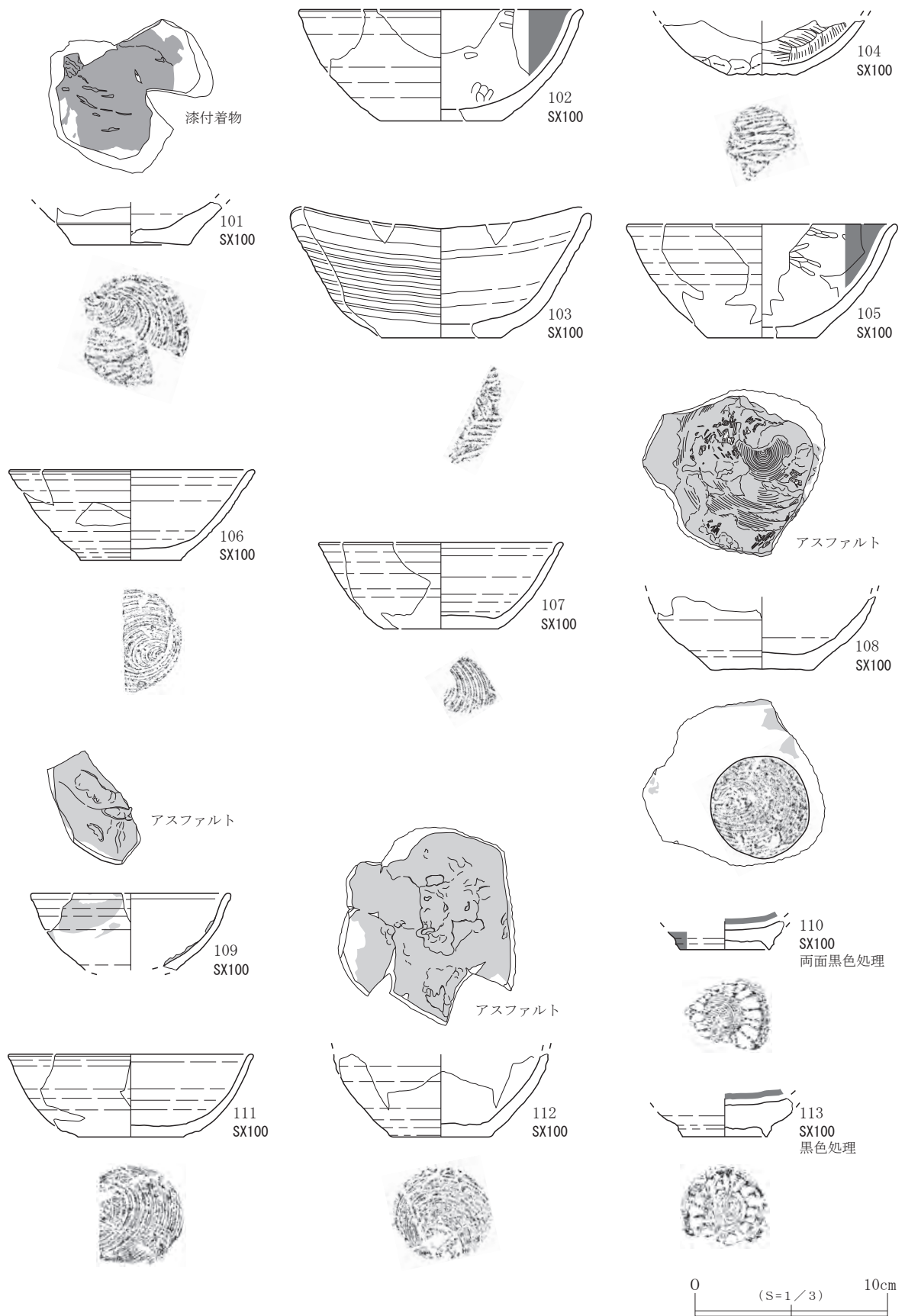
第34図 遺構内出土遺物(8)



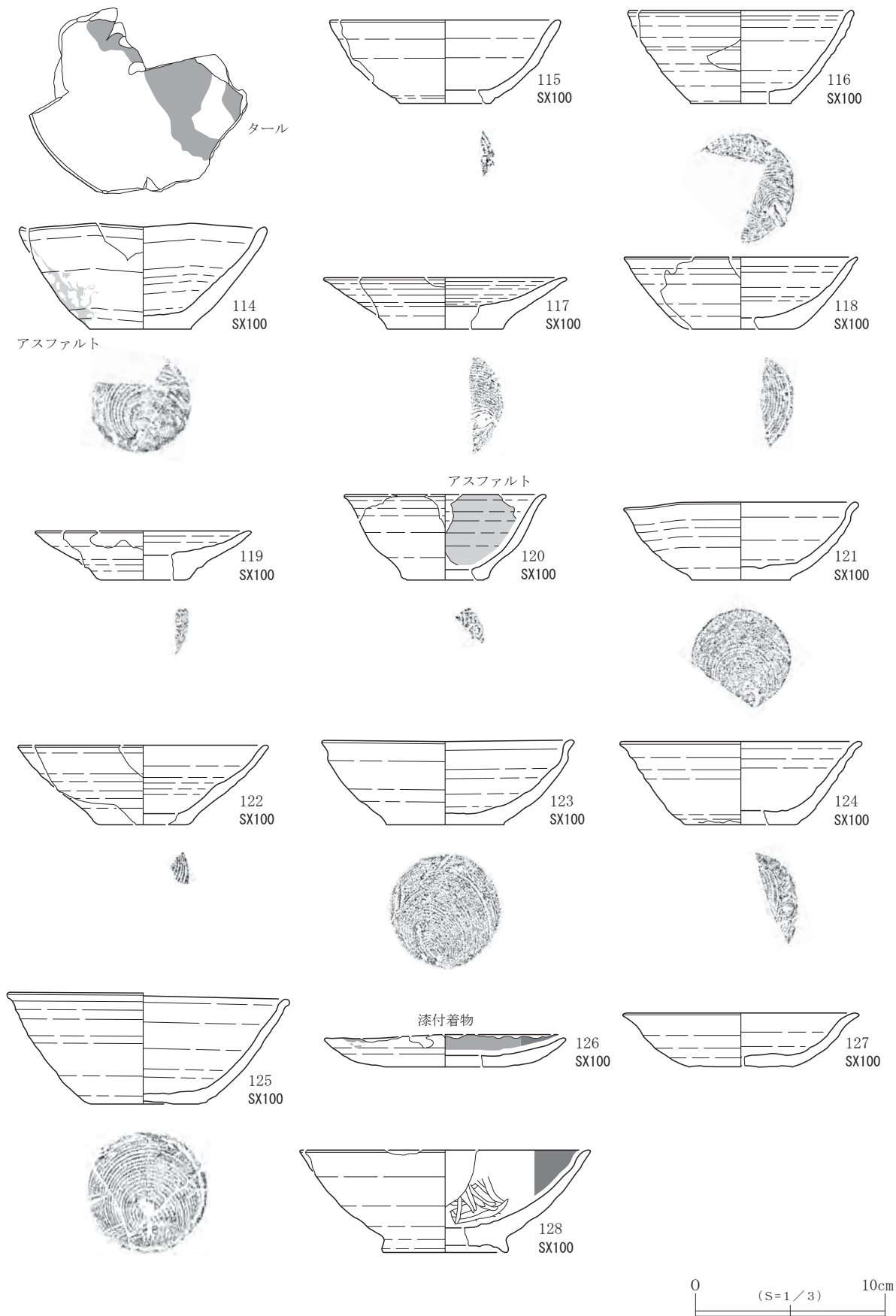
第35図 遺構内出土遺物(9)



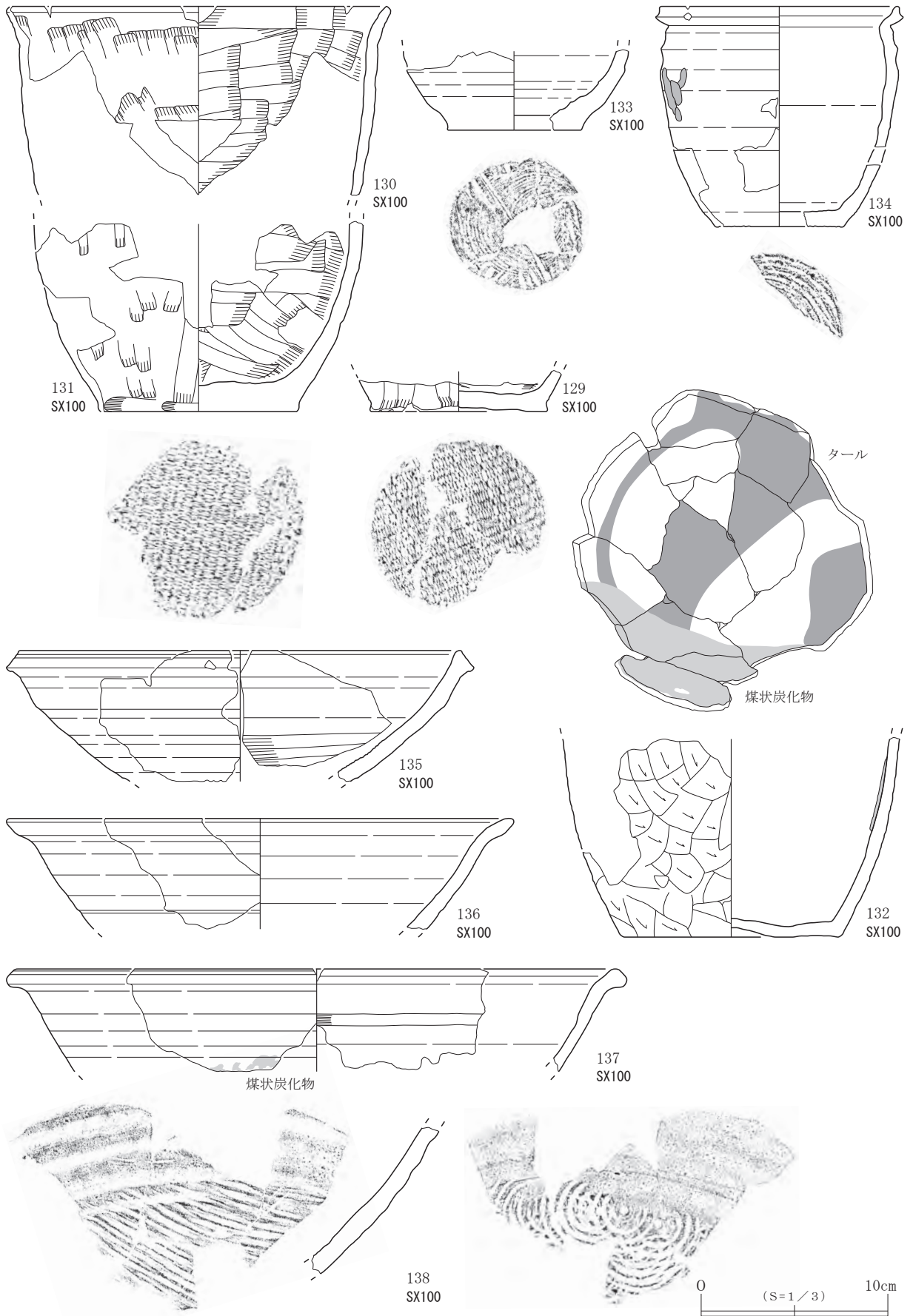
第36図 遺構内出土遺物(10)



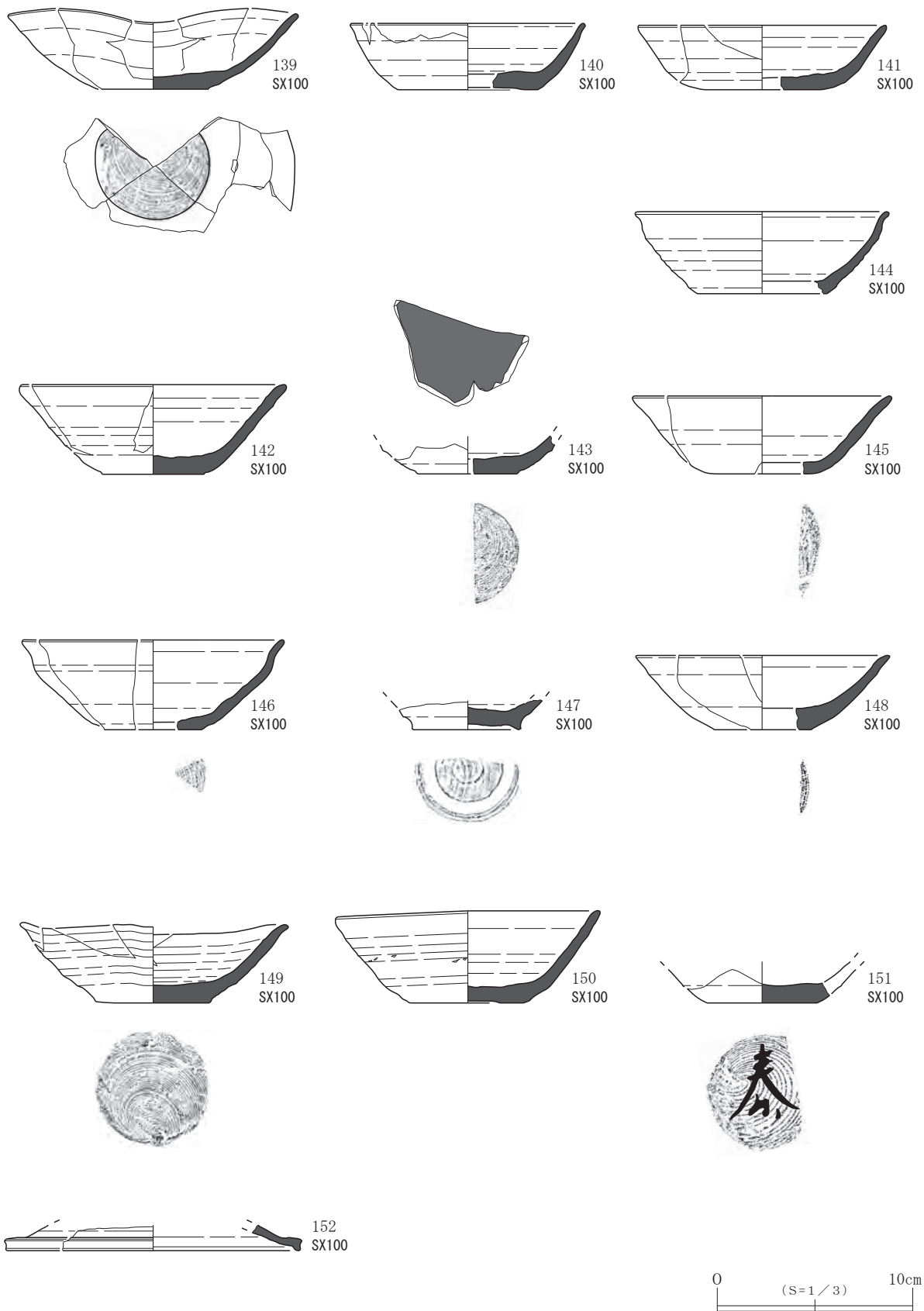
第37図 遺構内出土遺物 (11)



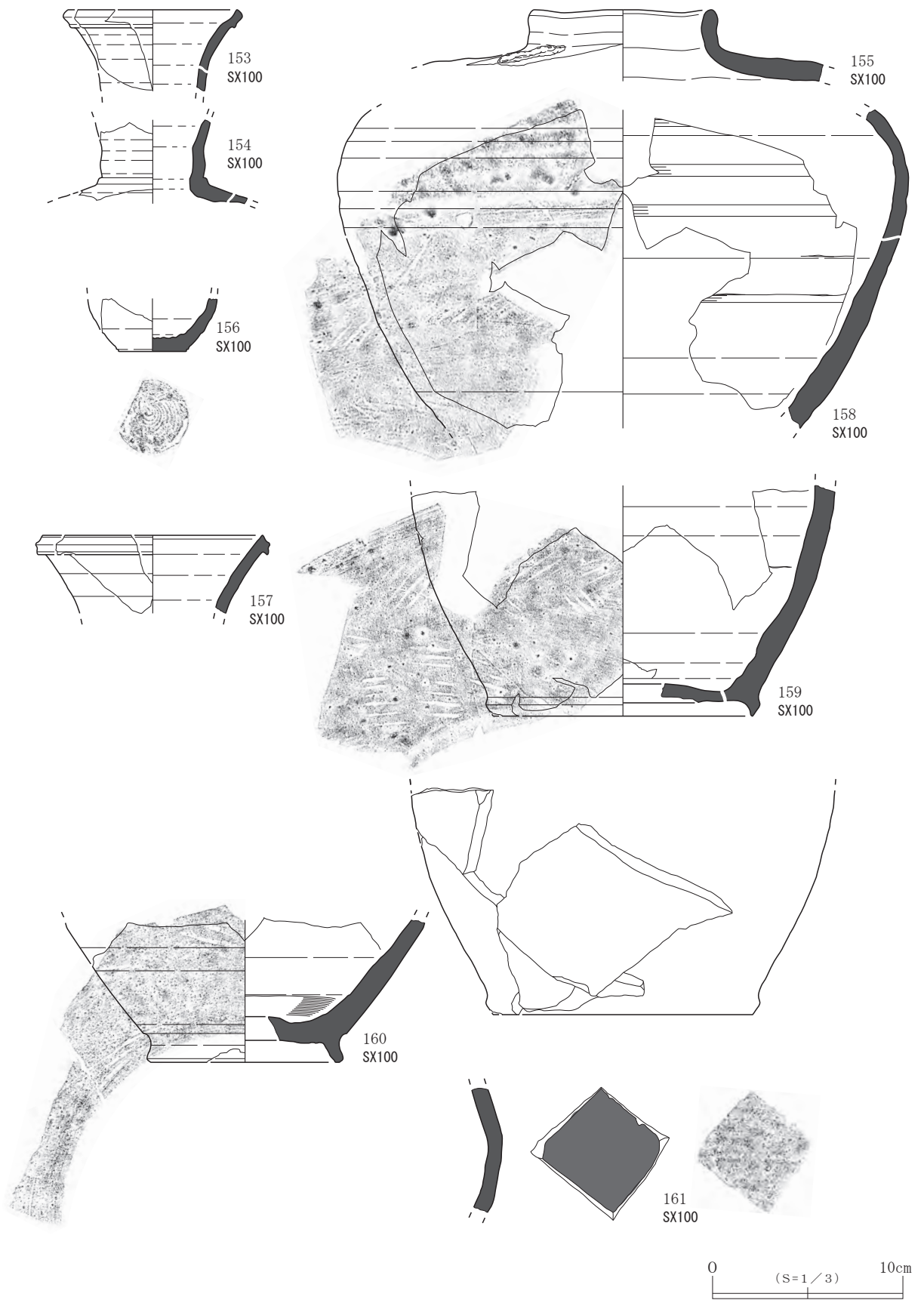
第38図 遺構内出土遺物(12)



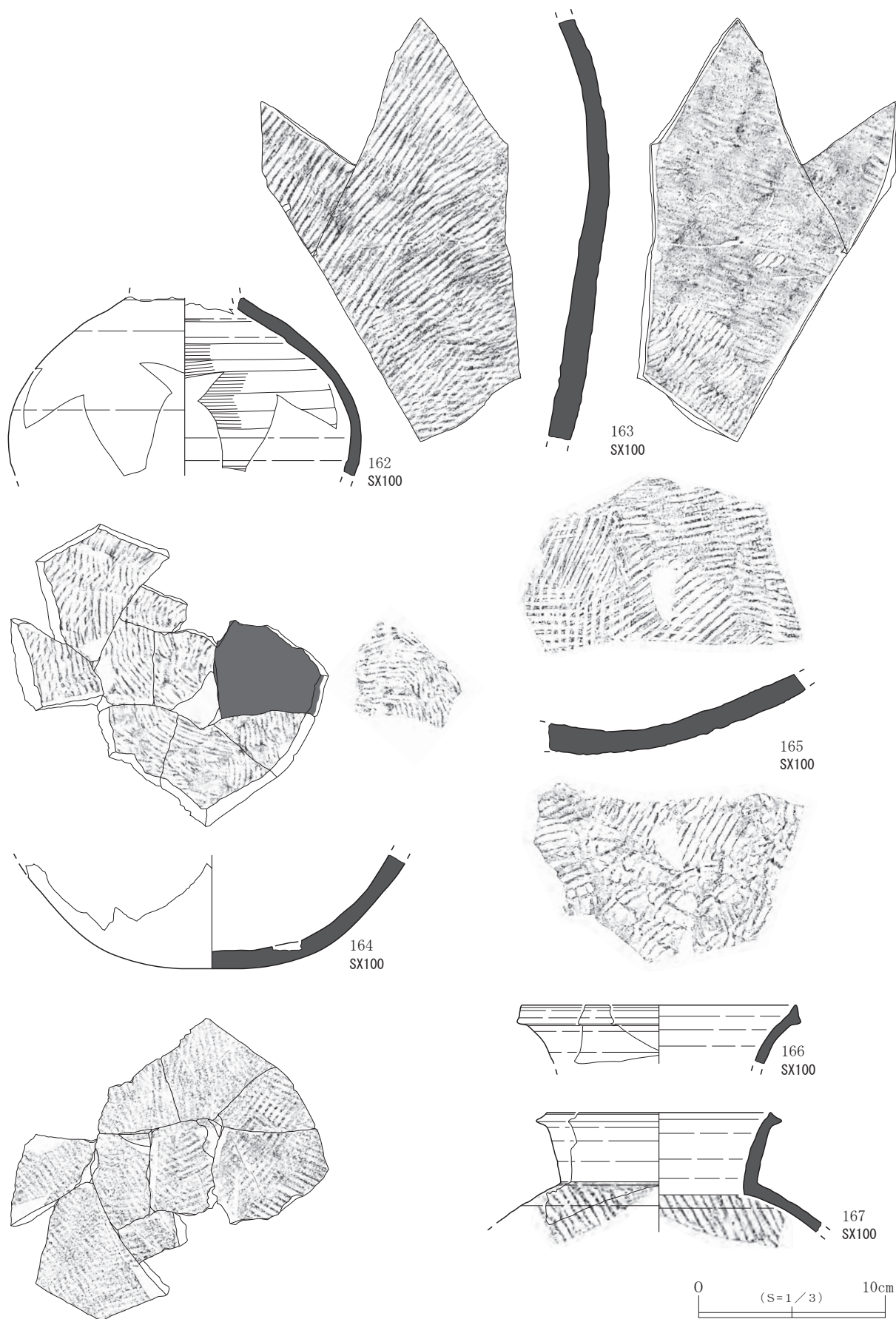
第39図 遺構内出土遺物 (13)



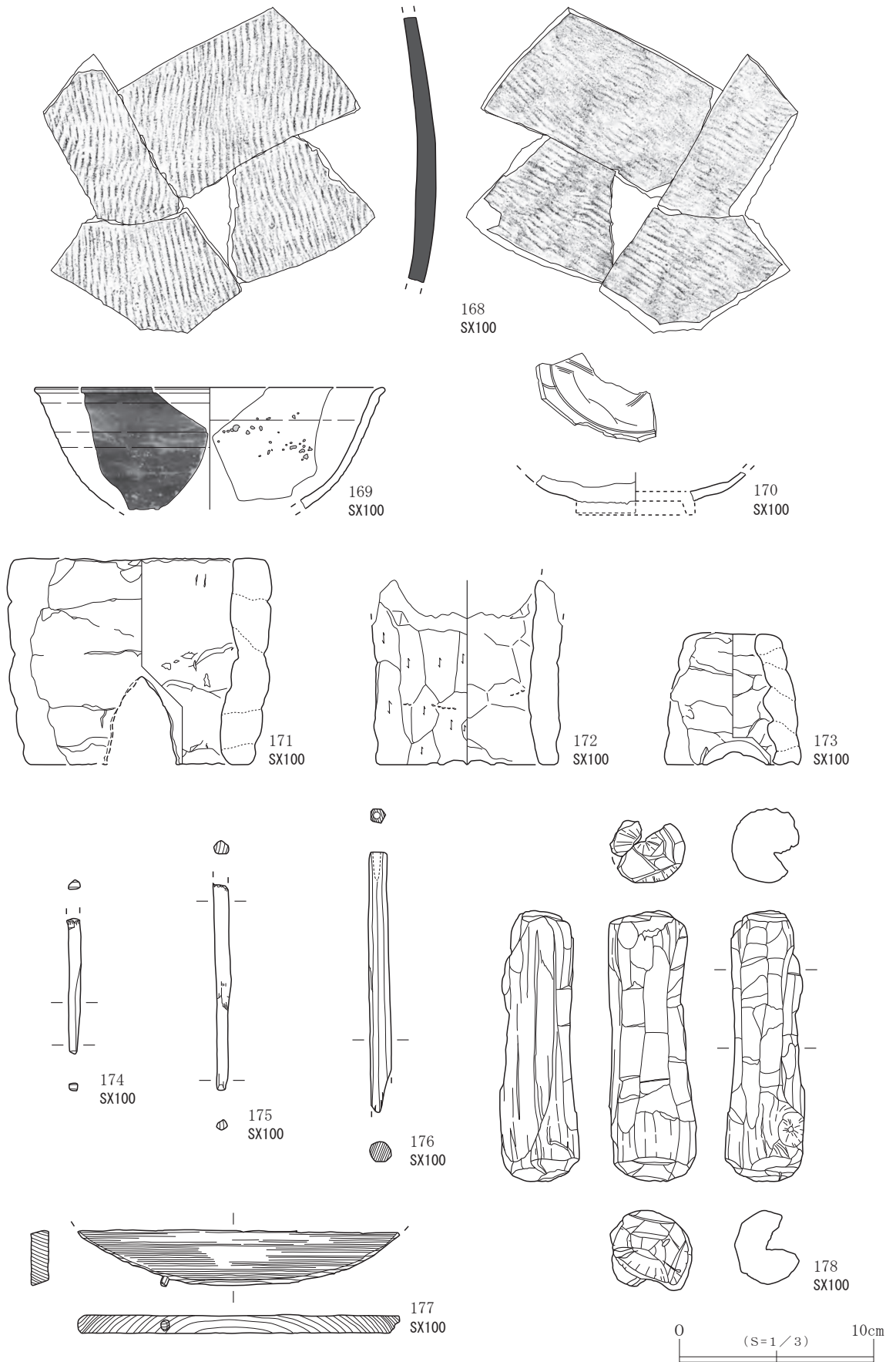
第40図 遺構内出土遺物(14)



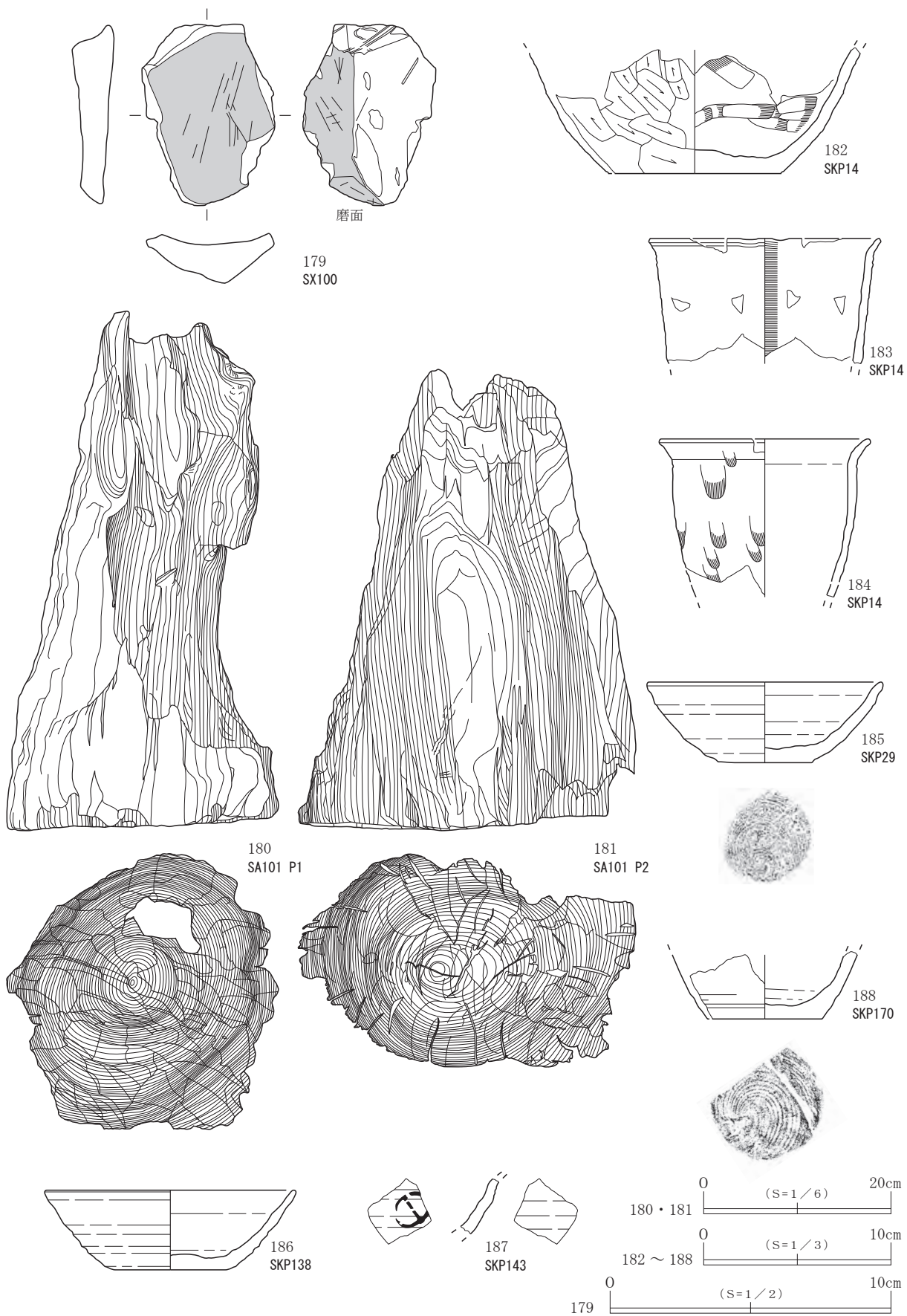
第41図 遺構内出土遺物(15)



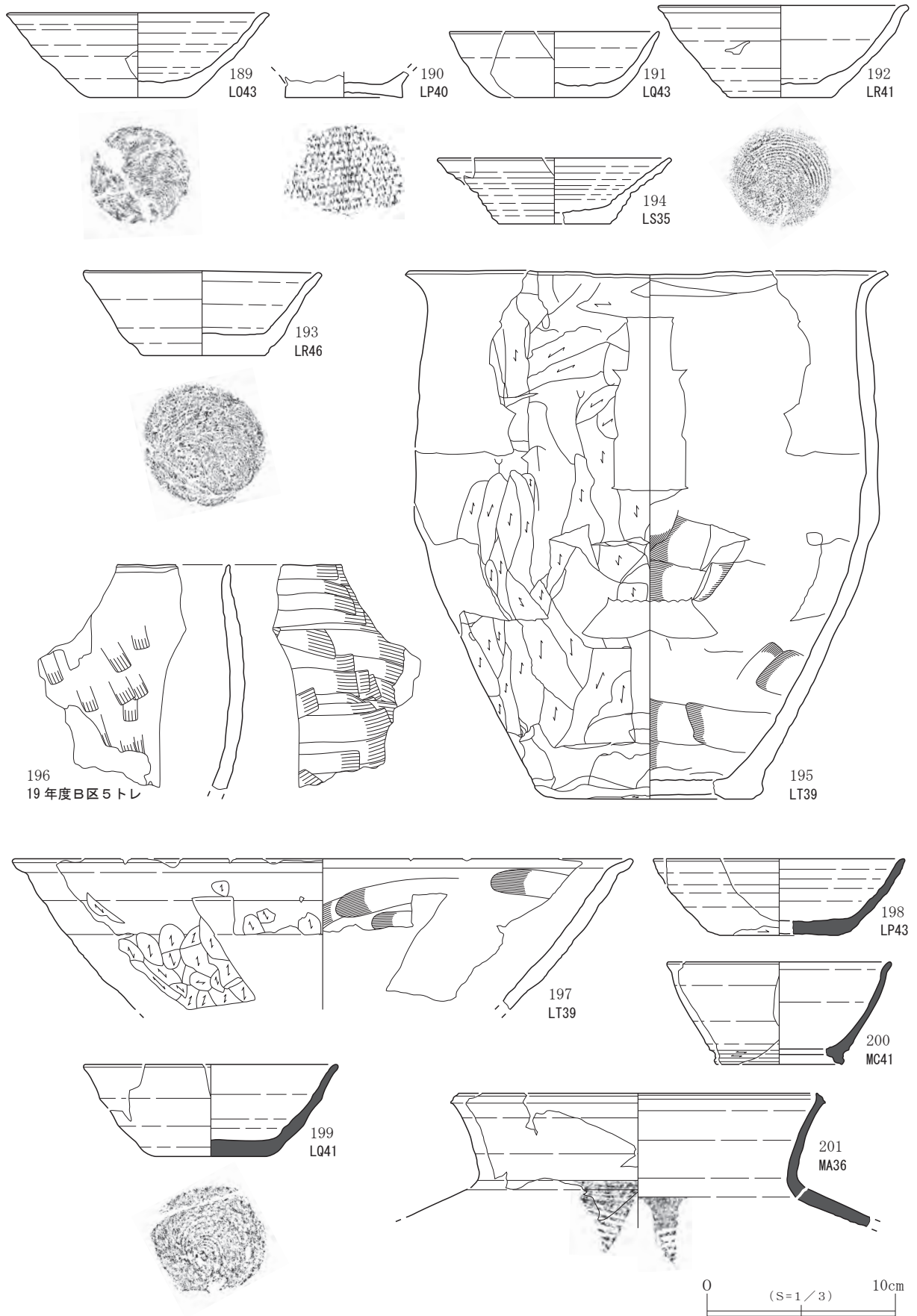
第42図 遺構内出土遺物(16)



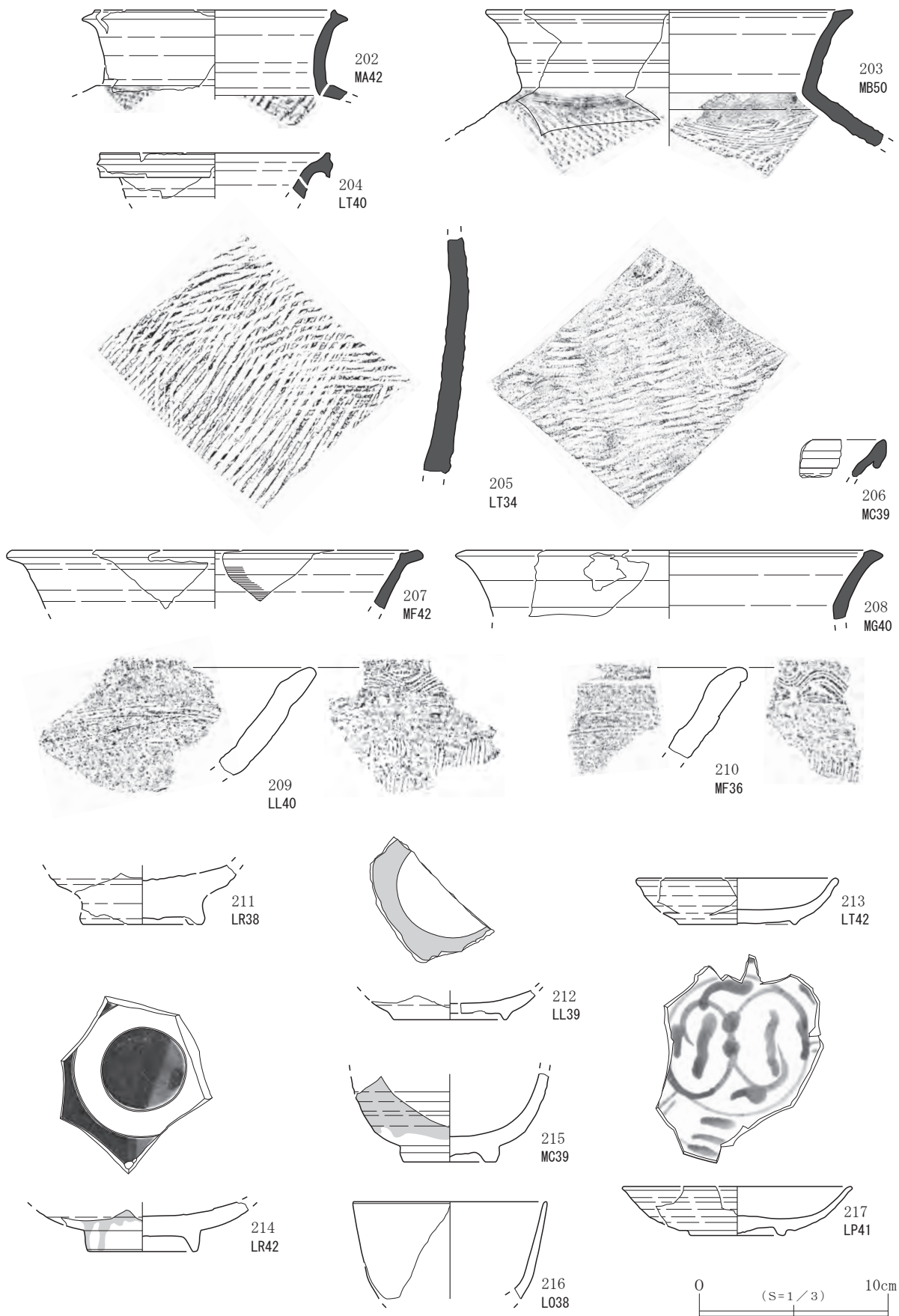
第43図 遺構内出土遺物(17)



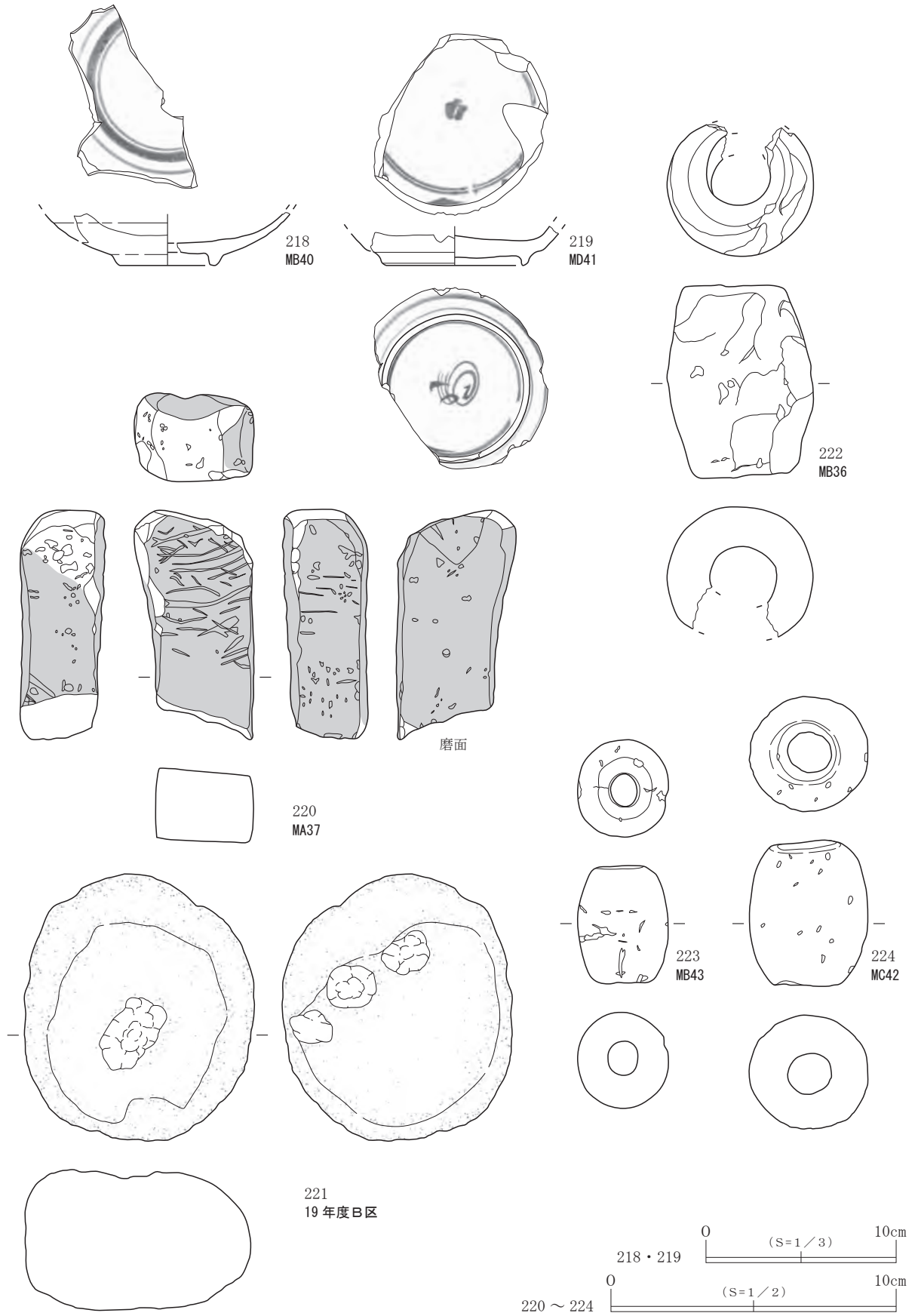
第44図 遺構内出土遺物(18)



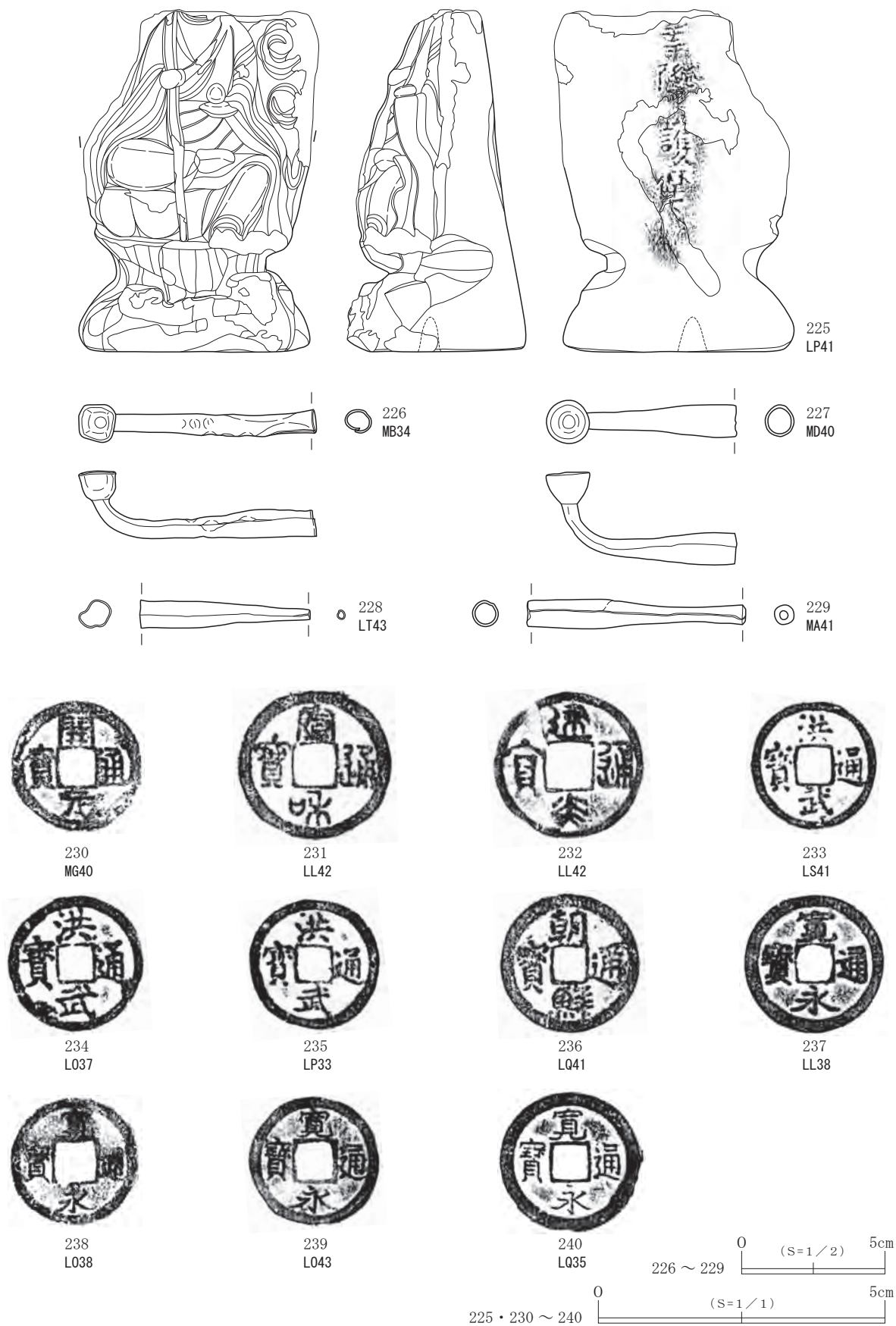
第45図 遺構外出土遺物(1)



第46図 遺構外出土遺物(2)



第47図 遺構外出土遺物(3)



第48図 遺構外出土遺物(4)

第4表 遺構内出土遺物観察表(1)

※木・石・土・金製品の大きさは最大長・最大幅・最大厚の順。底径のうち、高台付は高台径。

挿 号	遺 構 ・ グ リ ッ ド	層 位	種 類 ・ 器 種	残存状態		大きさ (cm)	法量 器高 (g)	器 面 調 整 等		色 調	備 考	
				口縁 〜 体部	底 部			外 面	内 面			
1	SK08	2	土師器 環	5/10	4/10	(12.5)	5.1	105	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄	A 5 b. SK08・MA41 グリッド出土遺物接合。	
2	SK08	2	土師器 環	1/10	4/10	(13.6)	4.8	43	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄	A 7 a.	
3	SK08	2	土師器 環	3/10	10/10	(11.6)	4.8	121	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄	A 2 a. 胎土は粗い砂粒を含有。	
4	SK08	2	土師器 甕	-	-	-	52	【外面】平行タタキ 【内面】平行当て具	浅黄橙	外面の一部と内面にタール付着。		
5	SK08	2	土師器 甕	9/10	10/10	11.9	4.8	129	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄橙	A 7 b. 破片5点接合。僅かに磨滅。	
6	SK08	2	土師器 環	3/10	6/10	(12.1)	4.7	70	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄橙	A 2 a. 破片2点接合。	
7	SK08	3	土師器 環	5/10	10/10	(12.5)	4.4	106	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄橙	A 7 b. 破片2点接合。僅かに磨滅。	
8	SK08	3	土師器 環	9/10以上	10/10	12.7	4.6	181	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄	A 2 b. 被熱剝離。灯明皿(内外面にタール)。	
9	SK08	3	土師器 環	5/10	10/10	(12.8)	4.6	129	【外面】ロクロナデ 底部：不明 【内面】ロクロナデ	浅黄	A 2 a. 破片8点接合。灯明皿(内面にタール)。	
10	SK08	3	土師器 環	3/10	10/10	(15.3)	6.6	164	【外面】ミガキ黒色処理	浅黄橙	B 7 b. 内黒土師器。外面は被熱剝離。内面は織維に捺付着(一部分離剝離)。	
11	SK08	3	漆・織維 (付着物)	-	-	-	6.0	0.8	3	-	10の付着物が分離剝離したもの。	
12	SK12	4	土師器 環	2/10	1/10	(11.4)	4.3	26	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	橙	A 2 b.	
13	SK12	4	土師器 環	1/10	1/10	(11.6)	2.5	31	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	褐灰	A 8 a. 柱状高台。皿状。	
14	SK17	4	土師器 甕	-	-	-	-	112	【外面】平行タタキ・格子タタキ 【内面】青海波文当て具	浅黄橙	胴部破片。タール付着。	
15	SK17	4	土師器 甕	1/10以下	-	(23.8)	-	95	【外面】ロクロナデ→ヘラナデ 【内面】ロクロナデ	橙	胴部は胴部に付けて筒かに内傾し、頸部で外折。口縁部は外反し、口唇部は丸みを帯びる外傾面を形成。頸部上位に1条の隆帯を有する。胎土は粗い砂粒多く含有。	
16	SK18	2	須恵器 甕	-	-	-	-	49	【外面】平行タタキ・格子タタキ 【内面】平行当て具	灰	自然釉。胎土は細かい褐色。SK18・SK54 出土遺物接合。広域分散廃棄遺物？	
17	SK22	1	浮	-	-	5.7	0.9	2	【外面】平行タタキ 【内面】平行当て具	-	表面を削り両端を尖らす。一方の先端には円錐状の孔。上下を赤・黒塗り。	
18	SK33	4	須恵器 甕	-	-	-	-	15	【外面】平行タタキ 【内面】平行当て具	灰	自然釉。胎土は灰黄色。SK33・SK P40(3層) 出土遺物接合。	
19	SK37	5	須恵器 甕	-	-	-	-	311	【外面】平行タタキ 【内面】青海波文当て具	青灰	胴部破片。自然釉。胎土は細かい褐色。SK37・SK43(2層)・SD83(11層)・SX100(L436)・LT43・MB40・MC43 グリッド出土遺物接合。広域分散廃棄遺物。	
20	SK41	2	土師器 鍋	1/10以下	-	(33.5)	-	62	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	浅黄	口縁部は僅かに外反。口端を斜めに内側につまみ出し、口唇部は外傾面を形成。	
21	SK43	2	土師器 環	1/10以下	10/10	5.8	-	63	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄橙	口縁部は僅かに外反。口端を斜めに内側につまみ出し、口唇部は外傾面を形成。	
22	SK43	2	土師器 甕	-	9/10	8.3	-	205	【外面】ケズリ 底部：砂底 【内面】エビナデ	浅黄	砂底。	
23	SK43	2	須恵器 甕	-	-	-	-	97	【外面】ロクロナデ・平行タタキ 【内面】平行当て具・指頭オサエ	青灰	胴部破片。SK43・LS38・LS42・MA44 グリッド出土遺物接合。	
24	SK43	2	須恵器 甕	-	-	-	-	88	【外面】平行タタキ 【内面】青海波文当て具・平行当て具	灰	胴部破片。自然釉。胎土は細かい褐色。SK43・MA41 グリッド出土遺物接合。	
25	SK47	-	須恵器 蓋	4/10	-	-	-	67	【外面】ロクロナデ・ケズリ 【内面】ロクロナデ	灰	つまみ部周縁がリソソ状で浅い凹面を有する。つまみ部(φ3.0cm、器高0.8cm)。SK47・MA46 グリッド出土遺物接合。	
26	SK54	-	土師器 環	3/10	3/10	(12.0)	5.0	61	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	橙	A 7 a. 外面磨滅。	
27	SK54	-	土師器 環	1/2	10/10	(12.6)	5.8	4.4	108	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄橙	A 6 b. 外面僅かに磨滅。
28	SK54	-	土師器 環	3/10	8/10	(16.4)	6.7	7.5	114	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	淡橙	A 7 a. 外面僅かに磨滅。
29	SK54	-	土師器 環	3/10	1/10以下	(12.9)	6.2	4.5	49	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明 【内面】ロクロナデ	黄橙	A 5 a. 外面僅かに磨滅。
30	SK54	-	土師器 環	1/10	1/10	(11.2)	4.5	8	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	橙	A 7 a.	
31	SK54	-	土師器 甕	1/10	1/10	(23.0)	-	29	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	淡黄	口縁部が僅かに外反。口端が方形状に肥厚し、口唇部は2面の外傾面を形成。	
32	SK54	-	須恵器 甕	-	-	-	-	9	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	灰	ミニチュアの瘻。胴部中で内彎し張り出し、頸部に付けて内傾。	
33	SK67	-	板材	-	-	48.7	8.2	1.3	110	-	端部に方形の穿孔し。	
34	SK69	2	土師器 甕	1/10以下	-	(19.7)	-	320	【外面】ロクロナデ 胴部：平行タタキ→ハケメ	橙	胴部上位が張り出し、内彎して頸部に至る。頸部は短く外折。口縁部は外傾し、口端を直立気味につまみ出し、口唇部は外傾面を形成。推定最大径 210cm。	
35	SK63	-	土師器 環	3/10	5/10	(12.4)	4.9	5.0	61	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	浅黄橙	A 2 a. 体部中位から外折する。体部外面に平行沈線6条。
36	SK71	3	土師器 環	3/10	5/10	(12.8)	6.8	4.9	73	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明	浅黄	B 7 a. 内黒土師器。体部外面に平行沈線3条。底部外面磨滅。
37	SK71	2	須恵器 甕	1/10以下	-	(17.6)	-	23	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	青灰	口縁部は外反。口端を直立気味につまみ出し、口唇部は外傾面と隆帯を形成。SK71・LT40 グリッド出土遺物接合。	
38	SK71	2	須恵器 甕	-	-	-	-	263	【外面】平行タタキ→ロクロナデ 【内面】青海波文当て具	黄灰	胴部破片。胎土は細かい褐色。SK71・SX100(L034)・L443・LS43 グリッド出土遺物接合。広域分散廃棄遺物。	
39	SK74	-	土師器 甕	-	-	-	-	116	【外面】格子タタキ 【内面】平行当て具	橙	胎土は細かい褐色。	
40	SK74	-	須恵器 環	1/10以下	1/10	(12.0)	4.0	22	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	青灰	胴部破片。	
41	SK75	4	須恵器 甕	-	-	-	-	156	【外面】格子タタキ 【内面】平行当て具	青灰	胴部破片。底部と胴部の境界は不明確で底部周縁から連続してごく緩やかな外傾で立ち上が	
42	SK75	4	須恵器 甕	-	-	-	-	187	【外面】平行タタキ・格子タタキ 【内面】指頭オサエ	灰	胴部破片。内面に磨滅。僅かに墨付着。SK75・MB40 グリッド出土遺物接合。	
43	SK80	3	須恵器 甕	-	-	-	-	142	【外面】平行タタキ・格子タタキ 【内面】青海波文当て具	暗灰	胴部破片。胎土は細かい褐色。SK80・MA42 グリッド出土遺物接合。	
44	SK82	1	須恵器 甕	-	-	-	-	76	【外面】平行タタキ 【内面】平行当て具	灰	胴部破片。	
45	SK88	2	須恵器 蓋	1/10以下	-	(13.4)	-	10	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	オリーブ	口縁部破片。口唇部に向けて短く内反する。胎土は細かい灰黄色。	

第6表 遺構内出土遺物観察表(3) ※木・石・土・金製品の大きさは最大長・最大幅・最大厚の順。底径のうち、高台付は高台径。

挿 図 番 号	遺 構 グ リ ッ ド	層 位	種 類 ・ 器 種	残 存 状 態	底 部	底 径 高 台	大 き さ (cm)	法 量 (g)	器 面 調 整 等		備 考									
									外 面	内 面										
35	S083	-	須 恵 器 甕	1/10以下	-	-	(10.0)	314	【外面】平行タタキ・格子タタキ→ケクスリ・ロクロナデ 底部：ケクスリ	灰	胴部は底部から内反して立ち上がる。外面胴部に自然軸を有する。S083・S086・SX100(LP36)・MB40グリッド出土遺物接合。広域分散廃棄遺物。									
									【外面】平行タタキ	灰	胴部破片。胎土はにぶい褐色。									
									【内面】平行当てて具	灰	胴部破片。胎土はにぶい褐色。									
									【内面】平行当てて具	灰	胴部破片。胎土はにぶい褐色。									
									【外面】平行タタキ・格子タタキ	淡黄	胴部は内彎して頸部に至る。頸部は外折、口縁部は口端を直立気味に僅かにつまみ上げ、口唇部は外傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
36	S086	III	土 師 器 瓶	-	-	-	-	36	【外面】ロクロナデ	淡黄	胴部は内彎して頸部に至る。頸部は外折、口縁部は口端を直立気味に僅かにつまみ上げ、口唇部は外傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									37	S083	III	土 師 器 瓶	1/10以下	-	-	-	36	【外面】ロクロナデ	淡黄	胴部は内彎して頸部に至る。頸部は外折、口縁部は口端を直立気味に僅かにつまみ上げ、口唇部は外傾面を形成。
																		【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。
【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。																		
38	S083	III	土 師 器 瓶	1/10以下	-	-	-	36	【外面】ロクロナデ	淡黄	胴部は内彎して頸部に至る。頸部は外折、口縁部は口端を直立気味に僅かにつまみ上げ、口唇部は外傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【外面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									
									【内面】ロクロナデ	淡黄	傾面を形成。									

第7表 遺構内出土遺物観察表(4) ※木・石・土・金製品の大きさは最大長・最大幅・最大厚の順。底径のうち、高台付は高台径。

挿図	番号	遺構・グリッド	層位	種類・器種	残存状態	口径	大きさ (cm)		法量 (g)	器面調整等	色		備考	
							底径	高台			外面	内面		
38	127	SX100/LR35	Ⅲ	土師器 環	口縁～ 底部	3/10	3/10	2.8	45	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	橙	橙	A 7 a。	
	128	SX100/LR35	Ⅲ	土師器 環	口縁～ 底部	3/10	3/10	5.4	85	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明、高台 【内面】ミガキ→黒色処理	にぶい橙	黒	B 7 a。内面黒土師器。底部磨滅。複数の刺突痕を有する。胎土は粗い砂粒多く含む。SX100(L033・L034・LP35グリッド)出土遺物接合。	
	129	SX100/L033	Ⅲ	土師器 甕	-	9/10	-	9.4	130	【外面】ハケメ 底部：網代痕 【内面】ハケメ	橙	橙	器面に変化がない。胴部は縦位のハケメ。胎土はφ5mm以下の砂粒を多く含む。SX100(L034・L035グリッド)出土遺物接合。広域分散廃棄遺物。	
	130	SX100/L034	Ⅲ	土師器 甕	1/10以下	-	-	-	73	【外面】ハケメ 【内面】ハケメ	橙	淡橙	胎土はφ5mm以下の砂粒を多く含む。SX100(L034・LP34グリッド)出土遺物接合。130と同一個体？	
	131	SX100/L034	Ⅲ	土師器 甕	-	7/10	-	(10.5)	223	【外面】ハケメ・ユピナデ 底部：網代痕 【内面】ハケメ	橙	淡橙	胎土はφ5mm以下の砂粒を多く含む。SX100(L034・LP34グリッド)出土遺物接合。130と同一個体？	
	132	SX100/LP35	Ⅲ	土師器 甕	-	9/10	-	11.7	371	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明、高台 【内面】ロクロナデ	橙	淡黄橙	胎土はφ5mm以下の砂粒を多く含む。SX100(LP35・LQ34・LQ35・LQ37・LQ38グリッド)出土遺物接合。広域分散廃棄遺物。	
	133	SX100/LP36	Ⅲ	土師器 甕	1/10以下	8/10	-	7.2	140	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	褐灰	にぶい赤褐	比較的小型の甕。底部中央を横断するハケメ調整。SX100(LP36・LP37グリッド)出土遺物接合。	
	134	SX100/LQ36	Ⅲ	土師器 甕	5/10	3/10	(6.8)	11.8	231	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	比較的小型の甕。底部中央を横断するハケメ調整。SX100(LP36・LP37グリッド)出土遺物接合。	
	135	SX100/LQ34	Ⅲ	土師器 鍋	1/10以下	-	(23.5)	-	100	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	橙	橙	口縁部は外反、口端を直立気味に僅かにつまみ出し、口唇部は外側面を形成。胎土は粗い砂粒多く含む。	
	136	SX100/LQ34	Ⅲ	土師器 鍋	1/10以下	-	(27.0)	-	46	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	淡赤橙	淡黄橙	口縁部は外反、口端を直立気味に僅かにつまみ出し、口唇部は外側面を形成。胎土は粗い砂粒多く含む。	
	137	SX100/LP34	Ⅲ	土師器 鍋	1/10以下	-	(32.2)	-	88	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	淡黄橙	淡黄橙	口縁部は外反、口端を直立気味に僅かにつまみ出し、口唇部は外側面を形成。胎土は粗い砂粒多く含む。	
	138	SX100/LP36	Ⅲ	土師器 鍋	-	-	-	-	193	【外面】平行タタキ→ロクロナデ 【内面】青濁波当て→ロクロナデ	橙	橙	胎土は粗い砂粒を多く含む。SX100(LP35・LQ34・LQ36グリッド)出土遺物接合。	
	39	139	SX100/LQ35	Ⅲ	須恵器 環	1/10以下	7/10	(14.8)	5.7	4.1	59	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	青灰	青灰
140		SX100/LQ37	Ⅲ	須恵器 環	3/10	3/10	(11.9)	(7.3)	3.4	46	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	灰	灰	7 a。
141		SX100/LQ38	Ⅲ	須恵器 環	1/10以下	4/10	(12.5)	(6.9)	3.3	32	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	4 a。
142		SX100/LP34	Ⅲ	須恵器 環	3/10	10/10	(13.4)	5.2	4.6	103	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	4 b。SX100(LP34・LP35グリッド)出土遺物接合。
143		SX100/LP34	Ⅲ	須恵器 環	-	4/10	-	5.0	-	29	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰	灰	胎土は粗い砂粒を多く含む。SX100(LP35・LQ34・LQ36グリッド)出土遺物接合。
144		SX100/LP35	Ⅲ	須恵器 環	3/10	1/10以下	(13.0)	(6.4)	4.2	48	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	胎土は粗い砂粒を多く含む。SX100(LP35・LQ34・LQ36グリッド)出土遺物接合。
145		SX100/LP36	Ⅲ	須恵器 環	2/10	1/10以下	(13.0)	(6.0)	4.0	28	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	7 a。底部僅かに磨滅。
146		SX100/LP36	Ⅲ	須恵器 環	2/10	1/10以下	(13.2)	(5.0)	4.6	29	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰	灰	6 b。
147		SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 環	-	5/10	-	(5.2)	-	36	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 高台 【内面】ロクロナデ	灰	灰	
148		SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 環	2/10	1/10以下	(12.8)	(5.0)	3.8	26	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	7 a。器形が歪む。胎土はにぶい赤褐色、φ7mm以下の砂粒を含有。SX100(LQ34・LQ35・LQ37グリッド)出土遺物接合。
149		SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 環	7/10	10/10	(13.5)	5.8	4.1	157	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	暗青灰	暗青灰	2 a。SX100(LQ35・LQ36グリッド)出土遺物接合。
150		SX100/LQ35	Ⅲ	須恵器 環	6/10	10/10	(13.3)	5.9	4.7	142	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	2 a。SX100(LQ35・LQ36グリッド)出土遺物接合。
151		SX100/LR34	Ⅲ	須恵器 環	-	8/10	-	5.6	-	50	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白	底部に黒書「泰」
152	SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 蓋	1/10以下	-	(15.0)	-	-	11	【外面】ロクロナデ 底部：へら切り 【内面】ロクロナデ	青黒	青黒	口縁部破片。口唇部に向けて短く外反する。	
40	153	SX100/LP38	Ⅲ	須恵器 長頸蓋	1/10以下	-	(8.8)	-	13	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	灰	黒	口縁部は僅かに外反、口唇部はつまみ出しによる隆帯と外側面を形成。154と同一個体？	
	154	SX100/LP38	Ⅲ	須恵器 長頸蓋	1/10以下	-	-	-	101	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ 頸部：指頭オサエ	青灰	青灰	頸部は外折、口縁部に向けて直立気味に立ち上がる。外面の頸部と肩部の境界付近にリング状の隆帯を形成。153と同一個体？	
	155	SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 短頸蓋	1/10以下	-	(9.2)	-	80	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	灰オリーブ	灰	頸部は口縁部に向けて直立気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反、口唇部まで器厚にあまり変化無く丸みを有する。外面に自然軸。胎土はにぶい褐色。158と同一個体？	
	156	SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 蓋	-	8/10	-	3.6	23	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰	灰	ミニチュアの甕。推定最大径6.6cm。	
	157	SX100/LQ34	Ⅲ	須恵器 蓋	1/10以下	-	(14.6)	-	18	【外面】平行タタキ→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	黒	灰	胎土は粗い砂粒を多く含む。SX100(LQ36・LP34・LP36グリッド)出土遺物接合。155と同一個体？	
	158	SX100/LQ36	Ⅲ	須恵器 蓋	-	-	-	-	303	【外面】平行タタキ→ロクロナデ→ハケメ 【内面】粘土細眼→ロクロナデ→ハケメ	灰～ 灰オリーブ	灰	胎土は粗い砂粒を多く含む。SX100(LQ36・LP34・LP36グリッド)出土遺物接合。155と同一個体？	
41	159	SX100/LQ37	Ⅲ	須恵器 蓋	-	1/10	-	(13.5)	396	【外面】平行タタキ→ロクロナデ 底部：高台：ロクロナデ 【内面】粘土細眼→ロクロナデ 底部：高台：ロクロナデ	灰	灰	胎土は粗い砂粒を多く含む。SX100(LQ37・LP35・LQ39グリッド)出土遺物接合。広域分散廃棄遺物。	
	160	SX100/LP35	Ⅲ	須恵器 蓋	-	3/10	-	(9.8)	321	【外面】平行タタキ→ロクロナデ 底部：高台：指頭オサエ・ ロクロナデ 【内面】ロクロナデ 底部：指頭オサエ・ ハラナデ	灰	灰	底部外面は指頭オサエと高台を貼りつける際のロクロナデによって調整、切り離しは不明。内面は指頭オサエとハラナデ調整で凹凸がある。胴部外面は僅かに浅く平行タタキ痕が残るが、内面には浅く具痕が残らない。SX100(LP35・LP36グリッド)出土遺物接合。	

第8表 遺構内出土遺物観察表(5) ※木・石・土・金製品の大きさは最大長・最大幅・最大厚の順。底径のうち、高台付は高台径。

挿入 番号	遺構・ グリッド	層位	種類・器種	残存状態	大きさ (cm)			法量 (g)	器面調整等		色調		備考
					口径	底径 高台	器高		外面	内面	内面		
41	161	SX100 LP36	須恵器 壺	-	-	-	40	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	灰	黒	内面全面と破面一部に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
42	162	SX100 LP36	須恵器 壺	-	-	-	234	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	灰	灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	163	SX100 L033	須恵器 甕	-	-	-	370	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	灰	灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	164	SX100 L035	須恵器 甕	-	-	-	334	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	青灰	灰ナリーブ	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	165	SX100 L037	須恵器 甕	-	-	-	220	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	青灰	青灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	166	SX100 LP34	須恵器 甕	1/10以下	-	-	12	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	灰白	ネリーブ灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	167	SX100 LP35	須恵器 甕	1/10以下	-	-	80	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	青灰	青灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	168	SX100 LR35	須恵器 甕	-	-	-	350	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	青灰	灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	169	SX100 LP36	須恵器 甕	1/10以下	-	-	49	【外面】ロクロナデ	【内面】ロクロナデ	暗緑灰	暗緑灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	170	SX100 LP32	白磁 碗	-	2/10	-	18	【外面】底面	【内面】底面	灰白	灰白	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	171	SX100 LP35	土製支脚	2/10	-	-	219	【外面】底面	【内面】底面	赤褐色	赤褐色	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	172	SX100 L038	土製支脚	3/10	-	-	158	【外面】底面	【内面】底面	赤褐色	赤褐色	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
	173	SX100 L038	土製支脚	2/10	-	-	52	【外面】底面	【内面】底面	赤褐色	赤褐色	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
174	SX100 LN41	箸状木製品	-	-	-	1	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
175	SX100 LN41	箸状木製品	-	-	-	7	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
176	SX100 L032	甕	-	-	-	11	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
177	SX100 LP36	曲物	-	-	-	12	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
178	SX100 LP37	木鏝 (こも租)	-	-	-	102	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
179	SX100 LP34	砥石	-	-	-	43	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
180	SA101 P1	柱材	-	-	-	kg	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
181	SA101 P2	柱材	-	-	-	kg	【外面】底面	【内面】底面	-	-	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
182	SRP14	土師器 甕	1/10以下	-	-	282	【外面】底面	【内面】底面	褐灰	褐灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
183	SRP14	土師器 甕	1/10以下	-	-	52	【外面】底面	【内面】底面	褐灰	褐灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
184	SRP14	土師器 甕	1/10以下	-	-	92	【外面】底面	【内面】底面	褐灰	褐灰	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
185	SKP29	土師器 環	5/10	10/10	4.9	4.3	88	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
186	SKP138	土師器 環	5/10	5/10	5.8	4.2	91	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
187	SRP143	土師器 環	-	-	-	7	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		
188	SRP170	土師器 環	-	7/10	-	54	【外面】底面	【内面】底面	褐	褐	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？		

第9表 遺構外出土遺物観察表(1) ※木・石・土・金製品の大きさは最大長・最大幅・最大厚の順。底径のうち、高台付は高台径。

挿入 番号	遺構・ グリッド	層位	種類・器種	残存状態	大きさ (cm)			法量 (g)	器面調整等		色調		備考	
					口径	底径 高台	器高		外面	内面	内面			
189	L043	II	土師器 環	3/10	10/10	13.6	5.2	4.5	109	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？
190	LP40	II	土師器 環	-	7/10	-	6.1	-	27	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？
191	LQ43	II	土師器 環	1/10	5/10	10.9	5.6	3.5	36	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？
192	LR41	II	土師器 環	7/10	10/10	13.1	5.5	4.9	155	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？
193	LR46	II	土師器 環	5/10	10/10	12.7	6.4	4.5	149	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？
194	LS35	II	土師器 環	3/10	4/10	12.2	(5.9)	3.5	33	【外面】底面	【内面】底面	にぶい	にぶい	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？
195	LT39	II	土師器 甕	3/10	1/10	(25.2)	28.1	472	【外面】底面	【内面】底面	褐灰	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	
196	19年度B区 5トレ	II	土師器 甕	1/10以下	-	-	-	77	【外面】底面	【内面】底面	浅黄	浅黄	胎土は内側に墨付着。破砕後に意図的に塗布し、散布。胎土にはぶい黄褐色。広域分散産産物？	

第10表 遺構外出土遺物観察表(2) ※木・石・土・金製品の大きさは最大長・最大幅・最大厚の順。底径のうち、高台付は高台径。

挿 図 番 号	遺 構 ・ グリ ット	層 位	種 類 ・ 器 種	残 存 状 態	底 部	大 き さ (cm)		法 量 (g)	器 面 調 整 等		色		備 考
						口径	底径 高台		器 高	器 重	外 面	内 面	
197	LT39	II	土師器 鍋	口縁～ 底部	-	(32.8)	-	113	【外面】ズリ 頸部、指頭オサエ 【内面】ユピナデ	橙	橙	口縁部は外反、口唇部尖る。頸部外面は指頭オサエにより凹凸、他に同一個体9片。胎土に粗い砂粒含有。 1c.底部ヘラ切り時、体部下端一部削る。胎土は砂礫を含有。 7a.全面僅かに摩滅。 7b.焼土はにぶい褐色。MC41・MD38 グリッド出土遺物接合。	
198	LP43	II	須恵器 環	1/10以下	4/10	(13.2)	4.0	45	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	灰	灰		
199	LQ41	II	須恵器 環	1/10	9/10	(13.2)	5.8	81	【外面】ロクロナデ 底面：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	灰白	灰白		
200	MC41	II	須恵器 環	2/10	1/10以下	(11.8)	5.4	27	【外面】ロクロナデ 下隅ケズリ 底部：切り難し不明 高台	青灰	青灰		
201	MA36	II	須恵器 甕	1/10以下	-	(19.0)	-	63	【外面】口縁～頸部：ロクロナデ 肩部：平行タタキ 【内面】口縁～頸部：ロクロナデ 肩部：平行タタキ	灰	灰	頸部は外反、口縁部に向けて外傾する。口縁部は外反、口端を斜め内傾につまみ出し、口唇部は外傾面を形成。MA36・MC39・MD40・MF42、グリッド出土遺物接合。	
202	MA42	II	須恵器 甕	1/10以下	-	(12.6)	-	66	【外面】口縁～頸部：ロクロナデ 肩部：平行タタキ 【内面】口縁～頸部：ロクロナデ 肩部：平行タタキ	青灰	青灰	頸部は外反、口縁部に向けて僅かに外反して立ち上がる。口縁部は外反、口端を直立気味に僅かにつまみ上げ、口唇部に向けて外傾する。口縁部は僅かに外反、口唇部は内傾面を形成。	
203	MB50	II	須恵器 甕	3/10	-	(9.6)	-	75	【外面】口縁～頸部：ロクロナデ 肩部：ハケタメ→青濁文当て具 【内面】口縁～頸部：ロクロナデ 肩部：ハケタメ→青濁文当て具	青灰	青灰	口縁部は外反、口唇部に向けて外傾する。口縁部は僅かに外反、口唇部は内傾面を形成。胎土はにぶい褐色。MB50・MD50、グリッド出土遺物接合。	
204	LT40	II	須恵器 甕	1/10以下	-	(12.0)	-	16	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	青灰	青灰	口縁部は外反、つまみ出しにより、口唇部中央に隆帯を形成。LT40・MD38、グリッド出土遺物接合。	
205	LT34	II	須恵器 甕	-	-	-	-	219	【外面】平行タタキ・格子タタキ 【内面】平行当て具→指頭オサエ	灰	灰	胴部破片。	
206	MC39	II	須恵器 甕	1/10以下	-	-	-	5	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	灰	灰	折り返し口縁を有する。口唇部中央に1本の低い隆帯を有する外傾面を形成。胎土はにぶい褐色。	
207	MF42	II	須恵器 甕	1/10以下	-	(21.5)	-	14	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	灰	灰	口縁部は外反、口唇部は丸みを有する外傾面を形成。	
208	MG40	II	須恵器 甕	1/10以下	-	(21.4)	-	39	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	黒	黒	口縁部は外反、口唇部は僅かに凹凸のある外傾面を形成。	
209	LL40	II	珠洲陶器 鉢	1/10以下	-	-	-	79	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→脚し目	青灰	青灰	口縁部内傾面取りで欄目波状文帯。V類(1400年代)	
210	MF36	II	珠洲陶器 鉢	1/10以下	-	-	-	42	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→脚し目	青灰	青灰	口縁部内傾面取りで欄目波状文帯。V類(1400年代)	
211	LR38	II	青磁 碗	-	-	(6.3)	-	144	【外面】高台量付軸刺き 高台見込み、露胎 【内面】見込み：無文	オリーブ灰	オリーブ灰	雑泉窯系？ 15世紀	
212	LL39	II	陶器	-	5/10	(5.9)	-	32	【外面】灰釉 高台見込み：輪トチン 【内面】灰釉 見込み：蛇の目軸刺き	-	-	瀬戸美濃産。1500～1600年？	
213	LT42	II	陶器 丸皿	1/10	10/10	(10.4)	6.2	66	【外面】灰釉 高台見込み：輪トチン 【内面】灰釉	-	-	瀬戸美濃産。1500～1600年。確認調査A-No.14 061227と接合。五寸皿。	
214	LR42	II	陶器 皿	-	10/10	-	5.6	115	【外面】透明釉 高台見込み：ヘラ切り、高台～体部下位：露胎 【内面】灰釉と輪線軸刺き、見込み：蛇の目軸刺き	-	-	肥前(内野山)産。17世紀末～18世紀前半。	
215	MC39	II	陶器 (天目茶碗)	-	8/10	-	4.8	88	【外面】灰釉 高台見込み、露胎 【内面】灰釉	-	-	肥前産。1580～1640年。	
216	LO38	II	磁器 袋付碗	1/10以下	-	(10.0)	-	22	【外面】草花文	-	-	肥前産。1610～1650年。	
217	LP41	II	磁器 袋付丸皿	3/10	8/10	(12.2)	5.0	79	【外面】高台量付軸刺き 【内面】左右対称の草文？ 【内面】五弁花文？ 二重圓線	-	-	肥前(波佐見)産。1650～1680年。LP41・LT41・LT42・MB42、グリッド出土遺物接合。他に同一個体3片。五寸皿。	
218	MB40	II	磁器	-	4/10	-	5.0	50	【外面】高台量付軸刺き 【内面】三重圓線	-	-	肥前産。1610～1650年。	
219	MD41	II	磁器	-	10/10	-	7.4	115	【外面】高台見込み、高脚銘 高台側面～体部下位：二重圓線 【内面】五弁花文？ 二重圓線	-	-	肥前(波佐見)産。17世紀～18世紀。MD41・MD42、グリッド出土遺物接合。	
220	MA37	II	磁石	-	-	8.1	4.2	2.7	129	-	-	-	
221	19年度B区	II	凹石	-	-	9.3	8.0	5.5	475	-	-	-	
222	ME36	II	土師	-	-	6.7	5.1	4.6	100	-	-	-	
223	MB43	II	土師	-	-	4.2	3.2	3.4	45	橙	橙	MB36・LS49(19年度A区出土)グリッド出土遺物接合。	
224	MC42	II	土師	-	-	5.1	4.1	4.0	68	赤褐色	赤褐色		
225	LP41	II	土師 仏像	-	-	6	4.2	3.1	47	浅黄橙	浅黄橙		
226	ME34	II	煙管(雁首)	-	-	8.3	2.4	1.3	7	-	-	青面に「口」逆原。銘。底部に円錐状に穿孔。型形成。延命地藏菩薩？	
227	MD40	II	煙管(雁首)	-	-	6.6	3.2	1.5	9	-	-	古泉分類V期(1750前後)	
228	LT43	II	煙管(破口)	-	-	5.9	1.0	-	3	-	-	古泉分類V期(1750前後)	
229	MA41	II	煙管(破口)	-	-	7.6	1.1	-	10	-	-	古泉分類V期(1750前後)	
230	MG40	II	圓元通宝	-	-	2.25	0.1	2.0	-	-	-	初録年 621年(唐)	
231	LL42	II	宣和通宝	-	-	2.68	0.1	4.1	-	-	-	初録年 1119年(北宋)	
232	LL42	II	宣和通宝	-	-	2.61	0.1	2.4	-	-	-	初録年 1127年(南宋)	
233	LS41	II	洪武通宝	-	-	2.2	0.1	2.3	-	-	-	初録年 1368年(明)	
234	LO37	II	洪武通宝	-	-	2.36	0.1	3.9	-	-	-	初録年 1368年(明)	
235	LP33	II	洪武通宝	-	-	2.29	0.1	3.2	-	-	-	初録年 1368年(明)	
236	LQ41	II	朝鮮通宝	-	-	2.42	0.1	13.9	-	-	-	初録年 1425年(朝鮮)	
237	LL38	II	寛永通宝	-	-	2.43	0.1	3.2	-	-	-	初録年 1636年。古寛永、寛と實の字体から、1659年まで鋳造。	
238	LO38	II	寛永通宝	-	-	2.21	0.1	2.0	-	-	-	初録年 1668年。新寛永	
239	LO43	II	寛永通宝	-	-	2.29	0.1	3.3	-	-	-	初録年 1668年。新寛永	
240	LQ35	II	寛永通宝	-	-	2.45	0.1	13.4	-	-	-	初録年 1668年。新寛永	

第5章 自然科学的分析

第1節 樹種同定

株式会社 吉田生物研究所

1 試料

試料は秋田県前田表Ⅱ遺跡から出土した容器1点、建築部材2点、用途不明品5点の合計8点である。

2 観察方法

No. 1～5は剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

No. 6～8は数mm立方の試料の炭化材をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（針葉樹1種、広葉樹3種）の第11表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

(1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(第49図 No. 1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

(2) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(第49図 No. 2・5・6・8)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（ $\sim 110\mu\text{m}$ ）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

(3) カツラ科カツラ属カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)

(第49図 No. 3・4)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管 (~100 μm) がおおむね単独または2~3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。軸方向柔組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物(チロース)がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ~900 μmからなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

(4) ミズキ科ミズキ属 (*Cornus* sp.)

(第49図 No. 7)

散孔材である。木口では中庸の道管 (~130 μm) が単独あるいは2~4個放射方向に複合して分布する。道管の大きさは年輪中央部で大きくなる傾向がある。年輪界は波状である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に多数の壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~4細胞列、高さ~1 mmである。ミズキ属はミズキ、ヤマボウシ等があり北海道、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版 1988年
 島地 謙・伊東隆夫『図説木材組織』地球社 1982年
 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V』京都大学木質科学研究所 1999年
 北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編 I・II』保育社 1979年
 深澤和三『樹体の解剖』海青社 1997年
 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』1985年
 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』1993年

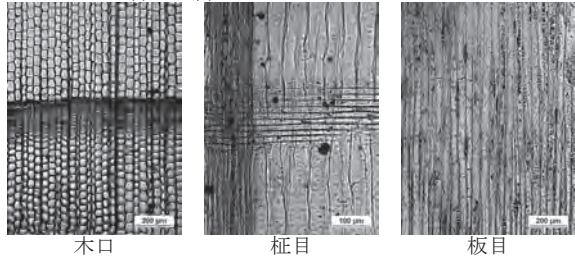
使用顕微鏡

Nikon DS-Fi1

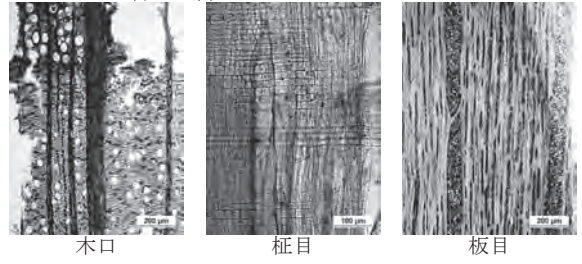
第11表 秋田県前田表Ⅱ遺跡出土木製品同定

No.	品名	遺構	樹種
1	樋?	S D20	スギ科スギ属スギ
2	漆塗り椀	S D28	ブナ科ブナ属
3	柱根	S A101 P 1	カツラ科カツラ属カツラ
4	柱根	S A101 P 2	カツラ科カツラ属カツラ
5	木錘(こも槌)	S X100 (L P37)	ブナ科ブナ属
6	炭化物	S K27	ブナ科ブナ属
7	炭化物	S K47	ミズキ科ミズキ属
8	炭化物	S K82	ブナ科ブナ属

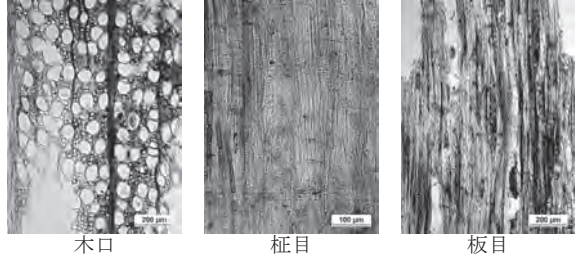
No. 1 スギ科スギ属スギ



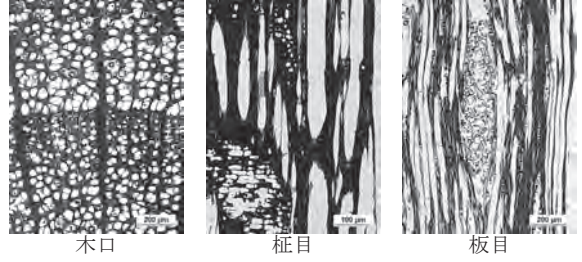
No. 5 ブナ科ブナ属



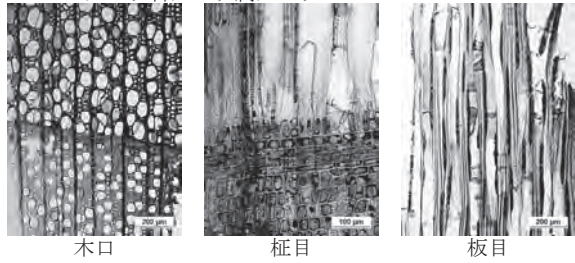
No. 2 ブナ科ブナ属



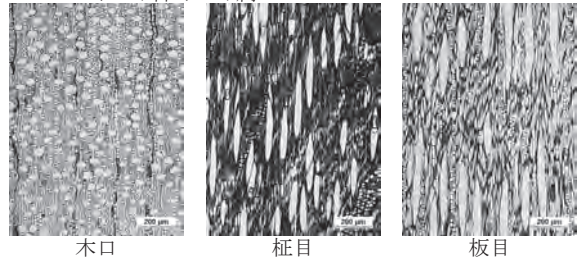
No. 6 ブナ科ブナ属



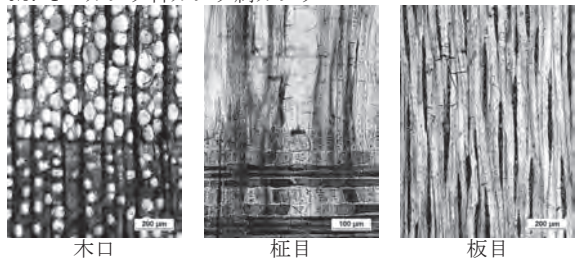
No. 3 カツラ科カツラ属カツラ



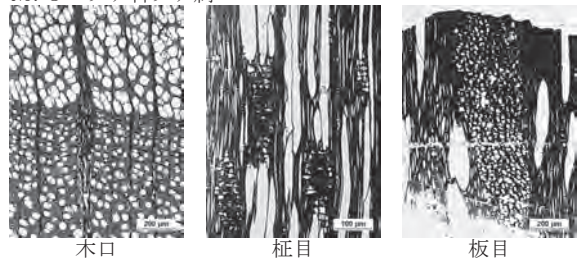
No. 7 ミズキ科ミズキ属



No. 4 カツラ科カツラ属カツラ



No. 8 ブナ科ブナ属



第49図 顕微鏡写真

第2節 放射性炭素年代測定

株式会社 吉田生物研究所

1 はじめに

秋田県前田表Ⅱ遺跡より検出された建築部材2点、用途不明品5点の合計7点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第12表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第12表 測定試料及び処理

No.	試料データ	前処理
1	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：樋？	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
3	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：柱根	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
4	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：柱根	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
5	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：不明木製品	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
6	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.2N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
7	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.2N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
8	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry 備考：炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス

3 結果

第13表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.0 (較正曲線データ: INTCAL04)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第13表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
1	-25.03 \pm 0.26	793 \pm 19	795 \pm 20	<u>1225AD (68.2%)</u> 1260AD	1216AD (95.4%) 1270AD
3	-28.74 \pm 0.19	1232 \pm 19	1230 \pm 20	714AD (25.4%) 745AD <u>767AD (34.6%)</u> 816AD 843AD (8.2%) 859AD	692AD (33.9%) 749AD 764AD (61.5%) 874AD
4	-27.30 \pm 0.15	1247 \pm 19	1245 \pm 20	<u>694AD (54.4%)</u> 748AD 765AD (13.8%) 778AD	<u>683AD (92.3%)</u> 823AD 841AD (3.1%) 860AD
5	-28.36 \pm 0.18	1198 \pm 19	1200 \pm 20	780AD (10.2%) 792AD <u>805AD (58.0%)</u> 870AD	<u>776AD (95.4%)</u> 887AD
6	-28.58 \pm 0.21	1129 \pm 20	1130 \pm 20	892AD (9.6%) 900AD <u>918AD (58.6%)</u> 966AD	<u>881AD (95.4%)</u> 981AD
7	-25.51 \pm 0.20	1442 \pm 20	1440 \pm 20	<u>606AD (68.2%)</u> 641AD	<u>577AD (95.4%)</u> 650AD
8	-26.94 \pm 0.16	1194 \pm 20	1195 \pm 20	783AD (6.7%) 790AD <u>809AD (61.5%)</u> 874AD	<u>776AD (95.4%)</u> 890AD

4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial r

第3節 赤外線分光分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

前田表Ⅱ遺跡は、阿部堂川の沖積地に立地する。今回の発掘調査により、平安時代～江戸時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の分析調査では、出土した土師器の付着物のうち、アスファルトや漆と考えられる部分の赤外分光分析と、不明付着物の顕微鏡観察を実施する。

2 試料

試料は、S K 08 から出土した土師器 1 点と、S X 100 (LP34Ⅲ層) から出土した土師器 1 点の合計 2 点である。各土器の黒く薄く付着している部分について赤外分光分析を、内面に付着している不明物質について顕微鏡観察をそれぞれ実施する。

3 分析方法

(1) 赤外分光分析

①赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて(すなわち吸収されて)、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数(波長の逆数 cm^{-1} で示す)、縦軸に吸光度 (ABS) を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる(山田, 1986)。

②赤外線吸収スペクトルの測定

土器に付着した黒色物質を微量採取し、ダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微 FT-IR 装置(サーモエレクトロン(株)製 Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaurus) を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度 (ABS) で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IR スペクトルと共に図中に併記している。

(2) 顕微鏡観察

土器内面の付着物の形態的特徴等を、双眼実体顕微鏡下で観察する。このうち、種実遺体について

は、現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照から種類と部位を同定する。

4 結果

(1) 土器 (SK08) 付着物質

黒色物質の FT-IR スペクトルを第 52 図に示す。なお図中には、比較資料として供した漆の実測スペクトルを併記している。本試料の FT-IR スペクトルでは、 3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 、 1710cm^{-1} 、 1620cm^{-1} 、 1450cm^{-1} 、 1270cm^{-1} 付近の強い吸収帯や 1350cm^{-1} 、 1100cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、 3400cm^{-1} 付近の吸収帯は O-H 基の伸縮振動、 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基の C-H 伸縮振動、 1710cm^{-1} 付近は C=O 伸縮振動、 1620cm^{-1} 付近は C=C 伸縮振動、 1450cm^{-1} 、 1270cm^{-1} 付近はメチル基の対称変角振動や C-O 伸縮振動、あるいは O-H 変角振動と予想される。

一方、顕微鏡観察を実施した物質は、土器内面に褐色の膜状の状態で、約 4 cm 四方の広さで認められる。表面には所々に小穴が空いており、穴の周囲には筋が格子状に延びている様子が認められる。これらの特徴から、膜状物質は何らかの編み物に由来する可能性がある。なお、端部から長さ約 5 mm の卵形を呈する物質や不定形の物質が認められ、編み物の内部に何らかの物質が存在する可能性があるが、詳細は不明である。

(2) 土器 (SX100) 付着物質

黒色物質の FT-IR スペクトルを、第 53 図に示す。なお図中には、比較試料として供した天然アスファルトの実測スペクトルを併記している。

本試料の FT-IR スペクトルでは、 2960cm^{-1} 、 2920cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 付近の強い吸収帯のほか、 3300cm^{-1} 、 1700cm^{-1} 、 1600cm^{-1} 、 1460cm^{-1} 、 1380cm^{-1} 、 1040cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、 3300cm^{-1} 付近の吸収帯は O-H 伸縮振動、 2960cm^{-1} 、 2920cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基の C-H 伸縮振動、 1700cm^{-1} 付近は C=O 伸縮振動、 1600cm^{-1} の吸収帯は C=C 伸縮振動または C=O 伸縮振動、 1460cm^{-1} 、 1380cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基の対称変角振動や C-H 対称変角振動と予想される。

この黒色物質は土器内面に広く付着しているが、場所によっては塊状を呈し、種子、炭化材、昆虫などが埋まっている様子が確認できる。いずれも取り出すことは不可能であり、炭化材と昆虫については保存状態も悪いため種類は不明である。一方、種実については、栽培種のイネの穎（籾殻）が少なくとも 4 個は確認され、その他に湿った場所に生育する草本のタガラシの果実 1 個が確認された。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎が確認された。灰褐色、長さ 6 ~ 7.5 mm、幅 3 ~ 4 mm、厚さ 2 mm 程度のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円体の稲穂を構成する。表面には顆粒状突起が縦列する。

・タガラシ (*Ranunculus sceleratus* L.) キンポウゲ科キンポウゲ属

果実が検出された。径 1 ~ 1.2 mm、厚さ 0.5 mm 程度のやや偏平な広楕円体。果皮表面は粗面。中心部は淡黄褐色でやや凹み、縁は黄白色の海綿状で水に浮きやすい。

5 考察

(1) 土器 (S K08) 付着物質

黒色物質は、土器内面に薄く塗布されたような状態で認められる。赤外分光分析の結果、3400、2930、2860、1720、1620、1450、1270 cm^{-1} 付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が認められ、比較資料として示した漆とよく似たスペクトルパターンを示すことから、塗布物は漆の可能性はある。漆は本来無色透明であることから、黒色物質を混和して黒色としている可能性がある。黒色となる混和物には炭粉や湯煙類があるが、赤外分光分析では黒色物質の種類は判定できない。混和物の有無については、今後薄片作成・観察などを行うことで検証できる可能性がある。

一方、土器内面に付着していた膜状物質は、繊維と思われる筋が格子状になっている様子がみられること等から、編み物に由来する可能性がある。端部に卵形の物質などが確認できるため、編み物と土器の間に何らかの物質が挟在する可能性があるが、直接観察できないためその由来等は不明である。

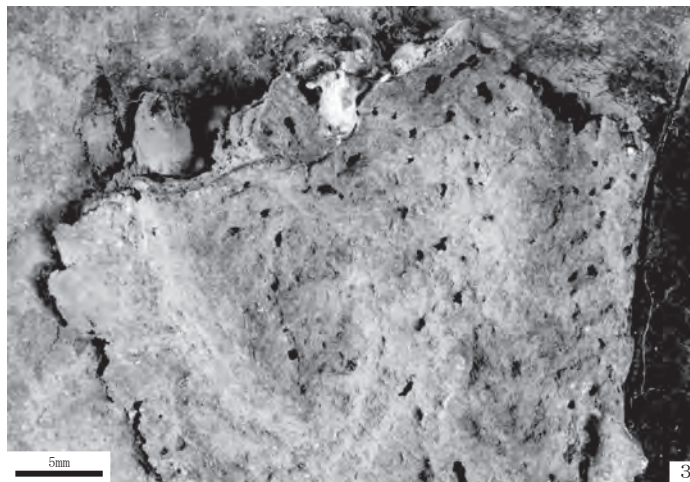
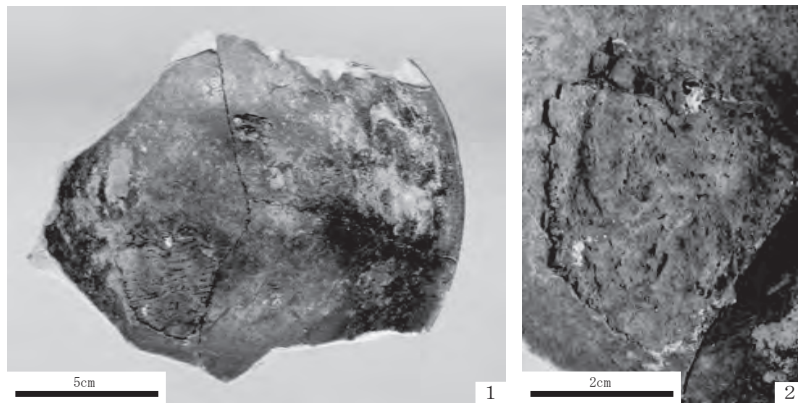
(2) 土器 (S X100) 付着物質

黒色物質は、土器表面にこびり付いたような状態で付着し、所々厚く付着している。黒色物質の赤外分光分析では、2960、2920、2860、1700、1600、1460、1380 cm^{-1} の吸収帯が認められる。これらの吸収帯は、比較資料として示した天然アスファルトの特性を示す吸収帯であり、スペクトルパターンもよく似ている。この結果から、黒色物質はアスファルトであることは明らかである。

アスファルトが厚く付着している部分には、凝固する前に取り込まれたと考えられる種実、炭化材、昆虫等が認められる。炭化材や昆虫は小片で保存状態も悪いため種類の同定ができないが、種実はイネの穎（籾殻）が少なくとも4個と、タガラシの果実1個が確認された。タガラシは湿った場所を好み、水田雑草でもあることから、イネと共に水田に生育していた可能性がある。

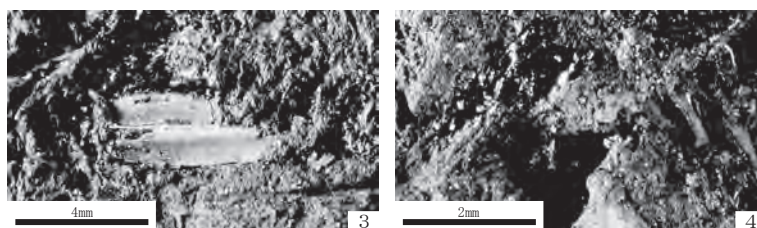
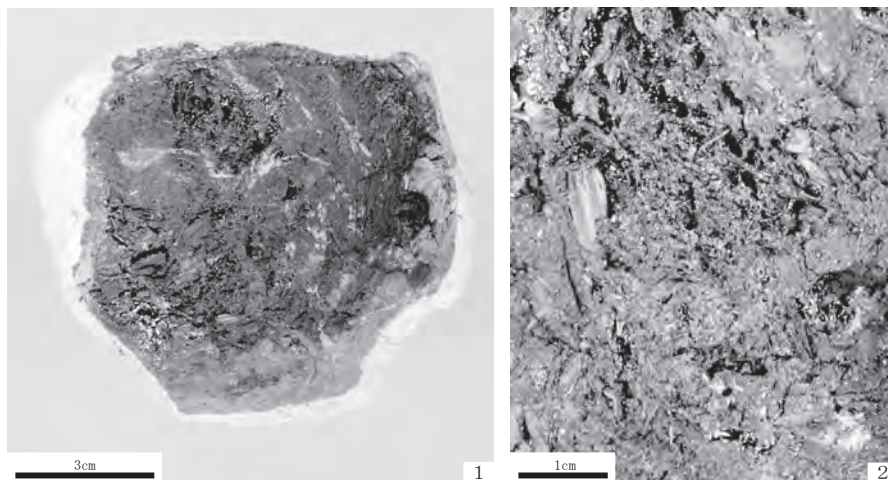
引用文献

山田富貴子 赤外線吸収スペクトル法『機器分析のてびき 第1集』化学同人 1-18. 1986年



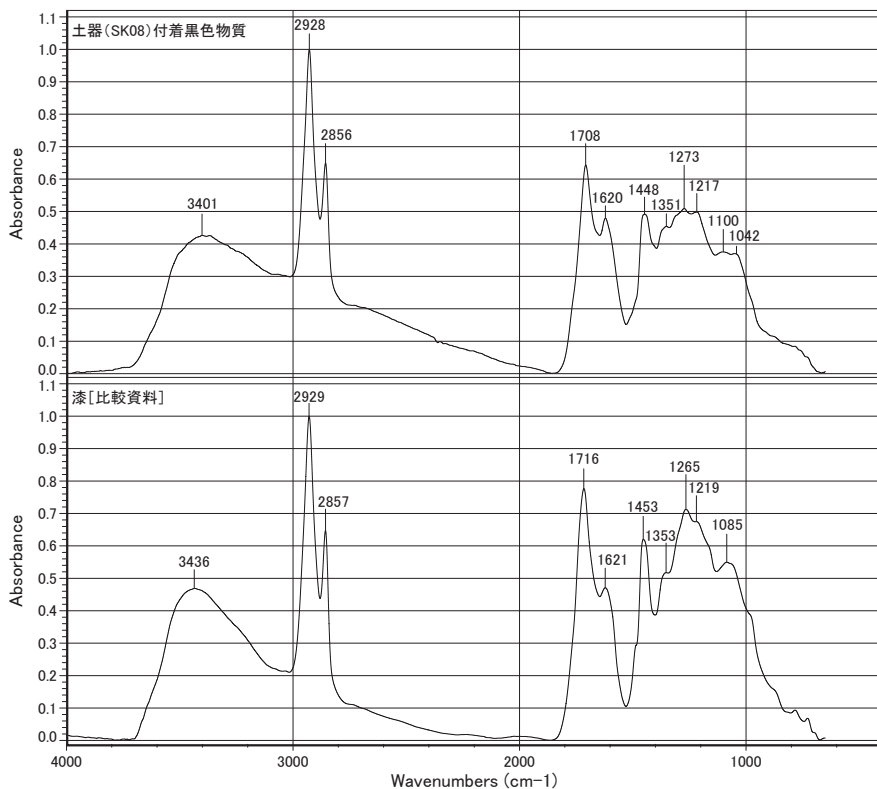
- 1. 土器全景
- 2. 膜状付着物の全景
- 3. 膜状付着物の拡大写真

第50図 土器(S K08) 付着物



- 1. 土器全景
- 2. 植物遺体等混入状況
- 3. イネ 穎
- 4. タガラシ 果実

第51図 土器(S X100) 付着物



測定情報

サンプルスキャン回数:64
 バックグラウンドスキャン回数:64
 分解能:4.000
 サンプル デイ:8.0
 ミラー速度:1.8988

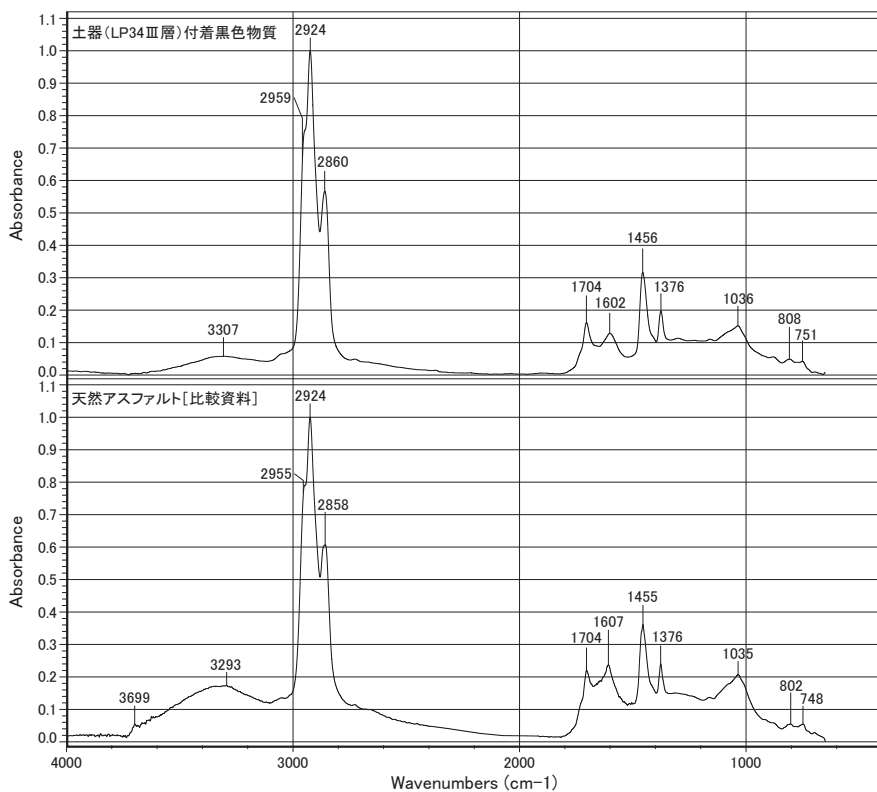
光学系の構成

検出器:MCT/A
 ビームスプリッタ:KBr
 光源:IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
 顕微透過法
 可変アパーチャ使用
 オートベースライン補正
 スムージング処理
 Y軸正規化

第 52 図 土器 (SK08) 付着黒色物質の FT-IR スペクトル



測定情報

サンプルスキャン回数:64
 バックグラウンドスキャン回数:64
 分解能:4.000
 サンプル デイ:8.0
 ミラー速度:1.8988

光学系の構成

検出器:MCT/A
 ビームスプリッタ:KBr
 光源:IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
 顕微透過法
 可変アパーチャ使用
 オートベースライン補正
 スムージング処理
 Y軸正規化

第 53 図 土器 (SX100) 付着黒色物質の FT-IR スペクトル

第6章 まとめ

前田表Ⅱ遺跡の発掘調査は平成19年度が阿部堂川を挟む遺跡の北側部分、平成20年度は19年度調査区の南側部分で実施した。19年度調査では遺構は確認されなかったが、主に平安時代の須恵器や土師器が少量出土した。これらは東側の丘陵地周辺から流され、堆積したものと推定される。20年度調査では平安時代から中世の土坑59基、溝状遺構11条、沢状の落ち込み1か所、柱列1基、柱穴様ピット151基と江戸時代の溝状遺構1条を検出した。ここでは過去の周辺遺跡の調査結果や旧家の伝承等も踏まえ、遺構・遺物から推定できる本遺跡の性格について述べる。

1 地形について

発掘調査前の現況地形を造成した前田表Ⅱ遺跡を含む平沢地区の耕地整理事業は大正4（1915）年までに完工している。明治時代に作成された字切図（第5図）はその工事以前の状況を示す。個々の遺構で記述したように、本発掘調査によって字切図に描かれた水路と流路方向をほぼ同じくする溝状遺構SD20は8世紀末～9世紀前半に、SD28は17世紀末～18世紀以降まで近接地に設置され、機能していたことが明らかになった。これらの溝状遺構の周辺では8世紀以降、ほぼ同じ地形で利用されたと考えられる。また、20年度調査区北西端にあるSD83は遺構底面の高低差がある溝で、SD20・28と同様、常時水が流れる灌漑用水路であったことが明らかになったが、この遺構の東側に隣接するLS～MC43～45グリッド付近は極端に遺構が少ない。SD83は字切図にも描かれていないことから、その周辺は明治時代以前に地形が改変されていたことがわかる。

字切図や遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図（第6図）、遺構配置図（第8図）から総合的に推測すると、当時の地形は、19年度調査A区の東側から20年度調査区の北側にかけては、丘陵地から延びて馬の背状となる周囲より高い地形であったと考えられる。この地形から北側の阿部堂川に向かっては急に低く、西から南側に向かっては緩やかに低くなり、20年度調査区に接する東側の丘陵地とSD20に囲まれた範囲は自然の凹地が広がる低湿地の沢状地形をしていたものと考えられる。調査区内で検出されたSD20・28・83などの阿部堂川を水源とする灌漑用水路は自然地形の高低差を利用して設置されたものと考えられる。また、灌漑用水路の内側には、区画を意図したと考えられる溝状遺構が設置されている。調査前の現況地形は、19年度調査A区東側と20年度調査区北側を大きく削平し、その土を19年度調査A区西と北側に盛土して造成されたものと考えられる。これらの大きく削平されたと考えられる範囲は溝で区画されて、周辺より極端に遺構が少ないが、削平前には溝で囲まれた内側になんらかの施設があった可能性が考えられる。

2 遺構と遺物について

SA101の項で記述したように、字切図には、本遺構の近くには阿部堂川を水源とする水路が北東から南西方向に設置され、その水路に沿い、道がある。道は途中で分岐し、丘陵地（前田表遺跡）に延び、さらには安倍館跡に続く。本発掘調査によって字切図に描かれた水路と流路方向をほぼ同じくするSD20が8世紀末～9世紀前半に近接地に設置されたことが明らかになった。本発掘調査ではSD20に沿った道は検出されなかったが、当時から丘陵地に続く道が存在し、検出された他の遺構は、

丘陵にある前田表遺跡・安倍館跡などを生活の場とした人々と関連するものである可能性が考えられる。例えば、S D 20の南東側に広がる沢状の落ち込みS X 100からは土師器・須恵器・土製品などの生活に使用されたとと思われる多数の遺物が出土した（第54図）が、本調査区内では居住施設は検出されていない。また、前田表遺跡・安倍館跡など同一の丘陵上には甕造という字名が今も残る。形状に規格性がなく、底面の凹凸が顕著な多くの土坑は丘陵地に暮らす人々の土器生産のための粘土採掘坑であった可能性が考えられる。なお、琴浦の旧家佐藤家の伝えによると、先祖は大同年間（806年）以前に安倍館に隣接する山刀研沢付近に住み、宝治年間（1247年）熊野神社を勧請したという（第4図・第1表）。S A 101から出土した柱根の放射性炭素年代測定結果（第5章第2節）とは近いが、関連はないのだろうか。

底部が肥厚した柱状高台を有する皿状の土師器坏3点が出土した。本遺跡と両前寺川を挟み、丘陵の裾部にほぼ同じ標高で近接する立沢遺跡でも比較的まとまって出土している。立沢遺跡は掘立柱建物跡が検出され、9世紀後半から10世紀前半を中心とする遺跡である。本遺跡の時期と重複し、類似の出土遺物があることなどから、両遺跡は関連する可能性が高いと考えられる。

S D 28からは江戸時代初頭の漆椀や陶磁器などの生活用品が出土した。両前寺の旧家安倍氏系図によると、文治年間（1185年）に至って五代の孫隆任は安倍館から下って阿弥陀堂に居住し、そして応永元（1394）年には十四代利任が阿弥陀堂からさらに安倍（阿部）堂に転住して以来連綿、今日に至ったというのである。現在、阿弥陀堂の地名は残っておらず、その位置は定かでない。現在の両前寺の集落は本遺跡の西側約150mの日本海側に広がるが、当時の集落は現在より東側にあった可能性が考えられる。

江戸時代の型押しのお像が出土した。秋田県立博物館の嶋田忠一・高橋正氏によると台座は蓮台で、事物の右手は錫杖、左手は宝珠と推定され、地藏菩薩、なかでも幼児の延命・利生を祈願する延命地藏の可能性が高く、また、背面に「□□護摩」とあるのは真言宗寺院との関連の可能性があるとの鑑定であった。両前寺では地藏講の祭事が昭和40年代まで毎月当番制で盛んに行われ、お産の掛け軸を礼拝する風習が伝わっていた。いつ頃から行われた祭事が定かではないが、今回出土したお像との関連や両前寺という地名の由来との関連はないのだろうか。なお、安倍氏が勧請した香取神社が丘陵上にあり、その境内に竜沢山両前寺と刻銘した五輪塔が遺存する。

3 祭祀遺物と考えられる広域廃棄遺物と墨書・篋書土器などについて

凡例で定義したように、広域に分散廃棄された可能性がある土器片が接合したものが17点あった（第56～59図）。そのなかで須恵器甕を意図的に破砕し、特定の破片内面に墨を塗布し、広域に散布したと考えられる例は、大仙市の厨川谷地遺跡で報告されている。同遺跡は沖積地の複数の旧河道に囲まれた微高地上にあり、近接する払田柵跡の祭祀遺跡として9世紀後半から10世紀前半まで機能していたことが明らかになっている。遺跡は初期段階には柵列と河川流路によって、南北に区画された閉ざされた空間が形成された。2つの区画された場では各々の目的により祭祀が執り行われ、その後、物理的な区画が消滅することにより、10世紀1四半期には河川流路を含めた水辺とその周辺全域が祭祀域として使用されたと考えられている。本遺跡は厨川谷地遺跡で祭祀的廃棄行為が執り行われた時期と重複し、立地状況においても類似点が多く、本遺跡のS X 100とその周辺域は祭祀域として使用さ

れたものと考えられる。なお、厨川谷地遺跡の柵列と本遺跡の溝は区画を意図としたと考えられる点では類似し、祭祀域の地形利用にも共通の観念があった可能性が考えられる。また、出土量には格段の差があるが、遺物には共通性が見られ、横瓶や内黒土師器、黒色土器などは祭祀的な廃棄行為によって散布されたと推定される。

墨書土器は須恵器坏「奏？」1点・土師器坏「⊖」15点、篋書土器は土師器坏「+または×」が1点出土している（第55図）。須恵器坏「奏？」は底部に記銘されるが、土師器坏はすべて体部に記銘され、一定のきまりが存在していた可能性が考えられる。また、「⊖」1点がSKP 143から出土している以外はSX 100から出土し、墨書・篋書土器を散布する行為についてはSX 100のみを場とする水辺を用いた特定の意図を持った祭祀であったと考えられる。

また、広域に分散廃棄された土器の中には、外面に平行タタキ、内面に平行当て具を使用した北陸地方の影響を受けたと考えられる丸底の土師器長胴甕が出土している。

4 むすび

2年間にわたる発掘調査で検出された遺構や遺物から、この遺跡が平安時代以降の人々の生活の場であったことが明らかになった。その中で遺跡が最も頻繁に利用されたのは平安時代と考えられる。しかし、調査区内からは竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの居住施設が見つかっておらず、祭祀的な行為や土坑・溝状遺構等を設置した人々が住む集落の中心からは離れていたと推測される。本遺跡の性格は不明な点が多いが、今後予定されている丘陵上にある前田表遺跡や家ノ浦遺跡などの周辺遺跡の発掘調査により、本遺跡の性格が明らかになっていくものと考えられる。

引用・参考文献

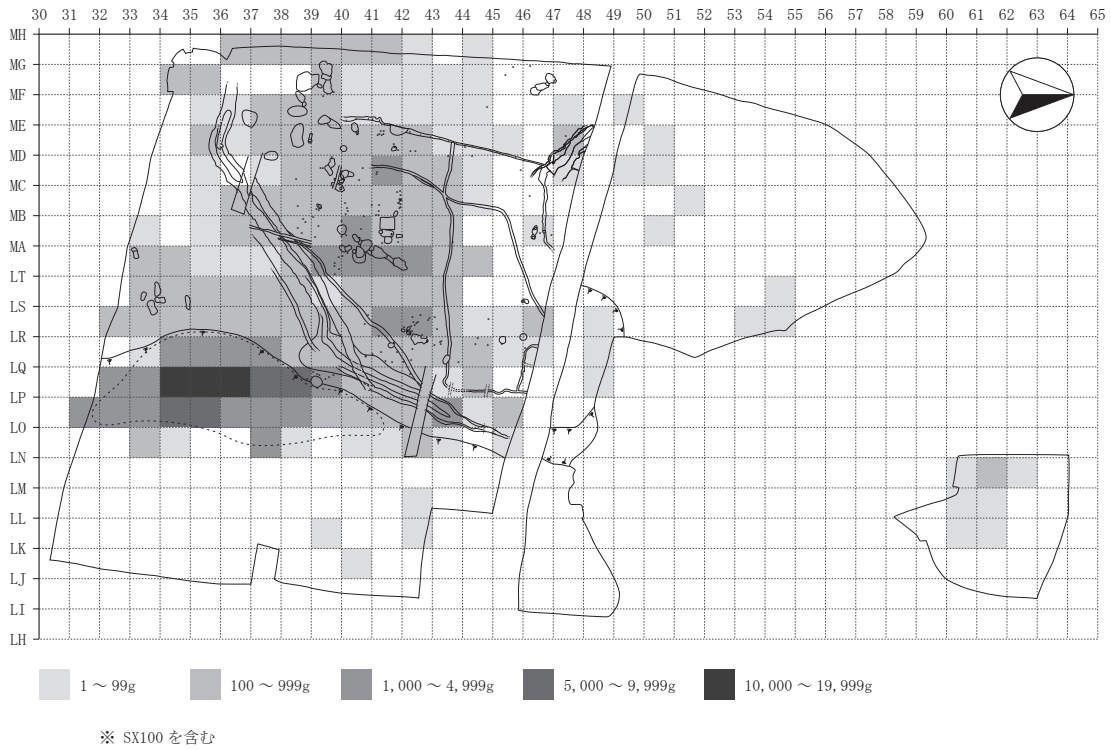
仁賀保町史編纂委員会『仁賀保町史』1972(昭和47)年

仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告』1987(昭和62)年

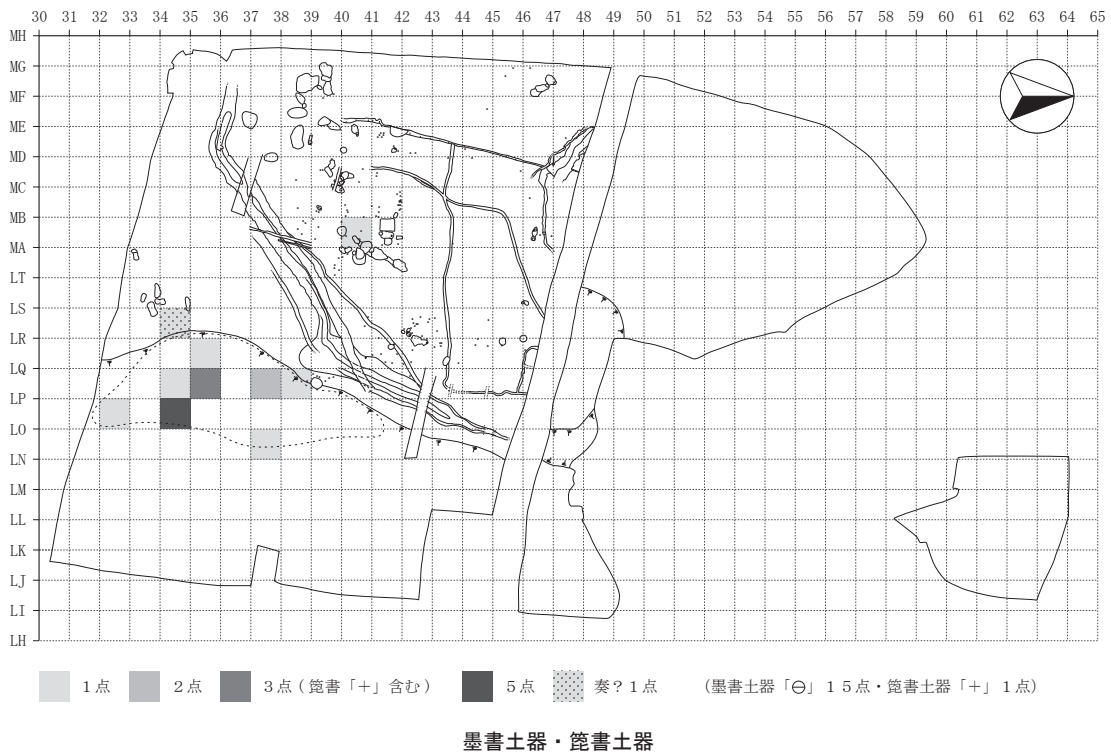
高橋学「西目町井岡遺跡で採集された遺物について」『秋田考古学』第40号 1990(平成2)年

秋田県教育委員会『厨川谷地遺跡—県営ほ場整備事業(土崎・小荒川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—』秋田県文化財調査報告書第383集 2005(平成17)年

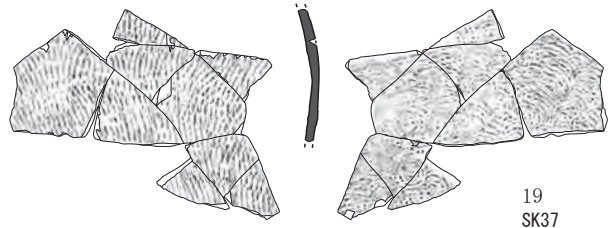
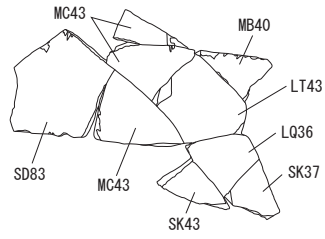
利部修「出羽国の丸底長胴甕をめぐって」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第12号』1997(平成9)年



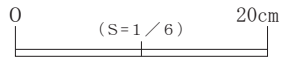
第54図 遺構外遺物出土分布図



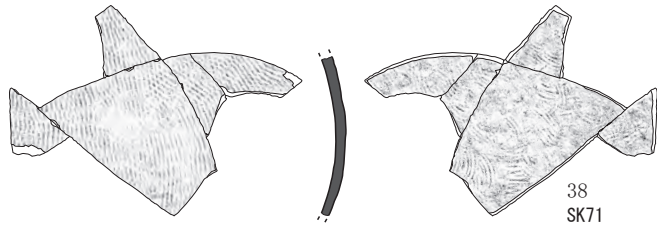
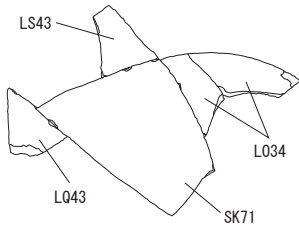
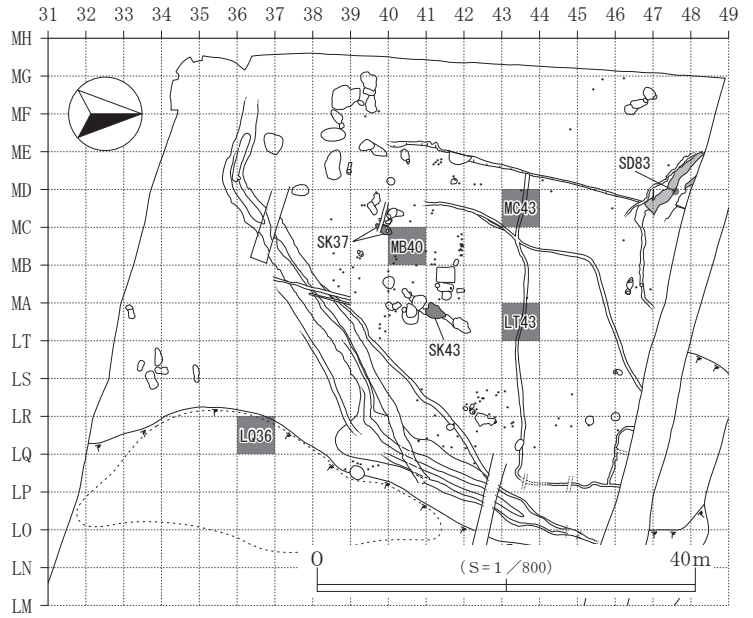
第55図 墨書土器・篋書土器出土分布図



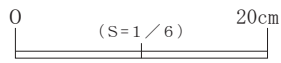
19
SK37



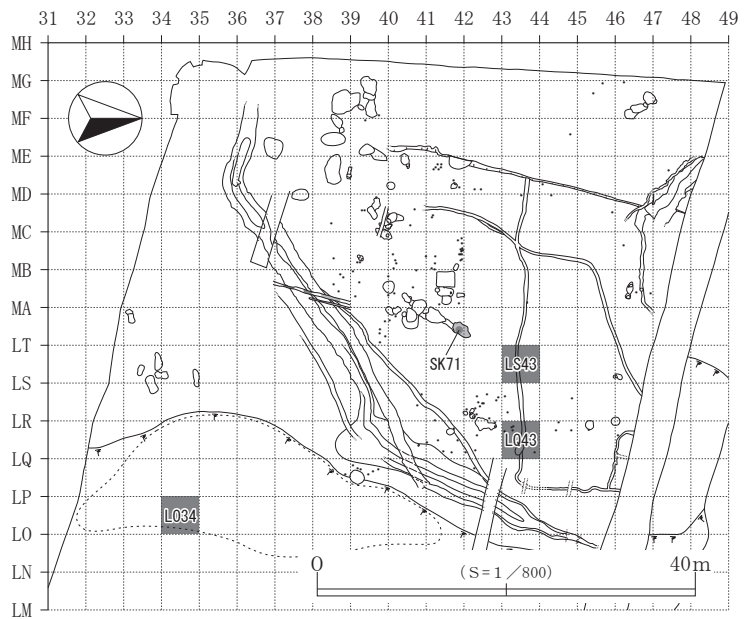
- SK37 × 1 点
- SK43 × 1 点
- SD83 × 1 点
- LQ36 × 1 点
- LT43 × 1 点
- MB40 × 1 点
- MC43 × 3 点



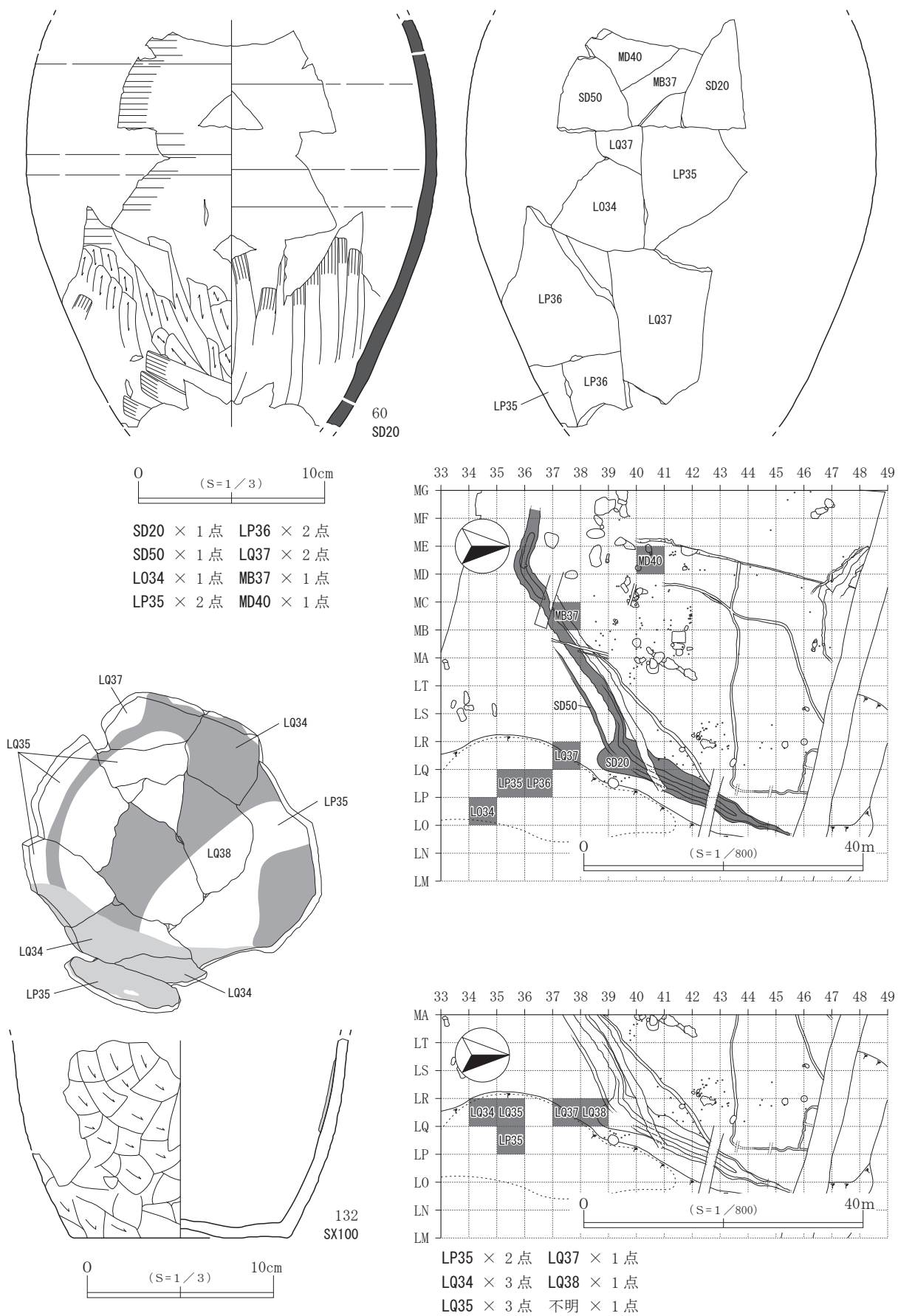
38
SK71



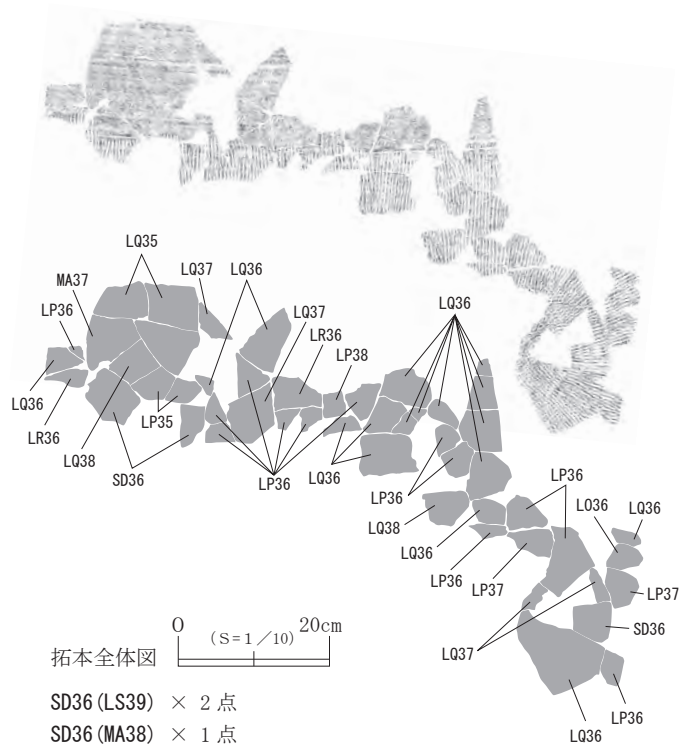
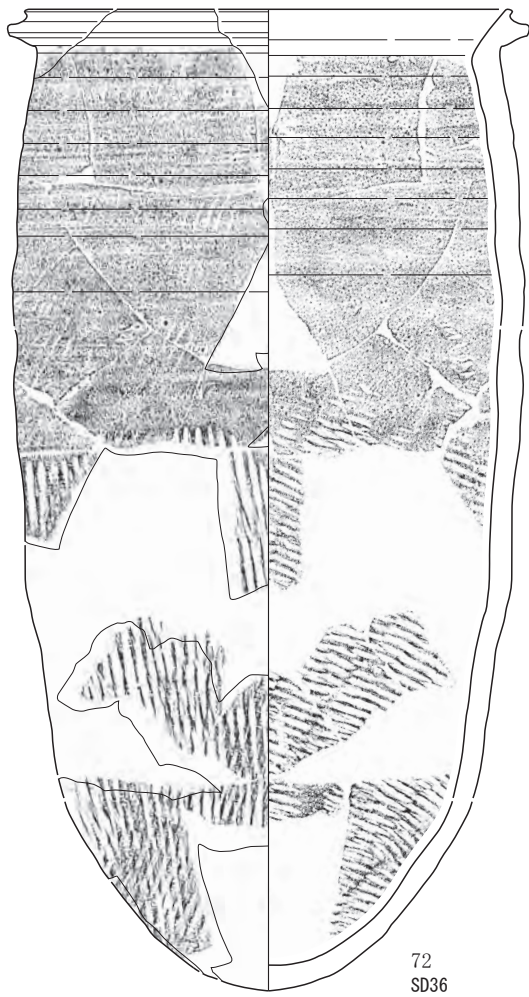
- SK71 × 1 点
- LQ34 × 2 点
- LQ43 × 1 点
- LS43 × 1 点



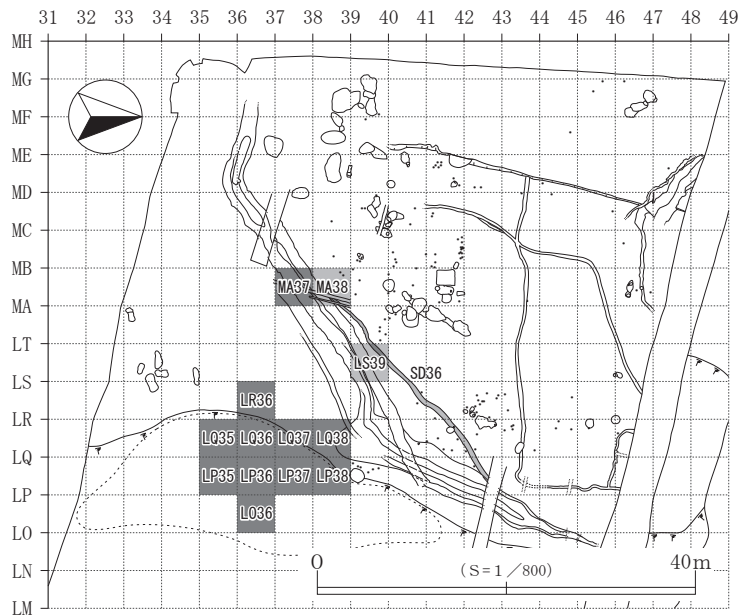
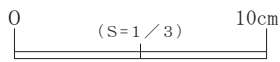
第 56 图 遺物接合分布図 (1)



第57図 遺物接合分布図(2)



- SD36 (LS39) × 2 点
 SD36 (MA38) × 1 点
 LQ36 × 1 点 LQ36 × 17 点
 LP35 × 2 点 LQ37 × 4 点
 LP36 × 13 点 LQ38 × 2 点
 LP37 × 2 点 LR36 × 2 点
 LP38 × 1 点 MA37 × 1 点
 LQ35 × 2 点 不明 × 1 点



第 58 图 遺物接合分布图 (3)



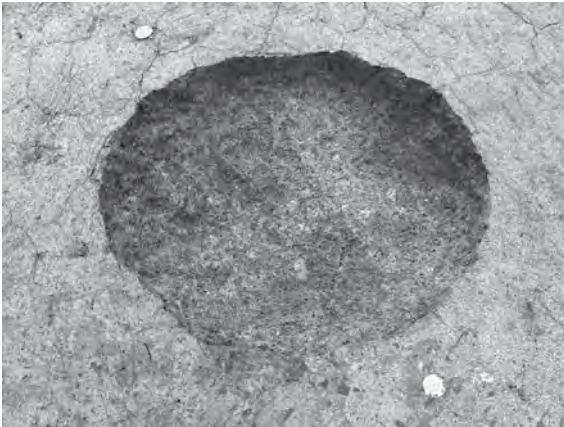
第59図 遺物接合分布図(4)



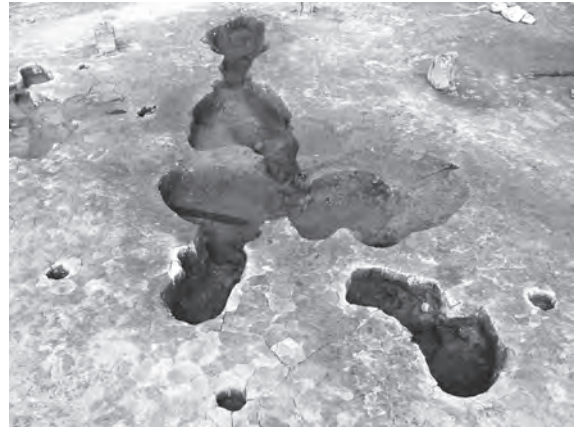
1 SK08断面A-B (南→)



2 SK08完掘 (南→)



3 SK12完掘 (南東→)



4 SK17·18·33·34·41·43·70·71·SD66完掘 (南西→)



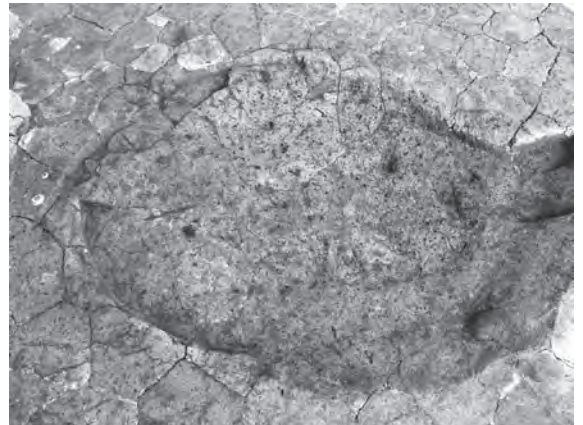
5 SK22完掘 (南西→)



6 SK25·26完掘 (西→)



7 SK27断面 (南西→)



8 SK27完掘 (南西→)



1 SK30完掘 (西→)



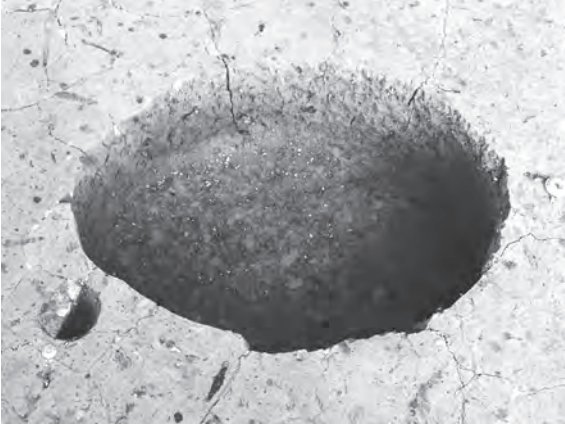
2 SK31完掘 (南→)



3 SK38・78・SKP188完掘 (東→)



4 SK39・55完掘 (東→)



5 SK49完掘 (西→)



6 SK57断面 (南→)



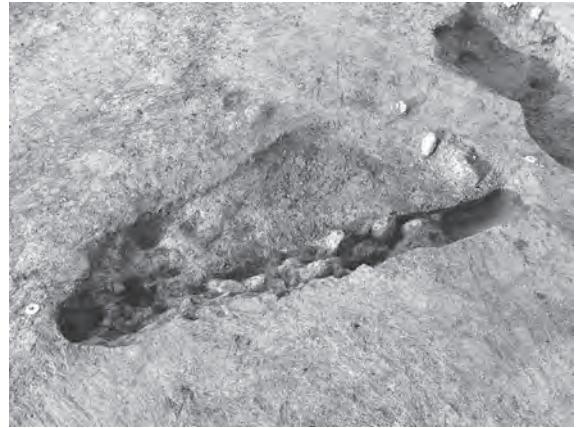
7 SK57完掘 (南西→)



8 SK59完掘 (南→)



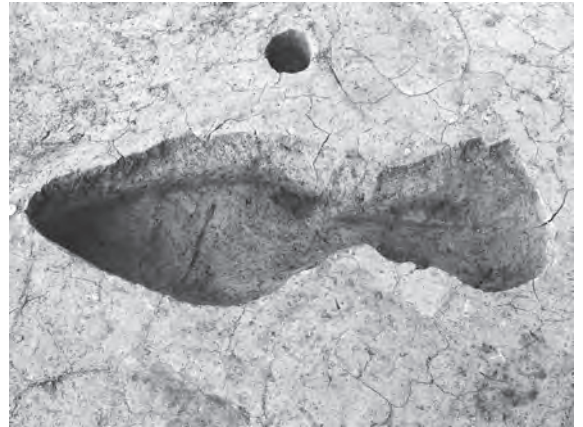
1 SK63完掘(東→)



2 SK65完掘(南西→)



3 SK82完掘(南西→)



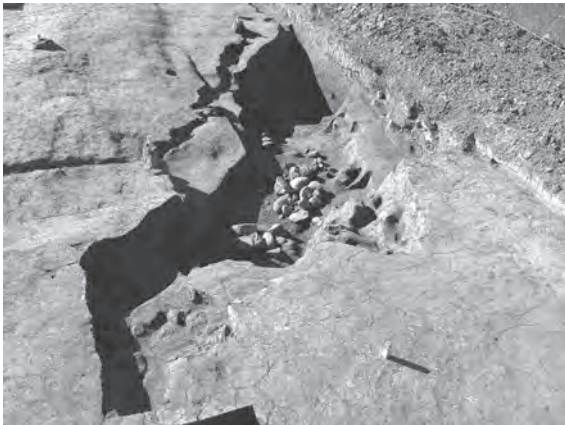
4 SK84・87完掘(南→)



5 SD05・06・07完掘(西→)



6 SD20断面K-L(西→)



7 SD83・86・90・102完掘(南東→)



8 SD83・102断面A-B(北西→)



1 SD20・28・36・50完掘(南西→)



2 SD90完掘(東→)



3 SA101 P1断面(東→)



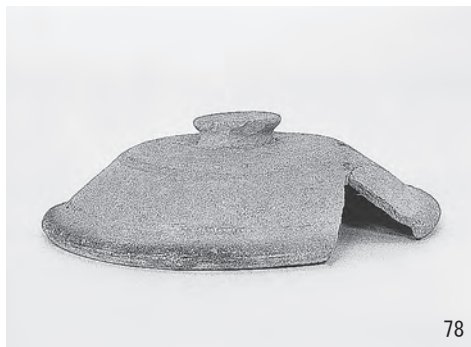
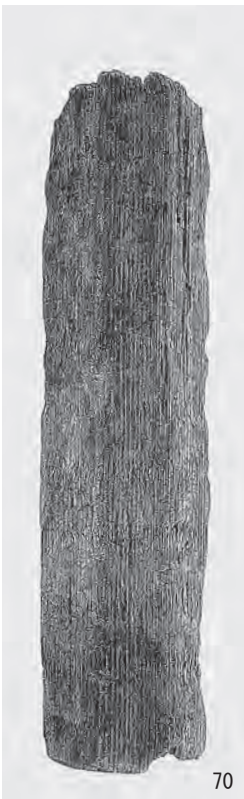
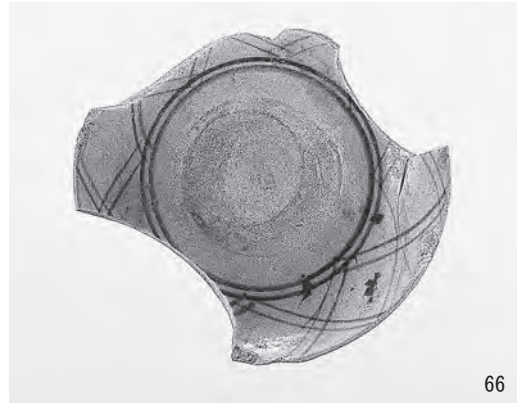
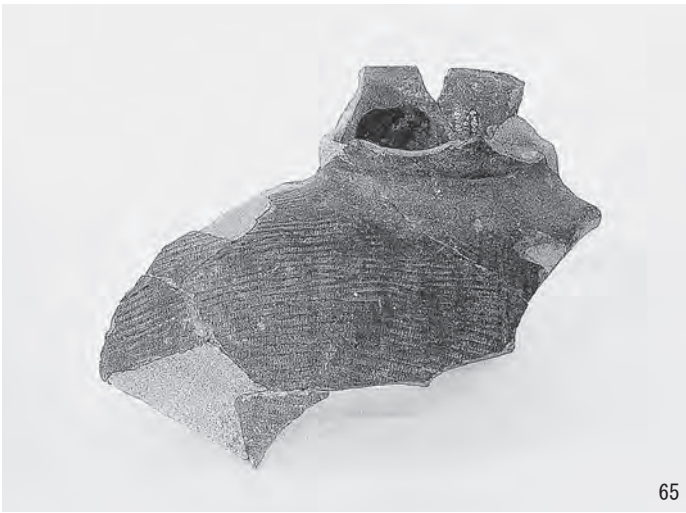
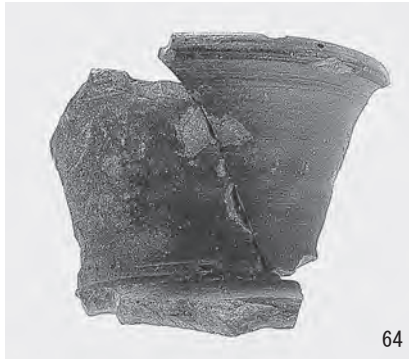
4 SA101 P2断面(東→)



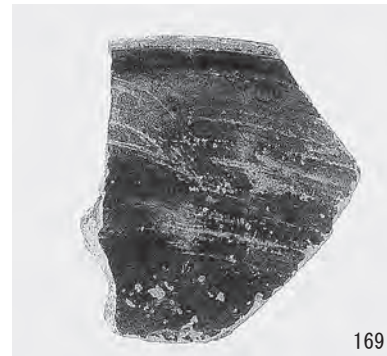
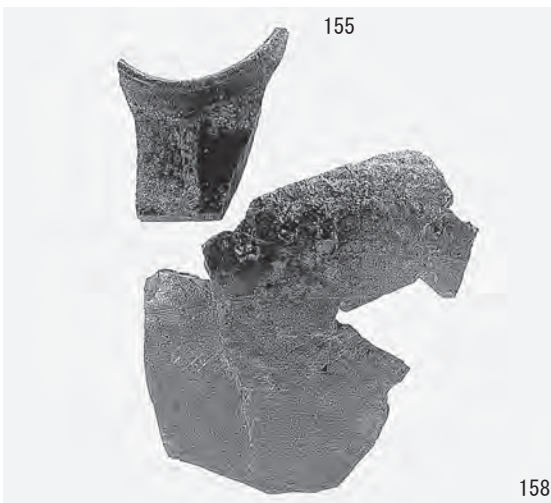
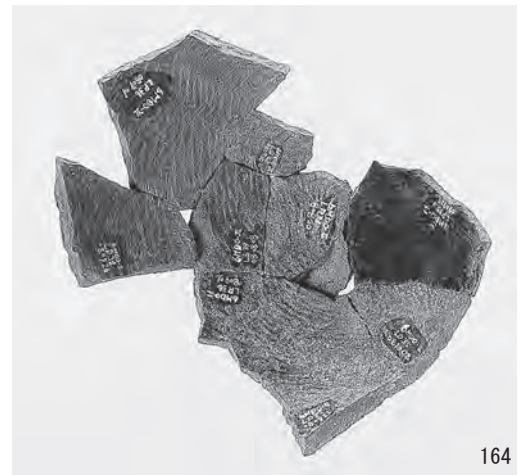
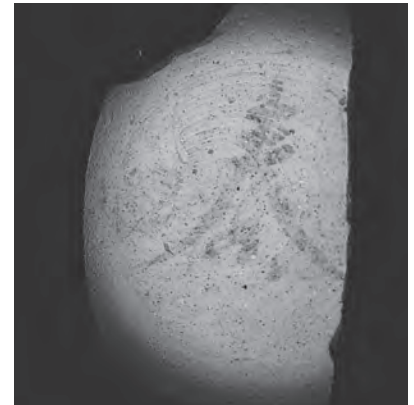
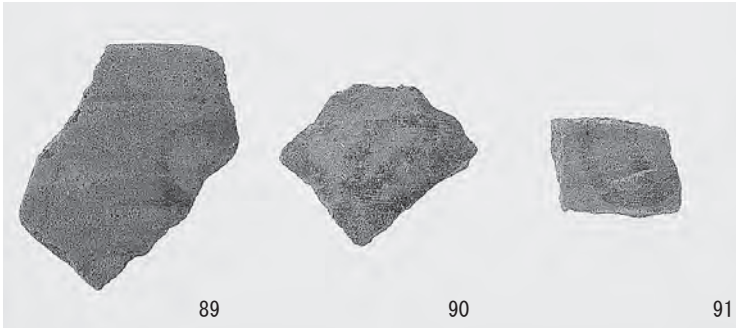
5 SA101 P1・P2完掘(東→)



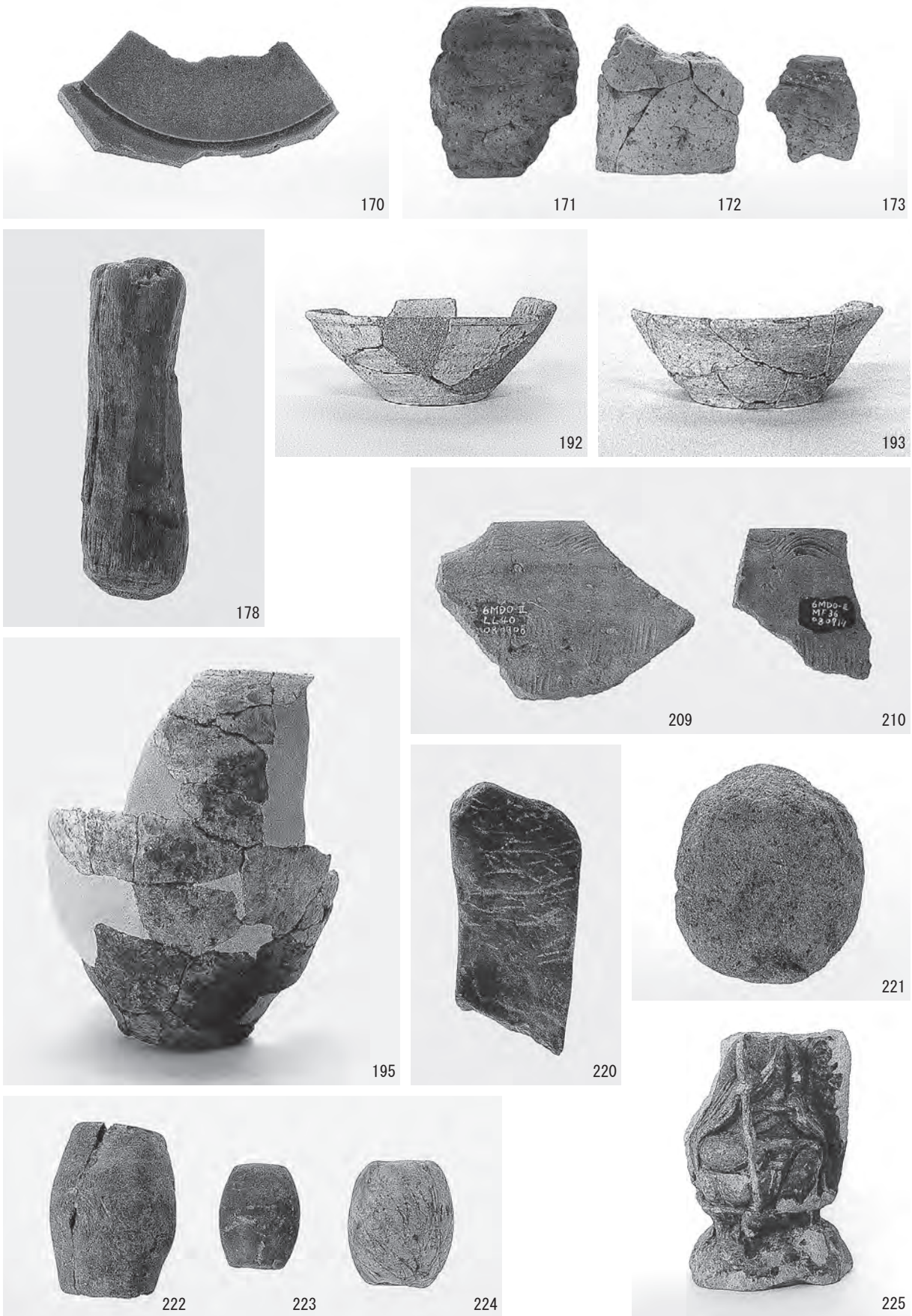
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物（3）



出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	まえだおもてにいせき							
書名	前田表Ⅱ遺跡							
副書名	一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
	Ⅲ							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第451集							
編著者名	築瀬圭二・加藤竜・藤本玲子							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王3丁目1番1号 TEL 018-860-5193							
発行年月日	西暦 2010年3月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ / ″	° / ′ / ″		(㎡)	
まえだおもてにいせき 前田表Ⅱ遺跡	あきたけん 秋田県にかほ しりょうぜんじあぎまえ 市両前寺字前 だおもて 田表145外	052141		39° 17′ 56″	139° 58′ 35″	19年度調査 20071010) 20071228 20年度調査 20080616) 20081010	1,800㎡ 4,200㎡	一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
前田表Ⅱ遺跡	集落跡	古代 (平安時代) ～中世 江戸時代	土坑 溝状遺構 沢状の落ち込み 柱列 柱穴様ピット 溝状遺構	59 11 1 1 151 1	土師器 須恵器 木製品 陶磁器 土製品(仏像) 銭貨	古代(平安時代)には集落の一部として利用され、祭祀が行われていた可能性が考えられる。		
要約	<p>2年間にわたる発掘調査で検出された遺構や遺物から、この遺跡が平安時代以降の人々の生活の場であったことが明らかになった。その中で遺跡が最も頻繁に利用されたのは平安時代と考えられる。しかし、調査区内からは竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの居住施設が見つかっておらず、祭祀的な行為や土坑・溝状遺構等を設置した人々が住む集落の中心からは離れていたと推測される。本遺跡の性格は不明な点が多いが、今後予定されている丘陵上にある前田表遺跡や家ノ浦遺跡などの周辺遺跡の発掘調査により、本遺跡の性格が明らかになっていくものと考えられる。</p>							

秋田県文化財調査報告書第 451 集

前田表Ⅱ遺跡

—一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

印刷・発行	平成22年3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地 電話0187-69-3331 FAX0187-69-3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号 電話018-860-5193
印 刷	株式会社 大館印刷

